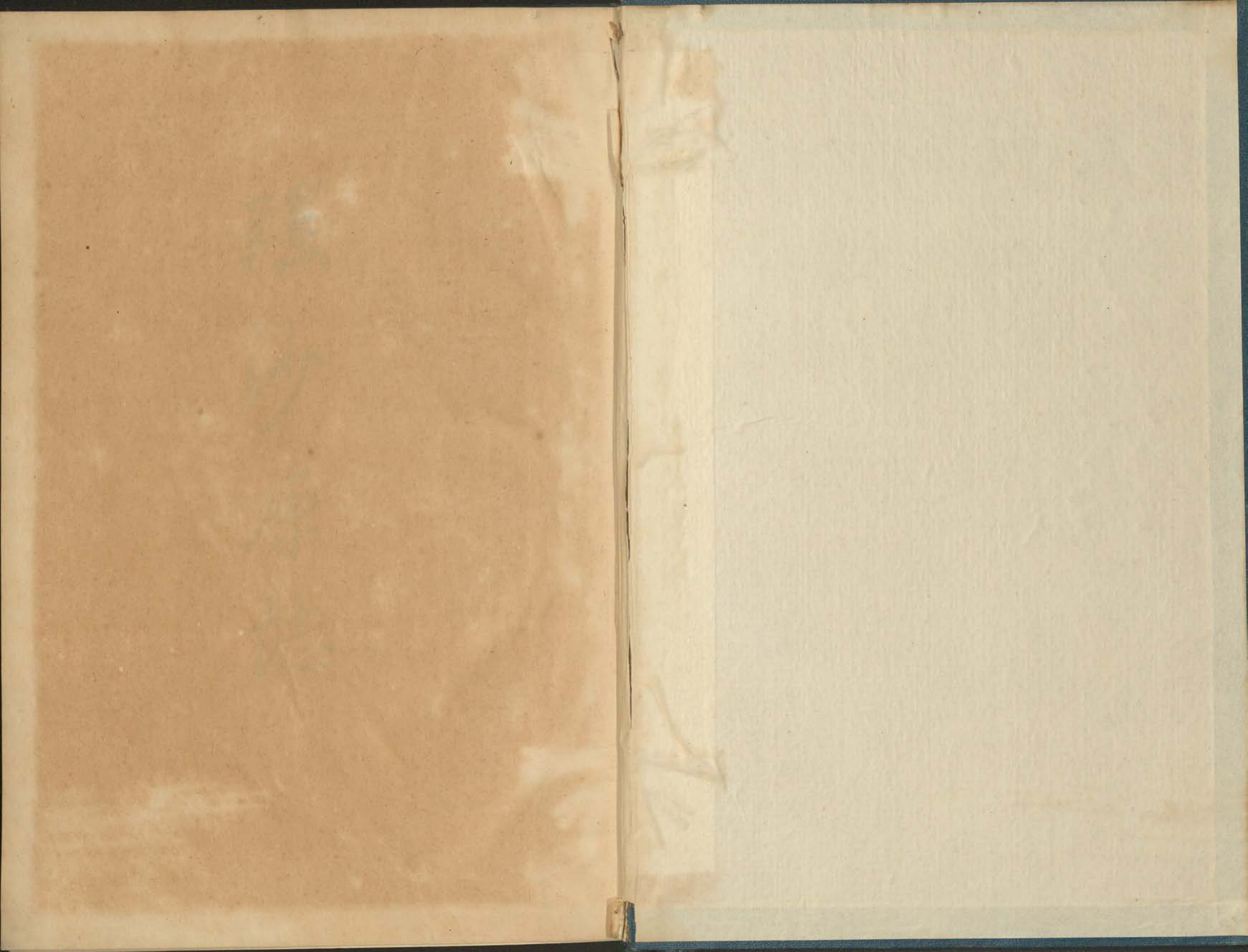




瑤沙原誌



門正校本





松の児童



松の庭校

序

浦和高等學校が創立されてからは三年、學友會が設置されてからは二年半、其の年月はまだ甚だ淺い。しかし吾々が學校を、學友會をおほしたて、來た苦心努力の績は、之を五年、十年の仕事に比することが出来る。學校の事は今姑く措く。學友會設置當初の事を考へると、善くもこんな異常な發達を遂げたものだと思ふ。「富士の根をふりさけ見れば白雪の尾花に續く武藏野の原」吾々は其の縮圖を始め此所に見た、殆ど手を加へるすべもない。しかし吾々はそれにめげるものではなかつた。勇躍猛進、且は開き、且は築いて、遂に今日の基礎を据ゑたのだ。其の堅勁、これを新設仲間の先進諸校に比べて斷じて多くを譲るものではない。實に我が學友會は桃を押割つて躍り出た時から既に意氣の旺盛なものがあつた。圓々と、すこやかに育つて三つになつた今はもうそろそろ鬼ヶ島を想つてゐる。私は金銀珊瑚綾錦、いろ／＼な寶物を車に滿載して、え

いやいやと歸つて来る日の、必ず近き將來に到來すべきことを信ずるのである。

大正十三年十一月

吉岡郷甫識す

吾學友會が本校々舎の落成せるを機として瑤沙原誌を出版するに至つた事は最初から關係の深かつた自分にとりては眞に歡喜の情に堪へない。云ふまでもなく今度の瑤沙原誌は正に其の第一編とも稱すべきもので其の内容は吾學友會に關する創業號或は建設史である。僅か三年足らずの月日ではあるが吾學友會が其の形式の整頓内容の充實に於て尋常ならざる發達を遂げ來つた事は會長の序にも見ゆる通りである。眼を閉ぢて靜に過去三年に於ける其の經過を回想する時自分の意識には各時期に於ける役員並に有志の諸君が或は暑と戦ひ寒を冒し或は夜を徹し疲を忍びて學友會の爲に獻げたる心からなる活動の場面が限りなく展開し來りて其のはてしを知らぬのである。自分は學友會の健全なる發育を悦ぶ毎に又此等諸君の隠れたる熱と汗とに對して衷情より感謝するを禁じ得ぬのである。瑤沙原誌は最も具体的に此等の事實を傳ふるもので自分は此處に

序

吾學友會が本校々舎の落成せるを機として瑤沙原誌を出版するに至つた事は最初から關係の深かつた自分にとりては眞に歡喜の情に堪へない。云ふまでもなく今度の瑤沙原誌は正に其の第一編とも稱すべきもので其の内容は吾學友會に關する創業號或は建設史である。僅か三年足らずの月日ではあるが吾學友會が其の形式の整頓内容の充實に於て尋常ならざる發達を遂げ來つた事は會長の序にも見ゆる通りである。眼を閉ぢて靜に過去三年に於ける其の經過を回想する時自分の意識には各時期に於ける役員並に有志の諸君が或は暑と戦ひ寒を冒し或は夜を徹し疲を忍びて學友會の爲に獻げたる心からなる活動の場面が限りなく展開し來りて其のはてしを知らぬのである。自分は學友會の健全なる發育を悦ぶ毎に又此等諸君の隠れたる熱と汗とに對して衷情より感謝するを禁じ得ぬのである。瑤沙原誌は最も具体的に此等の事實を傳ふるもので自分は此處に

活躍せる理想と意氣どが強く鮮に後人を刺戟し着色して永く感化を與へん事を切に望むのである。今後幾年かの後吾學友會は更に瑤沙原誌第二號を編纂するの時期があるであらう。其の時の内容は正に吾學友會の雄飛號若くは盛觀史でなくてはならぬ否斯くあらしむる事が確乎たる創業の後を承けて吾學友會を擔ひ立つ者の當然の權利であり又義務でなくてはならぬ。然り如何にせば可なるか。今日多くの學友會の通弊と認めらるゝ點の一は一般會員が其の會の利用に於て未だ十分に目醒めぬ事である。實際如何なる活動にも無關心なるが如き會員の尠からぬ點である。我等は此通弊に鑑み先づ第一に普遍的と云ふ標語を掲げねばならぬ即ち辯論の修養にも情操の涵養にも將た又身體の鍛鍊にも全員舉つて動く最も愉快なる時代を現出せしめねばならぬ。第二には繼續的と云ふ事である。如何なる修養に志す場合にも此の要件を缺くに於ては決して大なる効果を收め得ぬからである。第三には公正的と云ふ事である。我が學友會の現はす活動は如何なる種

類のものであつても其の根抵に於て範を天下の青年に示し則を万世の後人に垂ると云ふ偉大なる抱負と自信とに基けるものでなくてはならぬ。斯の如く普遍的繼續的及公正的なる三大標語を掲げ全員一致して白熱的奮進を試むる時に於て我々の理想境は着々眼前に展開せられ其の活動の跡は聽て皆瑤沙原誌雄飛號或は盛觀史を飾るに應はしき好資料となるであらう。而も又自分は吾學友會に斯る經過を取らしめんとするは實に會員全部の腦底に燃ゆる熱烈なる希望たる事を疑はぬ。茲に所感の一端を記し諸君と共に吾學友會無窮の發展を切に希ふ次第である。

大正十三年甲子歲冬

須之部量學

（以下は極めて薄い文字で書かれた、ほぼ不可読の文）

序にかへて

一九二二年に始められた我々の歩みは、既に三年を経た。三年の月日、決して短くない。まして創業の三年だもの。その間の足跡はたとへ手をひかれたものであるにせよ、考へれば意外の方面にまで延びてゐる、これらを集めて一本にして見たいとは、長い間の我々の心の奥に秘められた事だ。學校が落成してその記念式を舉げるに際しこれを出し得るに到つた事は非常に嬉しい事だ。我々は今後長くこの同じ歩みを續けなければならぬ。永遠に續くべきこの歩みの第一步に立つたこの足跡を今更振りかへつたとき、前途に更に大なるものゝある事を感じさせられる。こゝに序を書くに當り、學校當局でもあらゆる便宜を與へられ、尙校長先生には此書の命名に數日を費された事を書きたい。瑤沙原誌。これが今後我々のあらゆる活動に冠せらるべきものである。武藏野の眞只中に生いたつ我々に最もふさはしいものなるを我々は心から喜んで居る。

更に左の諸君にそれ／＼分擔して原稿を書いて頂けた事を深く感謝する。

開校より學友會創立まで 竹田八雄君

第一年度學友會會誌 第一回理事 尚好

第二年度學友會會誌 第二回理事 尚好

第三年度學友會會誌 第三回理事 尚好

各部々報 各部 委員

寮學誌 各年度寮總代

尚、編纂委員として設樂安男、谷亮平兩君が最初より努力せられた事は我々の感謝に耐えぬ處である。

大正十三年十一月

本吉加岐磐
田中達次郎

綱 領

第一 智徳ヲ磨キ體力ヲ鍛ヘ剛健博大ノ性格ヲ陶冶スヘキコト

第二 廉恥ヲ尚ヒ勤儉ヲ旨トシ高潔敦厚ノ精神ヲ涵養スヘキコト

第三 紀律ヲ守リ責任ヲ重ンシ自重自治ノ習慣ヲ體得スヘキコト

第四 師長ヲ敬ヒ學友ヲ愛シ恭順寛容ノ風度ヲ保持スヘキコト

校歌	一
應援歌	二
察歌	四
察友會則	一〇
及申告事項、施行注意、對抗競技規定	一一
察生規約	一二

學友會誌	一三
學友會誌	一四
學友會誌	一五
學友會誌	一六
學友會誌	一七
學友會誌	一八
學友會誌	一九
學友會誌	二〇
學友會誌	二一
學友會誌	二二
學友會誌	二三
學友會誌	二四
學友會誌	二五
學友會誌	二六
學友會誌	二七
學友會誌	二八
學友會誌	二九
學友會誌	三〇
學友會誌	三一
學友會誌	三二
學友會誌	三三
學友會誌	三四
學友會誌	三五
學友會誌	三六
學友會誌	三七
學友會誌	三八
學友會誌	三九
學友會誌	四〇
學友會誌	四一
學友會誌	四二
學友會誌	四三
學友會誌	四四
學友會誌	四五
學友會誌	四六
學友會誌	四七
學友會誌	四八
學友會誌	四九
學友會誌	五〇
學友會誌	五一
學友會誌	五二
學友會誌	五三
學友會誌	五四
學友會誌	五五
學友會誌	五六
學友會誌	五七
學友會誌	五八
學友會誌	五九
學友會誌	六〇
學友會誌	六一
學友會誌	六二
學友會誌	六三
學友會誌	六四
學友會誌	六五
學友會誌	六六
學友會誌	六七
學友會誌	六八
學友會誌	六九
學友會誌	七〇
學友會誌	七一
學友會誌	七二
學友會誌	七三
學友會誌	七四
學友會誌	七五
學友會誌	七六
學友會誌	七七
學友會誌	七八
學友會誌	七九
學友會誌	八〇
學友會誌	八一
學友會誌	八二
學友會誌	八三
學友會誌	八四
學友會誌	八五
學友會誌	八六
學友會誌	八七
學友會誌	八八
學友會誌	八九
學友會誌	九〇
學友會誌	九一
學友會誌	九二
學友會誌	九三
學友會誌	九四
學友會誌	九五
學友會誌	九六
學友會誌	九七
學友會誌	九八
學友會誌	九九
學友會誌	一〇〇

學友會誌

第一回發刊號

編輯 學友會 印刷 學友會 發行 學友會

地址 學友會 電話 學友會

山本 水吉 廣田 田中 鈴木 佐藤 高橋 山崎 木村 石川 渡辺 森田 山口 村上 田村 山本 水吉 廣田 田中 鈴木 佐藤 高橋 山崎 木村 石川 渡辺 森田 山口 村上 田村

第一回理事長 須之部先生

理事 藤倉寛三 和田治平 手代木 治兵衛

第二回理事

行實省吾 梶原 義 澤口剛雄 本多侍郎 本吉加岐磐

第三回理事

阿川昌一 平井孝雄 松崎健吉 小山隼太 本吉加岐磐
田中達次郎 野崎壽三男

開校當初から理事選舉まで

我校は大正七年當時の政府に於て計劃された、高等専門學校創設及擴張事業の一として、大正十年十一月に生れ出たものである。今その最初の一頁を記すに當り、入學以前より記したい。

入學まで

この新しい無垢な萌芽に對する純一な憧憬を以て、私達は十一年一月早々文部省へ受験名票用紙を貰らひに行つた。その頃はまだ本校の事務は一切文部省内で取扱はれてゐた。名票提出には浦和へ來た。その時の私達の印象は如何に美しいものだつたらう。美しい郷土心を抱いて私達は半建ちの本館の敷居を踏んだのだ。雪のとけそめた早春の頃、校舎のわきにたつて小雨を透して遠くグラウンドの向ふの松林をみた時、だゞつひろい赤土の上にしよんぼり建つてゐたあの本館に倚つて、屹然と立つた莊嚴な松林を見た時、何んなに私達は力づけられたか。初代だ！ 何でもはじめから造り上げるのだ。といふ自覺がむく／＼と燃えあがつて來た。私達は眼を轉じ肋骨の寮を見た。山と積まれた材木を見た。私達の住家としては全部これからである。私達は未踏の天地を開いてその初めから熟視するのだ。私達はめぐまれた。如何に開拓者の歡喜をほしいまにしたことよ。浦和の町は静かだ。天地は渺茫、武藏野の自然は麗美であつた。私達はどうしても入りた

い、否入らねばならぬと思つた。

入學試験は三月十八日から二十二日まで。本校は未だ建築中で一千六百の受験生を收容するにあまりに貧弱だつたので文科志望者は埼玉師範、理科志望者は浦和中學をその受験場として。体格検査は男子師範附屬小學校で施行された。

入學許可

大正十一年三月二十九日、私達は入學許可の通知を受けた。此の良き日、天に謝し、地にひざまづいて嬉んだこの日。私達は希望に燃えた浦和高等學校に入學し得たのであつた。

入學式

四月十二日、この指定された入學の日をどんなに待つたらう。私等の光輝と榮冠とを物語る二條の白線と菊華の制帽を頂いて開校第一の登校をした。前途多幸なるべき第一回の入學式はこの日製圖教室で行はれたこの時の式こそ二百の健兒を迎へた浦和高等學校誕生の聲であつた。學校長の告辭に始まり、生徒總代（文科甲類石田 英君）の答辭に終つた。相會するもの教員二十生徒二百皆新らしく強い希望と抱負とに輝の色を見せてゐた。

翌十三日、初めて各自の座席につき、先生方から學課につき指示を受けた。授業はその翌日より、机も壁も黒板も指跡一つなく、總てが開拓者の鋤を待つ荒野の様だ。特に造りたての便所へ最初の洗禮をあたる事は最も得意とする所であつた。

かくして我校の開校は大地祝福の中に完了した。

當時の學校及其の周圍

當時は學校もその周圍も何處へ行くとも總ては犯されざるものといふ一言にみちて居た。校舍は本館一棟小便室一棟、寮は東寮三棟及賄の一部が肋骨だけ、其の他は一切未知數の部類に包括されてある。用材の山人夫の影、大工の響、仕事小屋の反映、こんなものゝ外はむかしながらの武藏野であつた。特にグラウンド、特別教室以西の如きは何處が開かれるかと思ふばかりの有様。萱の枯草。木瓜の木。もとより大きなものゝ、

ないのは當然のことながら、學校の敷地といふより買手のない不毛地といふ方が適切だと思はれる位だつた。

學友會創立

數日の授業をうけた後私達は再び製圖教室に集まつて吉岡校長から學友會創立の發議をうけた。即ち智徳の練磨、体力の向上に於て學校教育の不備を補ひ、その完成を助成するために、職員生徒が一の自治機關を創設するの要を説き、賛否を求められた。「學友會が校友會か。」「創立方法に付いて。」「各部の改廢鹽梅。」其の他細部にわたり數人は様々な激論をはいたが、結局私達はそれらは別に審議することとして之の自治機關創設には大なる賛意を表した。

組長選舉

四月二十一日私達は學則の定むる所により各組毎に擔任教授立會の下に第一學期間の組長を選舉した。入學したばかりではあり、且名前も氣性も判らぬ頃とて、随分いゝかげんのもあつた様子。或組では「あいつはおせつかいが好きらしいから。」といつてその人を選舉したと言へば、或組では五十音順の首席を選んだとか聞いた。とにかく選ばれた人は幸にもよくその職責を盡し得た人だつたことは事實が之を示し、さすが創立當初の組長だと思はせる。してその組長副組長は

文 甲	石 田 英	岡 本 靜 彦
文 乙	赤 坂 政 治	大 河 内 信 威
文 丙	堀 豐 次	本 吉 加 岐 磐
理 甲	行 實 省 吾	株 木 治 郎

理 乙 竹 田 八 雄 新 井 寛 一

學友會創立委員會

さて前に同校生徒によつて賛意を表された我學友會の創立について、更に細部の議定をなすために、學校長、教務課長、生徒監、評議員の教授並びに第一學期正副組長を以て學友會創立委員會を組織した。先づ學校長より本校學友會創設に關する復案を各委員へ交附され、各委員は此の復案を審議し自分の組の意志を尋ねて修正の箇所を見出し、四月二十五日その討議會を開いた。その時の可決したものが只今の會則である。(別項參照)

理 事 選 舉

この會則の定むる所により、各類一名宛の理事を選任することとなり、五月一日學友會理事長立會の下に各組毎に行はれた。榮譽ある當時の當選者は次の通り

文 甲	藤 倉 寛 三 君
同 乙	和 田 治 平 君
同 丙	手 代 木 治 兵 衛 君
理 甲	行 實 省 吾 君
同 乙	梶 原 義 君

本會最初の五理事が皆有能の士であり、特に熱情と誠意の人であつたことは、吾人にとつて幸福の極であり、感謝の至である。創業の難を勇敢に突破された人々こそ永く記念されなければならない人々である。

今や本校はその外觀の完成と共に第一回の結果を見んとして居る。こゝに至れる、もとより皇恩國恩によ

るとはいへ又一面本校職員生徒の努力と、その健闘とによるものである。この當初經營時代である理事選舉以前の校誌を記憶をたどり感慨に湧きつゝ禿筆をはしらせた次第である。

大正拾一年度記事

新設の高等學校へ這入つて來た吾々には、元氣が充ち充ちてゐた。既設の高等學校が捉はれてゐる、歴史や氣風などと云ふものに、全然離れて、新しい學風を、この武藏野の眞唯中に打つ建てようとする意氣は、木の香の新しい、未だ彼方此方で、鈍の音がかん／＼と響いてゐる新校舎で、初めて出來た徽章をつけ、新しい二本筋が燦然と輝いてゐるを冠つてゐる者には、誰も彼もの心に溢れてゐた。

その一方には古い昔から夢みてゐる様な靜かな町があり、その町の穩しい人民共を、望月の缺けたる事もなく教育したり、監督したりする人々があつた。

吾々は、吾々には又よくとも吾々の理解者には正當と見え、非理解者には奇異と見えるかもしれない所の服裝をし、普通の人よりも少し威勢よく歩き、時には、愉快なる歌を唱ふのもあつた。それは、さうする事が、放肆でない自由が其處に存し、引込思案でない、將來、我が大日本帝國の有數なる中堅となるべき素質を養ふ時の、正當に理解さるべき伸々した處があると信じてゐたからであつた。

所が、一方教育したり監督したりする方の人々は、高等學校の生徒が、そんな風をするのは、大に豫想に反した事だつた。高等學校は中學の上である。その學生は中學生の兄さんであり、模範ともなるべきである三年間一日も學校を休む事なく、家に歸つては、勉強と家事の手傳ひに忙殺さるべく、素行篤實、學術優秀石部金吉、鎧を着けたる体でなくてはならない事に豫想をきめてゐた。そして、そんな事では勝手が違ふと云ひ出した。

其處に、兩者に矛盾あり、溶けぬ處あり、困つた問題が起つた。
女學校問題と警察問題とが、起るべく餘りに當然だつたのは、強ちに後世の史家を待たなくても、其處に歴然として遠因があり、その上近因が附け加はるに於ては、餘りに、明瞭過ぎる位明瞭な問題となるのである。

女學校長問題

人を批評すると云ふ事は、つゝしまなければならない事ではあるまいか。同情と理解。すべてを明かにしなければ止まないで、了解とを、批評せんとする人の上に注いだならば、人は益々批評する事が、こわくなりはいないだらうか。

大正十一年六月廿日二三の新聞に浦和高等女學校長内藤氏の、父兄會席上に於ける談話として、次の句がのつてゐた。

「近頃新聞で見る通りに汽車通學に際して、車中には、不良青年が、毒牙を磨いてゐるさうである。又浦和には、高等學校が新設されたについては、青年の元氣溢るゝあまり、或は間違が出来ないとも限らないから共に注意を要する。殊に汽車の時間については、高等學校とも相談して時間を選ぶ考へである云々」(後略)勿論吾人は、若き血燃ゆる者と雖も、何等の批評力を、加ふるなしに、無條件に、新聞記事を信ずる者ではない。だが、世間では、新聞記事を、無暗、盲目的に、取入れて、何等の考察する事なくして、直に取つて以て、己の智識となすものゝ、多い世の中である。

かくの如き世の中にあつて右の如き新聞記事が、責任ある教育者の口より出たとしたならば、之實に我々の名譽を傷け、今後永久に續くべき我々歴史の最初の二頁を汚すものである。

若し、事實無根の事が、故なくして、新聞記者の手によりて、作成されたりとせば、之實に新聞社の落度である。何れにしても、吾人等は、よく事の真相を確めなければならなかつたのである。

一度此記事新聞紙上にのるや、我々浦高二百の健兒は、奮慨甚しく、一刻も早く、事の真相を確め、若し果して、内藤氏が、かくの如き言を吐きたりとせば、よろしく、學友會理事は、之を糾弾し、罪を天下に謝せしむべし、と云ふものあり、或は、かく、我等を目して、不良少年そのものゝ如く見なすは、我等を侮辱するの甚しきものである。果して女學校長、此言をなしたりとせば、身教職にあるもの、何の證據ありてかゝる暴言をなすや、よろしく會見して、我等の眞價を知らしむべしと激昂するものあり。轟々して、慰撫する事も、出来さうにもない爲に、吾等は斷然、女學校長と、會見せん爲、當日直に緊急理事會を開き、對策を協議した。

即ち當時の理事、藤倉、和田、手代木、行實、梶原の五名は、公式に女學校長と會見して、懇談する事に議一決し、當日午後三時、浦和高等女學校校長室に於いて、會見したのである。

先づ我等は、當日の新聞記事を出して、校長先生の言とあるは事實なりや否やと切り出し、頗る、峻嚴に事實の有無を探索したのである。

氏は初め、事實を全然否認し、「單に父兄會席上に於いて今年高等學校が新に開校されたから」と言つたのみと、主張して、容易に眞相を吐きさうにもない。

我等五人の代表委員は、交々辯じ立てゝ、強硬に攻めたので、流石老功なる氏も竟に逃るゝすべもなく、

ひたすらに陳謝をのみ事としたのである。

吾等は陳謝をのみ求むるものでない。氏をして、此言をなさしめたる原因は何れにありしや、此考を氏に起さしめたるは、何なるかを明かにしなければ、責任を、果す事が出来ないのである。

吾等はなが／＼の押問答の末、氏の幾多の辯解を綜合して、父兄會席上に於いて、氏が、教へ子を愛するのあまり、口をすべらして、我校をも引合に出して丁つた、真情をおぼろげながらも、つかむ事が出来たのである。

即、氏は、身教職にあるもの、殊に女子教育者である。氏は男女間の戀愛關係を極端に恐れ、慊惡してゐるのである。此恐しき男女の戀愛事件を未然に防がん爲には、之を父兄の手、即家庭教育に委ぬる外はない。殊に高等學校新設され、輝く徽章、得意の白線二本に迷ふ、愚なる女學生の生じないとも限らぬ。殊に氏が某高等學校在學中、氏の友人が、婦人と關係し、交際し居りしを、時に注告し、時に叱咤して、其關係の一日も早く、切れん事を希望した事もあつたと云ふ。

眼前に此事實を見せられたる氏が、全部が全部、かくの如きものゝみとは思はぬも、時に或は、戀愛關係を結ぶものなしも限らぬ、と察したのも亦無理はない話かも知れぬ。

故に氏は、父兄會の席上遂に我校の名を出し、引合に出して、父兄の嚴重なる監督を依頼したらしいのである。

それが新聞記者の手により、誤り傳へられて、遂に我校の名譽を毀損するが如き記事ともなつたのである。故に我等は一々其辯を辯して、「たとひ内藤氏の言足らざるにもせよ、我校の名譽を傷けたるは、事實である。一度此記事の傳へられて、我校の生徒の憤慨甚しく、一刻も早く、先生が所説を聞きて、是非曲直を

明白にせんといさまいてゐる。あゝ、先生が、先生の教へ子を愛するの餘り、事此處に至らしめたるは、先生の一大落度であらねばならぬ。先生が、先生の教へ子を如何様に愛し、導くも、先生の自由である。されどそれが爲に、何等の關係なく、菊の如き潔白さを以て、之より伸び出でんと、漸くに、芽を出したるのみなる、我浦和高等學校の名譽を傷けたるは、暴と云ふも實に甚しい。我校の名譽ある歴史は、先生の妄言によりて其最初の一頁を汚された。拭ぐはんとして拭ふ能はざる汚点を如何にして、先生は賠償せんとするか、あゝつゝしむべきは口、辯者は、考に浮ぶ事を云ひ、賢者は、言はんとする事を思ふと。あゝ先生は遂に、辯者のそしりを免れ得ず。我等は誠意を込めて、單に人を攻撃せんが爲の舉に出づるなく、眞に我校の名譽を思ひ、けちづけられたる、我校の歴史を如何にせば可ならんかを、之れ憂へたのである。我等が赤心、面にあふるゝを見て、氏は更に一言辯解の辭を加ふることなく、只管に失言を謝し、明日新聞記者に會見してよくわが眞意を傳へ、以て誤りを匡し、謝意を表はすの辭を新聞紙上に發表する故、それにて、勘辯相成りたしと、希望した。我等は此處に於いて、代表委員としての責任を果したる故、夫にて満足し、歸途につく事にしたのである。而して途中、同日突發した左側通行問題に關し、警察當局の意見を聞かんが爲に、警察署に立寄つたのであるが、此事は、詳細に警察問題に關し藤倉君が執筆せらると思ふから此處には之を省く。而て直に歸校し、翌日放課後、直に生徒大會を開催し女學校校長と會見の顛末を報告し、全生徒諸君の諒解を得て、成功裡に、女學校校長問題は、結末を告げたのである。

警察問題

六月廿一日の生徒大會に女學校問題の報告が終ると、驚くべき事が語られた。

當日朝、數人の學生が、停車場から學校へ行かうとした。その途上、交通整理を矢張りやつてゐる浦和署の一警官が、その中の右側を歩いてゐる者に注意を與へた。學生は其の注意に従つた。そして警察前迄行つた。すると其處にゐた數人の警官が、突然追つて來て警察へ同行を命じた。其處迄は至極平穩である。處が問題となるべき事が起つた。それは、同行する時、暴力を以て引きずり込んだといふ事である。そして數人の警官の中に私服の儘の署長がゐて、その私服が宛も計畫されたかの如く見えたといふ事である。そして署内に於て侮辱を與ふる言辭を弄したといふのである。

其の暴力と計畫と侮辱とが非常な驚きを我々に與へた。法治國の一員として、法に服従するのは當然である。左側通行は従つて、當然我々が服従すべきである。處が暴力計畫、侮辱の非法を以てするのは何ぞやといふので我々の憤慨は其の極に達し、當日の學生大會は、直ちに左の如き決議をした。

- 1 高等學校學生に對し、浦和署が苛酷の扱ひをするは何故か
- 2 暴力を以て我々を拘束し、侮辱を加へんとするは何故ぞや

實行委員として

藤倉寛三、

和田治平、

手代木治兵衛、

行實省吾、

梶原義、

の五理事の他に

齋藤安治、

美波周、

今日出海、

堀豐次、

吉田恒太郎の五人を選出した。

十名の實行委員は、廿二日三時半警察へ行つた其の時學生の心ある者は、獨り寮にあつて坐視するに忍びず期せずして警察前に集つて來た。餘りその數が多數となつたので、警察の了解を得て、その後庭へ入れて貰つた。(此の事が、當時の新聞に浦高生大舉して警察を襲ふと報道されてある。)

實行委員は、屋上會議室で署長と交渉したが仲々了解しない。靜肅に、會談七時に到つて、岡本保安課長の仲裁もあり、漸やくにして、警察は、過去及將來の處置に對する了解を與へるといふので交渉は終つた。一方、署長自ら、全生徒に會つて、その了解を傳へる事とした。

後庭に集つてゐた學生は、四時から八時迄、無慮四時間を暗黒の庭に立ち續けて、ひたすら交渉の早く終らん事を祈つて、靜肅な緊張裡に待ち受けてゐた。寄宿舎から握り飯を荷車で運び、井戸水を飯み乍ら、立食したりした。

署長が、全學生の前に立つと、皆は歡呼して迎へた。芽出い交渉の結果が、責任ある人の口から、直接に聞かれるといふ豫感に充ちてゐたからだ。全部、脱帽して、その己れに屬する不注意を謝し、さて、署長の挨拶如何にと待つた。處が、その瞬間は如何だつたらう。

學生の期待は極端に裏切られた。署長の述べた言は一言も前の了解した意味に觸れなかつたのである。悲壯な痛憤が、暗に鎖された庭を襲うた。悲憤の涙に、すゝり泣きする者すら出來た。

然し乍ら、此の場合吾々は、多勢を恃んで、暴舉に出づる事は絶対に慎まなければならぬ。一に破るれば又一の手段がある、しかし、寮に歸つて、熟議を凝らし、一層有力なる手段に出でんにはといふので、一同寮に引き上げる事になつたのは午後九時であつた。

第二回、第三回の學生大會が開かれた。熟議は凝らされた。準備は成つた。一舉にして、計畫を實行せん

とした。所へ、吉岡校長が、責任を以て事件の解決を期するから、一切を任せて貰ひたいと云つて來た。任すか、任せまいか、此は重大な問題だけに非常に論議された。委員は、徹夜して火花を散した。だが、我々の目的は終始一貫してゐる。法治の民として、正當な解決さへつけばよい、我々一個の面目のために初めから、やつてゐる譯ではないのである。解決に對する約束を與ふるならば、任せても宜いといふ事になつた校長は、吾々に、吾々の満足する言質を與へた。吾々は校長に對する信頼と、言質の満足によつて、此の事件を全部任せて終つた。

それで、あれ程騒がれた此の問題も一時終つた。

そして其の結果は如何なつたが。唯、我々が言ひ得るのは、吾々は今でも満足してゐるといふ事である。それは、その言質の責任が果された形となつたといふ事に基くのである。

附言して云ふが、當時、此の事件は種々の人によつて批評された。所が全部の批評は、其の鵠を得てゐなかつた。抑々新聞記事其のものが、非常に間違つて、此の事件を報道してゐたからである。間違つた新聞記事を基として勝手な憶測を加へて捏造し、それによつて批評し、得々然として發表する處の所謂評家の愚を笑はざるを得ない。真に知る事によつて、初めて真に批評し得る。

陸上大運動會記

創立委員の手によりてなれる學友會則に、毎年十一月八日を卜して、陸上大運動會を行ふとある。殊に今年には本校の開校式舉行されて朝野の名士千數百の來賓が集る、當日、學校設立當時、功勞のあつた此

等の名士に立食の饗應をする、それに浦和町民も、わが開校式に祝意を表する爲、十一月八日、九日、十日と、三日間山車を出して祝賀するとある。

殊に第一回陸上大運動會である、何等の經驗なく、前例なき次第であるから當事者たる、我等五名の理事の苦心も實に絶大なるものであつた。

で約一ヶ月以前より準備おさ／＼怠りなく、開校第一回の運動會を完全に、より盛大に行はんが爲、連日理事會を開き熟議をこらした。

今年には在校生も少き故、本校の希望で例年縣廳主催にて開き居りし、縣下中等學校陸上競技をも併せて行ふことになつた。故に前後三回に亘り、縣下中等學校の代表者と會見し、之が審判規定等を協議したりして其多忙さは、眼もあてられぬ始末であつた。

先づ競技部委員と協議して、プログラムを作成し、之に則つとりて決行せんとした。

對類競技は今年度は單に八百米リレーのみを以て行ひ、之が優勝類に、先に作成せし優勝旗を與ふる事とした。各類にては夫々應援團長を選出して、猛烈に、應援する準備に夢中だつた。各類共に大旗を作り、應援旗を作り、大太鼓を借り入れて物々しい應援振りを、示したのである。

我等理事は、應援規定を作り、鳴物は太鼓のみとし、各類の色別は、文甲緑、文乙白、文丙コバルト、理甲黒、理乙赤とした。

さて、運動場設備は和田理事自ら之に當り、女學校、中學校、女子師範、男子師範等より種々の器具等を借入れ、殊に天幕の不足を補はん爲、多數借入れる爲の盡力は、多大のものであつた。

かく苦心の結果、どうにか、かうにか、盛大に行ひ得るとの自信を得て、賞品も分に過ぎる程のものを作り

メタルは文丙吉川尙君の圖案を容れて作成し、おもむろに、時日の來たるを待つ事にした。

而て、審判顧問として當日、斯界の權威者法學士辰野保氏、工學士山岡慎一氏、其他十數名の帝大競技部選手の來援を池知君の紹介により請ふ事を得たのは、吾人の誇となし得る所であつた。

かくして我等の最も記念すべき十一月八日は來た。開校式に兼ねるに運動會である。縣下及び生徒の人氣は、いやが上にも沸騰した。早朝より夫々係員の活動はめまぐるしい程であつた。

當日運動會係員の主なるものは次の如くである。

會 長	吉 岡 校 長
副 會 長	竹 村 教 授
審 判 長	須 之 部 教 授
審 判 顧 問	辰 野 法 學 士
同	山 岡 工 學 士
會場準備係長	和 田 理 事
運動進行係長	行 實 理 事
衛生警備係長	梶 原 理 事
記録係長	藤 倉 理 事
審判係長	手 代 木 理 事

かく準備に忙殺されてる頃より、天なる哉命なる哉、細雨頻に降り來る。

されど堂々たる會場には早朝より數千の觀衆殺倒し來る。參加の縣下中等學校應援團は續々とつめかけてゐ

る雨天順延とは定めあるも、時々晴れくるので斷然決行する事としたのである。かくて開校式は舉行され十一時半頃終了した。直に吉岡會長の開會の辞ありて、運動會は舉行され我校選手の百米競争によりて、戰の幕は切つて落されたのである。此頃集る觀衆無慮一万數千浦和未曾有の盛況と稱せられた。

かくて、順次プログラムによつて競技は進行し、競技半頃になつて、朝來の細雨はいよ／＼ほんものとなり來り、さしも熱心なる觀衆も、雨の爲に退場するの止むなきに至つた。されど、各類應援團の意氣もの凄く各々半裸体となりて我校の爲、各類選手の爲に氣焔をあげてゐる。

審判員及び各係員は傘もさゝす雨中にびしょぬれとなりて、競技進行の爲に盡力した。即豪雨とは雖も我浦高の健兒は一人として之にめげたるものがなかつたのである。

當日審判顧問として來臨を辱ふしたる辰野山岡兩學士を初め、帝大生諸君は、大雨を何等顧慮するなく、我等の爲に盡力下されし事は、實に感謝の念に堪へない次第である。殊に、辰野法學士は、洋行の途次ロンドンにて調製せられたる、貴重なる洋服を、臺なしにされしにも關らず。平然として、我等を叱咤し激勵してあの豪雨にも關らず、我等をして大運動會を完成せしめて下さつた事は更に感謝の念に堪へず、此處に改めて、感謝の辞を呈するものである。

當日の記録は別頂陸上運動部記録にあり。

而て競技は進行し遂に午後五時頃一般競技を終了し、當日の呼物たる對類選手八百米リレー競走開始せられた。

各類應援團は選手を擁して、控室より出場し、各選手各其部署につく。

此頃豪雨益々激しく、寒氣亦甚しく、加ふるに夕暮迫りて、觀衆は殆ど退場せる始末であつた。

されど選手の顔には必勝の氣眉宇に、あふれ、勝たざればたふるゝのみとの意氣込すまじかつた。而して各類應援團の意氣亦天に沖し、高校生徒によりてのみ演出せらるゝ氣慨を表はし得た。

スタートに選手集りて、コースを定め、日本一の稱ある、スターター山岡慎一氏の合圖によりて、いよくスタートは切られた、選手は皆各々よく走り、バトンの受授もよく、何れを勝とも定めかねたが、文乙選手よく走りて、遂に一着となり、優勝旗を與へられた。

かくして第一回大運動會も結末をつげた。

天我れに幸せず、降すに豪雨を以てしたけれども、我高校生之意氣を天下に表明する事を得たのも、或は又、天の下せる、試練であつたのかも知れぬ。

兎に角、豪雨の爲に、觀衆が半頃より離散したとは雖も、其準備と云ひ、人氣と云ひ、其應援振りと云ひ、其大仕掛と云ひ、吾人の誇り得る處であつて、又、今後再び繰り返される事がないかも知れぬ程のものであつたのだ。

運動會終了後、寮友會主催となりて、全校職員生徒及び審判顧問たる、辰野氏一行等を、招待し、晚餐會を催して下されし事は、當時の寮總代堀、手代木、和田、守屋及び委員諸君の盡力によるもので、感謝の念に堪へない次第である。席上、吉岡校長及び辰野法學士の演説は、我浦和高等學校の校風設立者たらざるべからざる我等の肝に命じて、墨守せざるべからざる事ではあるまいか、席上辰野氏は、諸君等が、諸君等の選手を職業的にするも、或は純潔たる學生選手にするも、諸君等の努力如何にある。浦和高等學校の校風が亦に染まるも、黄に染まるも、或は白きまゝの純潔さを保ち得るも、一重に諸君等の努力如何による。と喝破せられたが、吾人等の肝に命ずべき言辭だつた。

あゝ諸君、我浦和高等學校の校風は設立當時の如き高潔なるものであらうか、少くも我校の校風なると天下に誇り得る校風を有するであらうか、竟に何等かの色に染まつてしまつたのではあるまいか。あゝ之れ誰の罪ぞや、諸君、諸君等の學校であり、諸君等自身の校風である、心ある諸君の奮起すべき時ではあるまいか

理事改選

大正十一年度の運動會も終了せる十一月下旬、學友會の年度末の爲、來年度理事の改選を、各類別に行うた當選者次の如くである。

文科甲類	澤口剛雄
文科乙類	本多侍郎
文科丙類	本吉加岐磐
理科甲類	阿川昌一
理科乙類	平井孝雄

而して、直に會長より任命された。其後來年度各委員の選舉を行うて、事務引斷きをなし、我等は完全に與へられたる本務を全うする事を得て、此處に任務を果たし退く事を得た。

我等が任期は後の理事のそれに比して短期であつた。而て最初の事であり且何等の經驗なく前例なき爲、隨分なしおほせない事業もあつた。然し我等は、忠實に浦和高等學校學友會の爲に、働いたのである。我等は終始議論により行動し、感情により支配さるゝ事がなかつた。

正義と認め、學友會の爲と思へば、多數者を何等顧慮しなかつたのである。殊に寮に起つた流行病問題の時の如きは、或は壓制の如き感が、なかつたでもあるまい。故に我等は時として、理事横暴の聲を聞いた。が併し事件の續出した最初の學友會理事としては、誠に止むを得なかつたのである。多忙にして事件續發せる一ヶ年の激務を、よくなしおはせたりと、今にして、自ら誇り得るは、一に理事横暴の聲を聞く程。又壓制的に出でたりと思はるゝ程に、熱心と努力とがあつたが爲と思ふのである。

かくして吾等は、堂々と行動して、學友會の爲に盡力した。時に或は、學業を犠牲にしなければならない時もあった。だが我等は何等の不平なしに行動したのである。かくして一ヶ年の活動も終りをつげ、次期の理事諸君の御盡力を希望して、我等は、學友會の任務より退いたのである。

大正拾二年度記事

委員再選舉

吾々が、大正拾二年度の理事に選舉せられ、そして尊敬すべき、前理事の、手腕と熱情を以つて型造られた、その業跡を繼がねばならなかつた。而も多忙なるべき學友會第二年に入るのである。吾々は不安であつた。唯専心以つて之に當らうと誓ふのであつた。然も最速如斯不詳事に會つたのである。理事改選の翌々日委員の改選があつた。そして之が開票の結果將に發表せられやうとした。その時吾々は面白からざる噂、即ち委員選舉に不正投票のある旨を聞いた。それは次の二点であつた。

一、一人にて數枚の投票を敢てなすものあること

一、自己の、屬さざる部に對して迄選舉をなすものあること

以上である、吾々は勿論之を信じなかつた、或は爲にせんとする者、若しくは不平の一部の輩語であらうと思つた。然し吾々は之より共に活動しやうとする第一歩に、如斯暗雲あるを遺憾に思つた。同時に不愉快であつた。出来るならば、投票用紙の再検査をしてその、眞否を明らかにして欲しかつた。於是吾々は須之部理事長にこの旨を報告し、再検査を請ふたのである。不幸にも理事長はその筆跡より推して不正投票と見做すべきもの幾分あるを發見した。吾々は於是、如斯不正投票ある中で選出せられた役員との行動を潔とせず、理事長並に前理事に再選舉を乞ふたのである。

學友會豫算會議

大正十一年十一月八日の我が校第一回の開校記念式も過ぎてもうそろ／＼學期試験の準備も始まらうとする頃私し達は前理事の後を繼ぐ事となつた。然し理事の任期は十二月末日までなので會に關係した事柄は總て未だ前理事に依つてなされた、だが十二年度の仕事として私等は會の豫算の編成をしなければならなかつた。私の任期中何が苦しかつたといつても之れ程つらいものはなかつた、學校に入つてから漸く九月位で學校の勝手も知れずかて、加へて無能なる事を明か過ぎる程自覺させられて居る私等にとつては理事といふ仕事は全く耐え得ない程な重荷であつた。其の苦しい一年の中で又最も惱まされた想出多いあの豫算査定當時を遂想して見ると喜しい様な苦しい様なまるで夢の如き感がある。

前年度では開校第一年のことで學友會は確か文藝・野球・庭球・陸上運動の四部が豫算の分配を受けたが此の

年になつて辯論・剣道・柔道・弓道・旅行・水泳の六部が新たに加へられ總て十部となり會の外形だけは整ふたのである。後の六部は勿論此の豫算編成に依つて實際的に其の存在の價値を保ち得る理由であるが前の四部もそれ／＼創設尙日淺いために設備などは殆んど整はず従つてそれ等各部の費用も實に莫大なもので僅かな會の收入を以てしては到底各部の満足の行く様にはならなかつた。それで私達からは各部委員に對し各自の部の眞面目な豫算請求書を出す様に求めた、けれども人情の然らしむる所はどうにも致し方がない。此の年の會の收入總額は概算四千六百三拾五圓九十錢であるからして此の全部を各部に費したしても平均一部當り四百六拾三圓六拾錢である。故に部の種類に依つて其の間に多少の高低があるとしても最高精々七百圓位に止まるといふ事は誰が見たつて解る事柄だ。然し之れに對して提出された各部の請求書を舉げて見るとざつと左の如くである。

辯論	八三三、五	文藝	二五七三、〇八
剣道	一二〇〇、二五	柔道	九五五、
弓道	六二二、	野球	一九九二、三
庭球	二九三九、八	陸上	一一五五、三五
旅行	六三〇、	水泳	四二〇、
總計	一三、三二六、二八		

僅か四千五、六百圓の金額に對しては余りに出駄ら目な數字ではないか。勿論各部委員は此いふ數字を出した所がそれだけ自部に取り得様とは思つては居なからう。然し請求額が多ければそれだけ多く豫算を取り得るものと思つて居るかも知れない、然しそれを取捨査定する私達にとつてはそんな事は少しも關係はない。そ

んな大額をどし／＼切り捨て、行く事は私達にとつては却つて愉快な感じがする位なものだ。何の關係もなくなつた今になつてはさうは言ふものゝ其の當時は、他の理事はいざ知らず私だけは其の莫大な請求に對して随分悩まされた。豫算査定の日より一週間も前から私は其の事ばかり氣にして殆んど何も手につかなかつた。勿論各部の豫算査定については夫々擔當部が定められた。籤引の結果辯論文藝は澤口理事、柔道陸上は本多理事、野球弓道は本吉理事、剣道水泳は平井理事、庭球水泳は阿川理事といふ様に決つた。擔當部が決まると私達は先づ各其れ専門の商店から商品目録を取寄せ、それでも用の足りない場合には直接店に出掛けて直段、品質等を調べた。それから請求書中の自分の不必要とみなした條は片端から棒にした。必要と認められるものに對しては相當の考慮を拂ひ其の個數品質等を定め商品目録に映して出来るだけ安いもので間に合せる様にした。何も安いものが好なのではない反つて品質の良い物を選びたかつたのである。が限られた豫算に對し或る數だけが必要であるといふ場合には値段でねぎつて置かねばならない。それで出来る限り廉賣品を歓迎したわけである。左様風にして削ぐられるだけは削り出来るだけ安價な品で間に合せる様にしたが所詮收入總額に合せる事は出来なかつた。私の受持つた庭球などは軟球の他に硬球コートを設置するのでそれに伴ふ臨時費經常費が加へられ前掲の様な大額であつてどうにも仕方なかつたが、漸く千二百圓代まで切りつめた。然しこんなで所詮通せる筈がない。せめても七八百圓代までにしなければならぬのだ。其の時最も私を悩したものは硬球ボールだつた今思ひ出すも癪にさわる。なくてはならないしさればといつて價は高し。だが査定の前日までには漸く九百圓代に切りつめる事が出来た。他の理事達も如何に苦心慘慚した事であらう。「各部委員が今少し眞面目に請求してくれたならば……」といふ嘆息は恐らく私一人ではなかつたであらう。十二月十四日木曜日漸く査定に取り掛る事になつた。其の日午後三時會議室(今

の教務課の室)に私し達五名は集つて前掲の順序で各自の切りつめ案を提示し相互の意見を取り交し増すべきは増し棒にすべきは棒にしたのであつたが増す等は殆んどいやく全く無かつた。必要な物でさへも何とか口實を附して削らなければならぬ様な状態であつた。其の時の悲喜劇今思ひ出すも他の理事に對する懐しみが出て来る。十二月の頃とて寒さも強い、もう日も落ちた。室内は暗い、然し電燈は付かない、仕事はまだ澤山に残つて居る、仕方なく寮務室へと移つた。食事もそこへ香しからぬ仕事を始めた。辯論文藝といふ順序に片附いて行く、夜の九時頃には一通り切りつめは終へた。そこで總計を出して見た、數百圓の過剰である。今一度削り直さなければならなかつた。此の頃には實際私し達は疲れ切つてしまつて居つた。之れで三回目の削り直したのである。然し學期試験も近い、どうしても早く片付けてしまわなければならぬのだそこで第三回の切りつめを始めた。此の時には私し達は全く切りつめる勇氣は無かつた。總て必要なものばかりだ、これ以上削り取つてしまつたならば部として何が出来てあらうだがない金はやれない、どうしても収入額までに漕ぎ付けなければならぬ「こんなものは抜いてしまへ」「いや抜けない、擔當者としての自分にはもうこれ以上削れない、そんなに此の部ばかりを攻めるな」なんといふ荒々しい言葉が交換された夜は騒々と更けて行く、寒さはいよいよ身に浸みて来る、然し議論は水掛論に終る。仕事は相變らず捗取らない。ボン・ボン……と打つ時計の音も何となくものうささうだ。目は自然に塞つて来る。眼蓋は何だか厚ぼつたくなつた様な感じがする。相手の言ふ聲も夢の様だ。須之部理事長がストープに石炭を投げ込む音にふと我に返へる……朝も三時四時になるにつれて漸く眠たさも薄いて行つた。十五日の朝五時頃漸く總計を収入に等しくする事が出来た。其の結果は次の様であつた。

豫備費(規定、収入の百分の七) 二六九、^四 理事費 二九七、五〇

辯論	一九九、八	文藝	六八四、四〇
劍道	四九一、五〇	柔道	一六八、
弓道	二五五、五	野球	五四五、五〇
庭球	七八〇、七	陸上	四八九、一〇
旅行	一九二、	水泳	二六二、五
計	四六三五、九		

こうして査定は一段落付いたが豫算會議は十六日土曜日だ、それまでにこれを謄寫して會議への出席人數約五十人に行き渡る様にしなければならぬのだ。早速整理して謄寫の方は生徒課へ御願ひした、授業を告げる鐘は鳴る、さるで變な氣持だ。朝食もそこへ登校した。然し睡魔は四方から迫つて来る。

十六日午後一時いよいよ豫算會議は開れた、普通の役員會では殆んど出席する者もなく漸く定員の三分の二に達し辛じて開會し得た(否流會の憂目を見た事さへもあつたが)様な有様であるのに此の會議だけは總出席といふ好景氣であつた。會場には生氣が漲つて居る、實際人間といふ者は元金なものだ。(此處で惡口を云ふのではないが)文藝部委員などは自部の豫算が通過するやそこへ退出歸宅してしまつた。如何に豫算會議とは言へ自部に金を取り込むばかりが委員の能ではあるまい。今少し學友會を自身を思つてもらいたいのだ。話しはそれだが會長の挨拶に依つて會議は始つた。會長、議長の席につく、議事規則は大體帝國議會のそれだ。先づ第一に須之部理事長の會の收入支出に就て説明し、次いで本吉理事の主旨辯明あり第一讀會に入り數時間の質疑應答の後第二讀會に入つた。劈頭第一に理事費所屬の謄寫版一組金額五〇圓は否決

されてしまつた。此の様な必要品を不必要として否決した委員達の態度は實に慨歎の至りである。此の金額も結局は文藝劍道部其の他に歸してしまつたわけだ。同じく理事費の雜費五〇圓は雜費二〇圓事務員手當三〇圓とに分けて他は變化なく、辯論部は無事通過、文藝部に於ては部委員から蓄音機レコードの代價三〇圓の新しい請求があり理甲級長行實君の賛成演説に依つて通過してしまつた。次に劍道部委員善波君の練習用道具五組代價四二、一〇圓及び革胴の金紋代五圓の追加請求があり多數の賛成に依つて之れも通過してしまつた。柔道部は査定金額が他部に比して甚だしく僅少であつた爲め部員堀君は大いに奮戦したが効なく提案通りに通過し。弓道部に於ては山崎先生から矢場建設費の増額請求があつたが矢張り柔道と同じ運命となつた。野球庭球は原案の儘通過、次が陸上運動部で池知委員から蹴球ボール用空氣入ポンプ金額三圓五〇錢の新しい請求提案があり通過した。旅行部委員から安全携帶手斧二個金額九圓の新提案が出された。堀君の賛成演説があり之れも通過した。水泳部を殿にして第二讀會は終つた。こうして見ると請求書に無つた所の新提案は悉く通過して居る。それも一票二票の差ではなく大多數の賛成に依つてゐた。此いふやり方も豫算獲取の一方方法かも知れない。結局査定金額上に差引約三拾五圓の不足が生じたのだが各所から搾つて漸くにして充す事を得た。

斯くして第二讀會は終り議長より第三讀會の必要の有無に關する問があつたが其の必要なく此處に第二回學友會議豫算會議は終りを告げた。時正に午後九時。

物品會計規則制定

學友會も年をふると共に、理事並に各部共にその備品がふえて行くは當然だ。然し又消耗して行くものも廢棄すべきものも出づるのも當然である。然しそれらがどんなに瑣細なものであつても浦高學友會といふ公共的のものであり絶対に私的のものゝ區別する必要がある。現代の子は、充分細心でありたい。大まかな所謂豪傑は過去のものであらしめたい、吾々は、吾々の品物を丁寧にあつかふ、流用出来るものは流用する。それは小學校の一年の時から教へこまれてゐる。我々はこうして、この儘にふへるのはふへる儘、なくなるのはなくなる儘にして置くことは出来ない。備品は備品消耗品は消耗品、用ひられるものは用ひられるもの廢棄すべきものは廢棄する、こうして總てのしめくくりをつけねばならぬ。これが物品會計規則制定の所以だ。これは重要な規則である、新役員の中には或は之を了解しないものがあるかも知れないこれからいつて來る新會員、それらに對して道具使用等の最初に當つて、この規則を充分に頭にしみこませる必要がある。でないといふんだ間違が起らぬとも限らない。老妻心ながら附記する。

中等學校生徒を主體とする辯論部

並に運動各部大會に關する申合せ事項

同日、中等學校生徒を主體とする辯論部並に運動各部に關する申合せをなした。それ中等學校生徒をして或は思想の向上を計り、或は体育指導をなすのも、吾等の努の一つであつてよい、殊に學友會として、單に

内部のみならず、こうした會を催し、以つて現教育會に對して一警鐘を打つ義務がある。然し吾々のは飽く迄高等學校學友會である。故に物質的より寧ろ精神的にこれらに對して、力をそゝぎたい。底力のある堂々たる學友會でありたい。吾々の部の總ては、その態度意氣に於て中等學校の模範でありたい。吾々の催す中等學校大會、本年度に於ては辯論、野球庭球陸上運動、劍道、柔道としてこれに對して優勝旗を作成するこゝとした。

(別項參照)

於是、この規定案を造つて役員會議に附したのである。勿論之に對して不賛成をとへるものは無い、役員は喜んで之に對する。希望を大とし、飽く迄も中等學校指導の第一線に立たんことを申し合せた。

陸上運動會對類競技規定制定

學友會の年中行事として全會員一様に楽しむそれは運動會であらう。創立記念日を互に壽ぎ。そして楽しい運動會それは吾々に於ける或る意味の命の保養である。命の洗濯である、而して昨年既に、之に對して優勝旗を作成した。然し昨年度に於ては之をリレー一つに於て、勝つた類に之が授與されたのである。それは開校當初の年として且、運動場も充分に完成せられず吾等亦その技拙なかつた時としては當然である。然し當時既に對之心ある士は、リレーのみならず他の競技種目を採点せよとの聲があつた。そしてそれが輿論として次第に大きくなつて行つた。特にこれは一方に於て學校の意氣を盛にする所以であり同時に校内に於ける運動熱を高め引いて体育上に及ぼす効果大なるものあることを確信した。吾等は於是對類競技規定案を作成したのである。戶外運動の比較的不振な今之を會議するといふ理由は運動會近くなつては各類々によつて

相當の利害關係の生ずるであらうことを顧つたからである。今のうち、如斯争のない時に之を作るのがより當を得た方法であり公平であるからである。

會議は割合に平凡であつた。その中(12)の槍技は初めの案には無かつたのであつた。誰れかゝらの修正案が通過してこうなつたのである。その中團體競技なる語がある。これは生徒課の体操科の先生からの御要求もあつたのである。吾々はこれは或浦高の特色ある、運動たらしめたかつたのである、即ち全校の生徒皆出で、そして皆一様に戦ふといふ而も浦高團體競技として天下に知らしめたい、そうしたものを作りたいといふ意志であつた。然し合惜そうしたものを發見出来なかつた。一時はこれを切り取らうとしたが、結局この儘議案としたのである。どうせあるならこれも生したい。浦高特色あるものを造りたい。

新入生を迎へて

新入生、幾多の俊才を蹴倒して入學した若人二百名、吾々は感激を以てせずでは之をながむることは出来ない。吾々は吾々の過去に於て如何に彼等がいざんで居り希望に充ちてゐるかを知る、彼等は實に寵兒である。多幸兒である。彼等の前途には洋々たる未來がほゝわんでゐる。光があり熱がある。彼等を正しい高等學校生として導く、それは吾々として、誠に責任あることであらねばならぬ。之に對して吾々は幾度も理事會をひらいた、彼等が試験の始まらぬ前、即ち吾々の試験が終ると同時に之に對して、一片の檄文をはつた。そして同時に、制服に關すること、体操帽子に關すること、教科書に關すること等を注意した。彼等は試験中どんな氣持で之をながめたらう。どんなに心が躍つたらう。超えて新學期、四月十二日吾々の始

業式のあつたとき、舊生徒總代として本多理事は對之諄々と兄が弟に對する様な口調で高等學校の生活の意義を説いた。そして彼等の入學に對して祝福した、更に今後に對して期待する旨を懇々と述べた。凡らく新入生の總ては天命に感謝したらう、そして高等學校入學第一步に感激が生れたらう。生徒總代阿部總一郎君の答辭それは、喜に充ちたものであつた。希望にもえたものであつた。新入生の總てはそうであつた。次いで本多理事、即ち過ぐる一年の経過を述べ、創業一年の苦痛を述べた。更に新入生に待つ多きを述べた。吾々は非常に心よい氣持であつた。誠に嬉しい始業式であり、生氣あふれたものであつた。

對抗競技に關する申合事項

大正拾二年五月十七日突然にこの申合せ事項を作成するに至つたのは一寸奇異な感もするであらう。然しこの日對大阪高等學校との陸上對抗競技成立し、これに對して、その規約を會議しやうとしたのである。而して吾々に對抗競技に對して申合の無い限り對抗競技そのものは或は莫然たるものになつて來がちであり、かくては對抗競技の眞意義に異つて來るのである。こゝに於て吾々はこの機會を促へ之を申合せかくして對大阪對抗競技案を議さんとした。然るに大阪高等學校からは此の日に至つて之が取消を申し込んで來たのである。於是止なく、之を取消したのだ。この議案に對して別に大なる異議をとなへるものも無く、すらくと可決して行つた。今後多くの對抗競技があらう、熱と意氣、男子と男子の血汐はほゞばしるであらう。肉躍り血涌く、光景を演ずるであらう、その基礎は今にして成つたのだ。この僅か七條の簡單な申合せ、それが我等高等學校生活の最も意義あるもの、一つとして、倫理講義よりも修身書よりも尊いものとなるであらう。吾々はその日を期待して止まぬ。

三高校對抗陸上競技開始に關して

三高校對抗競技、運動界年中行事の一として世に、種々喧傳さる様に到つた、けれどもその開始交渉當時を思ふと誠に感慨無量である。思へば血潮に燃ゆる若人が勝つて狂ひ敗れて亦狂ふといふ、吾々は或時は勝利の王杯に月下に亂舞したこともあつた。敗卹の血涙に、相擁して戦庭にひた伏したこともあつた。高校感激生活といふも、對抗競技に於て極まるといふて不可はなからう。誠に意氣と意氣との白兵戦であり。男子と男子熱血の大格闘である。武藏原頭、培はれた吾等が之が實現の一日も早からんと望んだのも、故無しとせずである。

陸上運動部では早くから對抗競技の希望があつて、大正十二年一月、既に第八高等學校に對して戦を挑んだのであつた。然し先方から都合悪しき旨を報じて來た。學年改まつて、新精銳を迎へた競技部は、之に對する意志更に堅く、屢理事と相會合して之が實現に勉めた。而して吾々の意見は大体に於て大阪高等學校即ち、吾校と其の創立を一にし、且一高三高と相並んで、關東關西の大決戦をしようとしたのである。幸にして大阪高等學校役員會は、吾々の意を容れ承諾の旨を報じ來つたので、吾々は之が議案を作成し六月役員會議に附せんとした。然るに其後に至つて、大阪高等學校から、先の通知即ち下交渉の通知を以て公式思ふなるものと解し、又夏休真近きも準備尙備はざれば此の際中止したき由の通告に接した。吾々は頗る意外に思つた。又遺憾に堪えなかつた。學生大會は開かれ、一方大阪高等學校との交渉がなくなつた、不審を解き、他方新なる相手校を物色した。然し大底の高等學校は既に相手を求めて、年々之を行つてゐる、僅に新潟、山形、八高静岡位のものであつた。學生大會は新潟高等學校への挑戦に一決した。而して當時の選手監督善波周は

大阪に向向して真相を極めんとした。又一足遅れて競技部代表も亦大阪に至らんとした。然し會長よりの忠告に依つて之を止めひたすら新潟高等学校からの返信を期待してゐる。然るにこゝに意外にも、山形高等学校競技部委員、訪問し來つて、吾校との對抗競技の開催を求めて來た。吾々は大阪高等学校との關係を述べ、代表者今尙大阪にあり、且他方新潟高等学校への交渉中なるを以つて即答を避けた。吾々は於是新潟高等学校に向け返信を促した。善波歸校し、學生大會を開き大阪の状況を報告し全然其の意志無きを認め、更に今後の態度を議した。最後の手紙に驚ける、新潟にては、委員連池公咲、山田正盛両氏を派遣し來り、寮記念祭の爲前の手紙の遅く手に入りし理由と、山形高等学校との交渉關係を述べ之を慨し更に本校との對抗競技の開催を求めて來た。單純に考へて居た對抗競技が今や或る種の非常の複雑さを加へて來た。新高側及び山高側よりは連日委員が訪れて來る。特に新潟よりは先輩を引具して切に要求して來る。吾等はいくつて婿八人、全く板挾の狀態となつた。吾等はこの急なる場合に當つて最善の方法を講じ百尺竿頭更に一步を踏み出さんとした。即ち吾々は三高校對抗競技の新例をひらくの更に興味深かるべきことを知つて、來浦中の新潟委員に告げた。新潟委員は大に吾を德とした。於之三高校對抗競技開催に關して努力を拂ふべく意を決して、競技部監督善波同委員金子並に理事本吉、土曜日曜を利用し之が下交渉に山形に向つた。新潟委員亦吾等に隨つた。先輩校之に對する僅か二年の吾々の態度として、汗顔の至なるも、正は正とし邪は邪、清廉潔白、誠心誠意以つて、高等学校對抗競技に一新紀元を劃さんといふ、若き使命と希望に燃えてゐた。山形は勿論最初之を心好しとしなかつた。然し山形新潟の最初の交渉ある故、之を「オープン」として参加せしめよと云つた。けれども吾々は勿論之を拒み、本校として最初に挑戦せる新潟高等学校との關係を更に述べ三高校の圓滿融合以つて、三高校對立の興味あり意義あるべきことを力説すれば山形委員幾分意動ける

か兎に角新潟委員と先づ會合して見やう云ふ、両者の會合に對して吾々は或る種の不安に襲はれ、吾等突然こゝに参加したき旨を述べ、於是三高校大評定の場面展開された。各々口角泡を飛ばして論ず。然し我等の誠意徹せるか、遂に茲に三高校對抗競技開催と決し、並に下相談成立した。かくて後三高校胸襟をひらいて相語り。響應に預る、善波本吉尙新潟を訪問し、その練習を見、其の大敵なることを知る。多くの歡待に、満腔の悦に入り、成功裡に浦和へ歸つた。

かくして六月十五日附山形高等学校陸上競技部長から大体に於て山形に於ける三校の下相談に成つた案を以つて本校部長宛に申し込んで來た。同十六日附を以つて新潟校長から本校長宛に大体同様の挑戦狀が來た。於是、理事並に競技部代表者、協議をとり、その第二條に於ける運動場に關し帝大トラックとあるのを本校トラックと改めることが重大要件であつた。之に對して六月十八日附を以つて、新潟高等学校より幸にも承諾の旨報じ來た。然し山形高等学校からは、本年度は帝大トラック明年度以降は本校或は山高にての報が來る。山形に對し更に之に對して本校の意に賛成せられ度きを送り且新潟既に承諾の旨の電文を送つた。十九日日附を以つて遂に山形も本校の提議に賛同し來つて、於是六月二十六日役員會召集され、山高側提出のものを提正して通過し（別紙参照）七月一日山高より全部承諾の旨報じ來る。七月五日新潟よりも之が賛成を表し來つて三高校第一回對抗競技は開催せらるゝに至つたのである。

愈々期日も迫つた、七月十日、學期試験の終つた時、吾等は選手推戴式を運動場中央に於て行つた。澤口理事開會の辭を述べ、會長挨拶を述べ、平井理事痛切なる推戴の辭を與へ、本吉應援團長亦一片の激勵の辭を述べ選手總代金子主將之に對して挨拶あり式を閉づ。炎熱強く、若人は感激に充つ。應援團はトラックの一

隅に於て、應援歌の練習をなすと同時に、選手の猛烈な練習に、雨の如き拍手をあびせかけた。

七月十三日 應援團に關する事項を協議せん爲、山形高等學校委員總代山崎巖氏、應援團長落合兼夫氏來る同十四日新潟高等學校選手監督濱松太郎氏先輩薄田正知氏と共に來浦し同拾五日午前八時新潟選手一同、同午前九時山形選手一同着浦前者は本校ホールに後者は學校前アレー社に入る、同日午後三時、本校會議室に於て三高校幹部、對抗競技順序に關して協議を遂ぐ、そのうち、山高側並に新高側より前日に決勝の一部を加ふべしとの議出で各校各々激論あり。勿論最初の企て或は充分に行かざるべきも、ホームグラウンドとしての吾等は充分に、その時間其の他を研究し、齊藤圭司氏等にも相談して作成せるプログラムであり、又既に校長同志の挑戦狀によつて決定せるものであり且、本校學友會役員會議により更にその不可能なるべきこと、それらの理由によつて拒絶した。遂に吾校の提案（別項参照）通り可決せられた。この席上次いで應援團に關する申合せの一部、即ち應援團員の用ゆる手旗に關して又一議論を戦した。それは主に新高側からの提案であつたが、コーチャ―其の他の意見もあり我校に於ては手旗を持つことのよりよきことを主張して下らなかつた。新潟遂に折れて、手旗を使用することに決定した。

當日出席者

本校側 會長、理事長、陸上運動部長、理事五名、陸上運動部委員三名、

應援副團長、

山高側

岡部競技部長、委員總代山崎巖、競技部委員原於英雄、金澤良一郎、

鈴木武、選手監督石川、應援團長落合兼夫、先輩二名

新高側

競技部委員蓮池公咲、山田正盛、早山隆三、栗原善夫、選手監

督濱松太郎、先輩二名、

同日午後七時から、寄宿寮會議室に於て應援に關して三高校代表者集合し先に本校陸上競技部長から山形、新潟両校競技部長宛に出した、應援規定に基き申合事項を決定した。

同時に又プログラム編成に關して會合をひらき、短距離に於て豫選に於て強きもの同志の組合せとなるを憂へ各校より、其の自信あるべき者の順在を定め、第一回豫選はAの第一Bの第二Cの第三、第二回豫選は、Bの第二Bの第三Cの第一の様に組合す。應援團申合せの會合に於て小旗使用を通せるも新潟に於ては之が用意無き由である故に本校山高共に之に讓歩した。

越えて七月拾七日 午後二時から二階合併教室（今の文三甲教室及食堂）で歡迎會を行ふ。澤口理事開會の辭、次いで本會長の歡迎の辭あり。平井理事歡迎の辭、痛烈人を制す長廣告をふるひて降壇、之に對して新高側から蓮池主將の挨拶、山高側から委員總代山崎巖氏の挨拶があつた。山高のコーチャ―、金栗四三氏茲に一場の講演あり更に一段の緊張を添へた。終つて吾等校歌壯なる哉武藏野を高唱すれば、新潟山形亦、寮歌應援歌の應酬あり、新潟得意の「佐渡節」あれば山高、情緒あふる「おぼこ節」あり、戦の前の氣分、誠に英雄の趣がある。然し吾校沈黙多く歌はず、會漸く終らうとするとき「デンカシヨ」をやつた、かくて會閉ちた明後日の戦如何に、若き吾等に胸の躍動を覺えた。

十八日今日で用意萬端とのふべき日である。試験終つて此の方、吾々の未経験が如何に多くの勞力を費したか。思ひ起しても涙が出る。特に此日、朝まだきに、全部をおこし、夕深更に至る間時をも休む間もなく奔走した。特記したいのは、新潟側からの要求で、「ビット」の堀りかへしに従事したことである。當時の吾がコーチャ―大岡實氏自ら先頭に立つて、之を堀つた。そして遠いボールボルトのビットを堀つてこれをふ

るひ今堀つた所に入れるのである、そして堀つた土は又、邪魔にならぬ、特別教室の裏迄持つて行かねばならなかつた。實につらい仕事だ、前日、前々日であつたら、人夫を傭ふことも出来ただらうに、我々はたゞ明日の決戦を思ふのみでこの悲惨な労働に従事した。然し深夜、漸く之が完成して、天を仰いだとき、我々の口から期せずして應援歌が、高唱された。感激は襲うて來た。僅かの「サイダー」あたかもそれが酒でもあるかの様に。

七月十九日戦は遂に來た。午前十一時應援團は寄宿寮前に集合し「甲武信はしぐれ」の歌堂々ど入場すれば拍手ひゞく既にして山高、新高兩應援團入場し來る。正一時入場式辰野審判長から一場の挨拶並に今後この競技發展上に對する訓辭あつて、各校主將「各堂々と戦ふべし」と宣誓して第一回對抗競技の幕は切つておとされた。勝つか負けるか、我等は片唾をのみつゝ、競技の展開を俟つ。(當時の記録は陸上運動部記録参照)戦終る。得点山高八三、新高七二、之に比して我校僅か三十点、勝利に歡呼する山高應援團、萬歳、萬歳の聲を外に、沈黙に涙ぐむ我勢! 團長本吉 吉成、福井兩副團長に擁せられて、山高應援團に對して一言の挨拶をなす、山高さすがに敵を知るか、喜を抑へて、我等に答禮する。

かくて二階合併教室に於て慰勞會を開く。敗者よりも悲しいものは無い。本吉團長聲をばげまして挨拶をす。負けた負けた美事に負けた。然し負けるのは勝の前程であらねばならぬと、若人二百ひたすら泣く。會長亦悲痛なる挨拶あつて、選手主將金子、境に登るも語なし。來年を誓つて降りる。コーチャー大岡實氏一場の激勵の辭を與へらる。於是我等は勇躍以つて、立つを誓つて分れた。瑤沙原頭夕靄こめて夜はもの淋しい。

學友會役員選舉規則制定

役員、それは學友會の幹部であらねばならぬ。學友會の發展それは勿論學友會員全部の活動に待たねばならぬ。然しながら、各部各部の發展の過半はその役員の活動と意志とに待たねばならぬ、吾々の順良なる學風が醸される源泉は學友會であり、學友會の發展はその役員の手腕にあるのだ。於是役員は輕々に論せられぬ慎重に慎重を重ねねばならぬ、於是吾々の役員選出は少くとも權威あるものであらねばならぬ。然も昨年即ち本年の役員改選に當つて、既に不正投票があつたのである。如斯將來にあつては、頗る遺憾に堪えない、然しながら現在迄の、危しげな方法に於てはそこに不正投票が行はれるのが寧ろ當然であるのである。

吾々は於是機を見て、選舉法の制定を定めやうとした。然しその機會がなかつたがこゝに救仁部設置に關する役員會が召集せられたので吾々はこの機を促へて學友會役員選舉規則の制定をなしたのである。而して原案(略)を會長に依頼し、之を役員會議にはかつた。大なる議論も無く一二、修正の箇所もあつたけれども割合無事に通過した。かくて、本年度からの選舉それは充分に神聖なるものとし、各一票一票に對して權威生じ理事、委員の責任一層加はる様になつた。

指定洋服商に關すること

三月の終吾々は新入學生に使せん爲に指定洋服商より略服見本價格を取り寄せ、指定價格七圓五拾錢とした。而して、期日に間に合ふ様な日取にて寸法を取らしめた。然るに期日の五月一日に至るも尙未調製のもの

の多く、之を吾等に訴ふるものが多く、頗る困却した。それは指定商中。東京の某商店、浦和に来ることの面倒とその利得少きの理由で之が全部を九友商店に、譲與したのである。よつて九友商店は過重となつてかくの如き失體を敢てする様になつたのである。吾々の責任上の遺憾至極のことであつた。今後指定商を選定する場合に於てかゝること無き様單に品質、價格のみならず、その商店の責任感如何、も調査せられんことを望む。

九月に前の指定商満期なり、依つて茲に更に指定商を定めんとして浦和の相當信用ある商店、角屋、金井宮田、麻生、生島、平今等に見本を提出せしめた。而して之が見本の品質價格、裏地の如何を研究し、以つて左の二商店を一ヶ年間の指定商人とした。

角屋 洋服商 (松澤兵藏)
金井屋 洋服店

指定價格、二十五圓、新毛裏地、海軍ヘル。

右の如くにして例の如く日を定めて寸法を取らしめ、之が調製に當らしめた。相當信用に足る店であることを認める。

震災誌

歴史は大正十二年九月一日午前十一時五十八分より始る。

性質上寄宿寮を中心として展開するのは止むを得ない。また一日二日は世間同様呆然史であり、三日以後を

救護史とする。如實を尊んだが故に凡て現在形を以てした。

▲一 日▼

あの大雨の時は寮生の大部分は食堂で午餐の最中だつた。皿が舞ふ、鉢が飛ぶ、壁が崩れる、一震二震三震一時は全く生きた氣はなかつた。町の家は大部分よけてしまつたところ、に最早流言の子供が孕む。學校は瓦が少し落ちた位、町もさうひどくはなかつた。あとで聞くと十四五軒潰れたとか。みんな道端に出て蒼い顔をしてゐる。

汽車は不通になつたが、此の時は火事を知らなかつたので吞氣だつた。東京大火の報が何處からとなく傳つて來たのは四時頃だつたらう、かうなると人は現金なものだ。自分の家が危い、家族が危険だ、うす暗くなるまでには東京の連中は全部食糧や提灯を用意して出かける。殘寮三十名位、混沌、狼狽、呆然、これが一日後半日の歴史である。

▲二 日▼

寮はガラスとしてゐる。蒼い顔をして黙りこくつた幾人かが不安さうな眼つきをしてゐる。元氣な連中は東京の様子を見に出かける。寮は賄が歸つてしまつたので飯炊を炊いて茄子の香の物で一日をすごす。見物に行つた人達が歸つての報告に始めての騒ぎを知つた。所謂蜚語のそのまた誇張だから今考へるとあまりに馬鹿／＼しい位猛烈なものだつた。あたりが暗くなると東京の空が益々明るさを増す。「東京が灰になる。」こう思ふと無關心な筆者も、そぞろ涙なきを得なかつた。

▲三 日▼

朝から曇。正午から雨が降り出して三時頃大雨となつた。汽車は既に昨日から赤羽まで通る様になつてゐた。

寮の様子は昨日と大差はない。お晝頃から約十名許り停車場に出かけて、避難列車へ水運びの手傳ひをする箱の中に押し込まれて息の出さうにもなくなつた老人や、母の背に火をつくやうに泣く乳呑子や、焼單衣一枚の婦人や、一列車の中にどの位の悲惨を吞んでゐたかわからない。

水を運んでび廻つてゐるSは矢張り東京の人、火事の聲を聞くと共に飛んで歸つたけれど、家は勿論灰、家族の安否はさつぱりわからぬ。死んだのか生きたのか、Sのその時の氣持ちは到底ジツトしてはゐられなかつた。道は一つ。無茶苦茶に走り廻つて考へる余裕をなくすことだ。俺達の氣もみんなこんな風だつた。夜警をはじめ。四五人寮へ宿泊者があつた。

余 録

筆者は當時の狀を寫すために更に歩を上野の山迄運ぶことにする。先づ草履ばきで、正服、正帽、ゲートルに身を固めて太いステッキを持つ。ポケットには海軍小刀を忍ばせる。昨日は長村先生が〇〇とまちがへられて、自警團に頭をやられた。島地先生も左半身を目茶々々に撲られて、重態である等と、取沙汰されるのでドンキホーテの眞剣な心でナイフを握つたのだ。切符を買はずに窓から飛込む。川口驛で降りて赤羽まで歩かなければならないのだ。川口は半潰、傾斜、全潰見るも無殘な狀を呈してゐる。道に列をなした避難者が何千か何萬か知らぬ。限りなく続く。

澤庵を下げた人。掛時計を負つてゐる人。お鉢を抱いてゐる主婦。テゴで子供を擔いで来る魚屋らしい男。悲惨な滑稽である。口もとまで出かゝる微笑は途中で涙に變る。

舟橋は破れたとか云つて通さない。仕方なしに鐵橋の枕木を震へる足で踏みしめながら何十間かの命がけをやる。下は濁流が音を立て、流れてゐるのだ。子供を負つた婦人がゾロ／＼渡つて来る。人は強いものだ。

母は更に強い。と云ふことをツク／＼感じさせられる。

日暮里驛に下される。避難者の渦。

人波と張れどに氣をとられてゐると、

「惡む可きは〇〇〇である、吾等の家を焼き同胞を殺し今また此處に殺到せんとす！」と云ふ聲が聞える。

朱鞘の大刀をたばさんだ國民護衛團と云ふ肩書をつけた男が呶鳴つてゐるのだ。

上野の山の慘狀に至つては筆者は遂に筆を抛たねばならぬ。阿鼻、叫喚、混迷、雜踏、市の各所から未だ黒煙が上つてゐる。

四 日

浦高は創立後間もないのだが、縣下唯一の高校程度の學校でもあり、災害を免れたと云ふ關係もあつて立場は非常に重大な意味を持つてゐた。殊に寮生は僅か廿五名に足りないけれ共避難者の様子を見ては、どうしてもジツトしてゐることは出来なかつた。打算も苦痛も骨折りもみんな同胞のために泣く涙に洗ひ去られて、只「何にか盡し度い」と云ふ氣持ちで一杯だつた。丁度此の時筆者は寮の總代をしてゐた關係上一時仕事の中心になる義務を負はされてゐた。私は出るならば縣下の中學校を聯合して統一ある働きをしたかつた。然しそれは色々な情實などもあつて成らなかつた。

此の日僕達は服部先生の助力を得、廿五名許りを糾合して、有志は直ちに參加され度い旨を書いた、ビラを町の各所に貼り、ハツカ水、砂糖、外用藥、バケツ、テント、茶碗等を荷車に積んで川口町に出かけた。六辻村附近の路の両側の農家は殆んど全部潰れてゐる、川口町は鐵に直射される日光で息苦しい位ムカ／＼する。避難者の群は幾千、幾萬、ブラットホームに、街中に、ギツシリ詰つてゐる。浦和高等學校救護團の旗

を樹て本部を造つてから活動をはじめ。傷病者の運搬、介抱、玄米くばり、供水。砂糖水とハツカ水とは大受けだつた。同志許りではとても手が足りない、青年團や在郷軍人の助力を仰かうと思つたけれど役場も警察も耳を借さなかつた。

仕方なしに小學校に行つて、高等科の男女生二十名許りを集めて手傳つて貰ふことにした。赤い襷をかけた可愛い、人達の健けな奮闘振りは疲れた僕等に對する痛い鞭となつたことはいふまでもない。

七時半頃縣廳の貨物自動車にのせてもらつて歸浦した。途中の物々しい警戒ぶりには一驚を喫する。火事装束の自警團員に幾度提灯を突きつけられて尋問されたことだつたらうか。寄宿舎に歸つてからまた大騒ぎだ。「ペンキ塗りの建物には見あたり次第爆弾を投げる。」「大戸村の方へ三十人許りの〇〇が侵入した形勢がある。」「煙硝の香がする。」「井戸が危い。」こんなことが何處からとなく傳つて来る。よもやとは思ひながらも段々半信半疑になつた僕は疲れて動かぬ身体を無理に二時間交替で學校の周圍を守ることにした。須之部先生御自身寮の戸じまりを見廻つて鍵のかゝる窓は釘で打ちつけられた。電燈全部を消して東一寮の階下に雜魚寝する。

銃劍や木刀を持つた人達の姿が五六、うすら寒い秋の宵に黙りこくつて立つてゐるのは今考へても眞剣な喜劇であつた。

▲五 日▼

昨日の疲れのためか二三人病氣になつた人もあつた。それで今日は浦和町で働くことにした。中學生、師範生がよく働いてゐる。混亂は未だ少しも靜まらない、汽車の屋根に乗つた連中が「〇〇〇殺せ！」と連呼しながら通つてゆく。浦和の署長が東京から送られて來た〇〇二百人許りを放したと云ふので大分騒ぎが

大きくなつた。こゝでは二人殺された。あそこでは三人斬られたと云ふ聲が聞える。僕の日記には「嘗て大和民族の血に肥えし武藏野は六百年の後再び異邦人の血に飽く」と記されてある。

▲六 日▼

朝雨模様、午後雨。約廿人、川口驛に出かける、今日から汽車が川口を通過する様になつたので左程の混雜はなかつた。先日作業を繰返す。荒川の鐵橋の下に〇〇の死骸が七ヶ水に腫れて浮び上つてゐるのを見る犠牲だ！私は彼等が何にをしたかをしらない。只鼠の様に逃げる背から竹槍で突かれる様を想像して眼を閉ぢた。あとになつて〇〇の騒ぎが大部分單なる流言蜚語であつたことも、自警團の態度に就ても色々の批評と非難とを聞いた。筆者は當時直接にあの零團氣を呼吸した一人として口をつぐんで憐れな同胞に涙をそそがう。

この日川口に行く目的で汽車の屋根に乗つた連中は十名許り日暮里に下されて、そこで働いた。

▲七日より十四日頃まで▼

昨夜あたりから戒嚴令が浦和にも及んで馬に乗つた軍人の雄姿を町に見ることができた。それまで二日から絶えず亂打されてゐた警鐘も鳴りやんで人の心は暫く安らいだ。銃劍を持つた兵隊さんの一喝に遇つては「此の際」を口にして凡ゆる不道德を必然の名に被つた人達もおとなしく言ふことをきいた。力とは矢張り平和の基調だつた。

七日から大宮驛に出張することにする。寮生もボツ／＼歸つて來たし、通學生も加はつて甘何名、兵隊さんに手傳つてもらつて老人、婦女子組と壯年組とを分けて汽車にのる便を計つた。大變都合がよかつた。大宮驛の整理は十四五日頃になつてやうやく片づいた。

▲京濱罹災者調査團▼

十一日に須之部先生を中心とする、職員生徒罹災情況視察隊が組織されて、第一高等學校の寮を本部とし、澁谷驛前、新宿驛前、大塚驛前、早稻田工手學校前、増上寺前の五ヶ所に支部を置き、浦高關係者は自己及僚友の安否を急報す可き旨のビラを市中に撒いた。

此の計畫は大成功で、十五日に至つて全部の調査を終つた。

罹災生徒は京濱在住者中全部の約半數

最も痛恨に耐へぬのは本所にをられた阿部總一郎君の一家全滅。同じく本所の藤本次之助、及び柳井陽、両君の御家族の大部を失はれた事實であつた。

▲救仁部設置▼

十月一日交通が整ひ、人心が落つきを得るに至つて授業は開始された。

私達の仕事の最後を飾る可く、學友會に臨時救仁部が設けられた。各類各組を通じて一名宛の委員が選ばれ有志の寄附形式に依つて積極的に罹災生徒中の三十名の人々に對して物質的援助をなすことになつた。筆者は、有志と云つてもそれは非罹災者の殆んど全部を含んでゐると云ふことゝ、此の事業は今年の三月立派に完了したことを附記せねばならぬ。そして震災の物質上の被害のために一人の犠牲者も出さなかつたことをうれしく思ふ。

歴史はかくして灰燼より甦る鳳凰の如く帝都が復興の雄々しい槌音を挙げつゝある時、感謝の聲に送られてその扉を閉ぢる。

▼禮狀及表彰

尙我等の活動に對し特に書面を以て謝意を述べられたもの數名あつたが左に其の一二を原文のまゝ記さう。「恐ろしい火の海に溺れ、生きやうとして幾度も逃げまどつて黒煙の中に轉げました。そして命からゝ逃れ出で、又々苦しい救済列車にて見知らぬ土地に行く途中思ひがけぬ皆々様の御働らきに逢い、一度の食事もなき此身に生をよみがへらさる食事と水とを與へられ厚い涙と共に刻々と東北に向ひました。私は京橋區に住み帝大に行く兄も一高に行つて居つた兄二人を同時に失ひ、年老へる父母と小さい妹と共に逃げました。皆々様の勇ましいお働きにより、私共を助け下さつた事はほんとに御禮の申上やう御座います。唯皆様のお働きを一高に行つて居つた兄が知つた時、たとへ兄は焼死したとしても喜んでくれる事と存じます。やつと心が静まりましたから御禮に代へて申上ます。

(浦和高等學校罹災民救済部宛、福島市にて山内秀子)

又學校宛の年賀狀の一端に「握飯と水終生相忘るまじく乍延引御禮申上候」

(東京市下谷區車坂町 加藤才二)

十月二日學校長は次の表彰狀を我等生徒に與へられた。

本校生徒有志が這般ノ變災ニ際シ連夜本校ノ警備ニ當リ連日罹災者ノ救護ト鐵道從業者ノ援助トニ盡シ且ツ克ク罹災職員生徒ノ消息ヲ明ニシタルハ實ニ本校教養ノ旨趣ニ適フモノニシテ予ノ深ク感悅スル所仍テ茲ニ其ノ行爲ヲ表彰ス

大正十二年十月二日

浦和高等學校長 吉岡 郷 甫

わたくし達は實際よく働いた。働かうと思つて働いたのではない。働かなくてはゐられないから働いたのだ。人の波に押し潰されて死んだ赤ん坊を見た。息絶えた妻を擔ふた蒼き夫を見た。

槍を持つて狂ふ自警團と、子を求めて泣く母を見た。

私達はジツトしてゐることが出来なかつたのだ。生徒として學校のために働いたのではない。非罹災者の責任を思つて働いたのではない。人間として何にか盡さねばゐられなかつたら働いたのだ。僅か廿四五名でそれも新手と殆んど變らずによくあれ丈のまとまつた仕事が出きたかと思ふ。理論を超えて愛に燃ゆる心が仕事になつて現れたのだ。實際僕達の在つた處には、當に一脈の生氣がみなぎつたことを思ひ出す。そこに輿論の惹起が伴つた。

私達は私達自身の力は小さかつたけれ共、それが呼び起した大きな力に對して、限りないよろこびを持つてゐる。

筆者はこの一篇を私達の尊い事業の記録としてほゞえみを以て校友に捧げる。(平井孝雄記)

臨時救仁部設置

俄然として大震災は關東地方を震つた。一瞬時を境目としてこれ程の變化が起り得るものと、人々は今更ながら自然の偉力におのゝき慄へた。六十年の帝都の文明は隨所に起つた大震災によつて一瞬の間に灰燼と歸し去つた。恐怖動搖狼狽と人々はせんすべもなかつた。そののみならず十幾萬の尊い人靈と幾十億の富と

を失つた慘狀は實に目もあてられなかつたのである。

學友の災を被つたものまた七十有余家の多きに上つた。昨の平和は忽然として失はれて今は只暗涙にむせばなければならなかつた。罹災した學友の心は如何であつたらうか。この天變地異の打撃によつて、可惜英才を懷きながら學に従事することの不可能となつたものの全國に如何ばかりの數に上つたことであつたらう。親愛なる學友の中にもこの悲惨なる罹災者の多きを見た。實に心からなる同情に堪へなかつた。此の現前の學友の悲境を見て立つたのは實に學友會員總てであつた。

眞摯な友情が表はれ、友の悲みに力になつたのは學友會員の清純な美しい行として永遠に傳へられなければならぬ。この清純な眞摯な友情の發露こそは救仁部の成立を早からしめたのであつた。

一、實行委員の選舉

學友の悲境に翕然として集つた學友會員一同の誠心はこゝに實行委員の選舉を早からしむべく理事を促した。理事は即刻各學年各組一名の實行委員の選舉を了した。この實行委員十名と理事五名がこの事に従事することになつた。選舉の結果は左の如くであつた。

文二甲	新 國 康 彦	文二乙	和 田 治 平	文二丙	善 波 周
文一甲	松 崎 健 吉	文一乙	龜 田 純 一 郎	文一丙	堀 豐 次
理二甲	田 中 達 次 郎	理二乙	今 泉 政 吉	理一甲	内 田 富 夫
理一乙	菊 池 楨 太 郎				

以上の諸君が委員となつた。この外に理事五名即ち澤口剛雄、本多侍郎、本吉加岐磐、阿川昌一、平井孝雄の諸君がこの事業に携はることになつたのである。

因に委員中其の後都合により止められた人があつたので其の顔觸にも若干の異動を來した。其の結果新に委員になつたのは次の如くであつた。

文二乙 澤野小次郎

文二丙 加藤宗三

文一丙 吉成由平

二、資金について

これより先この問題について最も心痛せられたのは吉岡會長であつた。吉岡會長は學友會の會長であり校長であるため、愛弟子の悲境であり、會員の窮迫であるがため幾多の英才の困難に最も同情せられた。これがため幾度か文部當局を尋ねられて授業料の免除を請はれたのであつた。併し乍ら其の勞甚だ多かつたに係らず、文部當局よりは學校經常費に支へなき程度に於て、授業料を免除することを許されたのであつた。これは經常費より授業料免除額を差引く計算になることであるから、それだけでなくとも新設校として經費多端の折柄なれば、事實上非常な困難でなければならぬ。けれども悲境に立つた生徒を顧みざることもまた出来ないのであつた。されば二重の痛心を持たなければならぬのであつた。この結果全生徒に對する九月分授業料(五圓)の免除となつたのであつた。これは學校にとつて大きな打撃であつたに相違ない。けれどもこの授業料の免除はやがて救仁部の資金完成の最大原因であつた。既に一般生徒は九月分が免除され而も罹災學生は困難に苦しまなければならぬ。茲に於て一般生徒諸君の同情はこの五圓をば友のために喜捨されたのであつた。實際學生の身として物質的援助などといふことは寧ろ不可能といつて差し支へない。けれども同情の發露は偉大なる効果をもたしたのであつた。

三、救仁部の確立

實行委員は既に選定せられた。茲に於て幾度か實行委員會は開かれた。この委員會に於ては先づ救助を要す

る罹災學生の調査が凝議せられ、實行委員の力によつて其の調査は遂げられた。次に救助の範圍と細末に至る迄の規定の凝議がなされて規定の原案はなつた。この規定等一切の事柄に對しては救仁部の始終を通じて須之部理事長が當られたのであつた。實にそれこそ一通ならぬ困難な事柄であつたので心痛せられたことは非常なことで感謝しなければならぬのである。扨規定の原案等一切が出来上つた爲め之を學友會の役員會に上議した。而して完全に救仁部として學友會の臨時機關として確立するに至つたのである。この決議は大正十二年十一月二日の役員會によつてなされたもので、其の詳細は學友會役員必携の第七浦和高等學校學友會臨時救仁部規定によつて明細にされるからこゝには之を略す。

四、救仁部の事業經過

救仁部は既に確立した。こゝに於て一般學生の友情の發露たる贖金と辯論部(五拾圓)文藝部(七圓余)及び特別會員の寄附金よりなる豫算のもとに月額最高貳拾五圓の給與又は貸與によつて幾他の罹災學生の一助としたのであつた。この給與又は貸與を受けた罹災學生は其の數二十二名であつた。そして規定第一條にある「修學の繼續困難」を幸にも防ぎ得たことは全く學生一般の偉大なる同情の結果に外ならない。

而して規定に依れば大正十三年三月迄學資の補給又は貸與をなすもので、其の後之を止めるとなつてゐるこれはまことに止むを得ないことであつて、一時の急場の救援がその本來の目的でもあり、また然らずとしても、資金の關係上止むを得ないことである。兎に角會員一同の誠心こめての同情が罹災學生の救援に資すること多かつたことは美しい事柄であつて、永く傳へらるべきことでなければならぬ。

五、剩餘金處分問題

大正十三年三月に至つて其の學資の補給又は貸與を止めた救仁部は其の所期の目的を終つて若干金の剩餘を

得た。この問題について如何にすべきかは救仁部規定第九條に「本部ノ收入カ學費ノ補給額又ハ貸與額ヲ超過スル時ハ會長ハ學友會役員會ニ附議シテ其ノ費途ヲ定ム云々」の規定に従つて學友會の役員會の決議に従はなければならぬ。けれども實行委員會は參考意見を役員會に表示することは差支ないのである。そこでこの剰餘金と合算した前年度の總剰餘金の追加豫算會議は五月二十三日放課後圖書教室に於て開かれた。而して其の費途については非常なる議論が生じたのであつた。

つまりこの救仁部の剰餘金と合算したる壹千余圓(救仁部の剰餘金は四百余圓であつた)中の壹千參拾五圓を以て野球スタンドの建設並に其の五拾圓を以て關東中等學校辯論大會表旌盃の作製に充當すべき豫算原案であつた。この原案は先づ救仁部實行委員會にはかられた。この委員中にも救仁の目的を以て集められたるもの、剰餘金をスタンドに使用することは妥當ならずといふ人もあつたが委員會としては決議權を保有しないのであるからとにかく學友會役員會に其の處分決議を委せるより外なしとして可否の問題は別として白紙をもつて役員會に委任したのであつた。かくて五月二十三日追加豫算會議は召集せられ。否として反對するものも多かつた。今可否兩論を記載することも要は救仁部の剰餘金が含まれてゐるため議論沸騰したのであつたがため、強ちに徒爾ならずと筆者は信ずる。

可とするものは

「學友會の剰餘金がかくの如く纏ることは可成り困難なことである。剰餘金が纏れる際に之が費途を定めることは可成緊要のことである。創立日尙淺い學友會各部の整頓が未しといふ際なれば何部なりとも費用を欲する。けれどもこれが分擔をなすときには其の力薄弱のきらひがある。これがため最も必要と認めた野球スタンドに用ひることが妥當である。先づ第一に土塀塙が野球會あるが度に破損し其の修理の費用の支

出に學校としては困難である。この土塀防禦のためにも其の半永久的のものにして將來スタンドの必要もある關係上より見ても兎に角順次に各部の完成の上からして必要であり妥當である。」とするのである。否とするものは

「野球スタンドの建設に必しも反對するものでない。けれども場合が場合であり、支出金の性質が性質である關係上之が反對を稱へざるを得ない。即ち各部が未だ整はざるに先き立つて野球部のみが完成することは妥當でない。而も豫算の中には救助を意味する救仁部の剰餘金が含まれてゐるに於てをや、學生の救助のために醸出した金を救助に關係なきスタンド建設に充つることは非なり。」とするのである。

可否兩論の大様は右の如くであつた。けれども救仁部の剰餘金をそれに相應の事柄に使用すべき具体的方法を若し定めるとするならば可成り困難な問題である。實行委員が其の三月に於て凝議したときも良案は得なかつた。兎に角學友會の剰餘金と相違なく規定もまた役員會の決議に俟つとある以上は、貧弱なる學友會が其の剰餘金を學友會のために使用することを決議することは妥當である。救仁の性質なるがため、將來の資金にするならば別としても兎に角四百圓足らずでは殆ど救仁の名を体せる仕事を果して爲せるや否やは問題である。いはんや之を圖書購入の如き議論があつたとするならば圖書購入のことについては良案であらうが兎に角學友會の金を未だ整はざる各部を措いて圖書を購入することは妥當ならざるきらひがある。其の他のことにしても學友會の各部に屬さぬ事柄に使用すると同じであらう。既に規定に於て嚴然と學友會役員會で左右するものもあり、金は學友會の剰餘金であつて見れば學友會の何れに使途するも差し支へない。只醸出の當初に於て規定には明示してないが寄附の名目であり救仁の目的であつたがため、他の剰餘金と性質が異つてゐる丈である。併し乍ら既に寄附されて學友會の金となつた以上は飽く迄學友會の金である

只問題は各部に分與するか一部に使用するか、速急を要することに用ふるか否か、永く存續するものに用ふるか消耗品のものにするか或は一般經常費に使辦するかの問題である。かく考へるならば分與するならば完全なもの、出来ない不利があり、經常費や消耗品のものに巨額の金を使用することも考へものであるとすれば、兎に角比較的永久に存續し、比較的有用なもの而も又速急を要するものありとすればそれに使用することは何等の支障もないと信ずる。されば何れの部に使はれるとしても比較して有用なものと認められる以上比較的妥當である。各部とも財政は窮乏し必要なものに不満を感じてゐることはたしかなことで、各部に於て以上の立場から比較的よりよきものを持つならば、其の部へ歸することが妥當であらう。野球部スタンドに充用するより外に充用さるべきものがあつたかどうかそれは筆者の言ふ限りでない。而して野球會の度毎に牆が破られるとしたならば學友會にも責任はあることであらう。なるが故に其の責任を果すためにスタンドならざる何等かの方法を講ずる道もあるであらうが、學友會の費用が直接學友會のためになり、間接に牆を破ることを防ぐと豫算會議の發議者の云ふが如くならばスタンド建設又無用でもないし、事實堂々たる固定ネットが存在してゐる以上何れは必要に達しないのである。要するに議論の要點はスタンド建設尙早なりや否やの問題即ち他部にそれ以上緊急の事業の有無が問題であつたと考へる。兎に角原案は多少修正されたが通過することになつた。かくて救仁部の剩餘金はその規定第九條に依つて學友會役員會の決議に従つて費途が定まつて臨時救仁部なるものは終つたのであつた。

第二回陸上大運動會

あの大地震火災は各方面にその影響をあらはした。運動等に迄吾々を萎縮せしめようとした。各學校では運動會費を節約して之を救援費に寄附せよといふ運動すら起つた。然し災害に直面した吾等は考へた。今危急な時である。荏苒日を送るのは吾々の本領ではない。否寧ろ敢然立つべきである。

かう決めた一方吾々は周圍を見た。そこは矢張り焼野原であり、倒壊した家々であつた。この際大騒ぎをする事は勿論、極めて、質素に然も眞に底力のある行爲をせねばならない。吾々は充分の注意と用意をなした。吾々は準備萬端整へ其の日の來るのを待つた。記念式が終つて午前十時。百米にスタートは切られた。

この日天は晴れたけれども秩父嵐はこの武藏野を、荒れ狂ふてゐた。寒氣は猛烈で觀衆は極めて少く時々襲ひ來る突風に、小屋掛の來賓席の幔幕はふきあげらるゝのであつた。觀衆は砂と風になやまされてゐた。然し若人四百はめげなかつた。互に覇を爭ひ鎬をけづつた。一般競技は午前中に完了して午後一時からは優勝旗爭奪對類競技が施行せらるゝのだ、各類應援團は堂々と入場した。これより先各類應援團間に於て協定をなし、本年度はこの際なる故大鼓等は用ひざること、「ピラ」も貼らざることとなつた。此の結果はかへつて各類の應援に眞劍味を交したのである。即ち各類の應援と應援との眞の白兵戦となつたのである。一わたり見渡せば文乙は昨年の優勝本年も必ず、と必勝の意氣溢れ、百米ゴール附近に陣取り、並んで文丙第四コーナーの前に兵を集め紺碧の旗高く昨年の惜敗に報いんと必死の聲援、理甲亦之に隣り黒に換へた紫あざやかに、理乙赤文甲綠各々本年こそはと應援歌高らかに天、全く戰雲みなぎつた時秩父嵐々と吹きしきりいやが上にも緊張せしむる、文乙からの優勝旗返還あり、工學士山岡慎一氏の號砲に戰の幕は切られた。各類

の戦闘の有様よ、熱戦亦熱戦、點數は相平均して何れが勝つともしばし分らなかつた。次第次第に文丙理乙他を壓し理乙稍優勢なる儘に最後のリレーに入つたのである。若し理乙と文丙とが互に隣り合ふときは理乙若し文丙が勝ち理乙との間に、他の類が入るときは文丙の勝利となる。際どき接戦となつた。各級の應援は自熱化した。くれやすき晩秋の日はほの暗く、鬼氣迫るのであつた。文丙はよく走つて遂に一着を占めた。凱歌は文丙にあがつた。榮譽ある優勝旗は文丙の手に落ち、白熱の戦はこゝに了した。(記録は陸上運動部中に包括されてゐる)

この日吾が浦高學友會の恩人法學士辰野保氏工學士山岡慎一氏を初め帝大競技部の方々が審判に當られたことを感謝するのである。

かくて此の夜例の如く、寮友會主催となつて全校大懇親會を食堂に於て開いた。今迄の敵今は味方互に歡談高唱するのであつた。會凡そ一時間。各類共その祝勝會に若き日のある限りを盡した。

學友會物品管理規則

と大正十二年度の適用に就て

「學友會役員必携」の第二に「學友會物品管理規則」なる一項がある。この規則の所以と、其の大正十二年末の適用の結果を簡単に述べる。第一帳簿上では現存してゐる物品が現在には存在しないとした場合には甚だ困るこれが何年かの後のことなしたならば、既に數年前に滅びた品物が帳簿には現在もあるやうになつてゐたとすれば、随分變なもんだ。まるで事實は死んでゐる人が戸籍簿には生じてゐる様なもんだ。それに備品とか消耗品とかをはつきり定めることも必要だし、滅びたものは實際にも帳簿上にも消えて行き

帳簿と實際との合一は必要のことだ。若しさうでないとするなら委員なんて役目は随分大變なことになる。

規則に依ると檢閲が規定されてあるが要するに在るものは在るとし、無いものは無いとし日頃から凡帳面であるかどうかを見るのだ。併し檢閲者も被檢閲者もかうした微細な點は甚だ困難なことであらう。併しだからこそなかつたら何にもならぬ。吾々はだらしがあることを欲する。否さうあらねばならぬ。規則にたつてある様に十二年末には第一回の檢閲があつた。詳細は十二年度の帳簿に書いてある。只概して好成绩であつたと誌して置く。

大正拾三年度

豫算編成に關して

豫算査定

吾々の任期は大正十三年一月からであるが、拾參年度豫算は、十二年度十二月中に之を定めねばならない。是こそ理事の最初の難關であり、最初の試練である。理事當選後間もなき或夜吾等は東一寮一室の本吉理事の部屋に於て、來年度活躍を夢みながら豫算編成に關する打合せをなした。思へば之が初顔合せであり、スタートであるのだ。こゝで各妥協によつて豫算査定擔當を松崎理事は劍道水泳、小山理事は辯論柔道、本吉理事は陸上野球、内田理事は文藝弓道、野崎理事は庭球旅行と決定した。各部新委員と會合豫算請求書の提出期日を定めた。各部共創設の秋だ、特に大飛躍を試みやうとする第三年その多額の豫算請求は必定であつた併し總收入額は四八三圓といふに對して請求總額は實に一四、七八三圓といふ數字である。而してそれを見るときは必しも各部で所謂「やま」をかけてゐるものではない、寧ろ此の重要なポイントである第三年の飛躍に對する請求としては當然である。然し如何にせん豫算は以上の如くだ、一萬餘圓はさうしても切りつ

めねばならない。吾々は商品目録、直接商店に出張或は物品購入簿、前年度、前々年度豫算を参照して査定して行き、十二月八日土曜午後一時から最後の査定に取かゝつた。各自の示し合つた豫算それは最小限度迄切り詰めたものであるに係らず、収入總額の二倍に近いものであつた。吾々は勿論公平と均衡をモットーとした。各部共通、同種類の請求には、出來得る限り歩調を合せた。討論は續いた、然し仕事は涉らない。かなりはげしい議論、吾々は本當に、デレンマに陥つてゐるのだ。涼えた星空遠く鶏がなく、夜明けは近い、然し吾々はまだ一通の査定を終へたにすぎないのだ。難關は來た、この切つめた額これ以下に削つてどうして部として存在して行けやうか、吾々は忍びなくなつた、然し事實は厳として更に削減せねばならないのだ。激論につゞく激論、計算の苦痛に全然頭は動かない。我々はどんなにか査定額と収入總額との一致に苦惱を感じたか午後一時から夜迄昨夜から朝迄、朝から晝迄、廿四時間一瞬のたえまない勞働だ。査定は終つた。然し出て來るのは涙だつた。

豫算役員會迄……概算書印刷と不満の聲

吾々はこの査定を整理し豫算概算書を作製し更に、騰寫版に刷らねばならなかつた。昨年、一昨年にあつては之を生徒課に依頼した、然し、それはかなり誤つた考へである。わざ／＼先生方にこれを御依頼せず吾々自身が爲すのが當然である、於吾々は之が印刷にとりかゝつた、午後三時から翌朝二時半迄の仕事であつた。「こんな筈ぢやなかつた、精神的勞働と肉體的勞働と一緒、成る程名譽の至りだ。」誰かこぼしたのもむりはない。どこから洩れたか、豫算査定に關して不満の聲を聞いた。吾々は公平な査定を爲した確信がある數日來徹宵して徹を究め、細を穿つた積りである。それが公表されない前已にこうした聲を聞く吾等は憤慨もして見た然し何となく悲慘な氣もした。

第一回豫算會議

それは十二月十五日午後一時からであつた合併教室に例の様に規則正しく議長席(會長席)副會長、理事長席理事席之を更にU字形に各部長席各組總代各委員長席がもうけられて、各席には各々の番號がふられてある來年度我部發展そのかなりの部分はこの會議によつて決まると云つて過言ではない。各部委員は手ぐすね引いてゐる。彼等の背後には數十名、數百人の部員がひかへてゐるのだ。意氣ささじく議場は緊張し切つた例の如く會長議事法について説明し、劈頭「會費及び職金滞納者に對する中合せ事項」が議題に供せられ須之部理事長之が趣旨の辯明をなし、かなりはげしい質疑應答討論に花を咲かせた。結局その第二項一部を削去して可決した(學友會役員必携八参照)

次いで豫算案に移つた本吉理事即ち趣旨の辯明をなし公正な立場から、公平と均衡をモットーとし、各部從横に觀て案を作つた旨述べた。澤口辯論部手代木水泳部委員から豫算配布の遅れたことを攻めて來た。之に對して誤植訂正、豫算案の綴の後れたる事で理事が故意に遅らせたるにあらざることを徹底せしめ、更に二三不公平、不均等なる點ありと、二三ヶ所を指摘して理事に迫つた。之等に對する答辯終つて第一讀會に入り、本吉理事、理事部に關する説明あり、之に對する質疑應答があつた。殆んど各條項全部に對して其の詳細な質問には、理事も相當に參つた。全役員の意氣は今迄にない緊張さであつた。辯論部、小山理事。文藝部、内田理事既に大波瀾が起つてゐた、質問は質問を生み。中には揚足取のものすらあつた。その演劇部豫算全部削減にあつて會長再び文部大臣の訓令を讀みあげられた。昨年の豫算會にも本年も之を繰り返す。演劇に對する一部の熱望あふるものがある。文藝部質問了して緊急動議成立し夕食を使い更に會議を續行した。次いで劍道部に對し松崎理事の説明、こゝに於て再び大激論がかはされた。劍道部委員の、其の努力

は見るべきであらう。時己に十時緊急動議あり。本日の會議はこゝに止め、更に試験最終日本月二十四日再會すべき案成立して閉會、殺氣立つた各部委員、並んだ蠟燭の火影寧ろ凄慘と稱すべきだ。

會議の噂と豫算案に對する不平

第一回の豫算案に對する不平の聲は止まず中には豫算返上を號び、豫算案返上を運動するといふ、噂すら仄聞した。吾等は安閑と出来なかつた。第二學期試験それは省られなかつた。理事として當選してからどんな數字に苦しめられたか。吾等の夢殆んど連日、數字のお化に苦しんだ。會議の不安、それは夢となつてまで吾等をおびやかした。この貧弱な豫算、吾々理事を初め、大飛躍を期待する役員一同、これを満足させるのは所詮學友會費値上より外に道は無い。然し今こゝに之を斷行することは全然不可能なことである。而してこの豫算案返上は即ちこの役員會の解散を意味するのだ。即ち委員の改選且、その豫算は前年度の豫算を踏襲せねばならぬといふことだ、吾々は、これを知らずして單に豫算返上を論議する役員に對して徒に供手傍觀する程不親切ではない、學友會第三年度の發展を思ひ、各部均等を思ふとき、吾々は安閑としてゐることは出来なかつた。試験中も連日の様に會合したとして遂に特別委員會、附託を最上の策としたのである。

豫算會議第二日

第二回の豫算會議は十二月廿四日午後一時開會、柔道部小山理事、弓道部内田理事の説明、桑原弓道部長矢場屋根に關し弓道部委員と共に大奮戦をなした。野球部本吉理事説明これはスタンド及び溝に關して理事野球部委員對各部委員の大論戰の段となり續いて庭球部野崎理事説明庭球部委員大奮闘それによつて、この部に於ける同情を多分に買ふことが出来た。次いで陸上競技部本吉、旅行部野崎、水泳部松崎、各理事の説明あり相當の議論があつた。特に水泳部に於て甚しきものがあつた、そのいづれの部もその質疑應答少くとも

一時間以上に渡つてゐるこの時既に遅く、議場は殺氣立つてゐた。是に於て豫定の如く本吉理事から特別委員會附託の動議提出、最初議論紛糾する所があつた。然し會長の注意もあり、理事の眞意徹し動議成立、特別委員會は理事長理事五人、各部委員一人、各類代表者一人宛、を以つて組織すべく且その期日來年一月早く開くの議成立して會は閉された。寮は默として木枯のみの淋しい、冬休みだ、然しこのことが、胸にかへて心からな自由人となることも出来ない、

理事一部改選

こゝに不幸なことが起つた。それは理科甲類選出理事内田富夫君病氣の故で一月八日付理事の職を退かれた。思へばあの査定會の日、あの寒空、内田君はその日に風邪に冒されたらしかつた。そしてこうなつたのではないかとも思はれ、我々はいたく心淋しく覺えた。

同十一日その補欠選舉施行され、理科二年甲類田中達次郎君新に當選した。吾々は内田君の職を去られたのを悲しむと同時にこの才、田中君を得たのを祝つた。

特別委員會

大正拾三年一月拾五日思へばあの朝大震のあつた日だ、午後三時から特別委員會を二階會議室で開いた、先づ會は第一に削るべきものを削つた。その中に主なるものは剣道部道具代七五圓、野球スタンド建設費二〇〇圓也の削減であり、削減總額は四〇〇、二二圓であつた。之を更に適當に配置し、その主なるものは、野球部ボール代五四圓、弓道部矢場屋根三二、五〇、及び文藝部雜誌出版費七三圓の増加である。特筆すべきは文藝部並びに辯論部に於て別々に行はんとした、名士講演會は理事に於て行ふの妥當であるとしたことであつた即ち五五圓也が理事費に加つた。特別委員會は總て妥協を主として議事を涉らした。閉會は午前二時、

寒空に星が鋭く秩父嵐武原一角を凄く吹く夜であつた。

豫算會議第三日

最後の豫算會議である第三回目一月廿二日(火)午後三時から開かれた。役員に相當の欠席を見出した。凡らく豫算殆んど決定したと斷定したのであらう。今日會長御令妹に不幸があつて欠席され竹村副會長議長となる。豫算會議に入る前に本吉理事緊急動議提出。學友會の名を以つて會長に弔電を送送することを計り、萬場一致可決次いで本吉理事、特別委員會の報告あり、第一讀會に入つたが殆んどこれといふ質問も無く一瀉千里記事進捗する。第二讀會亦修正動議殆んど無く簡単に第三讀會省略茲に於て初めて大正拾三年度豫算案成立した。

思へば波瀾極めたものであつた。それは必竟會費の不足だ。この貧弱な豫算而も外部からは何等の援助の無い我會に於て到底満足な發展は得られまい。第三年だ第三年だ。浦高は漸く認められた、來年度に於て必ず學友會費値上を斷行すべきだ。

浦和町からの武道獎勵寄附金分配

二月初旬浦和町有志から參百五拾圓の寄附申込があつた。之は大正拾二年五月頃川内劍道部委員、浦和町長と會談の所學友會の財政の貧弱なること、劍道部の窮狀の話をしたるに、町長之に同情し、劍道獎勵の寄附を發起せられたのである。然るにその寄附金町民の一部は浦高劍道部から寄附を求めた様に誤解した。於是會長は學友會則第十五條によつてこの寄附を拒絶された。町有志は武道獎勵と改めて再び之を寄附して來た。會長快よく之を受納し、之が配分を劍、柔、弓三部に分割することにした劍道部から相當不滿の聲がした。

二月九日午後三時から階上會議室に於て會長、理事長、關係部長、理事之に出席し、會長より事の前後を

詳しく説明された。配分に當つて各部長間に卓を叩くの論争迄あつた。結局劍道部の意志を斟酌し大體二、一、二、に分配せらるることになつた。

新會員を迎ふ

三月十日吾々の學年試驗は終り越へて三月十八日から入學試驗は開始された。吾々は今新精銳二百を迎へやうとしてゐるのだ。思へば二年創業の苦惱の如何に多く吾々は體驗しただらう、砂原一角、浦高立つて二年、吾々は實に埋土柱石、基礎確立の下積に立つた。然し今榮譽の第三年に入るのだ。涌き起る感激よき友を迎へる喜悅それは如何ともしがたかつた。それは三月十一日劍道部東北武者修業首途の日、吾々は新人生に對する廣大な揭示を出した。そして洋服指定商、教科書、帽子、体操用ズボン等に對する注意を附した。早春の一日新入生に對する準備、事は瑣細である然し限り無き喜、渾身の力を盡して、今こゝに、美しい菊花一輪を廣褒萬里武藏野に手折る若き子を迎へるのだ。創業第三年男々しき新闘士を迎へるのだ。吾々は感激せざるを得ない。春の熱と力若人の希望、寮歌を誦して感激にむせぶ、男々しかれよ第三年。

不良少年のこと

此頃川口、浦和、大宮に徒黨してゐる不良青年があつてそれが吾々に怨恨(笑止すべき)あり注意を要すべきしとの警察の話があつた。浦和在住の金子某がその團長で彼等の怨恨といふのは、彼等の軟弱的非望が、我浦高生あるが爲に遂げ得ないといふにある、笑止茲に盡き憤飯も及び難い。一警部はこの報を齊し同時に彼の寫眞を携へ更に、彼及び彼の徒に、害を加へられたるものありや否やを調べた。彼は壯語して高校生の前にて白刃を抜きし等云へるといふも如斯こと全然我校には無く、彼の不良青年一流の見榮を思ひやつて可笑かつた。

然し吾等は心すべきである。警察の云ふが如きこと必しも必要ならざるも、吾人は、浦高生たるの覺悟と注意を必要とするのだ。自重自愛以つて高き自尊心を抱かねばならないのだ。

新入會員、歡迎大會

四月拾二日始業式に當つて在來生徒を代表して田中理事挨拶をなした。同日午後一時から、理事主催學友會新入會員の歡迎大會を開いた。小山理事開會の辭を述べスタートの肝要を力説し創業の如何に重大なるかを説き、新入生の責務大なるを論じ、次いで本吉理事歡迎の辭に換えて創業二年史をとき更に本年度活躍を述べ、會長亦和衷協同の大精神を説き以つて學友會發展につとむべきを論じ、各部委員交々立つて夫々自部を紹介し新入會員にその多きを期待すべきを力説すれば、若人は希望にみなざり、意氣冲天の慨があつた。紅白の祝餅出で、懇親の氣あふれ各部マネージャー學友會部外、乗馬俱樂部、エスベラント會、宗教哲學研究會等の紹介等あり、新入生亦立つて各自の抱負、希望を述べ、上級生の期待にそむかず、學友會發展に努むべきを誓つた。まことに學友會根本精神にふれた美しい會合であつた。

第一回名士講演會

名士を招待し親しくその風采に接し、更にその講演を聴くといふことそれは誠に吾等青年の自立的修養に資する所如何に大なるかは今改めて喋々を要しないことである。此の事それは長い懸案で、本年豫算編成に當つて、文藝、辯論部等からの請求があつた。吾々は此の事が單に或一部といふよりも寧ろ廣い範圍即ち學友會全體に關係あり且その招待の方面も一方面にのみ限られることの無き様、之は理事に移管されたのである。吾々は出來得る限り之を試みやうとした。然し之も新しい企ての一つ、立派に果す爲にはかなり大きな困難があつた。四月下旬漸く議を纏め、第一回講演會として、文學博士桑木嚴翼先生を招聘することにし、

本吉田中兩理事、博士を自邸に直接訪問をなして、吾等の意ある所を述べ、先生亦衷心から我等の微意ある點を容れられ、言下に快諾を與へられた。即ち五月八日(土)第一回の講演會をひらいた。午後一時開會、吾々はこの金の地方文化に資する所の多かるべきを知つて、公開し、中等學校、小學校職員並に中等諸學校生徒に通告し一般に對しても服裝等見苦しからざるものに、聴講を許した。千餘の聴衆講堂に充ち大盛會であつた。「學術と人生」なる題下に二時間餘に亘る講演學者の人の世にある心懸を説いて、人情味豊かな博士の講演は、吾等の印章に深いものがあつた。講堂前に記念撮影をし、更に會議室に於て貧しけれど吾々の心からな、晚餐を共にした。出席者、會長副會長理事長始め生徒二十名博士との談笑裡更に慈愛の念を深くした。

スタンド設置並辯論部彰表カップ製作

—附追加豫算會—

大正拾二年度收入超過、豫算殘額、同大正拾二年度第一回臨時豫算殘額救仁部殘額合して千三五圓の殘額を得た。之が使用に關して、會長から野球スタンド建設の議が提出された。それは野球の試合毎多くの觀衆の爲に破壊される土手、垣根の修理の爲學校は、頗る多額の金を支出しなければならぬ。これを防ぐ必要上是非共スタンド建設の必要がある。このまゝまつた殘額をこれに使用され度しとの議であつた。吾々といへども垣根に關し常に頭を痛めてゐるのである、まことに垣根それは實に、神聖な高校生活と混濁な人の世を絶縁する一聖境であらねばならない。それが試合毎に無恥な徒の蹂躪にまかせるわけには行かないのだ。幾度か救済策を講じた。然し効果は無かつたのである。野球部が發展するにつけ吾が運動場としてはスタンドは絶対に必要である。然し今たどへこゝにまどまつた金がよしあつてもその中に救仁部の殘額がある。吾々の熱涙の醺金友の憂に我立つた。あの美舉よしんばそれが殘金が生じたといつても單に條文に如何にあらう

とも縁もゆかりもないスタンド建設費の一部に費されるに忍びなかつた。然し救仁の事それを確實に成し得たのには一方に於て學校の大英斷にあつたのだ、即ち九月分授業料金免、罹災者の中困窮者に對する授業料免除によるのだ、それによつて、救仁部は完全に事業を遂行出来たと同時に、この殘額迄生じたのだ。吾々は於是、幾分迷はざるを得なかつた兎まれ、救仁部委員に一應の相談すべく議一定した。

救仁部委員會

於是救仁部委員一同と相會し、この由を述べた。勿論救仁部委員の意志はこれに無かつた。或る者は記念圖書を購入し地震に關する書籍を蒐集せよと稱し又或は最初の計畫の如く、この事業の經緯を要求した。即ち救仁部を更に方面を換へ、今後不慮の災害或は困窮の學生の出でたる時之を資としてそれに物質的援助を與へる機關設置すべしとのことであつた。然し極局條文の條項によつて役員會の議によつて決すべしとのことであつた。吾々は一種の不安があつたが兎に角之を役員會に附することゝなした。

役員會議

この當時辯論部からは優勝カップに對する請求があつた。即ち、劍道部以下五部は優勝旗或は優勝カップを所有するに係らず、辯論部のみ之無きを遺憾とし、之を求める頗る急なるものがあつた。よつて吾々はその意を了し案をたて、之を役員會議に附することゝした。五月廿三日圖書教室に於て開會本吉理事趣旨の辯明をなし、第一讀會に入れば果して大論戰が演ぜられ、會長、校長として垣根に關する懇望を述べられ、スタンドは出來得る限り土手に接近して作るべきを約せられた。更に之が設定後ラグビー練習につきて防害となるや否やにつきて又議論紛糾し、緊急動議によつて休會を宣せられ、實地踏査をなし更に休會明け、混亂裡に質問を了した。第二讀會に入るや果然スタンド建設廢止案出でその混亂は極に達した。會長豫算案過

半を占有するスタンド削除は、原案總ての消滅を意味すると述べるや、議論紛糾極に達し更に第一讀會に逆戻りするといふ珍奇な案成立、議場停頓、休會し更に意見交換をなし時間を空費し、二讀會に再び入つた辯論部からの三十圓増加の修正案通過し、スタンド千圓に削り僅か一票の差で可決。第三讀會を省いて可決かくてスタンドは出來ることになつた。然し本日役員會席上の空氣は決して心よいものではなかつた。最も不愉快な役員會であつたと述べるものが多かつた。而も此の問題は救仁部金未納問題で再燃して、役員會の不信のこゝろを敢て口にするものすら出でた。云ふ所は即ち友の憂に泣いた吾等の涙の結晶、あの大地震災に於て總てが罹災者だつたのだ、すべてが不幸だつたのだ。然しより不幸な友の爲に立つた吾等の美舉なのだ、それを今スタンド建設費の一部として用ゆ、それを可決したその眞意の那邊にあるかといふことであつた。

吾々は今回定ネットを見そしてスタンドを見る。一片の感無きに非ずである。それは誠にかうして出來たのである、或はかくして出來たが故に、益々吾々の大震災災を想起し、又友垣に泣くといふ訓をこゝに聞くことが出來れば幸である。

對抗競技

戰前折衝

陸上競技部

大正十一年夏思へかの記憶我が校山形新潟三高校對抗競技の其の第一回の幕を引いたとき嗚呼武原一角紺碧の旗光なくいたづらに仇人の持舞凱歌に泣いた我等が復讐の戰は遂に來たのである。

本年に於ける開催地は約によつて山高或は新潟の地に移されるのである二月以降山形から度々の來狀あつて今夏は山形にて開催したしとの旨又新潟よりかかる意向通知し來つた。五月新潟から郡山を(即ち三校から等距離の地)を定めて三高校代表會議地とし本年度對校競技に關する全般の協議をしたしと提議し來る更に委員之に關して下相談に來浦した。然し我等は相互に眞意を吐露して誠意あつたなら形式張つた協議會を必要としないのである、時恰も五月廿五日我が寄宿寮第二回記念祭であり加ふるに同日我が競技部對學習院の練習試合あれば試合見物記念招待を兼ねて山、新兩校の代表者と會見したき旨を曾和氏に傳へ曾和氏之を諾した。依つて此の旨を山校に通知した五月廿四日山高委員鈴木栗原江及び選手監督青木四氏來校し翌廿五日早朝新高マナーチャ―南氏來校せらる。同日夜三高代表者の會合を開く然るに新潟代表は全權委任にあらざる爲會議は何等進捗を見ず。止むなく南氏歸校し直ちに全權代表を送るべきことを約して流會に終つた。越えて五月廿八日三校代表會議を開催するに到つた。此の日午前八時新潟委員早山栗原マナーチャ―南氏來浦し同午前十一時から寄宿寮々務室に於て相會し劈頭新高代表意外にも我等の今日の會合の非を攻め郡山會見説をして譲らず。新潟代表の云ふ所と我等とは先の曾和氏との約束は要するに私的のものであると云ふ點に互に誤解を生じたのであつた。第一回會合に無力なる代表を送りしかも郡山會見の事思へば我等は敵前に堂々演技すると云ふ淡白さである總ての實力を見よと云ふ明るい氣分である、かかる形式的な事に抱泥する事から脱してあくまでも高校生らしく談笑の間に事を處せんとする堂々たる精神によるものである。加ふるに我等はその委員と約束したのである、同時にその約束を履行したのである、私的の訪問であらうが公的の訪問であらうがそれ等迄立入つて詮索するのは我々高校生としての恥辱であらねばなるまい。しかし互に誤解し合ふ事が出來た次いで果して開催地問題に關して山新兩校の間に猛烈な論議が開始された。山高昨夏の

勝利を言ひ是が爲に全校生先輩皆山形開催を豫期し、又他に豫議なき理由あり、本年開催せなくてはならぬい立場にある、新潟又此に對して論駁する所があつた。議論容易に纏まる形勢がなかつたので該問題は後廻しとし議事を進めた。決定せる案は大体次の如くである。

昨年の競技規定の一部を改め

一、前日に決勝の一部を入れること

二、その決勝種目、八百米、走高飛、砲丸投八百米リレー、(新高提出)

當日のプログラム

初日午後一時開始、(百米豫選) 八百米(決勝) 走高飛決勝。ローハードル豫選、二百米豫選

砲丸投決勝、四百米豫選、ハイハードル豫選、八百米リレー決勝。

二 日 目

午前十時開始、百米、走幅飛、四百米、槍投、ローハードル、二百米、棒高飛、千五百米、

ホップステップチャンプ、圓盤投、千六百米リレー。(三校協議)

リレー採點法改正、一等五点 二等三点 三等零點 (浦高提出)

大會記録を第一回から此を整理し毎年主催校は其の年度の大會記録を留め此を次年度開催校に渡すこと

毎年五月第一日曜日に三校代表者主催地にて會議を開くこと、(山高提出)

かくてその競技地に關し兩校譲らず時恰も山新兩校長本校に來り委員と會合互に了解し本年度に於ては山高トラックに於てこれを催すことゝなつた。

庭 球 部

吾庭球部は創設以來良選手を有してゐた、然しこの部は豫算上は比較的不幸であつた。彼等はきりめた豫算から充分なコートも出来ない始末であつた、彼等は肥肉の難に堪えなかつた、然し彼等は遂に決心した。そして本年度に入り、先づ水戸高等學校に對して挑戦した、然し水戸は、京都遠征を對抗競技と見做し之を拒んだ、彼等はこゝに、山形高等學校に對して挑戦したのであつた、時期切迫せる關係上同部委員は急に山形を訪れこれが協議を遂げたのであつた

野 球 部

野球部に於ける對抗競技に對する熱は已に昨年から猛烈であつた、然し好敵を見出せなかつた、而して之に關して學校長、それに對する大なる意見と抱負とを有せられ、相手を静岡高等學校に擇び専らその交渉にあたられた、

應 援 團 設 立

應援團それは高等學校生活の華であらねばならぬ、これこそ、その學校の意氣の代表であり感激の絶頂であるのだ、そこに眞劍さがあらねばならぬ、それは至純であり且合理的であらねばならぬ、一高對三高の應援それは兎角の論はあるも矢張り存続して行くのだ、然しその弊のあるのは勿論だ、吾々はより合理的より實質的内容的な應援團の設立を思ふのだ、於是吾々は各組總代を招集し之に對して互に意見を交換した、即ち大體に於て組總代に依つて候補者を推薦し、更に之を一般投票に委ねることにした、而してその人數

は團長副團長各一名、各類からその委員一名宛選出することゝし、團長並に副團長は學生全般の一般投票により、各類選出委員は各類の組總代に一任することゝした、かくて組總代に依つてその候補者に左の諸君を挙げたのである。

團長候補

文三甲 藤 倉 寛 三

文二丙 堀 豐 次

副團長候補

理三甲 田 中 雄 哉

理二乙 菊 地 楨 太 郎

拾六日以上の諸君の承諾を受け五月廿日之が一般投票を行ひその結果

團 長

堀 豐 次

副團長

菊 地 楨 太 郎

當選し直に之を發表した。

應援團長推戴式——附應援團委員詮衡

五月廿七日午後三時於講堂之を舉行した、全校生出席、田中理事開會を宣し、本吉理事團長推戴の辞を述べた、今や浦高、それは立つたのだ、健兒六百、より所を得てこれを中心とし大々の活躍を敢てすることを得るのだ、團長一場の挨拶をなす、即ち山形の地、以つて昨年の恥を雪ぐべく、靜高亦之を一蹴し去らんと述べ萬場わるゝ拍手起り菊地副團長亦痛切な言を以つて挨拶に換へ終つて有志の大激勵演説あり、萬歲高く、解散したのは薄暮であつた、かくするうち各組總代に依頼してあつた各類選出委員は左の通りに決定した。

文 甲

高 橋 慎 一

文 乙

田 島 亮 治

文 丙 吉 成 由 平
理 甲 北 村 辰 二
理 乙 廣 瀬 秀 一

浦高應援團幹部はかくして成つた、陣容整つた、爾來幹部の活動目醒しくよくその能力を發揮し得たのを喜ぶものである、

對抗競技に關する役員會

之より先き柔道部亦對抗競技を欲し弘前高等學校を假設敵と見て豫算を請求して來た、對抗競技として承認するには少くとも兩校委員間の充分なる協定を経なければならぬ、この一点から對抗競技中止の止むなきに致つたのは寧ろ同情に値すべきである、吾々は各部委員からその豫算を提出してもらひ、更に之を査定し案を作成した、同時に、各對抗競技規定、選手氏名、應援團幹部と共に役員會議に附することゝなした、而してその各部委員から提出された、豫算はあまりに一般會員に對して負擔の大なるものがあり、かくてはかへつて弊害を醸すべきを認め一人宛四圓としたのである。

役員會議

六月拾九日 午後三時、新築圖書館樓上、特別教室で之を開いた、本吉理事、趣旨辯明をなし、理事小山劍道松崎、野球小山、庭球野崎各之を説明し、之に對する辯明の衝に當つた、修正案に於て庭球部に於て、コート修繕に關して、大に議する所があつた、成る程、練習に堪へるコートが無い、それは甲冑無しで甲冑つけた相手に對する様なものだ、然し一方我々は全校生徒の負擔も亦思はざるを得なかつた、庭球部に對して誠に氣の毒な次第でならなかつた、コートに關して吾々は今後更に一考察をしてやらねばならぬ、應援團

に於て一二ヶ所修正の個所があつた、故に矛盾する所あつて、第三讀會に入り、雜費其の他から引いて、可決した、試合規定、選手氏名應援團幹部に關しては殆んど意氣無く原案可決、會議は無事終了かくて吾々は愈々宣戰状態となつた。

雨到らんとして風樓に滿つ

豫算會議は済み、宣戰状態に入つた、吾等は齊しく緊張した、然し未だ、對校競技を解せざるもの無きにもあらず、一部には兎角の論をなすものもある、吾々は一致團結せねばならぬ秋だ、議論のときは過ぎたのだ、必勝必勝、勝たねばならぬのだ、陸奥、烏海山下に、成は我武原に東海の仇人を迎へるのだ、吾々一部が躍氣としても始まらない、吾々はより之を一般に徹底せしめる爲に龐大な揭示を敢てし、役員氏名、選手氏名、期日等到れり盡せりの檄をかゝげたのである、雨到らんとし風樓に充つ、まことにその氣持がする。

選手推戴式

六月卅日午後三時から講堂に於て選手推戴式を舉行した、應援團幹部の努力によつて幾度かの應援演說會の爲對抗競技に對する空氣は次第に高潮し、吾々若人の熱は白熱化したのであつた、そして今日こゝに盡きたと云つてもいゝくらいである、

全校生徒入場續いて會長副會長理事長、各部々長職員入場、やがて理事を先頭に各部選手肅々と入場すれば、割れる様な拍手が起つた、やがて野崎理事、開會を宣し、小山理事立つて選手の紹介をなした、今も想

ひ起す、「百米、二百米、ローハードル……の選手……君、」彼はやをら立つて一禮すれば、急散それよりもしげき拍手は涌くのである……某壘選手……剣道野球陸上その選手紹介終つて、本吉理事 選手推戴の挨拶をなしたのである、嗚呼思へば去年一敗血にまみれた競技部、復讐の一戦である、勝たねばならぬ日は来るのだ、選手の胸中、吾等も亦躍動を覚えるのだ、東北武者修業に技と魂を練り、創業以來連戦連勝の吾剣道部、希望に充ちて、京都に登るその誇、さては苦節三年虎視眈々、中原を目して靜に英氣を養ひ、而も今日雄々しく立つた野球部、誰かこれらに勇壯なる感激を覺えないものがあらうか、誰か、若人の血潮にもえ肉の躍るを感じないだらう、本吉理事をして學友會第一期黃金時代を來らしめよと結ばしめたのに何が無理があらう、次いで會長亦一場の激勵の辭を述べ、選手並に應援團に對して激勵する所があり、次いで各部代表の宣言に移つた、言々句々皆之熱涙の結晶であつた、學友六百の負擔必勝の二字をもて報ゆべきを誓つた何といふ力強さであらう、何といふ男々しさであらう、萬堂寂として聲無く、たゞ涙のみであつた、應援團長亦熱血の激勵演説があつた、勝つて呉れ、勝つて呉れ否、吾々は舉つて勝たせるぞ、彼は泣いて誓つた、降壇して各部主將と堅き握手をなしたのである、あゝこの光景、これこそ浦高史上特筆すべき壯絶なる一大光景であつた、強くそして堅く、握らるゝ握手を見よ、それは何の意ぞ、膨落として落つる涙を見よ、それは何を物語るか、それは大武藏野に力強く立つた、吾等の姿、それ自身であつたからだ。六百の健兒の團結の表現があつたからだ、あゝ泰山よ、落ちよ、怒濤よくだけよ、吾等は一步も動かす若人六百はこゝでひたすらに泣いた、泣いて誓つた、必勝の二字を、校歌の合唱高らかに、若き日の感激に薄暮の武藏野、遠き彼方に迄、響き渡つた、吾等の熱と力は吾武藏野を原人的の底力を以つて強く／＼壓し去るのであつた、小山理事閉會の辭を述べて式を閉じた、

庭球部選手推戴式不参加の理由

こゝに遺憾であつたのは庭球部選手不参加のことであつた、吾々は憂慮した、その申し分に充分の理があつた、彼等は氣の毒にも練習に堪える、コートが無いのだ、これに對する机上的の理論は抜いて、實際に於て彼等は如何ともしかたがなかつたのだ、彼等は對抗競技なるものゝ責任を感じたのだ、彼等はいゝ加減の練習が出来ないよつて、斯様な状態で浦高の名譽それを得る事は出来ないと思つた。對抗競技なる以上勝たねばならないのだ、勝つそれは猛練習せねばならぬ、然し悲惨なことには庭球部にそのコートが無いのだ、庭球部選手は泣いた、泣いて、對抗競技の出来ない事を訴へた、然し彼等はそれを悲しんだ、そして田端ボブラコート借りて練習をしてかくて浦高名譽保存せんとしたのだ、何といふ悲惨な而かも美しい心根だらう彼等は精神的、物質的否あらゆる犠牲を惜しまなかつたのだ、彼等にはたゞ浦高學友會のみであつた、應援團長を仲介に、理事と庭球部の幹部との會合席上お互に泣いた、そしてお互に誓つた、握手が交換された。眼からは一様に涙がこぼれた、こうした悲壯な劇的場面かくて全部の了解成立して、目出度庭球部選手を更に推戴し得る事が出来たのである、こうしたことは或はこゝに蒐録すべきでないかも知れない、裏面にひそましむべきものかも知れない然し、吾々はどんなに選手其の他當事者が悲壯な状態にあるかをしめたいのである。敢て記した次第である。

山形視察

六月二十一日、本吉野崎兩理事、金子齋藤宮村三選手、應援團幹部二名計七名、各々使命を以つて山形視察に赴いたのであつた。それは、審判官に對する期日變更プログラム編成競技の準備の打合せ、並に應援に關する種々なる申合せをする爲であつた。と同時に選手並に應援團に對する宿舍の問題であつた。新高から

も選手委員マナーチャイ應援團長來り會議は、山高食堂に於てひかられた。審判官に關して辰野審判長以下一高對三高、水高對二高等の競技の爲前約あり當方の拾九二十日に間に合はず是非共二十一日廿二日兩日にせられ度しとのことであつた、吾々は勿論、この期日の繰のべに賛成を表した。其の他プログラム編成、應援團に對する打合せ幾分の議論はあつたが概して愉快に議事を進め得たのは喜しかつた。

終つて應援團長の案内により、選手の宿所を、高等學校前の下宿屋、竹村館、柏館二軒と定め尙應援團に關しては、專稱寺を借り得ることゝなつた。

庭球部選手推戴式——柔道部選手の壯圖を壽ぐ

選手推戴式のとき前記の爲に不參加の庭球部選手の推戴式を六月廿八日に舉行するを得た。此の日不幸對抗競技にもれた柔道部選手の東北大學主催柔道大會出陣を祝つて準選手として之を推戴したのである、式順序は前のと全然同じであつた。然し、此の推戴式は前に於けるよりも異つた悲壯の感が更に加はつたのであつた。吾々は同じく感激に泣いた。そして同じく誓つた、わけても藤本マナージャイが、壇上に伏して必ず勝つ、勝たねばお目にかかるまいと誓つた悲壯な光景を思ひ出すと吾々は全身冷水をあびる思ひがするのである。敵は甲冑をつけた立派な武士だ。吾等は素面だ。吾々は素裸だ。だが、吾々は吾々の秋水、一歩ふみだして彼等を眞二つにする、どうかその日を待つて呉れ、彼はいひ終つた、彼の面は土のやうに變つたのだ。何といふ、壯嚴な光景だらう。かくて全選手の推戴を無事遂行してこゝに愈々吾等は出陣することゝなるのだ。そして戦ふのだ。

戦況

劍道部

大正十三年七月十三日小山理事は一足先に宿舍其の他すべての準備の爲に先發し越へて拾五日、黎明遂に劍道部選手は出發するのだ。應援團旗ひるがへる朝の浦和驛頭、幾多の應援團員、職員に送られて、應援歌高らかに歌はるゝ中を選手は出發したのだ。「萬歳」「がんばれよ」選手の表は緊張した。應援團は緊張したその間に汽車は出た。理事應援團幹部は更に之を東京驛に迄送つた、そこには數名の學友來り、翻々とする應援團旗の下に熱血の兒等は高らかに歌つた。東京驛頭、吾等の歌は遠く品海に流れてゆくのであつた。綺羅をかざつた都人士はあの數ヶ月、剃刀をあてざる吾選手と、武藏野をのまゝの原人たる吾々のこの熱狂をきんなにかあやしんだらう。堅き握手、「やつてこい」「片つ端からやつつけて來い」「よし」選手の顔は青くかはつた。見送る人々も青くなつた。「進め浦和、慕進浦和」そのまゝに汽車はすべり出た。何といふ尊嚴な風景だらう、何といふ壯嚴な姿だらう。

汽車は午後七時〇五分京都に着いた。これより先き宿所に關して、相當複雑した行き懸りがあつた。然し京大劍道部員上坂良雄氏の斡旋によつて聖護院西町二一王垣館に定めた。上坂氏は松本高等學校出身者で吾々の爲によくお世話下すつた。感謝に堪へない次第である。

十七日選手歡迎大會が開催された。吾代表の演説は實に堂々たるものがあり堂を壓する慨があつた。

十八日戦の火蓋は切られた。試合經過はのせて劍道部史にあつて、高知高等學校に惜敗したのだ。超へて

二十一日、京都高等蠶糸學校と再び敗れたのだ。噫吾等は敗れたのだ。京都。そは遂に恨の地となつたのだ。夢に見る牛車、大宮人は消えて、それは血涙の記憶となつたのだ。

追記

粗朴な武原、原人的の底力、三千年來の武道の正流を掬んで茲に雄々しくも立つた。この企、誰か無謀と誹らう。吾等は道を知つてゐるのだ、武士的精神を解するのだ、關東精神を代表し、必勝を期して堂々と戦はんそは選手推戴席上委員の言、「道を忘るな」剣道部師範龜山先生の常套語、それが即ち吾々の抱負の凡てであつたのだ。男子の理想であつたのだ、然るに徒らな所謂劍術を弄する京都試合流に伍して、斯道の反逆者に武運拙く一鑄を輸したのだ。京都試合それは已に世に言がある。選手歡迎大會席上で、内藤師範、大野學士の言明もあつた。この試合既に道を逸したものである。吾等は吾等の敗戦に泣いた。然しそれは徒の涙ではない、吾等は吾等の敗戦に泣くと同時に斯道の廢類に更に一層の涙を注いだのだ。吾等の理想はかゝる所に徒に勝を誇らうとするのではない。百尺竿頭更に一步をふみ出すのだ。そして精神界に永久の勝者となつて、かゝる時弊から京都試合を更に救済するのだ。吾剣道部選手中大庭忠夫君がある。君の態度の如何に堂々たりし内藤氏思はず讃嘆の聲を發せられたと。かゝる事は實に未だ嘗つて無い所であると聞く、吾等は何ぞ徒に勝をのみを求めやう。吾大庭君こそ浦高のスピリットを最もこの時にあらはしたものであつた吾等は雄々しき決心、偉大なる抱負を有し、斷然立つた剣道部選手に對して更に敬虔の念を覺ゆるのである

山高

新高 三高校對抗陸上競技

浦高

出發の日

七月十五日猛練習を了へて、吾陸上運動部選手は今監督本吉野崎兩理事と共に、出發するのである。應援團旗ひるがへり學友の萬歳裡に浦和驛を出發、同日午後八時上野驛を出發したのであつた。上野驛は非常な雜鬧であつた。然し、その中を見送りの學友から歌はれる應援歌はあたりを壓し尊嚴を覺えるのであつた。汽笛と共に汽車が發車しやうとする時であつた。野球部選手一同、見送り入場禁止の上野驛構内に突入して助役驛員に制止されながら、萬歳萬歳と連呼したのであつた。「がんばれよ」「是非勝つて來い」彼等は驛員に謝罪しながら叫ぶのであつた、見送るもの見送らるゝものゝ眼には涙があつた。その善惡は問はない、たゞ高等學校生活、意氣と友、涙と感激の美しき劇的シーンであるのだ。汽車は浦和の地を通過した。應援團委員高橋君の、水車の様に打ぶる應援團旗、吾等は齊しく感動したのだ。吾々は一様に緊張を覺えるのであつた。夢まどか十六日早朝山形に到着、山高生多數の出迎へを受け三臺の自動車に分乗して、梅館竹村館の合宿所に入つた。

合宿所にて

思へば去年の夏武原の一角に血にまみれたあの日、夢の一年は過ぎた。そして今は敵地にあるのだ。戦は近し榮冠は近し、朝夕吾等の口からは遠征歌の一節二節が口誦された。然しさうした間にも覺え立ての、「おばこ節」に、氣分をやほらけて行くのであつた。

トラックに於ける吾等の練習は物すごいものであつた、特に加賀コーチャー來形されてから指定された時間運しと選手一同は敵軍遠視中に猛練習を續けたのだ。辰野下山のジャンプ、齋藤のハードル、金子船山の砲丸、宮本、池田の中距離、近藤の槍、それ等は敵方のさゝやきにも讃辭を惜まなかつた。「元氣ですぞ」顔なじみの山高の連中は堪へず感嘆の聲を放つた。然し選手一同をなやましたのは天候であつた、百度近くの暑氣であつた。然し皆の調子は狂はなかつた。元氣で終始した。

合宿中に水高山高の對抗柔道戦があつた。惜敗した水高選手、何といふ悲慘な姿だらう。吾々は一年前の吾々の自身の身を思ふてもらひ泣きをした。吾等は直ちに水高合宿所に之を訪ふてなぐさめ、且必ず之が復讐をすることをちかつた。夜水高の代表者、吾々の先の訪問に答へて吾等の合宿を訪れて來た。そして勝を祈つてくれた。雪辱して呉れと男泣きに泣いた。

この日新高選手一同來形した。戦機は熟した。山高トラックに於ける練習は日々に盛んになつた。吾等はたゞ勝のみであつた。勝利のみであつた。超へて十九日浦、山、水、新四校の辯論大會が山高講堂で行はれ、吾が派遣辯士は他校を遙に壓するの概があつた。

應援團來形

二十一日夜九時 堀團長以下百五十名應援歌勇ましく、山形停車場前廣場に參集した。菊地副團長高橋同委員理事マージヤト應援團先發隊並に山高應援團幹部之を出迎へた。

本吉理事一同に對して一場の挨拶をなし菊地副團長亦挨拶をした。かくて山高團長並に吾堀團長、こゝに握手の交換をした。陸奥島海山の下、醒風吹いて此の劇的シーンは皆人緊張するのであつた。大旗高く應援

歌いさましく吾等はメインストリートの示威運動を敢てなしたのである。戦かはんかな時機は到來したのだこの意氣吾大浦和の精神を遺憾なく發揮せられ、威風あたりをふるふ概があつた。專稱寺、百目蠟燭の火影ゆらぎてこの大戦機に更にふさはしいものであつた。明日は戦、言ふ所は勝ちのみだ。

戦の日 第一日

嗚呼戦の日よ躍進の日よ、遂に汝は來たのだ。炎熱に輝くトラックに今や白熱の戦はひらかれるのだ。嘗膽一年の審判の日が。正十二時、應援團二百に護られ選手は静々と入場した。「嗚呼人生の戦に、久遠の勝を制すべき」吾等が校歌の第三節目を歌ふとき、吾等は萬雷の拍手に迎へられた。われらは戦庭についたのだ。緊張は極度に達した。選手入場式、辰野審判長の挨拶、主將の宣誓あつて愈々試合は開始されるのだ。風雨降り倒らんとし風樓に充つ萬場寂として聲は無かつた。戦況は競技都報に譲る。第一日の戦況それは吾軍の勝利であつた。然し形勢は全く逆睹し難かつた。

第二日

前日の優勝に意氣更にあがり、今日の一舉必ず敵をほうんと選手も應援團も熱するのであつた。山高百四百ブロードに意氣漸くあがつて形勢は混沌とした。應援は白熱した、あゝ然し天が命か槍投に群を抜いてゐた近藤も早山の最後の一擲に名をなさしめ、ローハードル、棒高飛に優勝しつつも、ハイハードル、圓盤成績悪く、優勝は夢と消えたのであつた。

敗郎は來年だ！

勝つた山高、狂亂跳舞吾浦高、大旗垂れ應援團旗亦色あせた。何といふ悲慘なことだ。應援團は相抱いて泣いた。選手は泣いた、一年の忍従、覇業を懷いて長途に着いた吾等、その一瞬間前途、勝つとのみ信じて

ゐたのに。皆過去か夢か、吾等は破れたのだ。長蛇を空しく逸したのだ。否々敗れたのぢやあない武運が拙なかつたのだ。「馬鹿泣き顔を人にみせるな」「泣くのが悪いのか」なぐさめつ、なぐさめられつゝ然し、校歌を誦して舍に歸るあはれさ。

されど若人よ嘆くをやめて立て、吾等は若い、若い故に未來がある。未來は淡い幻の中に微笑んでゐる。思へばかの専稱寺の亂舞 二百五十の武藏野の子が敗郎の涙に狂踏亂舞したあの時、何といふ悲壯な思出が百目燭燭の火影ゆらぐ大伽藍、選手を迎へて車座になり聲はない。堀應援團長開會を宣し吾選手の勞を謝し今日の奮闘を、一升の樹に一升五合をもつたものなりと稱え、武運拙きを口惜んだ。本吉理事亦慨くをやめよ、吾等の時代は來た、吾叫んだ黄金時代それは必しも勝つのみではない、より浦高大精神の根本確定だ今それが成つたのだ、いたすらになげくをやめよといふ。されど金子主將今監督の涙の挨拶。吾等は齊しく泣いた。口惜涙は今更ながらにこみあげてくるのであつた。菊地副團長こゝに泣いて、倒れんとして自ら支へ、悪かつた、俺等が悪かつた、努力が足りなかつた、否!! 否!! の聲が四方から起るも副團長はひた泣きに泣きくづれるのであつた、加賀コーチャー涙聲以つて更に激勵の挨拶を述べられた。寂々としたこの殿堂山奥の如く鬼氣迫る思がするのであつた。ローソクはあやしくもえてうら悲しい。然したゞ泣くのが男子の本領か、非らず、應援歌の合唱に若人は立ちあがつた。踊り出した。選手も應援團も踊り出した。何故かからぬ、常の亂舞ではなかつた。笑ひさめく亂舞ではなかつた。踊りながら泣いた、泣きながら踊つた。何といふ悲壯な風景か 何といふ壯嚴な一夜か、これこそ若き感激の一夜であり、永久の思出の記録であらねばならぬ。

浦高 對抗庭球戰

選手來形——競技部惜敗

藤本マネージャー松本首將以下選手七名、來形したのは、競技部對抗試合豫選の日であつた。翌日はあの惜敗である。人皆は庭球部選手を抱いた、「是非勝つて呉れ」「復讐はたのんだぞ」庭球部選手は異様に緊した。「よし引き受けた」もらひ泣きに泣きながら選手は口をつぐむのであつた。責任は更に倍加するものであつた。涙の中に應援團は引きあげた。本吉野崎兩理事並に堀應援團長のみ之に残つたのであつた。そのうち須之部理事長來形し戰機は熟したのである。

勝つべき日

山形の炎熱は厳しかつた。冬は雪をして夏のこの熱、吾々は吾が庭球部選手のこの責任の一戦に果して充分技を發揮せらるゝやを憂へた。然し、一切を犠牲にして、専心練習につとめた選手の面影、そこには必勝の確信がひらめいた、榮冠の輝があつた。

試合は二十六日午前九時型の如き入場式の後開始された(庭球部々報参照)若林戸野原組一セットをとつて敗れたが七島松本組敵を軽く一蹴し、然も松本茂武野組亦樂に敵を封じ、敵は文義通り手のほどこす術も無かつた。

二對一のスコア ダブは吾軍の勝利に歸した。然し陸上競技の例もあり勝利は未定であつた。一同早寢明日の決戦をまつたのだ。

第二日目劈頭若林頑張りに頑張り抜いて接戦三時間二十五分遂に敵を打破つた。戸野原惜しくも敗れ、武

野敵に零敗を喫せしめ萬場の氣焔をはげば七島僅に一セットを與へたのみ軽く敵を封じた。こゝに敢て蒐録するはこの時突然須之部先生が見えなかつた。先生はこゝに勝と決るや直ちに會長に打電すべく自轉車を走らせたとのことであつた。松本茂又樂に勝つて松本(藤田)敵を散々に壓迫しぬいて樂に二セットを取つた。武藏野の子は情を知る、こゝに於て彼は斷然奇麗について出たのであつた。そして敵に勝を譲つたのであつた。六對三のスコア 吾は始めて大勝することが出来たのだ。

追記

「きつと勝つ」あの選手推戴式に豪語した藤本マネージャーの言競技部の復讐必ずしてみせる」かたぐ誓つた選手一同こゝに實現せられたのだ。まこと、天の時地の利それを一步踏みこして吾庭球部は遂に大勝を得たのだ。そして吾對抗競技史上、勝利の第一頁を色こく印することが出来たのだ。コート無きが爲危く中止されやうとして遠く石神井南大コート、田端ボブラ俱樂部コート、さては早大のコート浦中コートで猛練習を積んだのだ。浦高名譽の爲彼等は物質的精神的否總てを犠牲にして奮闘したのだ。この意氣と態度それは涙無きを得ない。

遠く劍道部京都に破れ、數日前競技部亦敗れた。復讐は美事になした吾等。吾等の喜は無上であつた。自働車二臺に分乗して山形市中を絶叫した、大なる美しき壯なる大武藏野、浦高大精神に生きた吾等の今日の勝利、宜なる哉である車上遂に亂舞するに至つたのも。某カフェーに於ける祝賀會、それにはあまりに貧しかつたが痛飲快飲飽く所が無かつたのだ。而して酔ふて若人は泣いた何故か泣いた。或者は抱いて泣いた或は屋根に伏して悠久の大空をながめて嘆じた。

靜高 對抗野球戰

敵軍倒來

二十六日靜高選手及び應援團幹部が到着した。池知主將以下選手一同、理事一同、應援團幹部一同並に合宿中であつた劍柔道部員一同之を浦和驛頭に迎へた。驛頭主將と主將應援團長と應援團長の堅き握手「よく來た」「御氣嫌よう」との挨拶が皆にかはされた。

思へば吾に一日の長がある、然しそれは對抗競技の常弱敵と雖も、豪もあなぞることは出来ない、枕を高くすることは出来ない。薄暮、應援歌の交換は若人をいやが上にも緊張せしめた。之を櫻木館に送つた。應援團幹部は寮會議室に宿泊した。寮に於けるその夜快談敵も亦必勝の意氣あふるゝものがあつた。

歡迎會

二十七日午後一時から圖書閱覽室にて選手歡迎會をひらいた。松崎理事開會の辞をのべ次いで本吉理事之が歡迎の辞をのべ、池知主將岡田マネージャー並に吾會長の歡迎挨拶あつて靜高又主將、マネージャー部長の挨拶があつた。更に吾マネージャー上村氏一場の挨拶をなしかくて常例の如く敵軍寮歌の合唱をなせば、我校歌の應酬をし會はやうやく親睦の目的を遂げやうとした。然るに不意に敵方座を立つたのであつた。變な感がしたのであつた、これについて吾校將來にいましむ、今日の靜高のとつた如き今後絶對になき様、戦前にあつて悠々と相交れば談笑、相戦へば死して尙、戦ふの氣力があつて欲しい。廣遙萬里武藏野は永久に悠々たるものだ。それは吾等の生命であらねばならぬ。

今日午後應援團に關する會議があつた詳細は應援團記事參照せられたし。

戦は明日、其の前の激論

この日吾々は明日の準備の爲にせはしかつた。雑多の用に追はれて目もまはる多忙さであつた。突然靜高應援團長來て、吾々理事に面會を求めた。應援團の地位に關し、指定の地を改めよといふにあつた。即ちスタンドの前に其の應援團の地位を定められたと云ふにあつた。成る程、その説は決して不當ではない、應援團なる主觀的立場にあつて、その應援團を選手に最も近づけることは或は當然かも知れない。然し吾校ベトネの兩側にスタンドはあるが固定ネット裏には無い。招待券を發行して置いて、その招待者の前で旗を打ちふる。如斯行爲は吾々として出来ない。且應援團の位置は互に均等である場合には、それは決して其の目的に反する様なことはない。其の與へられた地歩で互にぶつかり合ひ死力を盡すのが本領であらう。過去二回の陸上競技の應援の場所、それ等を比較すると遙にその均衡はとり易いのだ。如何にこのことを縷述しても靜高は頑として譲らなかつた。或意味に於て全く議論の議論であり、くだらない時間の空費であつた。吾々は實際こうした問題で苦しんだことはなかつた。吾々は是於スタント五間迄を承認した。吾浦高生よ將來如斯ことに論議する勿れ、吾等がかふした事柄に關しては全然主催校に任すべきだ。

戦雲漸く濃し

大武藏野の子がその育された天地に戦ふ日は來た、天氣快晴、浮雲悠々、嗚呼武藏野、炎暑いかに嚴くとも永遠に綠である。綠こそは榮冠のしるしである。

嗚呼戦はん哉戦ん哉東海の一豎何かある。午後一時開場早くからつめかけた觀衆は、たちまちスタンドを埋め外野側から、講堂婦人席に到るまで觀衆溢れるのであつた。午後一時十分吾選手應援團に擁せられ武藏野の歌高く入場すれば、萬雷の拍手が起つた。フリーバッテング吾が強打は、本壘打線を越へて觀衆の中に

落ち、難球亦確實なる野手のグラブに入る。その度に起る拍手、吾人皆今日の勝利を確信するのであつた。やがて靜高亦應援團に擁せられ入場。午後正二時、吉岡學校長の始球式、池田球審のプレーボールに場は愈々緊張するのであつた。(以下野球部報參照)

勝利

八A對一、堂々たる勝、開場式、應援團長握手交換、こゝに終局をどげた。歡喜にむせぶ吾軍、狂亂持舞應援歌は襟林を縫ふてこたなした、桂冠は來た。應援團は一勢に七本の轢高く町に流れ出た。校歌高く「友は勝てり」「吾は勝てり」狂へよ、踊れよ、嗚呼調の宮の宴こそ最も尊いものであらう。團長、かけ聲いさましく鏡をぬけば美香流れ、月下の玉杯、林間の亂舞、何といふ感激の一夜であらう、人皆酔ふて夜の更くるの知らないのである。若人よ一葉の綠吾にあり。寮歌の一節、綠は榮冠である。くめや勝利の玉杯を、勝利の美酒を、腰間の斬馬の劍遂にぬきし、馬來らば馬。人來らば人、勝利の駒はいなくのである。狂喜はかくてすべてを忘れしめた。感激の末か狂喜の余か、鐵道線路に亂舞して危く急行列車にひかれんとせるものありとか。或は又鏡樽をかぶりて往來を歩き或は、大事の禪を落して九裸、さても勝はうれしきものである。浦和町内を飲みまくり、デカンショの亂舞はいたる所に、夜を徹して歡喜に酔ふたのである。

大正十三年度應援團記錄

應援團設立

五月二十九日全校一般生徒の投票を圖つて此處に應援團長並びに同副團長が選出された。その氏名左の如

くである。

應援團長 文科二年丙類

堀 豊 次

同副團長 理科二年乙類

菊地 模 太郎

次で應援團に所屬すべき應援團委員即ち應援團の幹部を五名、組總代の監理の下に於て各類から夫々選舉する事になった。その氏名は左の如くである。

文科二年甲類

高 橋 慎 一

文科二年乙類

田 嶋 亮 治

文科二年丙類

吉 成 由 平

理科二年甲類

北 村 辰 二

理科二年乙類

廣 瀬 秀 一

此處に於て全く應援團の主腦部は整つた譯である。幹部が生徒控所に燃ゆるが如き抱負を抑へつゝ全校生徒に向つて宣言を發したのは實に此の時であつた。宣言文は次の如き者であつた。

「吾人ハ茲ニ高校自治ノ大精神ニ基キ權威アル永久持續ノ應援團制ノ確立達成ヲ期スルト共ニ沈滯セル校風ノ刷新ヲ圖リ以テ浦高現下ノ重大ナル時局ニ善處セン事ヲ期ス」

應 援 團 之 作 戰

責任の重大なるを痛感した幹部一同は第一回の幹部會を寄宿寮會議室に開き除るにその内部的組織並に根本的作戰に耽つた。次にその要点を挙げれば、

一、應援歌の選定に關する件

根 本 條 件

- (1) 平易なる事
- (2) あまりに高音ならざる事
- (3) 意氣と熱との充滿する事

一、應援練習に關する件

- (1) 出来るだけ多くやる事
- (2) 秩序整然たる事
- (3) 特色を發揮する事

一、應援團の相互團結の件

各委員を始め組長と連絡をとり遺憾なきを期する事

一、應援團志氣振興に關する件

辯論部と連絡をとり一方宣傳に力を用ふる事

一、遠征應援費に關する事

始めての遠征に付き幹部は鐵道局を始め諸所に問合せその他宿泊に關する費用等に付きても出来るだけ慎重に精密を期す

應 援 演 說 會

先に凝議せる如く吾人は豈うしても浦高一般の空氣をして對抗てふ戰鬪氣分に充分浸らしめなければ如何に幹部のみ努力しても結局無駄である事を推知して此處に斷然辯論部と相提携し與論の喚起に勉めた。

しかるに相會する者六百名に對して極めて僅少にして折角の計畫もあまり効果を奏さなかつた事は實に遺憾

の極である。しかし此の僅少なる人々こそ眞に心から學友會の發達と浦高の名譽とを痛感したる人々であつた。何んとならば會する者の面上には悲憤に躍る尊き涙が光つて居たからである。

幹部は此の有様を見て到底此れでは本年度の成功は覺えない事を推察し種々考究の結果遂に應援團内に臨時司法部を設立し特別なる理由なくして各種の應援的一般集合に缺席せる者を峻嚴なる制裁を下す事にした。第二回第三回と回を重ねるに従ひ漸次多數の出席者を得。漸くその目的は達せられんとした。

山形に於ける長團會議

六月十六日(土)堀團長、菊池副團長、田嶋委員の三名は理事陸上運動部委員と共に山形に向つて出發した。同十七日(日曜)午前十一時から山形高等學校食堂に於て協議會開催せられた。應援團として山形高校では落合團長以下委員、新潟からは大瀧副團長出席。競技に關する會議終つて團長會議は始まつた。

山形の提案たる應援規定は大體第一回三高校對抗競技の際の應援規定に依つてゐる。

それを修正し確定せるものを示さば

一、應援は味方の志氣を鼓舞するを旨とし他校の感情を害するが如き言動を避くる事

一、應援は團體的に之を行ひ左の規定に基きを應援なす事

A 應援歌の合唱

但し各競技中は絶対に合唱せざる事

B 拍手

C 個人的應援は絶対に之を避くべき事

D 鐘太鼓其の他鳴物は絶対に之を禁ずる事とし應援用具としては各校校友會を表示すべき長旗

五流、手旗及指揮用メガホンに限り之を認むる事

一、應援團の場所に關する件

一、選手及應援團の入場順は浦和新潟山形とす

一、選手及應援團の退出順は浦和新潟山形とす

一、應援團は競技前卅分に入場し所定の場所につく事

一、一般觀象取締に關しては山形高等學校學友會にて之に任ずる事

一、各校は寫眞掛一名、記録掛一名を出しトラツク内に入らしむる事

一、前條の外申合すべき事項を生じたるときは兩校應援團長間に於て協定する事

大體右の如き條項であつたが我校は此の會議に於て非常なる成功を收めた。應援團の場所に就いて激論がしばしば起つたが堀團長の雄辯とその他幹部の團結によつて我が浦高は最も良き場所を獲得する事が出来た。實に此の場所の如何は各校應援團の事實上の死活問題であつたのである。其の他入場順退出順等すべての本校の希望は完全に貫徹する事が出来たのであつた。右は報告演說會に於て發表せる如くすべての点に於て浦高は一步も退ず見事その使命を果す事が出来た。

應援歌並に應援練習

學校の如何を問はず總ての各應援團に於けるその應援團の氣風とか弱点とか特長とか意氣とか秩序とかいふものが表はれるのは事實上に於てその應援歌とその應援振りの如何にある。吾人も此の点に最も力を入れ、他校に最も勝れた應援歌と應援方法とを作成せんとしたのである。そこで本應援團が成立するや否や六月一日を以て生徒控所に應援歌募集の掲示を出したのである。然しその應募者比較的少く、締切期日を延し、二

通しが集らない。六月二十四日に至つて「進め浦和」の應援歌を得、高木先生の御修正を煩はし即日幹部は音楽學校に走りて弘田龍太郎氏に曲を依頼し、六月三十日に至つて完成したのである。一方「さゆれつ」の應援歌は一日遅れて二十五日に至つて出来たので音楽學校に依頼する事が出来なかつたのは誠に残念であつた。

斯くの如く應援歌の遅引したために應援の練習の日が殆んどなくなつて失つた。七月の二日始めて誦堂に集合して應援歌を練習し三日二日間應援歌の練習のみに費やさるゝの止むなきに至つた四日僅か一日應援の練習をなした、一方學期試験は五日より開始せらるゝが爲めに遂に一先づ此れで打切り、八日(日曜)學期試験中にも拘はらず約百五十名の者が熱心に應援の練習をなしたのみである。

山形遠征應援團出發

應援團出發に先づ約三週間幹部は野球戰應援の揭示と共に最後の檄を掲げ山形附近の地圖と共に生徒控所に示し又組長と連絡をとりて遠征者の人數等を精査し又印刷物を各人に配布して多數の遠征者を送る事に腐心した。しかるに遠征者の數は約百五十名内外であつて之れでは到底充分なる成果を收むる事が出来ないと思ひ學期試験が終ると直ちに六百枚の葉書に遠征勸誘の文を印刷して保證人の許に御願した。その間幹部會を開く事數回、幹部は日夜宣傳に、調査に、計畫に、狂奔した。

之れより先、菊池副長團と高橋委員は應援團の先發隊として七月十七日上野を出發し先發の理事選手と共に合宿して應援團の宿合たる専稱寺の準備山形新潟應援團幹部との準備の交渉、旗竿、借入、寢具、食事宣傳等すべての準備的行動に全力を傾注して萬全を期した。實に他國の地に來りすべてが不案内の所へもつて來て炎天焼くが如く真にその行動は慘憺たるものがあつたが一方選手諸君の心持を考へた時忽ちその苦しみは消えさるのであつた。

かうして二十一日の夜は訪れた。午後八時過我が應援團が山形驛に着いた。之れより先貨物自動車をやとひ各自の旗竿を準備し山形應援團幹部と共にブラットホームに今や遅しと待ちかまへてゐた。汽車が着いた!! あゝその時の光景應援歌は汽車中を間はすブラットホーム上を論ぜずごう／＼と唸り出た。見れば燦たる團長旗は團長の頭上に翻翻と輝いて居た。あゝその時の歡喜その時の光景今でも目に浮ぶ。

驛前に整列して本吉理事の挨拶があり菊池副團長の指揮で校歌の合唱をなし、次いで團長と出向の山形應援團長とに友情のこもつた挨拶があつた荷物を各自貨物自動車で先、専稱寺に送りのぼりをたて團長を先頭にして山形市のメインストリートを應援歌を合唱して専稱寺へと向つた。

全員を二十四班に分ち各班に班長を置き班長中より炊事掛、警備掛、整理掛の三つの役割を各々分擔せしめ諸般の事に圓滑を期した。電燈は經費の關係上架設困難であつた故遂に百目蠟燭で間に合はした。幹部警備係りを始め一般の注意により、燈火も決して危険ではなかつた。却つてある趣があつた。

山形に於ける應援團

十間の長さをとつた我が應援團の場所（山形五間）（新潟七間）はるかトラックを距て、向ふに一般觀覽席を控へ、會場絶好の位置であつてその團員の數ははるかに他校を凌駕して居た。

我校の應援振りは文字通り一糸亂れず正堂々たる者であつて何物をもとかす炎熱にも拘はらず終始緊張してゐた。百餘名の渾身の力で打振る紺碧の應援團は千歳の晴翠とトラックフィールドの白線に相映じて何んとも云へない爽快なる光景を現出した私は感激した二百哩の鐵路をふみ來りし熱烈なる百餘名の應援振り二日目の應援の如何に猛烈であつた事よ。敗戦の後團長の山形應援團に對する演舌の如何ばかり悲壯なりし事よ。そして夕陽遠く鳥海の頂きに落ちた時。團長旗の光りの如何に哀しかつたことは。

敗戦必しも敗戦にあらずその日應援戦は他校の何れよりも勝つてゐた。

それは九月十二日の山形縣長井町本町の長井アマチア倶樂部より、我應援團本部に宛てたる書論中に「貴校山高新高の大競技會を見て貴校の嶄新なる且又充實せる應援方法に其鳴し我が俱樂部もいさゝか貴校の御指導を受けて我が部應援方法を盛大にし充實致し度き所望に付き云々」の文あるを見ても如何ばかりその日の應援の山形市民を感動せしめしかは推して知る事が出來よう。

專稱寺の解散

戦終はりて應援團は一先づ專稱寺たる應援團宿泊所に引揚げた。此の日（二十三日）は選手も應援團もそれぞれ歸浦する故に選手を交へての大コンバが開かれた。しかしそれは決して欣喜雀躍のコンバにあらずして悲壯極まる別離の會であつた。選手キャプランの演説、加賀コーチャイ、今マネージャーの演舌團長の至言副團長の演説等、本堂にあふる、緊張と熱誠の氣分はやがて感激の琴線に觸れて百餘名は悲壯なる應援歌の合

唱に泣いた。之れこそ眞に浦高の氣風に一新機軸を出す者である

對靜高野球戰準備

浦和に於て開催せられると云ふ事と夏休が終はりに近いことの二つの事より種々便宜が多く幹部も山形遠征の時の如き苦しみを見ずにすんだ。しかし尙前と同じやうに葉書に印刷して特別事情なき限りは全部くるやうに本人宛に出して置いた。團長病氣缺席の結果相當手違を生じ副團長團長代理となり吉成委員は團長代理の命を受けて副團長代理となつた。

二十五日午後六時半選手一同並に應援團幹部を浦和驛頭に迎へ菊地團長代理は浦高應援團を代表して歡迎の辭を述べた。靜高の川口團長もそれに答ふところがあつた。

對靜高野球戰の團長會議

二十六日午前十一時本校階上會議室に於て開催された。相會する者、菊地團長代理、吉成副團長代理本吉理事池知キャプテン、靜岡側は川口團長と副團長の二名。會議條項は左の如し

一、應援は味方の志氣を鼓舞するを旨とし他校の感情を害するが如き言動を避くる事

一、應援は團体的に之を行ひ左の規定に基き應援をなす事

A 應援歌の合唱

但競技中は絶対に合唱せざる事

B 拍手

C 個人的應援は絶体的に之を避くる事

D 鐘太鼓其他鳴物は絶体に之を禁ずる事とし應援用具としては兩校校友會を表示すべき長旗七流

手旗及指揮用メガホンに限り之を認むる事

一、前二條の趣旨により兩校は其の應援團を組織しリーダーを置き應援の責に任ずる事

一、應援團の場所は當該校は一疊側とする事

一、選手應援團の入場順は浦和を先にする事

一、一般觀衆の取締に關しては浦和高等學校學友會に於て之に任ずる事

一、應援團は競技開始前少なくとも卅分に入場し所定の場所につく事

一、兩校の應援團長は競技前後に於て挨拶を交はす事

一、競技終了せしときは遠征校より競技場を退出すべき事

一、前條の外申合すべき事項を生じたるときは兩校應援團長間に於て協定する事

すべて我應援團提案通り可決せられた。上の規定に於て注目すべき点は左の三点である。

(1) 鐘太鼓其他鳴物は絶對に之を禁ずる事

(2) 應援團の場所は當該校は一疊側とする事

(3) 兩校の應援團長は競技の前後に於て挨拶を交はす事

此處此の會議に於ける一挿話がある、即ち應援の場所に關し論議してゐた時靜岡側では團員が熱叫して飛び出すと困るからその前に竹を支へやうとしやうではないかと眞面目に切出した時には浦高側之こそ眞に啞然としてしまつた。之れを見ても容易に我が提案の通過せる事を窺知する事が出來よう

對靜岡野球戰應援振

我が浦高應援團では二十八日午後十二時五十分集合地に集り菊池團長代理の選手に對する激勵の演説があり

次いで池知主將はそれに堅き決心を以て必勝を誓つた。終はりに團長代理の應援團員に對する注意並に激勵演説があつた。右終つて高らかなる校歌の合唱と共に滿場拍手裡に我選手と應援團は入場したのである。先づ我選手は軽いウォーミングアップの後フリーバッティングシートノックをやつた。妙技の續出する毎に聲援は鳴りもやまなかつた。

遂に靜高の入場。我應援團は一齋に拍手して之を迎へた。

兩校選手の挨拶が終はつて兩校應援團長は團長旗を持ちて肅々と歩を運べば兩副團長之れに隨ふ。

ホームベースの正面に於て兩校應援團長が堅き握手をなした時は滿場の拍手はしばし鳴りも止まなかつたかくて吉岡會長の鮮かなる始球式によりて戰團は切つて落された。

敵味方合して十四流の大戦は武藏野の平原になびき火を吐せんばかりの若人の聲に紺碧の空、緑の大地は爲めにとよめくやうに思はれた。

前列に一騎當千の山形遠征者をならべた我三百餘の應援の前には靜岡は既に敵ではなかつた。常に我が應援は機先を制し出鼻を揮つて敵をして潰走のやむなきに至らしめた。

八A對一 實に堂々と我軍は大勝した。應援團は欣喜雀躍し歡聲は一時に天地を搖した。

あゝ勝てり、戦後夕陽にかゝやく團長旗を眞先にリーダー旗のぼりを押し立て、調宮公園に至り選手の來着を待ち祝盃を舉げた時の欣快さは私の生涯忘るゝ事の出來ないものであらう。

辯論部

第一回部長 大野先生

委員 藤本三常 本吉加岐磐

第二回部長 大野先生

委員 藤本三常 贊田武

第三回部長 菰田先生

委員 澤口剛雄 堀 豊次

辯論部誌

—第一年—

入學の喜のまだ醒めない五月の始、私等は第一回の辯論部委員を拜命した。然し惜しい哉設置順位第六位にあつた爲、吾等は豫算を求むる譯に行かなかつた。私等はやりやうによつては金の比較的いらぬ部だ。相當迄の活動をして見せるぞと、臍を固め某日部員を當時の控室、今の理三、乙の教室に集めて本年度の抱負を述べ且部員からの意見を聴取した。どんなことであつたか殆んど忘れてしまつた。然し金のない部として随分無茶な、抱負であり、十が一も實現出来なかつたのが寧ろ當然であつたかも知れない。五月某日、自分の方には何等利害關係の無い豫算會議に出席し、今や活動に入らうとした時は臨時試験の最中、そのうちに例の女學校長失言問題や警察問題が連續的に起つて來た。そのうちに第一學期試験期に入り腸チブスが發生し一學期は全く無活動の状態で二學期に入つたが、腸チブスの餘波は九月下旬の試験となつて、この儘では全く何もしないで終りにならうとした。私等は、これではいかぬと

考へた、どうかして出来る丈部を固めねばならぬと思つた。丁度拓殖大學から全國學生雄辯大學の報告に接する儘

葦の隨から然く論ず 文甲 澤口剛雄君

を派遣した。當日本校生二十名近く拓大に飛び込んで猛烈な彌次を片つ端から送つた。「流石警察と喧嘩する學校」等との耳話を聞いて、いゝ氣持になつてゐた時代であつた。

次いで全然招待の無い明治大學に押かけ的に

亡ふる前に 理甲 行實省吾君

を送つた。彼の一流の辯舌はよく浦高雄辯部を知らしむるに足るものがあつた。

十一月一日校内第一回の練習會をひらいた。場所は當時の合併教室現在の文乙文甲の教室であつた。可笑い話は水差も水飲も勿論無いので、藥罐に前夜私等兩人して買つて來たコップを置いた仕末であつた然し非常なる盛會であつた。聴衆頗る多く彌次亦猛烈、特に秋の日足早く、夕に及んで、「ロースク」の火影に辯士亦熱を加へるのであつた。散會した時は七時半頃であつた。終つて食堂に於て、コンパを開き互に將來の我部を語り、「デカンショ」高く散

會した。

次いで左の如く各校に辯士を派遣した。

東京外國語學校主催全國雄辯大會

無慾の闘士

理乙 福井達雄

宗教大學主催全國雄辯大會

若人なればこそ

文丙 本吉加岐磐

明治大學主催全國雄辯大會

偶 感

文甲 藤本三常

以上第一年度の記録である。現在の隆盛を思ふと轉た隔世の感がある。

(大正十二年度自大正十二年一月至大正十二年十二月)

一、前年との關係

前年度は學校の開校された年であり、學友會の創設された年であつた。辯論部が學友會の一部として創設されたのも正にその年であつた。總てに於ての第一年であつたのだ。浦高に集つた天下の群才が、此處武藏野の一角に希望に満ち若さに溢れて、其の絶大なる青春の雄叫を擧げた第一年であつた。實に有意義なる浦高學友會史の第一頁に椽大の筆を置くべき第一年であつた。雄辯の士集つて純眞の叫武藏野に反響せしめたのも正に第一年であつた。

ふことは前年度に於てあきたらなかつた外面的活動への最も喜ぶべき事實であつた。而して前年度の苦節たる校内の練習會に於て練つた雄辯と經驗があつたればこそ此處に第二年は有意義となつたのであつたのである。

二、委員の改選

十一年度の末に學友會の會則に依つて、十一月下旬を以て新委員の選舉は施行せられた。前年度に於て部の爲に貢献することの多かつた本吉加岐磐氏は理事に當選して學友會の總務に關係することになつたので辯論部の委員を兼ねる譯には行かなかつたのは部として惜しいことであつた。併し乍ら藤本三常氏が其の絶大なる精力と偉大なる經驗とを持つて、新委員に再選したことは部として有難いことであつた。更に北海道出身の贊田武氏が新委員に當選したことは一層部の發展に資することが多いのであつた。贊田君は曾て中學時代北海道中等學校雄辯大會に於て第一等を得た猛者であつた。其の銀鈴を振るが如き雄辯は一堂の聽衆を魅了し去るに充分であつた。藤本君の絶大なる精力と經驗、贊田君の氣鋭とは外部に向つては第一年である辯論部に取つて誠に得難

委員本吉加岐磐藤本三常兩君が辯論部のために盡力大いに努めた結果は部をして更に第二年度、第三年度への發展に對する偉大なる拍車であつたといはなければならぬ。

今は(大正十三年十月現在)食堂と文三・甲の教室に分割されてゐるが當時の合併教室は、如何に雄辯の士の熱辯と聽衆の男性的なる野次とに依つて、活氣を呈したことであつたらう。闇黒が合併教室を襲つても、辯士も聽衆も、闇黒何するものぞとの氣概は夕食拔の只二本の二錢蠟燭の焔によつてのみ明くされた教室に幾度か熱辯と野次との應酬によつて活氣を呈したことであつたらう。其の熱心さ其の盛大さは實に部としては一文の豫算もなかつた時の事柄であつた。實にこれこそ委員の努力と部員の熱誠を裏書する唯一の事實であることを雄辯に語つてゐるのである。其等の記事の詳細は勿論第一年度の部史に記載せらるべき事柄ではあるが、實にそれこそ第二年度へ偉大なる効果を及してゐるのである。一文の豫算のない部が單に内面的練習にのみではあきたらなかつたことは云ふまでもない。十二年度こそは其の額が僅少であらうとも約二百圓の部費を得たとい

き寶刀であつた。

三、雄辯聯盟への加入

前年度に於ては其の豫算の金額の一文も無かつたことは關東大學専門學校雄辯聯盟への加入を敢てせしめなかつたのである。此の點のみにても前年度に於ける辯論部に取つて大なる打撃であつたと云はなければならぬ。井の中の蛙式に校内のみに於ける練習は其處に一定の型を生じ、辯論に對する弛緩を與へ其の發達の遅きこと火を見るより明かなことである。然るに東京を中心とする大學専門學校の雄辯聯盟に加入して、其の晴の舞臺に於ける經驗こそ實に至上のものだといはねばならぬ。

實に全國の雄辯の士一堂に會すると共に他方於て聽衆また精魄された帝都の學生である。猛烈なる野次、寸鐵膚を刺す底の野次を物ともせず壇上に突つ立ち上つての熱辯こそ吾等の辯論に對する至上の刺激であり、偉大なる體驗であらねばならぬ。この點に於て十二年度に光見の明ある藤本、贊田の兩委員が雄辯聯盟に吾が部を加入せしめたといふ事實は、そのみにても他の總ての同年度の活躍に優ること數等であると筆者は信ずる。

是に關して前年度に於て拓殖大學より辯士を請はれたことは部として最初のことであり、この事のあつてより他の大學等より招待せられることがあつたといふことは拓殖大學へ感謝して然るべき事柄である

四、校内に於ける練習の數々(十二年初期)

大正十二年度の初期(假に一月より二月)をかく云ふとせば冬籠りの時機であり運動各部に於ては殆ど休息の時期ではあるが辯論部としては活躍すべきの時期であつた二月の中旬に及んでは學期試験等のため辯論部も練習し得ないのであるが一月より二月の初旬に掛けては最も雄叫に相應しい時期と云はねばならぬ。

この時期に於ける辯士は文甲の藤本・藤倉・澤口・文乙の賛田・丙文・本吉・堀(豐)・加藤(宗)・吉田・恒・藤田(龍)・理甲の行實・理乙の福井等の諸君が多く演壇に上られた。行實の金屬性の音聲は多くの聴衆の拍手と賞讃に値するものであつた。藤本・藤倉・賛田・本吉・福井・藤田・堀等の諸君の雄辯家ぞろひは部として最も誇るべき事であつた。

要する前年度より十二年度初期に於ける演說會は熱誠そのものであつた。辯士も聴衆も共に熱誠であり

意氣と赤き若人の血はこの上もなくたぎりきつてゐたのであつた。

五、辯論部と文甲辯論會

當時の演說會が如上の如く、熱誠そのものであつて聴衆が熱心なればなる丈其の野次の猛烈なために、多數人の前に立つて意見を吐露することに馴れてゐない初心の人に取つては辯論部は實に恐ろしいものであつたに違ひない。相當に練習の功を積んだ人とか、幾千の人の前に立つても毫も恐れることのない膽力の据つた人でなくてはとも辯論部の練習會の演壇に立つのに躊躇せざるを得なかつたに違ひないこのために文甲四十名の學生中の有志丈にて雄辯論會を開いて自己の意見を吐露する練習をどの議が經つて文甲辯論會は創設されたのであつた。毎週一回の練習會には會員中の三分の一宛出演する、其の練習日は月曜日の放課後とすることにあつた。この文甲辯論會なるものは實に單なる一個の文甲のギルドに過ぎない。併しながらそれであつたがために辯論部の發達には至大の影響があつたことを忘れてはならぬ。

會員は辯論部の委員たる藤本三常君を初め文甲の殆

ど總てが入つてゐた。當番辯士の熱心なる練習は實に精神一到金石をうがつの概があつたればこそ、練習日には必ず練習を缺かなかつたればこそ實に他日辯論部の有数の辯士を幾多この文甲辯論會から出したのであつた。因に文甲辯論會は大正十一年の末期に出来たものであつて、翌年四月第二年の學年を迎へ新鋭二百の學生を迎へることになつて、文甲辯論會は更に一年級の有志を加へて膨脹したのであつた

即ち同年四月よりは文二・甲の新國康彦、山田貞夫・兩君が辯論會の幹事となつて毎週練習を缺かさなかつた。

全く總ては練習の功である。滴々と落ちる雨滴も幾年かの後には石をも穿つが様に、絶えざる練習こそ大雄辯たるの母胎でなければならぬ。この單なる一個の文甲ギルドの産果がやがて浦高辯論部をして其の盛名を得さしめるに至つたといふことは實に特書しなければならぬ事實であつた。

大正十二年の末期より其の盛名を誇はれるに至つた相杜正太郎君も其の初めは微々たる文甲辯論會の一會員に過ぎなかつた。事實其の進歩の跡の著しいことを知るものは文甲辯論會員總ての見るところであ

つて、後來滔々懸河の辯をふるふ彼を見ると、實に其の初を知り而して現在を知る總ての人をして、練習の偉大なる効果を嘆稱せしめねばやまないのである。

西谷多喜夫君もこの會の一人であつた。彼はその素質に於て既に雄辯家であつた。而も尙且文甲辯論會が出来た當時の彼を知る者は其の後の彼の雄辯を聞く時、同じく練習の偉大なる功績を悟らねばならぬ。素質が優れてゐる彼に取つて其練習は實に鬼に金棒の概があつた。

文甲士辯會が創設せられる以前に於て既に辯論部史上の有数の人たる藤倉寛三君、澤口剛雄もまたこの辯論會によつて上達の跡歴々たるものあるを見逃すことは出来ない。

この會より傑出して辯論部史上を飾るべき人々には新國康彦・御牧守一・土方辰三・鯉沼呢・山田貞夫・飯村義美・高橋慎一等の諸君がある。總て堂たる雄辯家である。

六、他校への派遣

雄辯聯盟に加入しなかつた以前即ち大正十一年の末期より吾部の對外的派遣は既に始つてゐた。最初に

派遣されたのは澤口剛雄にして拓殖大學の全國學生雄辯大會へである。吾が部として最初の事であり、派遣辯士其の責重しであつた。大講堂に集れる數百名の聽衆を前にしては辯士又躊躇せざるを得なかつたであらう。併しながら多數の本校生徒の應援の氣勢の大であつたことは確かに浦高辯論部の健在を帝都の學生の膽に入れるに充分であつた。當時尙警察問題のあつてより間もなくの事であつたが爲め、辯士澤口は會場に於ては野次の襲撃に襲はれ、控室にあつては警察問題の疑の火の手に襲はれたのであつた。會場に於ては悲惨にも不成功であつた辯士は控室に於て警察問題に對する説明に成功であつたと信ずる。

行實省吾君は日本大學に派遣されて帝都の中央に於て「亡びる前に」の演題のもとに其の金屬性の美音を以て滿場を魅了しつたのであつた。吾が部より派遣されての最初の雄辯であつた。

本吉加岐磐君は神田の中央佛教會館に於て行はれたる宗教大學主催の演說會に出席して、其の激越なる口調を以て（内容の激越なるに非ずして音容の感情的にして人の肺腑に迫る底の口調を意味する）論旨

を進めた。尙藤本三常君は明治大學主催の全國學生雄辯大會に行くべかりしを不幸病氣のために其の雄辯をして、止むなく發表し得なかつたことは惜むべきことであつた。以上は大正十一年度に屬する記事である。

下て大正十二年一月五日を以て東京帝國大學辯論部主催の全國高等學校雄辯大會には、齋藤孝義君が派遣せられた。帝大主催のそれは各大學専門學校のそれに比して、野次は殆どなく、寸鐵的の野次のみ時々出る程に聽衆は靜聽するのであつたから、派遣辯士も實に各大學専門學校への派遣辯士に比して別の苦勞を感ぜざるを得ないのであつた。

其の後福井達夫君は「無欲の闘士」なる演題をひつぎて東京外國語學校の全國學生雄辯大會に派遣された。實に其の會場は堂々たるものであつた。各學校の演說會場は必しも立派なものでない。然るに外語のそれは稀に見る堂々たる講堂であつて、壇上の辯士も喋り甲斐のあつたこと、信ずる。福井君又相當の成績を収めた。

専修大學主催の雄辯大會へは澤口剛雄が派遣された八高一高も參加して高校は浦和を合せて三校であつ

た。大學の雄辯のそれに比しては遜色あるを免れないが高校等のそれに比して吾が部は意を強ふすること

とは現在（大正十三年度現在）に始まつたのでなく當時に於ても正に肯定し得る事柄であつた。併し乍らこの日の演說會の一高の辯士は他の高等學校に優れてはゐたは勿論他の大學専門學校にも劣らぬ辯士であつた。後記すべき事柄なるも吾が部の辯士が他の高等學校等の辯士に優るとも劣らないことは僞はらざる告白であると思ふ。否確信なる事實である。吾が部の代表的辯雄家賛田君は慶應義塾に派遣され其の銀鈴の如き美音をふるつたのであつた。

尙十二年度の派遣は之にて盡きないのであるが大正十二年度の一學期末邊の記録は正に以上の事である

七、辯論部の不幸（其の一）

辯論部（恐らく他の諸部も同じ事であらうが）は未だ出發點にあつたといふことは明瞭な事實であつた。創設されて日向淺く、而も、其の豫算は僅少の額であつた。吾が部が更に自重一番天下のその盛名を擧げる爲めには、部員一同の結束は云ふまでもなく、其の絶へざる練習と必要な金の金圓と而も偉大なる先輩との必要は辯論に取つて先づ考へなければなら

ない問題である。

創設日向淺きが爲に其の練習が幾回繰り返されるとも完璧なりと自惚れることは許されない。而も貧乏なる學友會として二百内外の豫算以上は與へられぬのは詮方ないことであり、先輩のないことは止むを得ないことである以上、部としての當面の問題は正に會員の結束と、絶えざる練習とに俟つより外止むを得ないのである。然る如何なる爲か浦高の學生は辯論と云ふ事に對して冷淡ではないかと思惟し得べき現状にある。辯論の人生に如何に必要であるかといふことは、云ふまでもない事實であるに然も冷淡一顧だにせぬ様な氣風は實に憂はしい現象だといはなければならぬ。一般の學生にして己に然りであるとするれば、聽衆なき辯論會は流れ勝ちなどは止むを得ない。藤本賛田の兩委員の努力が如何程大であつても、學生一般がてんで問題にしてゐないならば萬事休すである。而も部員は萬事委員任せで熱心が足りないとするれば部そのものはどうして發展することが出来るよう。而も人々は口丈は物を云ふ。辯論部は奮はない。くだらないなあ」と筆者は屢々耳にした。然らば何故「辯論部の發達に一臂の力をやぶ

さかにするのか」と筆者は云ひたいのである。開校第一年の意氣は兎に辯論部にも沈滞し掛けて來た。而も此の時に當つて部として不幸なる出來事が幾多起つた。

委員として部のために貢獻の多かつた賛田武君は其の偉大なる學才と雄辯を持つて前途洋々たる偉才であつたに係らず病魔の犯すところとなつて、學校を退學せられたのであつた。賛田君は實に中途退學の余儀ない自己の不幸にどんなに泣かされたことであつたらう。

必ずこの病氣癒して見せると君では苦しくも病魔と戦つたのであつた。而も君は不幸にも藥石効もなく黄泉の客となつてしまはれた。實に痛惜の至であつた君の不幸、君の家族のなげきそれはどれ程であつたらう。實際惜しい限りであつた。

而も又君の病氣は獨り君の不幸許りでなくまた辯論部にどつても非常の不幸なことであつた。辯論部の發展が幾多君の手に依つて爲されなければならなかつたからであつた。後學後才が君によつて如何程鞭撻されることであつたかと思ふと君の不幸は部の不幸として一掬の涙なき能はずである。

に歸してしまつたのであつた。自然の威力を人々は今更ながらはつきりと意識した。

學友の災に獲ふもの實に七拾有餘家に及んだのであつた。一ヶ月の臨時休業となつた。

浦高救護團が設けられ學友職員の安否が尋ねられ不安に閉されたのであつた。

十月世間の靜まるにつれて學校は始つた。

救仁部が設置され學友の誠心が凝つてそれに集つた辯論部も又五拾圓の金額を救仁部に寄附したのであつた。五拾圓を寄附したことは辯論部の清い誠心の發露であつた。實に賞讃さるべき事柄であつた。けれどもこれがために一方辯論部は最早既定の辯論部其れ自体の仕事を休止せねばならなかつたのであつた。天災とは云へ實際辯論部の一大不幸だと言はなければならぬ。けれども中等學校の雄辯大會や大學専門學校の雄辯大會は中止の止むなきに至つたとしても、藤本委員の異常な努力と部員の熱誠とは十二年度後半をして可成りの活躍をなさしめたといふことは特筆すべき事柄でなければならぬ。

九、十二年度後半期の活躍

(イ)

次に委員藤本君は其の絶大なる精力家であつたに係らず拾貳年の初頃より長い間病魔のために苦まれた併し乍ら其の偉大なる強固なる意志と我張りとは再び昔日の强健な藤本それ自体にしたのであつたが十二年の初めの間は病氣であつたがため既に賛田君去つた後は病氣に苦しむ藤本君の獨りの雙肩に辯論部はあつたがため、藤本君自身も二重の苦痛を感じたであらうし、辯論部そのものとしても沈滞せざるを得なかつたこと強ち無理とは云へなかつたのであつた。

八、辯論部の不幸 (其の二)

大正十二年の夏期休暇は終つた。二學期は初まらうとする。天高く馬肥ゆるの秋は訪れる。人また雄叫びせざるべからざる秋は來るのであつた。委員藤本三常既に健康は快復された。辯論部の期待また少からざるものがあつた。

九月一日は來た。不幸なる恐怖と戦慄に満ちた九月一日は來たのだ。俄然關東地方には大地震が襲つたのであつた。同時に帝都の大半を烏有に歸せしめた恐るべき大火災が起つた人々の平和は亂された。五十年來築き上げられた帝都の莊嚴は一夜にして灰燼

年が變れば人も變る。辯論部の人材にも變化を來した。此の期に當つて擡頭し來つた辯士には相柱正太郎、渡邊義郎、木間常理、金丸秀夫等の諸君の新進であつた。夫々の特徴を持ち夫々の雄辯の所有者であつた。

西谷多喜夫、土方辰三、御牧守一等の諸君も此の期頃より出演の數を増して衆目の見るところ十指の指すところの雄辯家となつたのである。此の期以前より知られてゐる藤本委員を始めとし藤倉寛三、堀豐次、本吉加岐磐、澤口剛雄、吉田恒太郎、加藤宗三の諸君も多く出演されたのであつた。其の他前出の辯士諸君(文甲辯論會と辯論部の項參照)の中山田貞夫等も度々其の雄辯を振はれた。

聴衆は其の數に於て少き概はあつたけれども、一般に此の期の演說會の聴衆は熱心にして、寮の夕食の鐘が鳴つても熱心に會の果てる迄聞いてゐる人が多かつた。

(ロ)

神田青年會館の聯盟主催の演說會には藤倉寛三君が派遣された。其の演題は「混沌の讚美」といふのであつた。多くの聴衆を魅し去つたのであつた。

十一月に入つて東北帝大主催の雄辯大會には委員藤本三常君が部を代表して派遣せられた。附添として堀豊次君が同伴した。彼の地の演説會は實に盛大なもので、朝から午後にはわたる演説會に晝食抜きで熱心に辯士の一言隻語も聞き取らざるは止まずと云つた底の熱心さであつたとは藤本三常堀豊次兩氏の實見談である。

この派遣に於て特筆すべきは吾が部の派遣辯士は實に堂々たるものであつたといふ外に、東北帝大より最も厚遇せられたといふ二事である。

十二月一日には早稻田第二高等學院主催の一高浦高早高の合同雄辯會があつた。吾が部から派遣された辯士は堀豊次、西谷多喜夫、澤口剛雄及び委員藤本三常の四君であつた。

吾が西谷多喜夫氏は當日群に秀れてゐた。

同程度の學校のかうした會が非常に辯論發達のため有意義なことを特に記したい。

十二月八日には當年度の納會たるべき演説會が開かれ藤本、藤倉、堀、西谷、澤口、木間、渡邊、相杜、金丸等の諸君の熱辯があつて盛會であつた。

要するに十二年度に於ける辯論部は委員藤本三常君

もののあつたことは喜ぶべき事柄であつた。

去年の大震大震災は各大學等の辯論部に對して可成りの痛手であつたが爲に、聯盟各校の雄辯大會は或は中止或は延期せられた。

この爲に此の時期に學年に於ては第三學期なる多忙の時期に可成多くの聯盟各校の雄辯大會は開催せられたのであつた。而して部よりの派遣辯士は新進の相杜正太郎、渡邊義郎、金丸秀夫、木間常理等の氣鋭の人々にして、國學院大學、農業大學、松戸園藝明治大學等に各々雄辯をふるつたのであつた。尙二月三日埼玉師範辯論部主催となつて近縣中等學校懸賞雄辯大會の開かれるや、吾部委員は審査員として招待され澤口委員は一場の演説を試みた。

新學年は近いた。新進氣鋭の新入生に多くの期待を持つて、部はかくて、希望に満てる新學年を迎へるのであつた。

十一、陣容を整へて充實を圖る

櫻花は綻びて新學年は來た。有終の美をなさんと努力する辯論部にも春は來たのだ。

革新の氣部にみなぎり、活躍の腕は自から鳴つた。理事主催の學友會の新入會員歡迎會は四月十二日始

が只一人で部の發展のために努力することの多かつた割合に部員等は熱誠の足りないために概して云へば成績は良好であつたといふことは出来ないものであつた。革新すべき多くの事柄は將來に俟たねばならなかつた。

大正十三年度(自大正十三年一月至大正十三年末)

一〇、一月より三月迄

之より先、十二年十一月下旬を以て委員は改選せられた(委員等の選舉規定の施行後最初の選舉である)其の結果澤口剛雄、堀豊次二名が當選したのであつた。委員の選舉が終了して、來年度の豫算會議は開かれた此の會議に於ては可成の波亂曲折があつて、最後に豫算案の決定せられたのは越えて十三年一月下旬のことであつた。一月下旬の特別委員會には辯論部からは委員の病氣の爲に出席しなかつたといふ事は誠に部に取つて残念なことであつたが、二名の委員は豫算會議に於て健闘したことは事實であつたのだ。

一月より三月迄の此の時期は學生にとつて随分多忙な時であるが爲に辯論會としては僅々兩三度に過ぎなかつたけれども、辯士の練習に進歩の跡歴々たる

業式の午後新築の講堂に開催された。新入會員に多大の期待を持つ各部は部を擧げて優秀なる部員を得んとする。實に歡迎會に於ける各部代表者の挨拶は總て堂々たるものであつた。

辯論部よりは澤口委員が新入會員の歡迎の辭を述べた。奮はざる辯論のために、而して又辯論部のために、辯論についての感想を述べて多くの部員を得んとしたのであつた。併し乍ら吾が部の偉大なる代表者堀豊次の缺席(彼は病氣のため未だ故郷にあつたがために)は惜しむべき事であつた。堀委員の獅子吼こそ歡迎會當日には是非共必要缺くべからざることであつた。

其後新入部員を募集したが其の成績は思はしくなかつた。辯論に對する理解熱心がこれ程なのかと實に深憂に堪へなかつた程に應募した部員の少きに一驚せざるを得なかつた。併し乍ら其の際憂は裏切られ、辯論に對する理解と熱誠とを有する幾他の新銳があつたことは、五月一日の部員總會の白熱的の盛會に見ることを得たのであつた。この記憶すべき部員總會に至る迄、部員の募集については幾多の人に感謝せねばならないのであるが、新に入部した幾他

の新進氣鋭の士の歡迎會を兼ねたる部員總會の盛況な白熱的若さに燃えたこの會合は部員相互の親睦を深うした以上に、其の熱誠なる各自の意見開陳に於て未だ曾て見なかつた希望と感謝と誇りの混淆した氣分に辯論部其れ自身はならざるを得なかつた。此の會合に於て本年度の事業、練習の方法等を決議して、其の練習は次の如く規定せられた。而して盛會裡に深更散會した。

一、部員を三班に分つこと

一、毎週木曜放課後講堂に於て練習會を開く

一、當番辯士は止むを得ざる事の外必ず實行する事以上の如くであつて、其の翌日結束せる辯論部は控所に其の偉大なる宣言、沈滞せる校風の作興の指導者を以て敢て任ずると云ふが如き宣言と、三班の名簿を掲示したのであつた。かくて、結束せる辯論部は所定の如く毎週木曜日の放課後大講堂に於て修練の功を積むことを怠らなかつたのであつた。而して新進には半田祐一、小山禮吉、志村博、福島角三、大島四郎太、足立修、加藤一、其他文甲文乙等には有數な多くの雄辯家を得たのであつた。

十二、部長の更迭

明を開却すべからざることを痛論して降壇するに初まつて、到着順に依る十九校の辯士交々立つて熱辯をふるつた。當日最も其の雄辯に異彩を放つたのは日本大學中學の竹澤倫夫君にして、衆目の見るところ十指の指すところ等しく其の雄辯を三嘆した。十名の審査員の審査の結果、第一等は日大中學の竹澤君に歸した。而して表旌盃は日本大學中學に歸した。尙賞を得たものは左の通りであつた。

一等 群星一時に輝く時 日大中學 竹澤倫夫

二等 新時代の要求 東京大成 三浦 仁

三等 平和と創造への序曲 日白中學 五木田雄六

以上の三君には賞状及び賞牌を呈上した。尙此の他に豊嶋師範の齋藤富士雄君等拔群の成績であつた。以上の諸君は審査の結果の順序に依るものであるが、其の他の辯士として流石は一校の代表辯士なる故其の雄辯には聴衆者諸君の等しく感嘆せられたところであつた。のみならず、これら中等學校の辯士諸君に比べると吾が部の幼稚さを痛切に感じた。吾部は正に以て三省猛進精進せねばならないことをさとつた。

最後に午後四時閉會するや、階上會議室で茶話會を

辯論部の創設されてより部長として貢獻せられた大野部長は御都合に依つて部長の職を辭されたことは部にどつて惜むべき事であつた。併しながら熱心に辯論部の爲に御盡力下される菰田副會長が部長として新に吾部のために御指導下されることは幸福なことであつた。

十三、關東中等學校辯論大會

陣容既に整ひ意氣正に昂然る辯論部は茲に先づ意氣の一端を示すべく關東中等學校の猛者を招待して關東中等學校辯論大會をば新緑の五月二十五日午前十時を期し本校大講堂に開催した。恰もよし、快晴の其の日は寮紀念祭學習院對の本校野球戦陸上競技部の試合等盛澤山な多くの催しがあつた際とて、日曜日の其の日は浦高へと長蛇の如き人なだれは正に新聞紙の報じたるが如く然く盛大なるものであつた。辯論大會に來りて辯ずるもの正に十有九校の猛者、定刻前既に聴衆堂を埋むるの盛況は吾等の愉快これに過ぐるものはなかつた。

委員の開會の辭につき、吉岡會長の挨拶終つて、下野中學の神山順君精神界の文明を期せと題して、物質文明に日も此れ足らずとする現代の正に精神的文催した。茶話會席上の盛大さまた相互の胸襟を開いたことに於て有意義なものがあつた。會果ててや記念の參加章を呈上し、講堂にて記念撮影をし、健康を祝しつゝ、目出度く第一回の關東中等學校雄辯大會はかくて果てたのであつた。

此の大會にあつて其の準備の多忙を心よく引き受けられ、當日の大會に援助し下され、後かたづけまでもお骨折り下された菰田部長を始め多くの部員諸君の事績また特筆して感謝せねばならぬことであつた。尙當日部より特に相杜、木間、渡邊の三君は夫々雄辯をふるはれ辯論會に更に一層の光彩を添へてくれた。

十四、東北遊説及び各地派遣

この大會後も練習日には大概練習も缺かさず、修鍊を重ねた。此の間にあつて、東北遊説の議起り委員は夫々奔走した。

一方聯盟主催の日米問題學生演説會が上野の自治會館で開かれるや部の代表辯士として相杜正太郎君が派遣され、太いに其の氣勢を挙げた。立正大學の開校記念祭にあつて開かれた全國學生雄辯大會には金丸秀夫君が出席して其の特意の雄辯をふるひ、法

政大學豫科の全國學生雄辯大會には木間常理君が出席して獅子吼した。

一學期は終らうとする。委員は東北遊説に關する交渉の奔走に疲れた。而も其の遊説隊にとつ演壇に立つの機を得せしめたのは僅かに福島中學のみであつた。實に不成績の極みであつた。學期は終つた。

遊説隊に参加する辯士は夫々原稿を練つた。七月廿日の夜第一回の遊説隊諸君は意氣昂然として東北の野に旅立つた。一行は藤本三常新、國康彦、山田貞夫、木間常理、半田祐一、福島角三、土方辰三の諸君であつた。廿一日福島中學六百の健兒を前にして、福島半出、山田、木間、新國の諸君は交々立つて熱辯をふるひ、多大の影響を與へた。

一行は更に米澤の地を訪ひ、(此の際新國康彦君の盡力が多かつた)更に山形の地に於て催された、浦和、山形、新潟の三高校陸上競技會に列し、吾校選手の應援大いにつとめた。更に會津の地を訪ひ、一行の胸襟開いては水魚の交もたぬものがあつた。要するに第一回の遊説は失敗に終つた。併し乍ら辯士の意氣や大いに上り、其の得るところまた少くなかつたことを紀念としなければならぬ。

部員の意氣は益々昂然たるものがあつた。

茲に於て九月十日放課後秋季雄辯大會は講堂に於て開かれた。菊地楨太郎、飯村義美、木間常理、金丸秀夫、渡邊茂郎、相枉正太郎、小山隼太、小山禮吉等の諸君交々立つて雄辯をふるひ、甚だ盛會であつた。越えて九月二十二日の例會は前回に劣らぬ程の盛會であつた。志村博、加藤一、平井孝雄、新國康彦、相枉正太郎、木間常理、渡邊義郎、金丸秀夫の諸君の大獅子吼があつた。

筆者は茲に記さなければならぬことがある。辯論部も既に第三年目である。第一年度より三年度に至る迄の辯論會を通覧するとき實に感激に堪えぬことがある。歳々の花は同じであつても年々の人は同じではない。辯論部の壇上の人にも盛衰は争はれない併し乍ら個人としてではなく辯論部其のものとして見ると實に其の進歩の跡に驚かざる得ない。

意氣と青春の氣が今よりも多かつたと人の云ふ第一年度に於ける辯論部は實に常に緊張の度を失はない盛大さであつた。辯士の辯論は賞讃する程雄辯ではなかつた。併し乍ら辯士と聴衆とは以心傳心の熱勢に満されてゐた。熱誠溢れては、口角泡を

遊説隊の一行の出發に先つこと一日即ち七月十九日の夜行にて、山形高等學校主催の浦和山形新潟水戸の四高校辯論大會に参加すべき吾部の代表辯士西谷多喜夫(否定より肯定への辯士)及び相枉正太郎、次の世界史への序曲の辯士)の二名が出發した。廿日夜頃に及んで山形に於て開催された辯論大會に於て最優秀の辯士は實に吾が西谷、相枉兩君であつたと土地の新聞紙も又の優秀を賞讃したのであつた。實に其の成功をば吾部は永久に傳へなければならぬのであつた。この辯論大會の數日前即ち七月十五日には京都帝大講演部主催の全國高等學校辯論大會が開かれた。吾部よりは澤口剛雄(群星は亂れ飛ぶの辯士)その代表辯士として單身京都に派遣された。晝間夜間の二回に分れた大會の夜間に出席した澤口剛雄の成績又惡からざるものがあつた。かくて或は東北の野に、或は西に學期を終つた許りの辯論部の活躍は實に目醒しいものと云はねばならない。

十五、二學期に入れる辯論部

一學期に於て其の活躍の一端を示した辯論部は更により多くの活躍を二學期に於てはたさねばならない

飛して辯士と聴衆の應酬があつた。意氣はたとへあふれてゐたとしても其の辯説は拙劣であつたと云はなければならなかつた。然るに二年三年度に入れる及んで個人に就いて見るときは實に其の長足の進歩に驚かざるを得ない。部としての進歩また見逃すことは出来ぬ。

只惜むらくは實に熱心なる聴衆の障害をなし、或は辯論部の聲價を落しはせぬかとおそれるものは其の低劣なる野次でなければならぬ。男性的に堂々と壇上の辯士と討論する程の痛烈なる野次は失せて、いたづらに聴衆の哄笑を求めるが如き低劣化する野次を筆者の單なるおそれであつて欲しいと信するのである。

九月廿三日東京齒科醫專の辯論大會には吾部の雄辯家新國康彦君「泰山今や危し」と題して其の熱辯をふるつたのであつた。

十月四日、農業大學には「人種解放の障頭に立つて」と題して金丸秀夫君其の熱辯をふるつた。

尙十月一日合併教室に於て豫算上行詰れる辯論部の善後策否發展策の擬議會は委員堀豐次君の盡力によつて開かれた。會するもの二十余にして、擬國會、

文藝部 第一回部長 馬場先生

委員 土方辰三 増田七郎 山下義

原田五朗 吉野龜雄 中村政男

第二回部長 馬場先生

委員 土方辰三 増田七郎 吉川尙

藤田龍郎 加茂秀男

第三回部長 馬場先生

委員 相枉正太郎 増田七郎 吉川尙

佐野碩 吉野龜雄

文藝部誌

なにしろ時日が急なので詳しく書けない。言つてもいいのであるが、實のところ記録が無い、いやもつと卒直にいへば變つた事がないのである。偉大なる歴史家ならいざ知らず。われら凡人はこの平凡單調なる文藝部の三年をすぐれた「文藝部誌」にまとめる事は出来ない。吉野が一年の「學期」の分だけかいてくれたがあとが續かないので誠にすまないが之も載せないで仕舞ふ。

とにかく學友會の成立するや文藝部も同時に成りしかも設備順序投票の第二位を占めたことは特筆してよいであらう。少くとも之によつて浦高の大部分の人は文藝の存在を認めてゐたといつてよからう。かくて委員も決したが、それは

土方辰三(文甲) 賀茂秀男(理乙)

山下義(文丙) 吉野龜雄(理甲)

原田五朗(文丙)

の連中であつた。大正十一年度に於ける催し、企ては特記すべきものはない。第一學期に寫眞展覽會を行つたのは確に委員の努力を壯としてよかつたらう

その他のことは秋の繪畫展の外記録に殆ど見えない。たゞ學友會雜誌第一號が松村先生のエッセイを以て飾られて十二月に刊行せられた。我々は之を見て御互に「あいつがこんなことをかくのかな」と思ひ、ある人々に對する敬意を増したのであつた。大正十一年のカアテンは下りる。何しろ原つばのまん中にペンキ塗りの「コ」の字形の建物がボツカリと立つて青息をついて試験をパスした全國の青年が二百人集つたのである。この年に於てとにかく之だけの仕事の行はれたのは賞めてよからうと思ふ。

大正十二年の委員は

土方辰三(文二甲) 藤田龍郎(文二丙)

増田七郎(文二乙) 賀茂秀男(理二乙)

吉川尙(文二丙)

であつた。私の記録に見えぬものでは六月及び十二月の雜誌發行と、二回(す)の寫眞展覽會、秋の繪畫展覽會、寮に於ける數回のレコードコンサートなどである。九月の震災は秋に於ける各部の種々の催しの豫定を奪つてしまつた。

大正十三年の委員は

増田七郎(文三乙) 相枉正太郎(文二甲)

吉川 尚(文三丙) 吉野 龜雄(理二甲)
佐野 碩(文三丙)

で、今迄のところは七月の雑誌と、数回の写真及繪
書展、コンサート等であつた。

私は早く歴史をきり上げて「高等學校に於ける文藝
部の意義」なる一文を草してこの亂文のせめての補
ひとしたく考へたのであつたが時日の切迫のために
早く切上ぐべく之を略す。しかし諸君に私の結論だ
けを申上げることがゆるしてほしい。

文藝は何といつても個人的のものであり、又さうあ
らねばならない。かく考ふれば文藝部の存在はナン
センスのやうであるが決してさうではない。文藝部
の意義はこれら文藝の士の卵に道具と便利をはかる
のにある。(詳説略す) 諸君よ、諸君は浦高文藝部
を以て諸君の藝術の搖籃であると思つてはならない
畑だと思つてはいけない、諸君はあくまで己の心を
以て、己の腕を以て、たゞ一つのよりどころとする
がいゝ。(そのために文藝部の諸設備を大いに利用
してほしい)しかし諸君の内から他日すぐれた藝術
の士の生れたとき、わたくし達をして「あの人は浦
和の卒業生だせ」と他人に向つてはこりに喋るこ

とを、許して頂きたい。

安言亂文當死(甲)
(十月七日)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

大五十三年度の委員

吉川 尚(文三丙)

佐野 碩(文三丙)

吉野 龜雄(理二甲)

劍道部誌

剣道部

第一回部長

長村先生

委員

善波周 田中達次郎

第二回部長

長村先生

委員

善波周 川内忠次

第三回部長

長村先生

委員

川内忠次 館野覺治

剣道部誌

大正十一年度

創業の一年

浦高が開設されて、それと共に浦高學友會なるものが設立された。古來の武技だもの剣道もこの一部として、剣道部なるものが設けられる。部が設けられると共に部長として長村先生が定められた。

我々から學期毎に徴集される學友會費も僅かなのだから、一度に全部の部には分けられないとあつて生徒互選の結果剣道部は來年まで金を貰ふ事をさしひかへなければならぬ。四月中に部員の互選によつて委員が定められた。どうせ豫算のない部だ。だれがなつたつて大した仕事の出來やう筈がない。だから委員なんか必要もないやうだがそれでも形の上だけでもそれが必要ならんさうで善波周(文丙)田中達次郎(理甲)の二名がそれと定められた。

さてこれで大部目鼻がついたわけだ。だか何んと言ふたつて第一年だ。部員の數も少ない。その少ない部員もお互ひの名も分らない。氣質特色分りやうもない。その上困つた事には防具の數が少なく、勿

論剣道部所屬のものなぞ一つだつてありやしない。個人持ちのを二ツ三ツよせ集めただけのもの。道場なんか一体何處へ出來るのかその場所さへも分らない。何處から何と手をつけてよいのか委員たるもの大いに迷つた事だ。

然しかうやつて見て居ても仕方あるまいとあつてそろ／＼始める。場所に困つたがそれでも漸やく見付け出したのが寮の圖書室。割合に大きくて中はがらんとしたまゝの部屋。こいつ絶好の場所とボンボンとまでゆがすともガチャ／＼やりだした。ところが毎日の様に硝子がなくなつて外と空氣は流通するそのたびに窓がなにかあつちでひたひに敷をよせられたどの事、遂に床に穴があいちゃつた。今度はホルルだ、電氣燈を高く上げてやりだしたが此處でも同じ事。學校へ忍び込まうとすれば、教室を使ふことまかりならぬと大目玉。たう／＼六月には中學へ行つて道場をお貸りする事になつた。

おさへられると何處かへ出やうとするのは自然の勢、學校の内では何處でも出來なくなるときまつて見ると、さうですか。とそのまゝやめても居られない。遂に中學まで出かける事になつた。各自が道

具を擔いで放課後となると出てゆく。長村先生を筆頭に龜山先生時には渡邊先生も出て下さる。部員は依然として以前の通り少ないがその元氣は大したものだった。毎日出かけて稽古をやつて来る。次第に暑つくなつて来る。稽古を終ると皆で小便部室の井戸で身体を洗ひ歸つて来る。寮に來ればもう五時だ夕食がちゃんと食卓の上で烟もたて得ずおどなく待つてゐた。

その中に寮にチブスが出來たので、それにつれて稽古の方も流れになる。

八月の休暇中に何處かの道場にあつて稽古した部員があつたさうだ。数少ない部員なのに、その中からこんな人が居たとは珍重至極、厚く敬意を表します。第二學期、九月になつてそろ／＼稽古を始めやうとした時、東京帝大から剣道大會に招待された。こいつ幸とばかりに、ホールで少ない部員が又稽古をはじめた。その日來年度から開催される東大主催高等専門學校優勝試合について詳に打合せをしたいから委員を二名派遣しろとのお話、もとより二名しかない委員だ。そろつて出かける事となる。そこで選手は川内忠次、平井孝雄、熊谷忠三郎の三名に決

定した。

その當日は十月十二日。午前八時から生徒集會所で打合會が開かれた。色々のお話もあり。議論も出て兎に角十二月の冬休暇を利用して開かれる事に定められた。午後一時から大會が開かれる、浦高にとつてはこれが最初の戦だ。初陣なのだ。選手だつて大ていの事ではない。元氣に皆よくやつた。そのせいか普通の稽古の時より以上に働き得た。それだから初段「二段の猛者達と對抗し、よく之れを制し得て揚々歸校せり」などと嬉んで居たものもあつた。その日の組合せとその戦跡は次の通り。

○浦高	熊谷	○上蠶	向井
○農大	野尻	○浦高	平井
○一高	南	○浦高	川内
○浦高	平井	○商大	平川
○青師	川崎		
○浦高	川内		

大いによろこんで歸つて來た。

十一月には來年度の理事、委員の改選があり。その後は又學期試験やなにかで稽古をしやうと言ふものもなくなつた。

大正十二年度の活動

一月十五日から二週間武徳殿の寒稽古に左の諸君が出席した。田部井君などは熱心な方で雪の日も休まず皆勤、従つて技も著しく上達した。

善波、川内、平井、田中、熊谷、田部井。

寒稽古は終つたが此の儘稽古を止めるのは惜しいので寮の圖書室を借りて稽古を続ける。以上第三學期開校第二年を迎へた浦和高等學校の各部ではそろそろ内容の充實と對外的發展とが根ざして來た。四月廿五日。新學友會員から新部員を募集して新たな陣容を整へ、五月の始から新部員と共に浦和中學校道場を借りて稽古を始めたが中々不自由であつた。

五月廿六日午後一時から浦中道場で新入生歡迎剣道試合が催された。吉岡校長先生始め諸先生御出席下されたのは辱けない。試合は新入生の對類仕合と部員の高點試合で一年の對類試合には文乙が優勝し、高點試合では中屋、松崎、で、大庭、尾崎、青木、關口、松村、近末の諸君の奮戦めざましく、優勝類には部長寄贈の賞品を授與し、全勝者には銀製のメダルを授與した。全勝者は次の通りである。

文丙（館野覺治、同 尾崎洋、文乙 三神智全、同 設樂安男、理乙 梅澤實、

對類試合（各類から六名選出）（各一本勝負）

第一組（大將）

第二組（副將）

○（文甲）松崎健吉	○（文甲）淺川一雄
○（文乙）谷 亮平	○（文乙）渡邊義郎
○（文丙）館野覺治	○（文丙）尾崎 洋
○（理甲）高塚武治	○（理甲）井上辰雄
○（理乙）關口銳之助	○（理乙）堀 正侃

第三組

第四組

○（文甲）古瀬克巳	○（文甲）土師政治
○（文乙）三神智全	○（文乙）設樂安男
○（文丙）木間常理	○（文丙）松宮周郎
○（理甲）大瀧正雄	○（理甲）内田富夫
○（理乙）高橋智廣	○（理乙）松村勝治

第五組

第六組

○（文甲）和田 恒	○（文甲）青木文雄
○（文乙）山下 龍	○（文乙）和田重正
○（文丙）近末 靜	○（文丙）尾崎定芳

○(理甲)藤谷謙藏 ○(理甲)鈴木 始
 ○○○(理乙)梅澤 實 (理乙)廣瀬秀一
 (得點) 文甲十一。文乙十七。文丙十四。
 理甲 七。理乙十一。

高 點 試 合	
和 田 重 正	木 間 常 理
古 瀬 克 巳	藤 谷 謙 藏
近 末 靜	渡 邊 義 郎
大 瀧 正 雄	土 師 政 治
山 下 龍	尾 崎 洋
尾 崎 定 芳	廣 瀬 秀 一
竹 山 魁 芳	齋 藤 孝 義
鈴 木 始	高 塚 武 治
淺 川 一 雄	三 神 智 全
松 村 勝 治	梅 澤 實
内 田 富 夫	谷 亮 平
關 口 銳 之 助	堀 正 侃
高 橋 智 廣	中 屋 重 敏
松 宮 周 郎	田 部 井 寅 吉
青 木 文 雄	館 野 覺 治
道 岡 誠 一	松 崎 健 吉

田中達次郎
 大庭忠夫
 平井孝雄
 川内忠次

對類試合があつてから、新部員の中からも選手候補者を出して、對外的發展の基礎を作るべく委員の活動は益目覺しいものがあつた。
 五月十八日には東京帝國大學劍道部東北武者修業の一行が來浦せられたので、午後三時半から武德殿で稽古を願つた。部員の中から左の十三名を選出して派遣した。稽古後角中階上に於ける縣内學士會主催の歡迎會へ出席した。
 松崎健吉、渡邊義郎、三神智全、館野覺治、木間常理、尾崎洋、梅澤實、廣瀬秀一、堀正侃、平井孝雄、川内忠次、田中達次郎、善波周。
 六月十七日、法政大學第二回劍道大會へ左の二名を派遣長村部長附添(文二乙)川内忠次(理二甲)大庭忠夫。
 一學期も終りに近い或る日、部員一同集つて茶話會を開いた。夏休み富浦で合宿することなど語り合つて散會した。

七月十一日から十八日迄部員有志のもの廿三名が房州富浦村岡崎秋之助氏方へ合宿して富浦小學校に於て夏稽古をした。表門に掲げられた「浦和高等學校劍道部夏稽古道場」も吾々を力強けて呉れた。合宿したのは次の諸君で、

善波、川内、平井、大庭、田中、中屋、館野、松崎、三神、尾崎、大瀧、和田、道岡、藤谷、木間、鯉沼、田部井、茂木、堀、融、古瀬

この夏休の合宿が我々部員の親しみと團結の精神に與つて力のあつたことは特筆すべきことである。惠まれた海といふ自然のふどこゝろにひたつて、熱心に我々は稽古を勵んだのである。或る時は近くの安房中學に行つて稽古試合をしたこともあつた。

夏休みが過ぎて第二學期になる。待ちに待つた道場が出来土臺がいよゝゝ立てられることになつた。縄が張られ、土臺が築かれ、一日一日道場が建立されて行つた。十月六日昨年來待ちに待つた道場が漸く完成した。今日午後零時半から柔道部と共に道場開の式を舉げた。神主の祝詞も珍らしく、壯嚴のうちに式を閉じた。閉式後茶話會を開いた。その翌日から新道場で猛烈な稽古を始めた。道場を借りてゐた

頃とは氣分が全然異なる。

十月十一日有段者七名次の如く發表された。

二 段 善 波 周	二 段 川 内 忠 次
初 段 大 庭 忠 夫	初 段 平 井 孝 雄
初 段 田 中 達 次 郎	初 段 中 屋 重 敏
初 段 館 野 覺 治	

右頭書之資格ヲ得タルモノト認ム
 大正十三年十月十一日

浦和高等學校劍道部

第二學期最大の活動は縣下中等學校劍道大會であつた。參加學校は浦和中學。埼玉師範。川越中學。熊谷中學。熊谷農學校。秩父農林。不動岡中學。粕壁中學。川越工業。杉戸農業の十校で、十月二十八日午前九時から試合は開始せられ第一戦は次の組合せによつて行はれた。

川越中學 熊谷農學	浦和中學 杉戸農業
埼玉師範 秩父農學	川越工業 熊谷中學
粕壁中學 不動岡中	

第一回戰
 川越中學 熊谷農學
 大塚友重◎—○小松武—

大河原雅雄○横瀨陸義
竹澤丙午○星野敏治
内田正三○吉野近道
山崎豐○金子義
北村博學○原口千治
金井二郎○金井武夫
浦和中學 杉戸農業
松川勇武○中村源吉
小島五六○新井勝雄
中村芳郎○倉持日鼎
双木貞八○横溝清
石川恕隆○新井次郎
淺子英○奈良新次郎
大附左夫○長島新造
埼玉師範 秋父農業
天野喜十郎○黑澤織四郎
中島榮一○齋藤春治
西島貫一○大森正憲
五十嵐金平○新井知夫
根岸武夫○荒船德定
岡本四郎○關口道次郎

黒瀨長平○北熊谷中學
川越工業 熊谷中學
金子行三○原口純一
永井政一○齋藤達三郎
村田松市○矢島清樹
久喜忠雄○雨宮周
金井伯太郎○清水圭三
井上利勇○宗川玖衛
久喜勝一○杉田丈千代
柏壁中學 不動岡中學
東山澄○川島左近
有瀧清道○田村眞祐
勝沼嘉長○島村喜勝
關根政○小久保辰雄
槻本善躬○渡邊謹行
藤波保○網野滿
中川勘式○橋本福壽
第一回戰勝校は川越中學、浦和中學、埼玉師範、熊谷中學で第二回戰組合抽籤の結果は次の如く定まる
川越中學 埼玉師範 浦和中學 不動岡中學
熊谷中學 不戰二勝

第二回戰

川越中學 埼玉師範
大塚友重○天野喜十郎
大河原雅雄○中島榮一
竹澤丙午○西島貫一
内田正三○五十嵐金平
山崎豐○根岸武夫
北村博學○岡本四郎
金井二郎○黒瀨長平
浦和中學 不動岡中學
松川勇武○川島左近
小島五六○田村眞祐
中村芳郎○島村喜勝
双木貞八○小久保辰雄
石川恕隆○渡邊謹行
淺子英○網野滿
大附左夫○橋本福壽
第二戰勝校は川越中學、浦和中學、熊谷中學の三校で
第三回戰即ち準決勝抽籤の結果
川越中學 熊谷中學 浦和中學は不戰勝
準決勝戰

川越中學 熊谷中學
大塚友重○原口純一
大河原雅雄○齋藤達三郎
竹澤丙午○矢島清樹
内田正三○雨宮周
山崎豐○清水圭三
北村博學○宗川玖衛
金井二郎○杉田丈千代
準決勝戰に於て川越中學、浦和中學の勝で愈々決勝
決 勝 戰
浦和中學 川越中學
松川勇武○大塚友重
小島五六○大河原雅雄
中村芳郎○竹澤丙午
双木貞八○内田正三
石川恕隆○山崎豐
淺子英○北村博學
大附左夫○金井二郎
かくして名譽ある優勝旗は川越中學に授與せられ、
零時四十分閉會。後選手の慰勞茶話會を催して夕方
解散した。

十一月十六日午後三時から本校道場に於て東京高等蠶絲學校と稽古試合を行つた。選手十一名、各組各三本勝負、龜山師範の審判。

高 蠶 軍	本 校
倉 田 ○	善 波
小 野 ○	川 内
尾 崎 ○	大 庭
高 橋 ○	熊 谷
石 田 ○	平 井
大 井 ○	館 野
下 迫 ○	田 中
公 文 ○	三 神
丸 茂 ○	松 崎
山 根 ○	谷 崎
松 本 ○	中 屋

八對三で本校の勝

本校選手の他流仕合は此の試合を以て嚆矢とするので一同の緊張した精神は一舉一動に見えた。中屋君先づいつもの元氣で二本とも胴を切つて樂に敵を倒し、ついで谷、三神、館野等相ついで見事な試合

振を見せて呉れたのは嬉しかった。

大正十三年度の記録(十三年一月ヨリ七月迄)

一月十日から向ふ三週間寒稽古を行つた。朝早く息が寒さの爲めに白く見える時、澄み切つた冬の空氣を破つて響き渡る氣合を聞きたいのは山々であつたが残念ながら未だ道場に電燈が無かつたので、午後三時から猛烈な稽古を行ふこととした。寒稽古期間中を利用して熊中及川中道場に稽古に行く。一月二十六日、拾餘名の部員は熊谷中學に遠征して稽古し、廿七日は熊谷の疲勞も抜けやらぬに川越中學に稽古に行つた。この朝は前夜來ふりさうだつた。空模様も遂に雪となり、紛々として落下し寒風膚を刺す中を聲高らかに談笑しつゝ、歩だ劍士はさこそと思はれて頼もしかつた。長村先生の射止めた寒雀はやがて川越で開いた吾等のコンパの食稽に供へられた。歡を盡すこと數時心恍惚として夜晩く舍に戻つた。

二月一日には寒稽古納會式あり。

二月三日 東京帝國大學劍道大會には次の諸君が出場し全部優勝して、大いに我部の氣焔をあげた川内忠次、田中達次郎、大庭忠夫、中屋重敏、

館野覺次、

同じ日東洋協會劍道大會に出場した善波周、尾崎洋三神智全の三名も共に勝利を得國學院大會に出場した者。平井孝雄、松崎健吉、新國康彦、關口銳之助の諸君も幸に良成績を収めて我部の勢は益々盛になつて來た。

東北武者修業記

二月九日には田島二郎氏來浦され色々部のことを懇談した、東北武者修業今まで只管部内の充實を計つてゐた我が部は兼ねて計畫してゐた東北武者修行を企て行ふことになつたのである。嗚呼痛快なるこの壯圖劍道部創立以來のこの勇舉、今にして尙その雄々しさを讚美したのである。

三月十一日 東北武者修業の第一日は福島に向ふべく、長村部長、龜山師範、田島先生同伴善波、川内田中、平井、熊谷、松崎、館野、尾崎、土師、大瀧寫真係、三神監督等十四名の一行は江見教授須之部教授その他幾多の學友の見送の裡に午前六時四十分浦和驛を出發した。一行は車中高唱雜談の中に福島驛に午後四時到着した。そこで福島武德殿に於て高

商の部員、巡查講習所生地方劍士等五十餘名を敵として、最初の火蓋は切つて落された。初陣の若人の血は躍り戰の第一日はかくて終つて福島に一泊、此處の知事及武德會支部から名産梨を送られた。

明ければ十二日 早朝一行は昨日の敵の見送りを受けて雄々しく福島を後に米澤に向つた。米澤に近くに従つて白雪黒土を覆つて、米澤市一帶は萬目總て白銀の錦を以て飾られてゐた。午前中は白雪をふみ何回となく路上で轉廻しつゝ上杉謙信の社に詣でた。米澤で特に私達の目を引いたのは未だうら若い婦人までが脚に股引様のものをはき、頭に頭巾とも云はれず、笠とも付かぬものを被つて路を歩つてゐる風俗だつた。これをたづつけと云ふのださうな、女學生も皆この様子をしてみゐる。午後一時から三時頃まで米澤警察道場で中學師範及び地方劍士四十名と稽古し、午後四時五十分の列車で山形に向つた。

山又山進むにつれて奇は益々奇にして險は愈々險。山形着は午後六時十分であつた。山形高校生の出迎へを受け、共に飲み共に食つて大いに氣焔を吐さつゝ愉快な歡迎會を開いて貰つた。

三月十三日 山高道場で山高生と戦ひ、意氣と意氣

との戦ひは演じられた。驚いたことは米澤の地は白雪に覆はれてゐたのにこの地には雪の一片さへも見ることが出来なかつたことである。名にし負ふモンペイ姿の通つて行くのは至つて少なかつた。名残深い山形を後に見つゝ山形發午後二時二十四分の汽車で秋田驛に午後九時一二分着、直に驛前の關根旅館に投宿した。

三月十四日秋田鑛山専門學校の招きに應じて粉雪散落寒風疾驅の中を部員一同は元氣でマントに身を包んで旅館を出かけた。途中少さき一雜菓店で飴等を食つて大笑したこともあつた。同學校では各教室を案内されて標本や雜種の機械等を參觀し、鑛物の説明をきゝ大いに得るところがあつた。午後一時から秋田武德殿で鑛專、中學、敎習所生等八十名と激しく稽古した。數日來手や足に負傷してゐたにも係らず、常に敵を道場の半以上前方に壓迫してゐたのも雄々しかつた。午後四時の列車で秋田發雪は益々深く午後八時四三分弘前着。元氣のよい弘高生に迎へられて暗い道を學校へと足を運んだ。途中晩食を食ふべく或るカフェーに寄つた。此處でメラスといふ語を覺える。メラスとは十七八の美しき女を呼ぶ方

言であるといふ。此の地は地上二三尺も雪に覆はれ道は雪が固められて石の如くなつて、雪の國といふ感じがしみるゝとした。弘高ホールに宿を借りた。三月十五日早朝起き出でて見れば雪は窓邊近くまで高く積り軒端近くには經三四寸もあるやうな大水柱が數條となく下つて居つた。平井君などは甘さうに氷柱をかぢつて居つた。弘高道場で午前午後二回稽古をした。午前中は弘高の生徒と血戰した。弘高生諸君は體格も元氣も、他に勝れた所があつた。午後には弘高を辭し、後ステイションで互に萬歳を連呼しつゝ吾等に乗せた夜汽車は煙を後に残しつゝ大鰐温泉に疾走した。晩は連日の疲勞を癒すべく温泉に浸りて身心の愉樂をむさぼつた。

三月十六日 大鰐驛を正午に出發し午後二時七分青森驛に着く。街路は雪を以て固められ二三尺も高められ子供等は戸口に降る斜面で雪滑をして居つた。五六才の小さい子供が巧みにすべつて行くのには驚いた。路の兩側には名産林檎を賣る店が多い。青森武德殿に於て五六拾名の劍士と可成盛んな稽古をした。思へば是は本州の最北端に於ける戰であつた。一風呂浴びて未だ盛岡行列車には間があつたので部

員は數人宛連れ立つて夜の町電燈の光に見事に描き出された雪の道を首をマントの中に引つ込めて散歩した。刻々迫る寒氣に堪へ兼ねて一人歸り二人歸りやがて停車場のストロブの廻りは吾等一行に依つて取圍まれ談笑に時を移し午後十一時五〇分盛岡に向つて南下した。まどろむこと少時と思つたのに早や三月十七日盛岡驛頭の人となつた。時に午前六時三十一分。寒氣膚を刺し身を動かさずには一時も過すことは出来ず剥へ空腹に責められ、驛前なる陸奥館に行つて、空腹を満し、午前中此處に眠つた。午後盛岡武德殿で稽古をしたが、高農生徒は卒業式で出場し得なかつたので、少數の中學生と地方有志のものだけで甚だ物足りない感があつた。こゝで特に奇怪に感じたのは降る雪がウドン粉のやうに踏みつけた履物につかなかつたことである。この雪を食ふと腹痛を起すといふ話である。

盛岡發午後四時二〇分の列車にて仙臺着午後九時十五分。直ちに驛前旅館に宿した。如何した手違ひか二高では吾等のこの企に對して何等の通知に接しなかつたとかで停車場には一人の出迎へ者も來なかつた。

三月十八日 善波、河内、館野の三名早朝二高に赴き、吾等の企圖を話したところが大いに驚ろいて、かゝる企があるとは露程も知らず、若しこれについて通知があつたならば喜んでお迎へしましたのにと云つて居つた。吾等も吾等の手落ちであつたことを述べ取敢へず、午後二高道場で稽古をお願いするのとに定め一先づ旅館に歸つた。午後一同二高道場で二高生、大學生等と共に愉快に稽古をした。是を最後として我等の武者修業も終りを告げることゝなつた。思へばこの始めての壯舉がかくも成功裡に行ふことが出来たのは吾等の等しく喜びとせねばならぬ所である。一行は重荷を降した心地して、今日までの懸命と疲勞とを浴場に洗ひ流し、後バウリスタで彼我共に胸襟を打ちひらいて快談した。二高劍道部長倉先生の太痛飲を見て心私に驚いた同夜彼等の見送りを受けつゝ一行は鹽釜に向つた。

九時過ぎ鹽釜ホテルに宿る。解散コンパを開いて、底抜け騒ぎをして番頭を面食らはせた。

三月十九日 一行夫々勝手な假裝をして寫眞を取る川内の旅館番頭平井の支那そば屋、善波の宣敎師、田中の氣取屋、松村のドラ息子、熊谷の生娘等頗る

振つたものがあつた。塩釜神社参拜の後帆船一艘に乗り松島灣を松島に向つた。船中の食晝は又格別の味であつた。天恵の美蓋し壯麗の語を發せしむるものがある。松影淡き遠き海上にかももの且つは飛び且つは水に浸れるのは宛然白波の騒いでゐるやうであつた。進むに従つて天恵益々豊かに吾人をして批判を下すべき餘地ならしめた。

あゝ松島や松島やと叫びしめたのは尤である。やがて松島についた。お寺詣りの後休憩所で夕食を食つた。その時の御馳走は有名なカキフライで皆舌鼓みを打つて食べた。

松島驛で平井君の切符置き忘れで驛長の狼狽の姿今でも眼前に現れて来る。午後九時頃松島を發して歸浦の途につく、醒めては眠り、眠つては醒めつゝある程に友が後一時間で浦和に着々と云ふ聲に徐々に下車の準備をした。

浦和驛着は二十日午前七時三十分であつた。驛頭にて長村先生小山理事外多數の人の出迎を受け驛前で萬歳を連呼して解散した。

丁度受験生が澤山下車して吾等一行を奇異の眼で眺めてゐた。かくて吾等一行は元氣に再び浦和の地を

踏んだ、御同道下さつた田島先生に深く御禮申し上げて止まぬ。

開校第三年を迎へて入學式後入部歡誘し、新部員二十四名を得た。四月十二日の新入生歡迎席上では各内容の報告があり吾が部では川内君が出て挨拶をした。

四月十三日、埼玉縣武德會支部主催の剣道大會に部員出場。善波周、川内忠次、大庭忠夫、館野覺治、熊谷忠三郎、關口銳之助の諸君は全部勝ち、土師、堀兩名は惜しくも敗れた。

次いで四月十五日には一高剣道部關東武者修業の一行が其の最終日として來校した。一行十一名共に寮ホールに伴ひ愉快に談笑した。

翌日中學校師範學校の劍士二十餘名、田島先生引率の劍士數名吾劍道部員全部は午後吾が道場に於て一高武者修業者と共に稽古をした。一高の師範大島先生も來られた。稽古が済んでから雨中を冒して角中に至り、懇親會を行つた。數時間を互に談じ互に飲食しつゝ愉快に過し、十時三四分の列車で歸京する爲に浦和驛に一高の人達を萬歳裡に見送つた。

五月 新部員の歡迎を兼ねて一年生對類試合を行ふ

各類五名宛の選手を出しリーグ戦を行ふ、試合の結果左の如し。

第一組(先鋒)

文 甲	文 乙	文 丙	理 甲	理 乙
小山貞雄	小磯省吾	柴田正治	東郷 豊	土師喜平
五本	五本	零本	五本	八本

第二組

黒木典雄	芦澤直治	岩崎 晶	原田 潔	加藤泰雄
五本	四本	四本	二本	八本

第三組

淺子 英	秋葉三左工門	星野幸雄	大森英義	早川 優
七本	八本	二本	三本	三本

第四組

藤枝泉介	村田泰雄	岸美智夫	下河邊 光	秋山捷二
六本	零本	六本	八本	一本

第五組(大將)

發智勝太郎	城戸崎 久	土岐安一	織田澤良一	奥井辰夫
四本	零本	八本	六本	五本

計文甲二十七本文乙二十七本文丙二十本 理甲二十四本 理乙二十五本
優勝類文甲 メタルを授與す

個人全勝者 文乙秋葉三左工門 文丙土岐安一 理甲下河邊光
理乙加藤泰雄 理乙土師喜平

竹刀一本宛を授與した。

五月三十一日 戸山學校劍道大會に左の二名を派遣し、何れも見事に敵を制して歸つて來た。

善 波 周 川 内 忠 次

六月十日には田中達次郎君補充兵として入營するため、暫らくの別れを惜むべく劍道部コンバを開いた
六月十五日 明治大學に左の者を派遣、力戦したが遂に敗北す。

館野覺治 三神智全 土師政治

六月十九日には各部對抗試合に關する臨時豫算會あり。翌日、選手推戴式があつた。劍道部選手は次の如し。善波周、川内忠次、大庭忠夫、平井孝雄、館野覺治、松崎健吉、三神智全、尾崎 洋、熊谷忠三郎、土師政治、淺子英、關口銳之助、監督設樂安男各部代表の感激に充ちた宣誓の言葉を聞き、一種異様な感にうたれた。更に各部主將と應援團長との凱旋を深く誓つた悲壯なる握手は正視するに忍びざるものがあつた。

六月二十二日 法政大學第三回劍道大會に左の者出場し見事敵を斃した。

川内忠次 松崎健吉 館野覺治 尾崎洋

京都遠征記

眞夏の暑さ烈しいのにもめげず、試験中もいとはず、京都遠征に供ふべく、我が剣道部は幾週間となく練習に練習を重ねた。我が校のために、我が部のためにと、かうした緊張した厳肅な日が幾日となく過ぎて行つた。試験が終わると全部寄宿に陣取つて、毎日烈しい練習に日を送つて居た。

時は来たのである。戦の日は近づいたのである。七月十五日朝まだき、雄々しくも我が選手は京都遠征の首途に登つたのである。白地に紺の袴、竹刀袋を肩にした選手の姿は、實に雄々しくもまた壯なものであつた。

堀應援團長を始め、その他の盛な見送りを受けて浦和を後にした。八時十五分發の特急に乗つて愈々東京驛を出發することになつた。本吉理事の感激に満ちた激勵の辭、應援歌の合唱は東京驛頭をふるはせて悲壯な感じに打たれたのである。

京都に着くと、小山理事中屋君それから京都帝大の上坂君等に迎へられて、雨の中を玉垣館に落ちついた。以下小山理事の吾が部によせられた一文を以

て京都遠征記に代へよう。

私の常に敬愛する 我剣道部諸兄。

私は謹で筆を取りました。私は嚴肅な氣持であります。

剣道部、私は斯う口誦むと自ら森とした方にうたれます。そして緊張して参ります。隆々たる勢を見せたあの我剣道部。その眞直に突進して来た此の三年間。鍛えに鍛え、錬りに錬つた、己が力を赤裸に示てぶつかつた、京都遠征、その壯舉に私も加へさせて戴いたのでした。

勝て歸れの歡呼をあげせられつゝ關東武士的精神を代表し、屹度勝つて歸ると出陣した諸兄の雄々しい決心、私は唯無言の涙を飲んで眺むるのみでした。京都での宿泊、諸兄は上坂さんの義あり熱あるあの力強い應援を御忘れではないでせう。然るに噫、たゞ涙と書いた切りで後の動けなかつたあの時の氣持私達は負けたのでした。口惜しくも破れたのでした。私は今あの思出多い記録を辿つてみます。

七月十八日

(晴)

此の日早朝より暑し。いよ／＼晴舞臺に幾年の技を

試みるの日は来りぬ。敵は高知高校也。四國の若輩何するものぞ。我に關東武士の血は流れたり。高くリファインされたる浦高スピリット、美しく大いに壯なる武藏野に培はれし吾等が熱と力、錬は足りぬ何のことかあらんや。土佐犬猛しとするか、強しと號するか。何とするものぞ、我に正々堂々の道あり我に偉大なる精神あり、力あり。

六時半迄に設樂行きてオーダーを交換す。サイドは南側也。

七時十分前に道場につく。時尙は早うして人影疏なり。我湯、砂糖、塩、藥等を持つ……七時過ぎぬ。高知漸く至る。吾人は彼等の顔を一種憐然の情を以て見かへりぬ。

彼等は二年生を有するのみ、悲しくも破れんとするか、否か、オーダー試合順次の如し。



(中略) 一本々々勝負の大接戦となりぬ。而して中尾コテを取りて萬事休す。高知側にかすがなる歡聲洩る我忘然自失す。我遂に敗者たり了んぬ。いかにせんか噫されど凡ては休みぬ。(略)敗者のみの味ふべき辛き酒を黙々として飲みほしぬ。(中略)一人として口を利くものなし。下宿につくや、身支度も取らず道具も置かずかつげるまゝ二階に上りぬ我後より行きし時は己に一言の聞ゆるなく、夏のはさす八疊に竹刀袋を負へるまゝ、睚して泣き居りき。

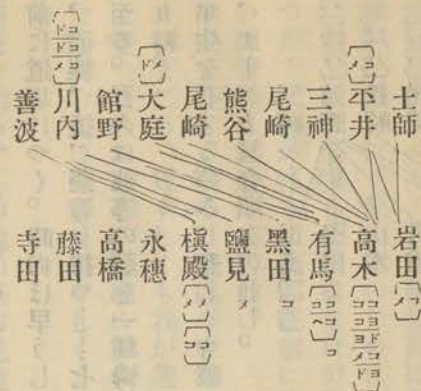
七月二十一日

(晴)

いよ／＼最後の日が来た。今日が最後かと思ふと妙に淋しい氣がした。……(中略)淺子が試合が近づいて来た事を知らせて来た。……(略)試合は始まつたもうこちらは「あたつて碎ける」主義である。向ふは是非共勝つて優勝戦に出たいと思つてゐるのだ。うんとなぐつてなぐりつけて、突き殺せと云つてかゝつて行くのだ、面白いことになつて呉れと願

つてゐた。

次の通りの経過である



……(中略)二階へ行つて見ると長村さんも来てゐた。もうブランドーを抜いて皆一杯づつやつてゐた。……誰とはなしに口に出る試合の言葉を強く打消しつゝのんでゐた。

大庭が泣き始めた。善波がすまないと云つて泣き始めた。平井が泣き始めた。皆が泣き始めた。善波がグイ／＼やるそして俺もす／＼めた。善波は益々のむ。ビールは追加せられた。(略) おゝ何んと云ふ光景であらう。皆泣きたはれてゐるのだ。今朝

受けつばなしにした。(以下略)

斯う讀んで参りますと自然と涙がにじみ出ます。吾々は京都で敗けたのです。全校の生徒の期待に副ひ得ず。長村、龜山先生の苦心に報い得ず。上坂さんに報恩しえず。夥多の負擔を背負はされて歸つて來たのでした。

併し、畏敬する諸兄。

私は諸兄のその堅い大決心を知つてゐます。強い強い報復の力を信じます。二學期に入りまして諸兄の猛練習を陰乍ら見て喜んでゐました。もう一息ですもう一段のガンバリです。凡ての機會報復、名譽回復、報恩、凡ての機會がかゝつてこの冬の東大試合にかかつてゐます。聖護院西町のあの下宿の二階で涙と共に誓つた、「今度こそは」と云ふことを深く深く心に刻み込んでうん／＼頑張つて下さい。悠々とその機會が近づいて來ます。ほんとうに御身を大切に、まず／＼技を練つて下さい。陰ながら一心に榮ある勝利を祈つてゐます。私をも憐んで下さい。頑張つて下さい。頑張つて下さい。祖師來らは祖師までも。必ず／＼勝つて下さい。私はもう勝つ事のみを考へてゐます。敢へて筆を取つた私の心

訪れて呉れた、中西(文二甲)君も交つて涙をぬぐつてゐる。長村さんがもう何も考へまいと云つた。龜山さんも泣くな泣くなと慰め、その代り此の冬こそはしつかりやつて呉れと云はれた。

善波は俺のそばで俺の手を握つて、今年待つて呉れと云つて泣いた。上坂さんが歸つて來られて、すぐ仲間に入つて來られた。吾々は又涙が新になる。噫此の人、幾何の恩愛をうけたことだらう。

吾々は先輩と云ふものを持たなかつたから、今迄こんな親切をうけた覚えがない、世に云ふ先輩と云ふものは、こんな力強いものなのだらう。それにしても何んと云ふ御世話のうけたことだらう。吾々は大風一過後に唯心のドン底から來る身を切るやうな淋しさの中に此の人に對する大きな重い恩愛の負擔を感ずるのみだ。

あゝ優勝旗。それをとつて此の下宿へ引き上げて下さいと上坂さんはいつも云つてゐられた。夢だ／＼唯優勝旗をかつぎ込むことのみが君に對する御恩返しだと思つてゐたのに、何んと云ふことだらう。

二戰二敗スコンクではないか。淋しいと云はうか。悲しいと云はうか。吾々は返すことの出來ぬ御恩を

を御知り下さい。不一。

戰一度過ぎてうたゝ悲風慘たり。敗軍の將は兵を語らず。私達は來るべき十二月の東大試合に必勝の意氣を以て當らんとするのみである。

第二學期以後

八月二十五日から、野球部對抗試合の應援を兼ねて、寄宿寮に合宿して練習を積んだ。

十月十二日、我劍道部主催の第二回關東中等學校劍道大會は開かれた。集るもの二十五校、光榮ある優勝旗を目標に、若人の血は燃えて、午後九時龍壤虎撃の戰は開始されたのである。戰跡は次の如くである。

第一回戰

- 不動岡中學——千葉中學(棄權)
- 早稻田實業——杉戸農業
- 足利工業——青山師範
- 下野中學——青山學院中學部
- 埼玉蠶業——熊谷農業
- 粕壁中學——豐島師範
- 目白中學——浦和中學
- 埼玉師範——日本中學

高崎商業 ○宇都宮中學
 ○川越中學 開成中學
 栃木中學(棄權) ○赤坂中學
 ○埼玉工業 燒星中學
 熊谷中學 ○不動岡中學
 千葉中學(棄權) ○早稻田實業
 杉戸農 ○足利工業
 ○青山師範 下野中學
 ○青山學院中學 埼玉蠶業
 熊谷農業 ○粕壁中學
 ○豐島師範 目白中學
 ○浦和中學 埼玉師範
 日本中學 ○高崎商業
 宇都宮中學 ○川越中學
 ○大成中學 栃木中學(棄權)
 ○赤坂中學 埼玉工業
 燒星中學 ○熊谷中學
 かくして準優勝校即ち二戰二勝校は次の七校になつた。

青山師範
 豐島師範
 浦和中學
 川越中學
 赤坂中學
 抽籤の結果次の如き組合せて、優勝旗の爭奪戦は愈々熱を加へて來た。

一、不動岡中學—青山師範
 二、早稻田實業—川越中學
 三、浦和中學—赤坂中學
 不戰勝校 豐島師範

第二回戰
 第一回 不動岡中學—青山師範
 ○川島 山本○○
 小久保 鈴木○○
 金子 小林○○
 (副)島村 上吉原○○
 (大)網野 長沼○○

第二回 ○早稻田實業—川越中學

- 須藤 田口
- 大澤 菅原○
- 大森 大塚○○
- (副)澁谷 山崎○
- (大)田中 北村○

第三回 ○浦和中學—赤坂中學

- 小島 吉田
- 堀杉 阿加井○
- 中村 伊藤
- (副)澁谷 永澤○○
- (大)松川 渡邊○○

第二回戰で残つたのは次の四校である。

青山師範、早稻田實業、浦和中學、豐島師範
 昨年の優勝校川越中學が此の戰に敗れたのは惜しかつた。然し實力は遂に如何とも仕難かつたのである。戦は益々白熱化した。苦人の血はいやが上に燃えた。緊張し切つた道場の空氣に選手の責任は益々重大になつて來たのである。噫果して優勝旗は何處に落ち行くことであらう。午後四時三十分準決勝戦の火蓋は切られた。その結果は次の如し。

準決勝戰

第一回 ○豐島師範—浦和中學

- 木内 小島○○
- 菊地 堀杉
- 田上 中村○○
- 舟久 澁谷
- (大)高山 (大)松川

第二回 ○早稻田實業—青山師範

- 須藤 山本○○
- 大澤 鈴木○○
- 大森 小林
- 澁谷 上吉原○
- (大)田中 (大)永沼

浦和中學意氣を以てよく戰つたが豐島師範に敗れて青山師範亦遂に早稻田實業のために惜しくも破れて優勝戦は豐島師範對早稻田實業となつた。何れも關東にその名聞えた名選手のみ、豐島勝つか、早實勝つか、何れとも決し難く觀衆も選手も嚴肅な氣に充された。

決勝戰

早稻田實業—豐島師範

○須藤——木内○○

○大澤——菊地

大森——田上○○

○メ澁谷——舟久

○(大)田中——(大)高山○○

一勝一敗、戦は緊張の極度に達し、大將同志の勝負となつたのである。両雄は互に火花を散らした。早實の田中君先づ小手より体をはかして見事に胴を取り、次で豊島の高山君小手を入れて、一本々々の勝負となつた。接戦又接戦、両軍危機に迫つた。此の時早く、高山君の入れた小手は遂に豊島師範の勝を物語つたのである。

かくして光榮ある優勝旗は豊島師範に送られ盛會裡に關東中等學校第二回剣道大會の幕は閉ぢられたのである。

第三回 ○早田實業——田中 中學

第一回 ○豊島師範——新井 中學

第二回 ○豊島師範——新井 中學

柔道部誌

委員 鈴木 勲

大田實業 六

第三回 田中 中學

委員 青田 太

田中 中學

委員 青田 太

田中 中學

委員 青田 太

田中 中學

田中 中學

委員 青田 太

田中 中學

田中 中學

委員 青田 太

田中 中學

田中 中學

委員 青田 太

田中 中學

田中 中學

委員 青田 太

田中 中學

田中 中學

柔道部

第一回部長 下田先生

委員 吉田恒太郎 堀井英一

第二回部長 服部先生

委員 堀井英一 芹澤信一

第三回部長 服部先生

委員 鈴木俊 大澤彦六

柔道部誌

大正十一年四月、本校の開校と共に學友會成り、我が部亦その一部として設置せられ、下田卯市氏（現廣島高等學校教授）を部長に推戴し、吉田恒太郎、堀井英一の二人、委員としてその事務にあたる然れども當時未だ道場なく、委員も何等腕を振ふべき事もなくその年を終れり。

同年十二月、委員の改選あり、堀井英一、芹澤信一の二人選舉せられ直ちに大正十二年豫算編成に着手す。然るに同會議に於て過大なる削減を蒙り、事業に一頓挫を來せるも、新學期よりの活動を約して大正十一年を送る。

新學年を迎へたる吾等は未だ道場の完成せざるに依り浦和中學道場に於て寒稽古を行ひ、部員悉く参加し猛烈なる練習を開始すること三週間に至る。

下田教授都合により部長を拜辭せらる。此に於て新に服部實教授就任せられ大に吾等を鞭撻さる。

本校柔道部師範として工藤一三先生任命せられ、專意指導の任に當らる。

十月十七日道場落成し調神社宮司を聘し盛大なる道

場開を催し後茶話會に移る。

第一回關東大會——縣下大會（第一回）

十月二十一日關東柔道大會開催の豫定なりしも未曾有の震災により縣下中等學校大會に縮するのやむなきに止れり。参加校名左の如し。

浦和中學

川越中學

熊谷中學

粕壁中學

埼玉師範

熊谷農學校

堀井委員の開會の辭、服部部長の挨拶に次いで仕合開始されたり、優勝校左の如し。

粕壁中學

芹澤委員の閉會の辭を以て第一回の大會を了る。

第二回早大派遣

十一月十六日早稻田大學柔道大會に福井達雄、松原順三兩君を派遣し優勝す。

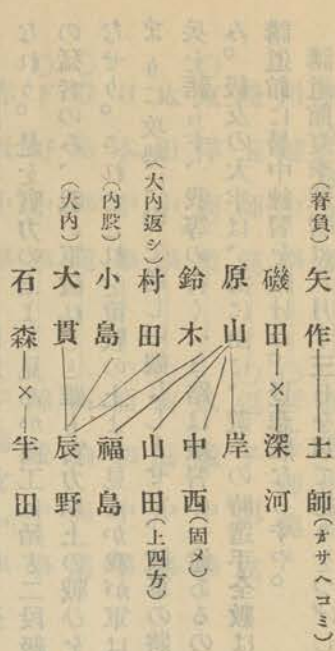
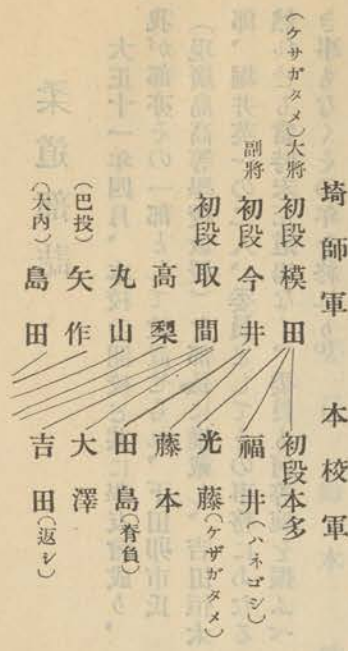
十一月中旬秋季部員大會を催し後茶話會を開き部員一同記念撮影をなす。

大正十二年十二月委員の改選ありて、鈴木俊、大澤

彦六その任にあたる。十二月下旬、大正十三年度豫算會議あり、我が部の豫算額僅かに二百圓餘。事業の大なるに比し、収入の少きを嘆ず。

十二月二十四日、舊委員慰勞會あり。あくれた大正十三年、吾人の前途洋々たるあり。我が部第二回の寒稽古を月上旬より二月下旬迄三週間にわたりて行ふ、稽古は午前六時よりなりしが、部員出席率甚だ少く、工藤師範自ら部員を起して廻はるの狀態なりき。皆勤者僅かに二十名。現時の狀態に比するに隔世の感あり。

第三回本校對崎師 寒稽古終るや、二月上旬、本校對崎玉師範との仕合ひを行ふ。成績次の如し。

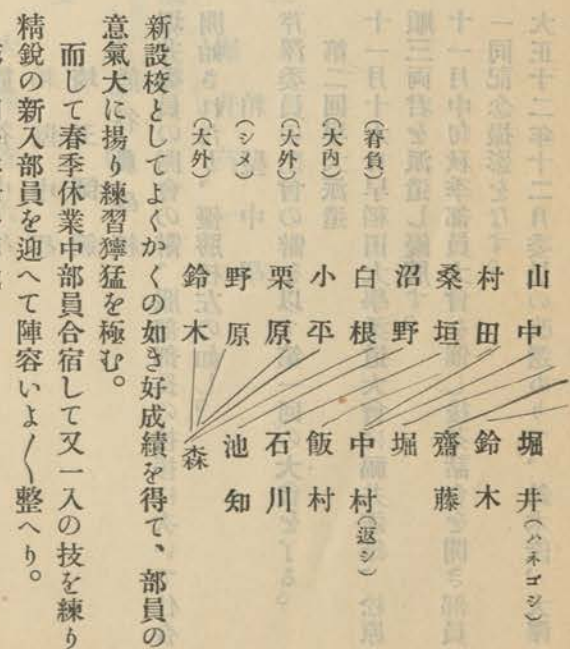


第五回 本校對松本高校戦

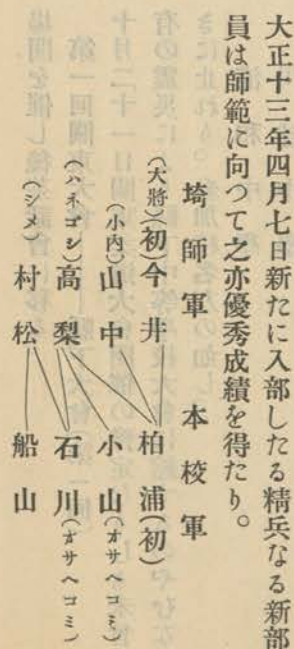
大正十三年四月下旬松本高校よりの申込みにより六月上旬を期して両校最初の仕合をなさん事を決す。部員よく其の旨を体し連日猛烈なる練習をつゞけ機益々熟し道場に一種云ふべからざる緊張の氣分溢たり。然るに五月中旬に至り突然先方よりの中止の依頼によりやむなく仕合中絶の悲運に會ふに至れりされど緊張の極度に達したる選手はこの「不戦一勝」を以て満足せず、更に獍猛の評ある弘前高校に對して挑戦せん事を議決したり。

第五回 本校對弘前高校戦

六月十四日弘前高校委員來校し本校鈴木委員これが應援の重任に當り、當日午前九時より會議室に於て



第四回一年對崎師戦



福井、石川、光藤の三選手立會の上兩校代表の討議に入る。弘前高校よりの重要條件左の如し。

- 一、仕合場所は浦高道場とする事
- 一、仕合は毎年連續して之を行ふ事
- 一、場所は弘高校道場とする事

之に對し鈴木委員の提出したる條件は

一、明年より帝大主催の大會に出場するを以て仕合は本年一回限りとする事

時たま、東北帝大よりの東北大會の報知に接し同大會に於て親しく仕合せん事を約して中止散會せり

第六回 東北遠征

豫算の都合上學友會よりの應援を失ひたるにも拘らず、自費を以て獨力東北帝國大學主催關東北柔道大會に参加することに決せり。その意氣や實に壯と云ふべし。かくして我が部選手は一學期の試験をも捨て、或は本校道場に、或は小石川講道館道場に、連日猛練習を續け、七月十八日夜、九時四十五分の列車にて仙臺に向け、浦和を出發せり。二十日帝大主催の選手歡迎會あり、我が校は翌二十一日午後仙臺高等工業と戦ふこと、なれり。時に我が部の選手メンバー次の如し

大將 初段 福井 達雄
 副將 初段 光藤 富士男
 初役 初段 柏浦 徳三
 初段 鈴木 俊三
 初段 田島 亮治
 小山 貞雄
 宮崎 繁雄
 石川 龍雄
 初段 松原 順三
 市川 幸得

されど、不幸我が軍は遂に破れぬ。市川、松原は腕を殆ど折られしが屈せず、福井主將の如き、二十五分の奮闘にかゝはらず、敵將二名を残して引き分となれり。是を實力の上より見んか商工は殆ど二段級の猛者のみ、我が軍破れしと雖も實力以上の戦ひをなせり。されどこれを策戦の上より見んか我が軍はまりに攻勢に出で過しの観なしとせず。敗軍の將兵を語らず、我等の行くべき路は練習の一途あるのみ。級友の大半は、海に由に、遊ぶの時選手全數は講道館に暑中練習を続けぬ。豈悲壯ならずや。

講道館夏季練習は八月十三日を以て終りをづけし

が選手の進境著る、しく、最終試合に於て柏浦君の如きは初段三名を投げるの功績をあげたり。

八月二十五日より一週間本校對靜岡高校野球戦の應援をかねて、本校道場に於て合宿を行ふ。

第七回關東中等學校柔道大會

九月二十八日 我柔道部主催のもとに第二回關東中等學校柔道大會を開く。快晴の天と曠潤なる武蔵野に吸はるゝが如き二十三校の勇士、胸を躍らして集りぬ。優勝旗返還式後、戦の幕はおとされ名譽の優勝旗に向つて幾多の若人は懸命の努力を注げり。

因に前回の優勝校は柏壁中學校にして、大會参加校名を挙げれば左の如し

返子開成中學 高崎中學 前橋中學 豊山中中學 豊島師範 熊谷中學 赤坂中學 高輪商業 中野中學 宇都宮中學 東洋商業 太田中學 太成中學 群馬師範 日本中學 郁文館中學 荏原中學 錦城中學 埼玉師範 浦和中學 柏壁中學 川越中學

その戦跡は次のやうである。

第一回戦

豊山中中學 ○荏原中學

郁文館中學 ○高崎中學
 川越中學 ○群馬師範
 埼玉師範 ○返子開成
 東洋商業 成城中學
 太田中學 ○前橋中學
 日本中學 ○浦和中學
 豊島師範 高輪商業
 下野中學 錦城中學
 赤坂中學 ○宇都宮中學
 柏壁中學 ○熊谷中學
 不戦一勝校 大成中學校

第二回戦

○返子開成 大成中學
 ○豊島師範 宇都宮中學
 群馬師範 ○前橋中學
 東洋商業 ○浦和中學
 不戦一勝校 高崎中學 熊谷中學
 下野中學 荏原中學
 第三回戦
 ○高崎中學 熊谷中學
 ○下野中學 豊島師範

○前橋中學 返子開成
 ○荏原中學 浦和中學

高崎中學對熊谷中學の試合は實に接戦なりき。初め兩校同點を得て、代表者戦に入り高崎中學の宮澤君と熊谷中學の植竹君兩虎戦ふこと十分に於て尙決せず、引分けとなりぬ。更に第二次の代表者戦に入るこになり、高崎中學の神澤君と熊谷中學の越智君との戦は演ぜられぬ。越智君絞めて成功せんとせる刹那神澤巧みに大内刈を以て越智を投げ、遂に高崎中學の勝となりぬ。

準決勝校(六〇卅一分)

○豊島師範 前橋中學
 佐伯 矢島
 ○三上 小島
 鈴木 × 大隅
 ○坂東 荻野
 秋田 加藤
 ○村山下 村藤
 篠崎 × 加藤
 荏原中學 ○高崎中學
 ○春日 山田

當日浦高道場に於て猛練習をなし完全に疲れたるにも拘らず川口町迄出かけてよく奮戦し相當の成績を得たるは全く日頃練習の結果の現れたるものと云ふべきなり。特に石川、小山、宮崎三選手の如きは近來の進歩物倅く部員一同より驚きの眼を以てみられしが此の結果によつて益々其の實力の確實さを確證せり。

第十回 對商大豫科戰

十三年十月一日浦高柔道部より商大豫科柔道部に對して仕合を申込む、數回促してやうやく返事を得。曰く、「御申越しの十九日には御手合はせ出來兼ね候間二十五日か十一月一日かの午後より願はしく候敬具」と我部必勝の計畫を立て仕合練習を開始す。然るに突前商大より延期の依頼により浦高柔道部亦之を容認せり。されど仕合前日の中止方依頼電報に選手一同甚だ不快の感を抱けり。

（以下は右ページの下部にある、左ページに印刷されたと思われる文章の複製と思われる）

弓道部誌

大正十三年四月
（以下は左ページの下部にある、右ページに印刷されたと思われる文章の複製と思われる）

弓道部 第一回部長 上村先生

委員 小橋茂雄 大澤彦六

第二回部長 桑原先生

委員 小橋茂雄 大澤彦六

第三回部長 桑原先生

委員 藤原裔生 平田孝次

弓道部誌

大正十一年年度

大正十一年五月の頃。學友學第一回豫算會が開かれた。然し弓道部は何の恩澤にもあづかれなかつた。金がなければ何の仕事も出来ぬ己むを得ず僅か卅六人の部員より部費を徴收し十八圓を得た。この十八圓を吾部最初の貴い建設費なのである。これにより土壘を作り、矢的、弦を買つたのだ。そして弓だけは庶務課の坂本氏の御好意により女子師範より五張借りる事となつた。強弱取まてあつて中には初步の僕等には随分手強いものあつた。その随分小使部屋の裏は未だ草のみであつた。少しも手が入れられずむかしのまゝの草なのだ。何處に行つても弓の稽古の出来さうな處はない。兎に角吾々は皆始めての者ばかりだ。尤も二三経験あるものもないではなかつたが、そろつて巻藁から始めなければならいと、これも女子師範から借りて來た巻藁に向つた。場所は小使部屋の裏建築の際に用ひたと思はれる低い臺に乗せてやりだした。巻藁は勝手に動く。これではいけないと下へ空俵を敷く。矢だつて巻藁専用のが

あるわけではない。白い羽のついたのでやる。段々生意氣になつて巻藁から四五間はなれて内密になる。忽ち矢は外れて草の中へ突入皆に手傳つてもらつてその行方探索。こんな稽古をやつて居る中に漸やく土壘着手といふ事になつた。土壘、それは文字通り土壘だ。矢場とは違ふ。今の射的場の西側垣根に近く土を盛りあげたものに過ぎなかつた。砂は無論ない。高さ四尺、長さ六尺位。それは北方の運動場から射る様にした。その時分にも既に肋木はあつたのでよく肋木に弓や矢をたてかけて射たものだ。だが困る事には砂のない土壘に矢が中ると深くは入つて汜々みれになる事だつた。それを一々手拭で拭いて又射る。そうした原始的のやり方をして居つた。時には未熟の僕等は土壘を越し後方の草叢の中へ矢を飛ばしその行方を尋ね、ばならぬ事もあつた。その頃は今の矢場も雨天体操場も特別教室の邊も叢の中だ。晴天の日は面白いが雨の日、風の日は無縁出来ぬ。それも未だ我慢が出来るが最も遺憾な事は師範のゐない事だ。師範のゐない弓道部はまるで形をなしてゐない。唯原始時代の弓取にも較ぶべきだ。只的に向つて矢をはなち中てさへすれだよか

つた。それも中々當らぬ。土鼠討ちや萱の根はりの方が多い位。でもかうした時代の又と来る事のないのと思ふとたまらなし懐しい氣がする。

大正十一年度

この年始めて、弓道中が浦高内に在る事を認めらるゝに至つたのである。前年十二月の豫算會議に於て部費に百五拾五圓を配當された。それに浦和町より運動設備費として吾が校に寄附せられたうちから弓道々場建設費として四百二十圓の配當を受けた。これに力を得た自分等には創業期の基礎計畫に忙殺される日が續いた。その折偶々上村部長は獨逸に留學せらるゝ事となつた爲め部長を辭せられ同年四月迄は部長なしの状態であつた。然しその間山崎先生が道場の設計その他一切について御指導下された事は我等の大きいに感謝する所である。その後四月になつて桑原先生が部長になられてからは益々吾部の曙光は輝き初めた。それと期を同うして山崎先生の御幹旋で大宮在住の小山梧樓先生を師範に戴く事が出来たのはこれ又部の基礎を鞏固ならしめる所以である。道場も漸やく活氣が漲つて「何を愚圖／＼して

ゐる早く場道を作れ」と吾々を鞭撻してくれる熱心な部員もあつた。然しながら四百二十圓では間口三間奥行二間の貧弱なものしか出来ぬ。如何に小さくとも三間に三間位のを依りたいと云ふので色々工夫の結果僅か二百五十五圓の部費の中から百二十圓さいて五百四十四圓で遂に九坪の道場を建てる事となつた。大正十二年六月建築に着手し竣工したのは七月であつた。それでいよいよ道場で練習を始めたのはあの震災後の十月であつた。然し未だ矢場は出来てゐないので唯巻藁に向つて射型の稽古をするのみである。このときにも如何しても早く矢場を作らぬと云ふ非難の聲もあつた。然し狹窄射撃の射朶と同一場所となる筈の吾部の矢場は未だ作る事が出来なかつた。それでその年中を射形の習練にのみで終つた。

かくて弓道部基礎時代は過ぎた。あはたゞしくも過ぎた。

大正十三年度

十一月中旬委員の改選が行はれ藤原裔生平田孝次新委員に選ばれた。桑原部長は従前通りである。直ち

に十三年度豫算編成に着手し請求額八百六十三圓五十錢に對し役員會に於て種々折衝の結果二百九圓廿錢に縮少された。尙この豫算案中最も問題となつたのは矢場及び砂で此矢場の設計に關しては吾部の特に考慮したところであるが理事の査定額は僅に四十六圓にて或部の請求額たる七十八圓五十錢に復活するゝ迄は多大の努力を要したのである。それでもい

よ／＼建設に着手して見ると豫想外の事も出来て七十八圓餘では不足を來し十三年度經常費の中から補足して百十五圓を以て漸く矢場が出来上つた。而して矢場の砂に至つては全然豫算から削除せられたが幸に浦和町から武道部への寄附金の中八十七圓餘の分配を受けたのでその大部分を以て砂代となし十三年二月になつて、漸く矢場が出来上り道場の目鼻がついたのである。而もその少い豫算で漸くこれだけの設備をしたのであるからその設備は頗る不完全であることは言を俟たない所である。當時小山師範は毎週一回來校指導せられた。その日ですらも部員の出席するものは十名に満たなかつた。故に吾々は部の發展を將來に期し來るべき新學年を待つた。

期待せし新學年は來た。我部は茲に四十八名の新人

部員を得五月二日ホールに茶話會を催し「部員は必ず毎日練習する事」の中合せをなし漸く陣容を整へた。第一學期中小山師範は毎週火曜日に來校せらるゝ事になつた。

五月卅日、本學年度第一回例會を開催。この日小山師範外四名の地方弓道家出席され禮射を行はれ尋いで紅白試合を行つた。吾部に於ける此種最初の催であつて部員の得るところは鮮少ではなかつた。又茲に特筆すべきは吾部は六月以後學習院講師西牟田砥潔先生の指導を仰ぐ事になつたことである。同氏は毎週土曜に來校せられ爰に一段と心強さを感じるに至つた。

六月廿八日、第二回例會を開催す。西牟田、平松兩先生出張せらる。これを以て第一學期最後の例會とした。

同年九月以降、小山師範は毎週水曜、西牟田先生は土曜日に來校指導せらる。

九月二十四日例會を開く。これはさきに西牟田師範の御盡力によりて來る十一月時學習院試會を行ふに決定し、その練習として開催したものである。同月

來年度には東北、京都兩帝大主催弓道大會に出場しなければならぬ。黙々と進む我等の前途はかく次第に光を見出してゐる。

野
球
部
誌

野球部

誌
 現今是と稱定太きやとを得た。されど我部
 田原、開成中學より一室も統合して取れる行儀
 固なるものであつた。野城福岡とて、京都生保の
 第一流、下中、學校野城大體を二十日に入学。學費
 した。學費程に校校にして其の數程に學費はあ
 った。昭和學費は更に且野城の學費はざる野城に例し
 一新編元を設けた。太倉の勉學、整齊中學、福岡、同

野球部 第一回部長 山崎先生

委員 吉田信俊 岡田真吉

第二回部長 山崎先生

委員 岡田真吉 池知正見

第三回部長 山崎先生

委員 山中謙二 松井正雄

野球部誌

創業

大十一年四月二百の健兒を迎へて開校したる我浦和高等學校は直ちに、全生徒及職員を以て組織せられた學友會を設立し、十一の部門に分れた。されども新設とて幾何も資本なきを以て會員の一般投票によりて先づ四部門を選んで投票數の多數のものより漸時充實すべく決し、投票の結果庭球部陸上運動部文藝部野球部の四部より完成すべく決定され直ちに部員の募集を行ふことになつた。我野球部に於ても相當多數の部員を得た。部員決定後直ちに委員の選手に移つた。委員選舉の結果我部は文科甲類の吉田信俊君並びに文科丙類岡田真吉君の精銳を得た。両君共前者は早稻田中學選手とし又後者は、開成中學に於て技を磨かれたものである。既にして委員の確定を見たが練磨するに適當なるグラウンドは未だ出来なかつたためバツテング、ケーヂ其の他必要なる道具のみを求めて空地の一隅にネットを張り有志の練習を始めた。此の時のグラウンドの状態は甚だ難然たるものにして現今のそれを見ると其の慘悲

なるを思はしめる。今のダイヤモンド附近の沼地で丈よりも高い雜草が一面に叢生し當時今の此の入口の大きな松の木の下をホームとしてネットを張り興味本位の練習をした。先づ第一回の試合として東寮第一寮と二寮の階下組及二寮の二階と三寮組との試合行ひ三寮組の勝に歸した。之は第一回全寮茶話會の余興として舉行せるものであるが茶話會當日は雨天の爲め數日延期して舉行した。審判官として今の主將池知正見君及壘審として山崎先生を煩はす試合は相當愉快に行はれ勝敗の両組とも賞與を授與された。其後に文丙對他の類合併の試合を行ひたるも文丙軍の惜敗にて終る、之で第一學期を終る。夏期休業中に稍グラウンドの完成を見又浦和町の寄贈によりて現今見る固定大ネットを得た。されど我部は未だ他校と競ふ程の團結を見ず唯浦和中學を破つただけで、開成中學チームとも試合して敗れる程貧弱なるものであつた。野球場開きとして我部主催の第一回縣下中等學校野球大會を二十日に入つて舉行した。参加僅かに四校にして其の數甚だ貧弱ではあつたが相當盛會に終り且縣下の振はざる野球に對し一新記元を畫した。大會の結果熊谷中學優勝。因に

參加學校は熊谷中學川越中學浦和中學埼玉師範の四校である。之で大正十一年度に於ける我部の事業は打切りとした。十二月委員改選の結果文丙の岡田眞吉君留任し同じく文丙池知正見君新委員となる。

池知君は岡田君と同じく開成中學出にて陸上運動部委員であつた。豫算會の結果我部は五百有余圓を支給せられた。陸上運動部に於てもトラック完成の結果有望部員中に退部せられたるものが少くなつた。

大正十二年度の奮闘

我部は本年度より大活躍を開始すべくコーチャーとして元は早大名三壘手として外國にも其の名を讃えられたる石井順一氏を迎へ、四月五日より本校に於て春季合宿の練習を行つたが未だ我部の基礎固まらずして其の結果は良好でなかつた。されども石井氏の盡力の結果昨年度よりは見違へる程の進歩で其の練習の結果の試金石として第一高等學校と對戦することになつた。之より先新たに合格せる者より新入部員の募集を行ひ數名の應募者を得、就中渡邊廣文君松井正雄君を得たのは大なる收護であつた。此の二精銳を加へて四月下旬一高校庭にて戦ふ。されど武運拙くして我軍十六對〇にて大敗爲たもの、我軍

は此の戦にて學ぶべき多くを得た。メンバー如左。

佐田 藤井 内知 木田 邊
遊和 齋松 武池 加吉 渡
投捕 一二三 遊左 中右

此の戦後和田君は都合によつて退部され新たに渡邊君捕手として之より活躍された。同じく松井君も三壘手となる。放課後は殆んど毎日練習に費し又石井コーチャーも來られ益々伎倆熟達した。其後浦和中學を大敗せしめ神陵俱樂部及帝大選手を本校々庭に迎ひ撃つたが敵として余りに強く遺憾なく両戦共に惨敗に終る。目白中學其後來襲せるも五回戦四對〇にて軽くほふる。かく中學チームとは格段の伎倆を得る迄に至つた。對校野球戰の議あつても未だ我部に充分の自信なく且つ相手として相當の學校なく唯大阪高等學校に挑戦しても先方既に松江高校との先約ありし爲めに斷はられた。されば第一學期に七月十日試験終了と共に解散。されども秋季の活動に供ふるために八月二十日より房州北條の安房中學の校庭を借用し合宿練習を舉行すべく其の準備も略整つたが都合によつて中止した。されど幸か不幸か彼

の大震災災の來襲し北條の地も悲惨なる状態に陥りたるを見て若し合宿中なりとせば相當の死傷は免れ得なかつたらうに合宿中止の結果は禍より免るゝを得たのだ。されども我部員中に震災にて死亡せるものなかつたは不幸中の幸とはいへ、松井君岡田君山中君等は焼失或倒壊の爲めに損害を蒙られし由此處に同情の意を表する殊に松井君は正にあの大事事を生みし被服廠跡に入らんとして九死に一生を得たる幸運兒である。爲めに九月中は休業となり十月一日から始業せられた、又直ちに我部は部員の募集を待つて放課後練習を開始する。合宿行きの爲め岡田君の家に移搬しておいた野球道具は火事の爲めに焼失し新たに購入した。十月中旬第二回縣下中等學校野球大會を舉行。參加學校は昨年の四校に新たに深谷商業學校の參加を見る。即ち熊谷中學浦和中學川越中學埼玉師範深谷商業の五校である。戦ひの結果、川越中學二日間に亘る大激戦の結果熊谷中學に名をなさしめ熊谷中學再び優勝した。此の大會に於て金色燦然たる大優勝旗は注文店震災にて焼失し當時に出來せざりし爲め空しく目錄のみを與へた。校長の發聲にて萬歳を三唱して此の大會を閉づ、大會後秋

季の試合として學習院軍を目白臺に襲ひ接戦の末惜敗した。眞に此の試こそは惜敗である。中途渡邊捕手突指をなして投球の自由を全く失ひ變るに人なかつた爲頑張つて試合を續行したのだから此の負傷なくんば完全に勝利を得たりといひたい。スコア一三對二メンバー左の如し。

佐邊 田内 井知 丸 木 中
遊渡 岡武 松池 金治 山
投捕 一二三 遊左 中右

此の試合後帝大軍の招きに應じ尾久に對戦せるも或る事情の爲我軍意氣阻衷し惜敗に終る、其の他に文科對理科一年同志の對科マッチを行ひしも九對九の同點にて終る、遂に十一月下旬部員慰勞會を開き此のシーズンを終る。

十二月委員改選の結果文丙山中謙二君及理甲松井正雄君の兩君當選された。前者は曉星中學後者は府立第三中學校の出身である。豫算會の結果曲節を経て六百有餘圓を分配せられた。

大正十三年度の活躍

本校開校後既に三年になる。本年度こそ我部の充實を計り天下にその偉名を轟かさんとの決心の下に部

員一同堅く誓つて四月一日より春季合宿練習をなすことに決した。

之より先選抜試験の難關を突破せる二百の合格者より廣く人材をつのらんとして三月下旬二百名に洩れなく野球部入部の勧誘狀を發送して數名の精銳を得た。三月三十一日夜合宿部員全部集合した。

又コーチヤールとして現大帝選手元一高主將高根正二氏及上村正知氏の兩氏を推戴した。乃ち兩氏は遠路毎日東京より我部の爲めに來浦せられ懇篤にコーチせられしは吾部員の深く感謝して已まない次第である。かくて四月一日より十二日迄猛練習を繼續本年度より我野球部は全部同一寮に入寮し一致團結を計ることに努め西一寮の階上を割當てられた。さればその計畫は見事に圖に當り日増しに強味を増した。十三日以後は放課後より日暮るゝまで毎日練習を繼續し、その結果は歴然として幾多の試合に現はれたるを見る。即ち第一學期に於ては十六戰十亦一勝五敗の好成績たりその詳細は別表の如し、

第一回對抗野球戰・對靜岡高等學校と交渉成立

斯く本年度に於て俄然活躍し初めた同部は愈々第一回の對抗野球戰を舉行すべく靜岡高等學校を迎ふる

ことに決した。その後山形弘前兩高校よりも挑戦されたが靜岡の先約あつたため遺憾ながら拒絶した。始め我部に於ては七月中旬に於て試合舉行を希望したが先方の切望により本年度に限り八月二十八日と決定しその規定案を作つた。

六月中旬に於て臨時役員會召集され野球場スタンド建設に關して議案提出され無事通過して一壘三壘側に各十五間四段四百人を容るゝスタンド建設され七月初旬完成した。之が爲めグラウンドは引き締り固定ネットと共に吾部に偉觀を添へ埼玉縣下有數の野球場となる。

七月十七日より尾久球場に開催せられたる全國高等專門學校關東豫選大會に部として出場の事に決し之より先主催帝大野球部に參加を申し込む、爲めに七月十一日より本校に合宿す十五日小石川植物園にて開かれたる出場選手の懇親會に出席する、抽籤の結果不戰一勝となり二勝戰の相手として同く不戰一勝の橫濱高工と當る、閉會に臨み吾選手一同校歌を合唱して其の意氣の旺んるを示し既に他校を壓す。七月十七日正午より橫濱高工と戦かふ公衆の前に於て試合をするは吾部としては始めての事故甚だしく

山中 謙二 中山 直己

勝手違ひしも輕く橫濱高工に止をさし、先ず凱歌を奏す。直ちに山形に遠征中の競技部と富浦に合宿中の水泳部に勝電を送る。十九日農大と戦ひ十八對四にて破り遂に決勝戰に出場することとなる、開校後僅かに三年にして既に決勝戰に出で廣く其の浦高野球部否浦高の存在を天下に認めしめし吾野球部の功績は實に偉大なるものと云ふべきである。されど決勝線に於て一高の爲に慘敗連日熱苦を物とせず聲援を與へて下さつた校長先生部長及島地教授其他會員諸君に感謝の意を表す。大會終了後は直ちに解散した

(大湊合宿記)

八月一日より對靜岡高校第一回對校競技の準備として遠く青森縣大湊の地に於て練習を爲す、七月三十日午前十時上野發一行如左、

コーチヤール 上村正名氏、(大帝選手)

主將 池知 正見 副監 岡田 眞吉

遊佐 嘉平 渡邊 廣文

坂倉 敬三 竹内彌四郎

長谷川 孝七 松井 正雄

柴田 正治 加治木須惠人

翌三十一日午前五時大湊着、直ちに宿舎なる下士官兵集會所に入る、練習地は大湊海軍要港部所屬グラウンドに當るにより要港部司令部に司令官參謀長等に到着の挨拶をする。大湊の地は實に風光明媚風爽かにして夏季練習地としては屈強の場所である。殊に海軍防備隊や潜水隊の野球チームがあつて種々世話をして下されたため誠に好都合に練習が運んだ。同地に於ては八月十九日迄毎日練習をし、八月十日朝歸京の途に就く、翌二十一日六時朝上野着、翌二十一日より本校々庭にて練習開始、二十三日に腕ならして熊中クラブチームを迎へ六對一にて輕く破り對抗戰への自信をつけた。

二十五日靜高選手來浦、吾選手停車場に出迎ふ、驛頭にて兩主將握手の交換をなす、

二十六日靜高選手の懇親會を吾校に催す、

二十七日吾軍の練習殊に打撃はす凄じく敵膽を寒からしめた。我軍練習後靜高輕く練習をなす、

二十八日愈々對抗戰の日である。

(對靜岡高等學校第一回對抗野球戰)

午後一時浦高選手應援團の先頭に立ちて入場、場を一週後キャッチボール、シールドバッティングを行ひ正二時半靜高選手も應援團に擁せられて入場直ちにキャッチボール、シールドバッティングを行ふ、一時より兩軍十五分づゝノシートノックを行ひ、正二時半池田球審のプレーボールの宣告と共に戦端は開かれた。靜高先攻。

第一回、靜高川瀬一匍山本右飛球大瀧三振

浦高竹内 四球、中山のバンドに送られ、遊佐死球にて走者一二壘によりしも渡邊遊飛、池知投匍して入らず(兩軍零)

第二回、靜高松永投匍、竹内捕匍暴投に生き、山家の投匍野手撰澤となりて兩者生く、中野の二匍に走者三二壘によりしも佐藤一匍に入らず、

浦高坂倉四球、松井の遊匍に對殺されしも加ノ木四球、山中遊匍失に一死滿壘となる、次打者武内スクイズプレーを誤り、松井三本間に挟まれしも遊撃手の落球に三壘に生く、武内三振して二死となりしも中山の遊匍失に松井生還、加治木も一舉本壘に殺到して刺さ

る、(浦高一靜高零)

第三回、靜高芝野投匍、川瀬遊撃安打に出でんも山本の遊匍に對殺せらる、大瀧右翼前に安打したるも川瀬三壘を得んとして三本間に挟殺さる、

浦高遊佐擊飛球、渡邊三振、池知四球に出で、制球惡投に二壘を得んも離壘して刺さる、

(兩軍零)

第四回、靜高松永三振、武内左飛、山家投匍

浦高坂倉遊撃飛球後、松井左飛失に出でしも加治木三振、山中の二匍に對殺せらる、

(兩軍零)

第五回、靜高中野佐藤共に二匍、芝野三振、

浦高武内投匍、中山左飛、山家投匍は、遊左三振

(兩軍零)

第六回、靜高川瀬捕匍、山本投飛、大瀧三振、

浦高渡邊中堅安打、池知中堅安打して兩者一二壘による坂倉の遊匍に渡邊三壘に對殺、松井の遊匍失に一死滿壘となりしも加治木三振、山中捕邪飛に入らず、

(兩軍零)

第七回、靜高松永右中間を抜く三壘打に出で武内の

中犠飛に生還同點となる、山家死球に出でしも中野の投匍に對殺せられ、佐藤三振、

浦高竹内捕匍失に出で中山のバンドに送られ、遊佐の左直失(中山代走)武内三壘に至る、遊佐二盗に走者三二壘による、渡邊の二匍安打に武内生還、中山も本壘に殺到して刺さる、池知四球、坂倉四球に二死滿壘となる、松井四球に渡邊生還せしも加治木三振して終る、

(浦高二靜高一)

第八回、靜高芝野三振、川瀬遊左、山家中堅安打に出でしも大瀧三振、

浦高山中二飛、後武内二壘失に出で二盗中山三振せしも、遊佐の左直失に武内生還、遊佐二壘に至る、制球惡投に三壘を得、渡邊の三匍失に生還、池知の左邊失に渡邊生還、池知二壘に至る、坂倉の三本間安打に池知生還、池知二壘に至る、松井の左翼安打に坂倉生還、松井二壘を得んとして刺さる、

(浦高五、靜高零)

第九回、靜高松永投飛、武内三振せしも最後の球底

くバウンドして捕手の膝に當りて轉々する間に一壘に生く、二盗したるも山家三振中野遊匍に萬事休す終に八A對一にて浦高大勝す、

閉戦四時五十分、(別項記録參照)

愈々二學期に入り九月五日より従前通り放課後練習を開始する。

九月十八日、本シーズンの劈頭戦として帝大軍を本校に迎へたるも箇井投手に牛耳られ成軍一五對〇にて大敗。

(第二回縣下中等學校野球大會)

九月十五日、縣下中等學校野球大會出場申入れを締切る、

參加校昨年と同じく五校、

熊谷中學、川越中學、浦和中學、埼玉師範、埼玉商業、

九月二十日日本齒科醫學專門學校と本校校庭に戦ひ十四對三の段違ひにて勝つ。

九月二十一日、縣下中等學校野球大會出場選手の懇親會を開く、終つて雨天の爲優勝旗返還式を雨天體操場に行ふ、

九月二十三日、川越中學對熊谷中學戦を午前十時よ

失策	打數	得點	安打	盜壘	三振	失策
6	7	5	4	2	0	0
1	4	1	1	1	0	0
1	4	4	1	1	0	0
1	6	2	0	2	2	2
3	7	2	1	0	1	2
1	6	2	1	0	2	0
2	6	4	3	1	1	0
1	5	1	1	1	1	1
1	6	1	0	2	0	0

九月二十八日(日)午後二時より熊中對埼商の間に本大會の決勝戦を行ふ、球審遊佐、壘審山中武内、熊中先攻にて開始、

第一回熊中、四敵失二安打に一舉六点、第二回、一敵失及二安打に二点、第三回安打三本を放つて二点第四回一點、第六回、敵の三壘、遊撃の連失に一舉八點を加へ、第九回三點計廿二點を挙げしに反し、埼商は全く打撃振はず僅かに安打を散發せるのみにて熊中は三年連續して優勝旗を獲得す、

浦	邊	打	得	安	儀	盜	刺	捕	失
高	數	點	打	打	壘	殺	殺	策	
2	渡	4	0	0	0	0	10	2	4
5	松	4	0	0	0	1	0	1	0
6	池	4	0	0	0	1	2	4	4
1	遊	3	1	0	0	1	0	3	0
3	坂	3	0	0	0	0	8	0	2
4	加	4	0	0	0	0	2	0	0
8	治	3	1	0	0	2	3	3	2
4	武	3	0	2	0	1	1	0	0
7	山	4	0	0	0	0	1	1	1
9	中	4	0	0	0	0	0	0	0
	山	4	0	0	0	0	0	0	0
		33	2	2	0	6	27	14	13

練習、試合記録
四月二十六日午後三時より球審内田壘審武内のもとに對一高戦を行ふ我軍東投手の盟球に打撃を封せられ僅かに二點を得しのみ遂に十八對二にて慘敗す。

	打 數	得 點	安 打	盜 壘	三 振
柴崎	4	0	0	0	1
中野	4	0	0	0	1
青木	4	0	0	1	3
森島	4	0	0	0	1
中瀨	4	0	0	0	1
梁瀨	4	0	0	1	0
松澤	3	0	1	1	1
柳瀨	4	0	0	0	2
關口	3	0	1	0	1
	34	0	2	3	11

— (157) —

失策	三振	盗塁	安打	得点	打数	失策	三振	盗塁	安打	得点	打数
0	0	0	1	2	4	1	0	1	2	4	3
0	0	0	2	1	4	1	1	3	1	7	6
1	1	0	0	1	4	1	1	1	0	1	7
0	0	0	2	1	4	0	0	2	1	2	6
0	1	0	1	1	3	0	1	1	0	2	1
4	1	1	0	1	4	0	0	1	0	8	9
1	0	0	1	0	4	1	0	0	1	9	9
8	4	3	9	10	32	6	4	6	14	23	38

谷藤附崎島日川屋竹
 強齋大寺田朝小守植
 376125489

浦中對熊中戦を行
 浦中は一回二
 球審渡邊壘審松井、浦中先攻、

九月二十七日(土)午後三時より

球場 師

崎野木 島瀬澤瀬口
 柴中青森中梁松柳關
 698254371

失策振壘打點數										失策振壘打點數									
3	0	0	1	1	0	1	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	2	0	0	1	0	0	0	0	0
2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9	10	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	7	8	31	0	0	0	0	0

點を占め氣勢上りしも以後振はず七回一點を加へたるのみに反し熊中は二回一點、三回四點六回三點計八點を入れ、八A對三にて熊中勝つ、

—(156)—

學習院

捕殺	刺殺	盜壘	犧打	安打	得點	打數	盜壘	犧打	安打	得點	打數
1	1	0	0	1	0	4	6	4	10	12	42
2	2	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0
1	2	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0
2	8	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0
5	0	1	0	0	0	4	0	0	0	0	0
0	12	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0
0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0
1	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0
33	0	3	0	1	27	11					

六月七日石神井球場に於て對商大二回戰を球審兒玉壘審町谷のもとに行ひ接戰十回に及び惜敗す

	失策	捕殺	刺殺	盜壘	犠打	安打	打得點	
より球審上村壘審中島のもとに行はれたり	0	5	1	1	0	3	1	4
大學第一回戦は本校校庭に於て六月一日午後二	0	0	3	0	1	0	1	3
	0	1	2	1	1	1	1	4
	0	4	4	0	0	0	0	2
	0	0	1	0	0	0	1	3
	0	2	1	0	0	0	0	4
	1	0	0	0	0	0	1	4
	1	0	1	0	0	0	0	4
	1	1	0	0	0	0	2	4
	3	13	27	2	2	7	8	32
内中井邊佐木橋谷倉								
武山松渡遊加高池坂								
浦高								
梶藤田川田野倉中								
大佐梅細會西河與田								
657348291								
商大								

五月十一日午後二時三十分より球審上村、壘審、農大方のもと武對農業大學野球戦を行ふ、我軍一回二點、三回三點、六回一點計六點を挙げたるに反し敵軍四回に三點を得たるのみ、

河野	7	犠	盗	打	得	安	刺	捕	失
渡邊	6	打	壘	數	點	打	殺	殺	策
市村	9	打	16	47	18	13	27	7	6
東	1								
横田(長)	2								
服部	3								
齋藤	5								
三澤	4								
坂									
横田(光)	8								

月十一日午後二時三十分より球審上
 方のもと貳對農業大學野球戦を行ふ
 三回三點、六回一點計六點を挙げ
 四回に三點を得たるのみ、

一 高

刺	捕	失
殺	殺	策
9	0	1
1	1	0
0	3	1
0	1	0
11	0	1
1	2	1
0	1	0
4	0	1
1	0	0
27	8	5

五月十八日午後三時より球審上村壘審津田のもとに第二回對學習院戦を行ふ

失策	1	2	3	1	1	0	0	0	0
									8

[illegible]

失策	盗壘	犠打	安打	得点	打数
2	0	0	0	0	0
2	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
1	0	0	0	0	0
2	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
4	0	0	0	0	0

内井倉邊佐木山中
武松坂渡遊肥加中
浦高

槻田神藤田川倉野田
大會小佐梅佃與河西

打点	得点	安打
38	5	8

商大

失策	捕殺	刺殺
1	2	4
1	0	7
0	3	11
0	1	0
0	0	0
0	0	2
0	0	0
0	0	0
0	0	0
5	11	21

六月十四日本校々庭に於て對埼玉師範野球戦を行ふ

安打	得点	打数
2	4	7
2	5	5
3	5	6
3	1	8
1	5	7
1	5	7
2	5	7
3	4	6
0	2	5
17	36	58

内倉井邊佐木橋谷中
武松坂渡遊肥高池山
浦高
矢槻村島崎藤川竹日
强大中田寺齋小植朝

六月二十一日本校校庭に於て對國學院大學野球戦を行ふ

失策	捕殺	刺殺	安打	得点	打数
0	0	0	3	2	6
0	0	0	0	1	4
0	0	0	2	1	4
0	0	0	0	1	6
0	0	0	0	1	4
0	0	0	0	1	4
0	0	0	0	1	5
0	0	0	0	1	4
0	0	0	0	1	5
0	0	0	0	1	4
2	10	27	12	11	43

内中邊佐井倉橋谷山

武山渡遊松坂加池

浦高
家利原岡立口井田
于有萩猪平倉山岩廣

打点	得点	安打
30	0	5

國學院

六月廿二日本校々庭に於て對東洋大學野球戦を行ふ
球審中島壘審森

失策	犠打	安打	得点	打数
0	0	0	1	5
0	0	0	3	3
0	0	0	1	4
0	0	0	0	4
0	0	0	1	3
0	0	0	1	3
0	0	0	0	4
0	0	0	0	4
5	0	6	11	32

内山井倉佐木谷邊橋

武中松坂遊加池長高

浦高
谷村島川 木下島野
水木福平原佐山長坂

打点	得点	安打
32	3	4

東洋大學

六月二十九日立教球場に於て審判水谷(球)永田
(壘)のもとに對立教大學豫科野球戦を行ふ

失策	捕殺	刺殺	盗壘	犠打	安打
2	4	2	0	0	0
0	0	0	1	1	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0
9	13	27	2	3	1

打 得 安 犠 盜
數 點 打 打 壘

4	0	1	0	0
4	0	2	0	0
4	0	0	0	0
4	0	0	2	0
3	0	0	0	0
4	0	0	0	0
4	0	2	0	0

34 0 8 0 0

打 得
數 點

15	45
15	安
14	打

一 高

失 策 1

野村田 田藤部澤邊
河市横東横齋服三渡

(光)
(長)

八月二十八日の第一回對抗試合に備へんため大湊合宿を引きあげし我軍は二十三日縣下の雄熊中俱樂部を本校々庭に迎ふ、我軍五回一点六回二點八回三點敵軍七回二一點を得たるのみ六A對一にて我軍勝つ

打 得 安 犠 盜 刺 捕 失
數 點 打 打 壘 殺 殺 策

4	1	1	0	0	1	2	0
3	1	2	0	0	1	4	0
4	2	0	0	1	6	2	0
4	1	1	0	1	5	0	0
3	1	0	1	0	12	0	0
3	1	0	1	0	1	0	0
4	0	1	0	0	0	0	0
4	0	9	0	0	0	0	0

32 6 6 2 3 27 15 5

打 得 安
數 點 打

31	1	31
5	1	安
4	2	打

盜 壘 1

池谷林島井塚野飛川
小大小田荒大卵掛森

浦 高

九月十八日本校々庭に審判津田(球)中島(審)のもとに對帝大野球戦を行ふ

打 得 安 犠 盜
數 點 打 打 壘

4	0	0	0	0
3	0	1	0	0
3	0	0	0	1
3	0	0	0	0
3	0	0	0	1
2	0	1	0	0
3	0	1	0	1

29 0 4 0 3

打 得
數 點

40	15
安	盜
打	壘
14	9

帝 大

田地山本木井田内島
内伊下山高筒野武中

浦 高

九月二十日午後三時より本校々庭に於て審判山中のもとに對日本齒科醫專野球戦を行ふ我軍二回八點六回二點七回四點計十四點ヲ入レタルニ反シ敵軍三

打 得 安 犠 盜
數 點 打 打 壘

2	1	0	0	0
2	0	0	0	1
2	2	0	0	0
1	2	0	0	0
2	1	0	0	1
2	0	0	0	0
4	2	0	0	0

37 14 10 0 3

打 得
數 點

37	9
安	盜
打	壘
8	1

日 齒

浦本崎坂井澤島藤明
三岡湖田横安田齋有

浦 高

回二點九回一點計三點を入れたのみにて十四對三にて我軍大勝す

庭球部

第一回部長

高木先生

委員

藤本次之助

松本播州

第二回部長

高木先生

委員

藤本次之助

戸野原三夫

第三回部長

遠藤先生

委員

松本茂正

若林晃

庭球部誌

大正十一年四月吾が浦和高等學校の開校せらるるや
 新入生二百名によつてこゝに學友會は組織せらるる
 に至つた。しかるに學友會各部は豫算の關係上大正
 十一年度に全部の各部を設置することは困難でもあ
 りまた結果に於て思はしくないと云ふので一般會員
 によつて各部設置順位投票を行ふこととするや吾が
 庭球部は會員諸君の援助により第一位を以つて當選
 し得た事は實に吾が部にとつて幸福なことであつた
 しかして五月豫算會議が開かれて庭球部、野球部、
 陸上競技部の三部の事業を決定しようとしたのであ
 つた。

この時に當つて庭球部には大難關があつた。それは
 硬球採用と云ふ事であつたが部長高木氏委員松本君
 等の努力も要するに豫算の貧弱と、ある一部の人々
 の眞に庭球なるものを解せなかつた爲めに硬球採用
 を否定されてしまつた事は吾が部にとつて殘念な事
 であつた。

今秋明治神宮競技會の開かるゝ中、軟球は庭球に非
 ずとして庭球より引離された事を思ひ浮べる時私は

あれほど榮えた軟球の運命が余り早くつきたのに驚
 くのである。私はもしもあの時からと思ふと殘念で
 たまらぬがそれは今さら余り男らしくない事である
 兎に角それでも私達は十一年は軟球によりて部の結
 束を強めるために、また十二年度よりは斷然硬球を
 採用せんとして、部費の大部分を以つて硬球用のコ
 ートを造り、經常費を節約して秋のシーズンより猛
 練習を行なつた。この時に選ばれた選手は、
 武野、戸原、木村、山下、藤本、松本、三宅、清水、
 日下、澤野、七島、坂卷
 の十二名であつた。
 しかしてこのシーズンよりどん／＼試合をした部は
 庭球部だけで、それだけ早く短時日の中に結束した
 部は他になかつた。

處女試合は十月一日に於て縣下の雄熊谷中學との試
 合であつたが、裕々と優退二組を残して大勝した。

オーダー 五組 (對熊谷中學校)

〇〇三 宅

武野 (優退)

〇〇四 戸之原

清水

〇〇五 山

澤野 (優退)

〇〇七 島

澤野 (優退)

×坂 卷 藤 本
○三 宅 澤 野(優退)

十月十七日 對誘掖會試合

○七 島 澤 野(優退)
×松 本 木 村
×山 下 日 下
×戸之原 清 水
×三 宅 武 野
○七 島 澤 野(優退)

十月卅一日 對國勢院試合 六組

○三 宅 武 野(優退)
○松 本 日 下
○戸之原 清 水
×七 島 澤 野
×松 本 日 下
×坂 卷 木 村
○三 宅 武 野

十月五日 對第一高等學校戰五組

○三 宅 武 野(優退)
×山 下 木 村
○七 島 澤 野(優退)
○松 本 日 下(優退)
戸之原 清 水(不戰)

試合後ホールで一高の選手を迎へて茶話會を開く。
かくてこのシーズンの練習を閉づ。
日數四十日間。四戰三勝、何等のコーチもうけず獨
力でかくの如き日短の間にかゝる成功を得た事は部
員諸子及び選手諸君の熱誠の至す處であつた。特に
對一高校の如き優退四組と云ふ大勝は吾部の史上の
第一頁を飾るものであらう。

十二月に於て再び委員改選をなす。前年度の委員松
本君の代りに戸之原君と藤本君が委員をやつてくれ
る事になり。豫算會議開かれ、こゝに始めて硬球採
用を肯定さる。しかし充分に豫算が取れなかつたが
兎に角正式略式のニコート及び固定ネットを○び部
費の大半を費して設置し大正十二年三月廿五日より
形ちばかりの合宿をなす。合宿をなせる者
武野、松本、藤本、日下、木村の五名
以つて春のシーズンにそなへたりしが六月中旬途にて

豫算全部費せしため練習を中止す。

本年度新たに左の選手を選ぶ。

舊選手

松本、武野、七島、藤本、日下、木村、戸之原

新選手

松本茂正、若林 晃、野崎重近、守屋等十一名
秋のシーズンは中繼ぎに選手負擔で再び軟球を始め
る事として練習を開始す。

十月三日 浦和中學校のために練習試合をなす

○守 屋 木 村(優退)
×若 林 野 崎
○三 宅 武 野(優退)
○松 本(播) 藤 本
松 本(茂) 澤 野(不戰)

十月廿六日縣下中等學校庭球大會を催す。

参加校 浦和中學 熊谷中學 不動岡中學 川越中學

埼玉師範 埼玉工業 秩父農林 埼玉蠶業

埼玉商業 柏壁中學 以上十校

決勝戦熊谷對埼師の試合は暗くなりてドロンゲーム
となり十月卅一日新らためて決勝戦を行なひしに熊
中の優勝する處となり大銀盃は熊中主將の手に同時

受與す。

十一月四日 對高等蠶絲學校 五組

×七 島 藤 本
×若 林 守 屋
○三 宅 武 野(優退)
○松 本(茂) 澤 野(優退)
×戸之原 木 村

十一月五日 對國學院大學戰

×七 島 藤 本
×若 林 守 屋
×三 宅 武 野
×戸之原 木 村
×松 本(茂) 澤 野

このシーズンは二勝一敗、かくて秋のシーズンを終
る。十二月委員の改選を行ひ、松本茂正君、若林晃
君の兩名當選す。

大正十三年四月一日より十日まで春のシーズンにそ
なへるため、合宿練習をなし一層硬球を採用す。

参加者 松本(茂正) 若林 武野 藤本 野崎

荒木 松本(播)

五月初旬千葉醫科大學と最初の硬球試合をなす。

ダブル 二組 戸之原
若 林 本(播) 七 島
シングル 三組

× 藤 本
× 武 野
× 松 本(播)
六月八日 對一高戦
ダブル 三組

× 若 林 野 崎
× 七 島 松 本(播)
× 武 野 松 本(茂)
シングル 六組

× 野 崎
× 戸 之 原
× 七 島
× 武 野
× 松 本(茂)
× 松 本(播)
六月中旬對山形高校との對抗試合を行ふ話がまどま
り、たゞちに練練習を開始し田端ボブラ俱樂部に猛

習に行く事となる。

新らたに新選手を一年より選ぶ

神木、三宅、瀬戸口の三名

七月十四日より石神井商大コートにて合宿して平田
君のコーチの下に猛練習をなす。

参加者 七島武野、松本(茂)、松本(播)、戸之原、
若林、藤本、三宅、神木、

七月十四日 この日商大の寮に移る。

七月十五日 雨のため一日練習休む。

七月十六日……廿日

猛練習をなす。武野、三宅病氣になる。

七月二十日

オーダーを定む。

シングル

1 松 本 播 州
2 松 本 茂 正
3 武 野 隆 次
4 七 島 德 次 郎
5 戸 之 原 三 夫

6 若 林 晃
ダブル

1 松 本 茂 正
武 野 隆 次
2 松 本 播 州
七 島 德 次 郎
3 若 林 晃
戸 之 原 三 夫

補 缺
1 神 木 育 夫
2 藤 本 次 之 助
七月二十一日 休 養

七月二十二日 浦 和 發 六 時 (午前)
山 形 着 六 時 (午後)

七月二十三日 午後より山高コートにて一寸練習

七月二十四日 午後より猛練習

七月二十五日

休 養

七月二十六日

九時よりダブルゲームを行なふ。

1 若 林 三 六 並 木
戸 之 原 五 七 押 谷
2 松 本(播) 六 一 佐 藤
七 島 六 二 小 木 曾
3 松 本(茂) 六 〇 荒 木
武 野 六 一 四 川 村
1 當り悪きため充分腕を伸ばしえず苦戦の後敗る
2 實力の相異の至す處にしてボーレー戦にてあ
3 ざやかにきまる
1 當り物凄く快勝す。

七月二十七日

九時よりシングルゲームを行なふ

6 若 林 六 一 三 小 宮
六 一 二
四 一 六
五 一 七
六 一 二

5	戸之原	一六	吉	田
4	七	六三	並	木
3	武	六二	荒	木
2	松本(茂)	六〇	中	村
1	松本(播)	六二	川	村

6 當り惡しきため苦戦の後勝つ、戦ふ事三時間

- 半貴重なる一点を得て、吾が校を有利に導く。
- 當り惡しきため奮戦せしも破る。
 - よくネバリて快勝す。
 - 當りよく美事に敵を一蹴す。
 - 當り惡く苦戦の後敵を壓す。
 - 敵の主將敗軍を幸いてよく戦ひし故善戦せしも破らる。

かくて六對三のスコアにて遂に吾が校の大勝する處となり、第一回對山形高等學校戦は豫期の如く、また當部の策戦通りの勝利となる。

思ふに三年間吾々の望んでゐた完成期中の第一期に到着したのをこの對山形戦によつて證明せらるるのである。これは一に設置以來の名部長高木氏を始め名コーチャー平田君の與かつて大なる處をこゝに更ためて感謝したいと思ふ。

彼の對山形戦の合宿當時私の到らざる處から多くの選手諸君に迷惑をかけたが、しかし諸君は當時の庭珠部の現状を諒としよく一致共同して山高を壓してくれたことは私の生涯忘れえざる一事項であらう。

對山高戦の吾校の勝利は前述の如き、石神井のあの

炎熱下の猛練習による事は明らかである。そしてまた吾々の方が山高選手よりはるかに東京化せる庭球をプレーしたと云ふ事によつてこの勝因は造られたのである。

春のシーズンも大成功を以つて休暇となり、九月より再び秋のシーズンとなり練習を重ねぬ。

十月十二日、十三日の兩日、當部コート及び立教大學コートに於て立大豫科と戦ふ。大學チームに對してよく勝びしも破れしは實力の相異なる處にして當日の善戦は吾部の將來を思はしむ。

對立大戦

浦高 (於浦高コート)

× 3	三宅	三六	佐藤
× 2	神木	三六	松尾
× 1	武野	一六	中島
× 1	藤本	三六	香月
× 1	七島	五七	川崎
× 1	松本(茂)	四六	森

立大	浦高
○ 神尾	若林
○ 橋本	藤本
○ 松尾	七島
○ 佐藤	武野
○ 香月	松本茂正
中島	松本播州

松本播州君對中島君は大接戦を重ねしが暗くなりしためドロンゲームとなる。

十月十七日及び十九日の兩日本部主催にて第一回關東庭球大會を開く。参加者三十校六十組

早稻田實業、東洋商業、粕壁中學、埼玉工業、攻玉社中學、京華中學、高崎商業、川越中學、埼玉商業、荏原中學、不動ヶ岡中學、熊谷中學、錦城中學、豊山中學、豊島師範、枋木中學、目白中學、郁文館中學、秩父農林、錦城商業、埼玉蠶業、正則中學、日本大學中學、埼玉師範、浦和中學、日本中學、立教中學、宇都宮中學、大成中學、青山師範、

かくて吾部も設置以來三ヶ年を過ぎここにやや形ばかりながらまとまつた部を形成することが出來たの

は一に創設来より盡力下された部長高木氏を初め第一期委員松本播州君、當時の理事諸君及び第三期委員若林晃君、松本茂正君、その他七島徳次郎君、武野隆次君、現理事本吉君を始め他の四君の熱誠を以つて盡して下された事をこゝに厚く謝する次第である。しかるに今や名部長高木氏朝鮮大學に御榮轉となり部長を辭せらるゝ事は吾部にとりて残念な事であるがしかし新らたに遠藤氏を吾部長に得た事はそれを補ふに充分であるのに私は喜ぶ次第である。今や吾校も全部落成し、まさに落成式は近く舉げられんとす。この期に際して吾部も兎に角一段落をつけて、こゝに強固なる基礎を形造りえたのは吾が校落成記念と共に伍して喜ぶべき事である。

陸上運動部誌

陸上運動部

第一回部長

渡邊先生

委員

下田成太郎

金子辰太郎

池知正見

加治木 須惠人

第二回部長

江見先生

委員

齋藤孝義

金子辰太郎

石川龍雄

大石寅造

第三回部長

江見先生

委員

齋藤孝義

市川本三

金子辰太郎

陸上運動部誌

よくもこう發展し來たと思ふ。その初め荒地その儘であつた、この沙原に苦心慘愴あのトラックを造り、貧弱そのもの、陸上運動部であつたのがまた、く間に立派なチームが出来、外に對しても相當の成績を挙げ得る様になつた。トラックの一角に立つて既往を思ふとき、吾々は第一回の陸上運動會のどしや降りの豪雨を思ふ。それより以前のトラック開きを思ふ。それより前の薄の原、茨の野を思ふ。まるで隔世だ、夢の様だ。でもあの當時委員や部員の熱誠振として學校生活の熱心さ、それが今日を築いたものである。第一回に少數の部員、とはいふもの、全學生の殆んど三分の一が無暗にトラックを歩きまはり、砲丸を投げたり、ホップをしたりしてゐた。そして同じ級の者親しい者達が、互に「せつて」ゐた。それが根底であつたのだ。随分苦心もした。開校式時分になつて辰野さん始め帝大の齋藤圭司、渡邊亮雨氏の人事ならぬ御世話によつてどうやら部といふものが出来あがつたのだ。こうしてトラックの一端に立つて見るとき、齋藤さんや渡邊さんが先

に立つて不出來なトラックを、當時何譯の分らない生徒の先頭に立つて測量して居られるのが目につく辰野さんの運動會の日の姿として晚餐會の痛切なる御説教が耳に響く、全く有難かつた。恩人だ、恩人だ、尊敬すべき恩人である。

この間もいはれた「浦和の連中くらゐ知つてゐるものは無い。而も親の苦心子知らずで困る」と

第一回開校運動會がすんで一高の一年と接戦したとして第二年にはいつて對抗競技を敢てした。それは理事の方で詳しく書いて呉れるだらうから省く。大岡實氏がコーチチャーとして來られた。この對抗競技の爲に學校の体操科の方でも便宜をはかられ時々戸山學校の方や或る時は權威岡部氏がお出下された今に、諸先生方に感謝に堪えない次第である。こうして手をひかれながら歩んで來たのだ。そして今日の發展を得たのだ。どうかその跡を記録によつて見てもらひ度い。

終りに本年對抗競技に當つて、加賀一郎氏をコーチチャーに迎へたことは吾々の誇とする所である。どんなに氏が熱誠の人であるか、吾々はその當時を思ひ出して深く、感謝するのである。同時に氏が更

に長く吾々の歩を健全ならしむる様指導あられんとを願する次第である。

吾々の部はまた前途遠遠。だ過去から現在迄多くのよき人々によつて導かれて来た。そして又まだ將來も導かれねばなるまい。然も吾々は對抗競技に二回の惨敗だ。更に奮起せねばならない。禪をしめてかゝらなければならぬ。

一、トラック開き 十月二十一日

百米第一回豫選

一、松 本 (十四秒)

二、稻 葉

三、齋藤孝義 (十二秒五分ノ三)

二、下 山 (十三秒)

一、紀 伊 (十三秒)

二、大 石

決 勝

一、紀 伊 (十三秒)

二、下 山

三、齋 藤

二百米第一回豫選

一、下 山 (廿五秒五分ノ二)

二、松 本 播

一、齋藤孝義 (二十六秒)

二、大 石

二百米決勝

一、下 山 (廿六秒)

二、大 石

四百米決勝

一、大 石 (二分五秒五分ノ二)

二、松 本 播

三、齋藤孝義

八百米決勝

一、小 坂 (二分五十二秒)

二、稻 葉 厚

一千五百米決勝

一、稻 葉 (六分十三秒)

二、小 坂

砲 丸

一、金 子 (九米)

二、松 本 (八米六〇)

浦高開校記念運動會

トラックの部

百米 (本校)

A組 一着 笠 井 (十三秒五分ノ二)

二着 稻 葉

B組 一着 池 知 (十三秒五分ノ四)

二着 岡 本

C組 一着 池 本 (十四秒)

二着 佐 藤

D組 一着 保 坂 (十三秒)

二着 善 波

E組 一着 下 山 (十三秒)

二着 宮 村

二百米

A組 一着 下 山 (廿六秒五分ノ四)

二着 大 石

B組 一着 池 本 (二十八秒五分ノ四)

二着 富 田

八百米

一着 池 知 (二分五十六秒五分ノ一)

二着 吉 川 (三分九秒五分ノ四)

三等 河 内 (八米三五)
圓 盤
一等 下 田 (三十二米〇九)
二等 松 本 (三十一米四三)
三等 大場朋 (三十米〇〇)
槍
一等 江 田 (三十四米二七)
二等 大 場 (三十四米一〇)
三等 金 子 (三十一米五二)
中 飛
一等 下 山 (五米〇七)
二等 岡 本 (四米八一)
三等 大 石 (四米五七)
ハイジャンプ
一等 金 子 (二米五七)
二等 佐 藤 (二米四八)
三等 松 本 (二米四七)
ホ、ス、ジ、
一等 下 山 (十米〇〇)
二等 松 本 (九米六八)
大正十一年度

千五百米

- 一着 本多 (五分二十六秒五分ノ三)
- 二着 戸野原 (五分三十八秒五分ノ三)
- 三着 稻葉 (五分五十四秒)

五千米

- 一着 本多侍郎 (廿分十八秒)
- 二着 川田 (二十二分四秒)
- 三着 田部井 (二十二分四秒)
- 四着 黒田 (二十二分四秒)
- 五着 小坂 (二十三分三秒)
- 六着 新國 (二十四分四十七秒)

提灯

- A組 一着 石田英 二着 藤本三
- 三着 芹澤信一
- B組 一着 馬場忠教 二着 木村藤五郎
- 三着 池知正見

C組

- 一着 清水眞澄 二着 上原四郎
- 三着 田中達次郎

D組

- 一着 富田直之 二着 北西卯三郎
- 三着 藤本次之助

八百米リレーレース

- 一着 文乙 齋藤(孝) 齋藤(安) 保坂 紀伊

- 二着 文丙 善波 藤田 原田 宮村

- 三着 文甲 馬場 吉田 岡本 下山

- 四着 理甲 松本 大庭 平野 大石

- 五着 理乙 坂巻 塚田 大澤 柴田

砲丸 投

- 一等 金子辰太郎 (八米八十)
- 二等 熊谷忠三郎 (八米七二)
- 三等 戸野原 (八米五〇)

走巾 飛

- 一等 下山索二 (五米四六)
- 二等 岡本静彦 (四米九五)
- 三等 金子辰 (四米九三)
- 圓盤 投
- 一等 下田成太郎 (二十一米四三)
- 二等 馬場忠教 (二十米八五)
- 三等 大場朋次郎 (十九米六二)

走高飛

- 一着 金子辰太郎 (四尺二)
- 二着 佐藤俊男 (四尺二)

- 一着 江田益美 (三十一米)
- 二着 塚田潔 (二十七米八〇)
- 三着 金子辰太郎 (二十七米三〇)

第一回中等學校競技大會(十一月八日)

フイールド

砲丸 擲

- 一着 (師範) 岩崎好三郎 (九米八〇)
- 二着 (師範) 塚越要 (九米五六)
- 三着 (師範) 黒瀬長平 (九米五二)

走巾 跳

- 一着 (師範) 塚越要 (二十尺)
- 二着 (師範) 岡田正一 (十八尺九七)
- 三着 (熊農) 大澤鼎重 (十七尺〇〇)

圓盤 投

- 一着 (師範) 塚越要 (二七、四九)
- 二着 (不中) 小久保辰雄 (二一、九四)
- 三着 (師範) 黒瀬長平 (二一、四〇)

走高飛

- 一着 (師範) 塚越要
- 二着 (師範) 岩崎好三郎 二着 (師範) 押田勤
- 三着 (川中) 町田藤一郎 三着 (川中) 岸田勝太郎

二百米豫選

- A組 一着 (師範) 四方田 (二七秒)
- 二着 (浦中) 木内 三着 (稻中) 平子
- B組 一着 (農林) 町田 (二七秒五分ノ二)
- 二着 (川中) 中島 三着 (熊中) 須藤

C組

- 一着 (師範) 吉田 (二六秒)
- 二着 (川中) 大河原 三着 (稻中) 勝治

二百米決勝

- 一着 (川中) 大河原 (二五秒二分ノ一)
- 二着 (師範) 吉田 三着 (師範) 四方田

四百米豫選

- A組 一着 (川中) 藤野 (二分一秒)
- 二着 (川中)
- 三着 (秩農) 貫井
- B組 一着 (熊中) 石川 (二分二秒五分ノ三)
- 二着 (秩農) 世島 三着 (師範) 鈴木

四百米決勝

- 一着 (師範) 田村 (一分二秒)
- 二着 (川中) 藤野 三着 (熊中) 石川

- 四百米 片岡 (二高) 一分一秒五分ノ三 (一高)
- 八百米 片岡 (二高) 二分二秒 (本多(浦) 同(二高) 同(二高) 宮村(浦) 千五百米 本多(浦) 五分十五秒五分ノ四 (二高)

- 一着 (師範) 根岸 (二分十九秒五分ノ三)
- 二着 (師範) 櫻井 三着 (熊中) 渡邊

- 千五百米 (一高) 河田(浦) 小坂(浦)
- 八百米 片岡 (二高) 二分二秒 (本多(浦) 同(二高) 同(二高) 宮村(浦) 千五百米 本多(浦) 五分十五秒五分ノ四 (二高)

- 一着 (師範) 松本唯男 (十分十二秒)
- 二着 (熊中) 新家 忠 (十分十六秒五分ノ二)

- 八百米 片岡 (二高) 二分二秒 (本多(浦) 同(二高) 同(二高) 宮村(浦) 千五百米 本多(浦) 五分十五秒五分ノ四 (二高)

- 三着 (熊中) 原口純一 (十分三十六秒)
- 四着 (熊農) 今村惣郎 (十分三十七秒)
- 五着 (川中) 大島三之助

- 八百米 片岡 (二高) 二分二秒 (本多(浦) 同(二高) 同(二高) 宮村(浦) 千五百米 本多(浦) 五分十五秒五分ノ四 (二高)

- 一着 (師範) (一分四十八秒五分ノ三)
- 二着 (熊中) (一分五十秒五分ノ三)
- 三着 (川中)

- 八百米 片岡 (二高) 二分二秒 (本多(浦) 同(二高) 同(二高) 宮村(浦) 千五百米 本多(浦) 五分十五秒五分ノ四 (二高)

本校對第一高等學校一年練習試合(十二月十三日)

走巾飛 中島(一高)五米四五 下山(浦) 原口(浦)

- 二百米 河野(一高)二六秒 齋藤(浦)
- 岡松(一等) 同 (一高) 下山(浦)

- 八百米 片岡 (二高) 二分二秒 (本多(浦) 同(二高) 同(二高) 宮村(浦) 千五百米 本多(浦) 五分十五秒五分ノ四 (二高)

一年對類競技

砲丸投 (十六封度)

- 一 梅澤(理乙) 七、七六
- 二 市川(文乙) 七、五六
- 三 下田(理甲) 七、三七
- 四 館野(文丙) 六、九三
- 五 石岡(文乙) 六、八二

- 四百米 片岡 (二高) 二分二秒 (本多(浦) 同(二高) 同(二高) 宮村(浦) 千五百米 本多(浦) 五分十五秒五分ノ四 (二高)

- 一、五〇〇 一 森 (文甲) 五分三四秒十分ノ一
- 二 池田(理乙) 五分三四秒五分ノ四
- 三 飛澤(文丙)
- 四 大 中(文甲) 五 松田(文丙)
- 一 小山(文乙) 一、四三米突
- 二 井上(文丙) 一、四一米突
- 三 守屋(文甲)
- 四 深井(理乙)
- 五 尾崎(文丙)
- 東 (理甲)

- 八百米 片岡 (二高) 二分二秒 (本多(浦) 同(二高) 同(二高) 宮村(浦) 千五百米 本多(浦) 五分十五秒五分ノ四 (二高)

一〇〇〇米リレー

- 一 理甲チーム 二分二十八秒五分ノ四
- 二 文丙チーム
- 三 文乙チーム

- 八百米 片岡 (二高) 二分二秒 (本多(浦) 同(二高) 同(二高) 宮村(浦) 千五百米 本多(浦) 五分十五秒五分ノ四 (二高)

二百米

一市川 (二六秒五分ノ一)

二宮村

四百米

一大石 (五八秒五分ノ四)

二木下 (一分六秒五分ノ一)

三島

千五百米

一池田 (五分三六秒五分ノ四)

二川内三若宮 四加藤 五田部井

フイールド

圓盤投

金子 (二四米七三)

二江田 (二三米一一)

三下田 (二三米〇一)

四松原 (二二米九〇)

五梅澤 (二〇米五五)

走巾飛

一下山 (五米九二)

二保坂 (五米五七)

三金子 (五米五六)

砲丸投

一金子 (十米六六)

二下田 (九米二九)

三江田 (九米二七)

槍投

一江田 (三三米九八)

二近藤 (三二米四一)

三塚田 (三一米九八)

棒高飛

一永井 (二米四四)

走高飛

一下山 (二〇四三五) 二原田 三若宮

ホスンドアジャンプ

一下山 (二一七三)

二原田 (二一七三)

三金子 (二〇米七七)

大正十二年六月卅日(土)

對校競技第二次豫選

〇百米

一市川 (十二秒五分ノ二)

二大石 三保坂

二百米

一齋藤

二市川 三大石

八百米

一池田 (二分二七秒十分ノ二)

二若宮 三守屋

砲丸投

一金子 (一〇米三三)

二江田 (九米八五)

三梅澤 (九米五二)

走巾跳

一小ヌ (五米六〇)

二保坂 (五米五二)

三原田 (五米五〇)

槍投

一近藤 (三七米六〇)

二江田 (三五米四〇)

三金子 (三一米七八)

ローハールド

一齊藤 (三〇秒二分ノ二) 二若宮

二柴田 (三〇秒五分ノ二) 二大石

走高飛

一原田 (一米五〇)

二守屋 (二米四四) 三若宮

四百米

一大石 (二分五分ノ四)

二宮村 三市川

圓盤投

一梅澤 (二六米四〇)

二江田 (二四米五六)

三金子 (二三米一五)

ハイハールド

一善波 (二十秒五分ノ三)

二齊藤 (同)

三大石 (二一秒五ノ二)

山形、新潟、浦和、第一回對抗競技記録

第一日(七月二十日)

百米豫選

一回早山(新) 十二秒 市川(浦)

二回田中(山) 十二、五分一 蓮池(新)

三回曾和(新) 十二、五分一 東(山)

高ハールド(豫選)

一回 善波(浦) 二秒五分一 唐澤(新)
二回 鈴木(山) 二〇秒五分二 青木(新)
三回 石西(山) 一九秒五分四 金井(新)
二百米豫選

一回 市川(浦) 二秒五分一 早山(新)
二回 田中(山) 二秒五分 蓮池(新)
三回 東(山) 三二秒 曾和(新)
低ハードル(豫選)

一回 齋藤(浦) 三〇秒五分二 石田(山)
二回 田中(山) 三〇秒五分二 柴田(浦)
三回 井坂(新) 三〇秒五分一 若宮(浦)
四百米(豫選)

一回 金澤(山) 五九秒五分二 大石(浦)
二回 田中(山) 五八秒五分二 蓮池(新)
三回 鈴木(山) 五八秒五分二 原(新)
第二日(午前九時開始)

百米
早山(新) 十二秒 田中(山) 市川(浦)
東(山)
八百米
南雲(山) 二分二秒五分二 鈴木(山)

瀨水(新) 池田(浦)
走巾跳
早山(新) 五米九二 栗原(新) 下山(浦)
保坂(浦)

砲丸投
南雲(山) 十一米一八 栗原(山) 金子(浦)
永井(新)
低ハードル

田中(山) 三〇秒 齋藤(浦) 井坂(新)
柴田(浦)
走高飛

下山(浦) 早山(新) 一米五五 東(山)
鈴木(山) 青木(新)
槍投

早山(新) 四一、三七 江田(浦)
妹尾(山) 金子(浦)
八百米リレー

新潟チーム(蓮池、曾和、井坂、早山) 一分四一秒五分二
山形チーム(東、新山、鈴木、田中)
午後

二百米
早山(新) 二秒五分 田中(山) 市川(浦)
東(山)
千五百米

南雲(山) 五八秒五分四 新山(山)
池田(浦) 大槻(山)
ホッブスラッブエンドジャムブ

東(山) 十二米二四 早山(新)
栗原(新) 原田(浦)
四百米

田中(山) 五七秒 鈴木(山) 大石(浦)
蓮池(新)
高ハードル

石西(山) 一九秒五分四 青木(新)
善波(浦) 鈴木(山)
圓盤投

早山(新) 二七米八五 池野(新)
野田(山) 川名(山)
棒高跳

平山(新) 二米八〇二分一 阿部(新)
中村(同) 栗原(山) 妹尾(同)

鈴木(同) 永井(浦) 佐藤(同)
千六百米リレー

山形チーム(新山、南雲、鈴木、田中) 三分五四秒
新潟チーム

第二回縣下中等學校大會(十月三十一)
百 米(豫選)

一回 四方田(埼師) 十二秒八 藤野(川中)
二回 平井(埼師) 十二秒二 山崎(浦中)
三回 大河原(川中) 十二秒五 榎本(粕中)
砲丸投 (埼工)

一 柿沼(齋師) 一〇、九五米 本澤(埼師)
黑瀬(埼師) 金子(埼工)
八百米 (豫選)

一回 櫻井(埼師) 二分三二、四 關根(川中)
柳下(浦中)
二回 西海(川中) 岡田(埼師) 關口(熊中)

八百米リレー (豫選)
一回 埼師チーム 埼工チーム
二回 川中チーム 粕中チーム

走巾跳
小林(埼師) 五米八四 武井(埼師)

高橋(不中) 長濱(不中)

八百米 横内(川中) 池谷(埒工)

四百米 (豫選)
一回 大川(粕中) 一分二秒四 越智(熊中)
二回 茂木(埒師) 五八秒八 山川(熊中)
三回 鈴木(埒師) 一分一秒四 秋松(浦中)

八百米 櫻井(埒師) 二分一秒 岡田(埒師)
關根(川中) 西海(川中)
ホツプステツプアンドジャンプ(埒師)
中村(埒師) 十二米〇四 黒澤(埒師)
藤野(川中) 高橋(不動岡)

走 高飛 押田(埒師) 一米六〇 大久保(埒師)

岸田(川中) 四等八名

八百米 リレー(決勝)

百 米 (決勝)

四方田(埒師) 十二秒 平井(埒師) 大河原(山中)

百 米 第二回運動會記録

藤野(山中)

百 米

五千 米

一回

白石(埒師) 島野(埒師)

善波

圓盤 投

笠井

關根(埒師) 二五、四六五 土屋(埒師)

三回

柿沼(埒工) 石川(熊農)

齋藤

四百 米 (決勝)

四回

茂木(埒師) 五五秒八 鈴木(埒師)

五回

山川(熊中) 越智(熊中)

六回

槍 投

七回

櫻井(埒師) 三九米二九 黒瀬(埒師)

八百 米

二百 米

高ハールドル

善波 二十秒 若宮

槍 投

一回

齋藤

二回

松本

三回

對類選手競技

四回

市川(文乙)

千五百 米

近藤(理乙)

大庭

走 高跳

四百 米

守屋(文甲)

森

深井(理乙)

低ハールドル

若宮(理乙)

一回

下田成(文甲)

砲丸 投

下田成(文甲)

走 巾跳

圓盤 投

松本

下田成(文甲)

走 巾跳

下田成(文甲)

圓盤 投

下田成(文甲)

金子

宮村(文丙)

ボツプステツプエンドジャンプ

保坂(文乙)

走 高飛

永井(理甲)

下田切

永井(理甲)

走 高飛

永井(理甲)

藤本(文甲) 尾崎(文丙) (三等四等同點)
 四百米 宮村(文丙) 一分 市川(文乙)
 池田(理乙) 守屋(文甲)
 走 巾飛 原田(文丙) 五米二〇 佐藤(理甲)
 馬場(文甲) 保坂(文乙)
 砲丸投 金子(文丙) 十米三八、五 梅澤(理乙)
 小山(文乙) 土師(文甲)
 千五百米 池田(理乙) 五分三秒二 森(文甲)
 池田(理甲) 野崎(文丙)
 槍投 近藤(理乙) 三八米七〇 江田(理甲)
 金子(文丙) 大場(文乙)
 八百米リレー 文丙チーム 一分五十秒四 文乙チーム
 文甲チーム 理乙チーム
 功學院練習試合(十一月十八日)於學習院トラック
 百米

一 市川(浦) 十二秒五分一 二 小山(浦)
 三 宮林(浦) 本田(學)
 砲丸投 金子(浦) 十米六八 二 小山(浦)
 三 梅澤(浦)
 八百米 一 北大路(學) 三分三秒五分二
 二 川上(學) 池田(浦)
 ホ、スチエヂャンプ 一 宮村(浦) 十一米九八 二 岡部(學)
 三 市川(浦)
 高ハードル 一 岡部(學) 二 齋藤(浦)
 走 巾跳 一 岡部(學) 五米六八 二 南部(學) 五米六〇
 三 金子(浦)
 二百米 一 北大路(學) 二五秒 二 宮村(浦)
 三 市川(浦)
 走 高飛 一 岡部(學) 一米六一五 二 岡部(學)
 一 岡部(學)

三 守屋(浦) 低ハードル
 一 岡部(學) 三十秒 二 南部(學)
 三 若宮(浦)
 圓盤投 一 岡部(學) 二五米八三 二 水野(學)
 三 金子(浦)
 四百米 一 北大路(學) 五八秒五分一
 二 宮林(浦) 三 大石(浦)
 棒高飛 一 南部(學) 八呎四 二 佐藤(浦)
 三 永井(浦)
 千五百米 一 川上(學) 五分十七秒 二 北大路(學)
 三 池田(浦)
 槍投 一 岡部(學) 四一、三二
 二 近藤(浦) 三八米二五 三 金子
 八百米 浦高チーム 一分四五秒
 得点 學習院四十七點五 浦高三十八點五

對本校第一高等學校競技會
 百米 一 市川(本校) 十二秒五分ノ二
 二 白川(二高) 三 關口(二高)
 砲丸 一 梅澤(本校) 九米五九
 二 張(二高) 三 小山(本校)
 八百米 一 多賀(二高) 二分二六秒五分ノ四
 二 張(二高) 三 守屋(本校)
 走 巾飛 一 關口(二高) 五米四〇
 二 市川(本校) 三 佐藤(二高)
 二百米 一 市川(本校) 二十五秒五ノ三
 二 西村(二高) 三 白川(二高)
 走 高飛 一 吉村(二高) 十一米五〇二五分ノ一
 二 守屋(本校) 三 保柳(二高)
 ローハードル 一 北村(二高) 三十二秒五分ノ一

二 關口(一高) 下田功(本校)

大正十三年四月二十六日
一年級 對類 競技會記錄

圓盤投
一等 張(一高) 二十四米六八
二等 梅澤(本校) 三 香西(本校)

百 米豫選
A 一 辰野(文甲) 十三秒五分ノ二
二 柏浦(理乙) 三 坂倉(理甲)

四 百 米
一等 西村(一高) 一分〇二秒
二等 市川(本校) 小池(一高)

B 一 岸(文丙) 十三秒
二 星野(文乙) 三 佐藤(理乙)

棒高飛
一等 永井(本校) 九尺
一等 白川(一高) 同
三等 吉村(一高)

百 米決勝
一 辰野(文甲) 十二秒五分ノ三
二 柏浦(理乙) 三 岸(文丙)

槍投
一等 近藤(本校) 三十九米五七
二等 松本茂(本校) 三十五米四六
三等 梅澤(本校) 三十四米三五

四 百 米決勝
一 辰野(文甲) 一分〇三秒
二 川田(文乙) 三 土岐(文丙)

一五〇〇米
一等 多賀(一高) 五分十五秒
二等 張(一高) 三 池田(本校)

一五〇〇米決勝
一 星野(文乙) 五分五〇秒
二 川田(文乙) 三 奥井(理乙)

八百米リレー
一 高チーム 一分四十六秒五分ノ三
恩田 西村 關口 小池

一八〇〇米リレー
一 文乙チーム 一分五十五秒

星野 舟山 草間 川田

走高飛
一 辰野(文甲) 五尺
二 草間(文乙) 四尺八五

砲丸投
一 舟山(文乙) 一一米一〇
二 小山(文甲) 九米二四
三 中西(理甲) 八米八三
四 土師(理乙) 八米八〇

棒高飛
一 舟山(文乙) 二〇六
二 中山(文乙) 二〇六
三 小山(文甲) 二〇六
四 山根(文甲) 二〇六

圓盤投
一 土師(理乙) 二二米五七
二 土師(理乙) 二二米一七
三 舟山(文乙) 二〇米五七
四 渡邊(文甲) 二〇米三四、五

對校競技豫選
大正十三年五月十一日

槍投
一 蓼沼(理乙) 三三米一〇
二 中西(理甲) 三三米一〇
三 肥田木(文丙) 三〇米八八
四 小山(文甲) 三〇米一〇

○百 米
井上(十三秒) 市川 大石

走巾飛
一 辰野(文甲) 五米六四
二 舟山(文乙) 五米三八
三 肥田木(文丙) 同
四 柏浦(理乙) 四米九二

○八百 米
池田(二分二五秒) 川田

走巾飛
一 辰野(文甲) 五米六四
二 舟山(文乙) 五米三八
三 肥田木(文丙) 同
四 柏浦(理乙) 四米九二

○四百 米
大石(二分一秒) 市川 木下

走巾飛
一 辰野(文甲) 五米六四
二 舟山(文乙) 五米三八
三 肥田木(文丙) 同
四 柏浦(理乙) 四米九二

○二百 米
市川(二六秒十分ノ二) 大石 井上

走巾飛
一 辰野(文甲) 五米六四
二 舟山(文乙) 五米三八
三 肥田木(文丙) 同
四 柏浦(理乙) 四米九二

○砲 丸
金子(一〇米九五) 船山(二〇米七二)
鈴木(九米八九)

○圓板

香西(二四米六一) 金子(二三米六一)
梅澤(二三米二四)

○槍投

近藤(二八米五二) 松本(三四米九三)
梅澤(二三米)

○雨天ノタメ中止
大正十三年五月十七日(土)

對帝大醫學部練習試合 於帝大トラツク

百米

一 大村(帝) 十二〇五分ノ一
二 辰野(浦) 三三 市川(浦)

砲丸投

一 金子(浦) 一一米〇三
二 舟山(浦) 三三 村山(帝)

八百米

一 池田(浦) 二分十七秒
二 村松(帝) 三三 川田(浦)

走巾飛

一 下山(浦) 六米〇八
二 辰野(浦) 五米七六

圓盤投

一 柴(帝) 五米七四
二 吉野(帝) 二八米六〇
三 北原(帝) 二六米〇二

金子(浦)

二五米一二

砲丸投

一 本多(學) 十一秒五分ノ二
二 舟山(浦) 十一米一九
三 金子(浦) 十米九八

八百米

一 岡村弟(學) 十米六三
二 北大路(學) 八三 德川(學)

走高飛

一 辰野(浦) 一四四 南部 下山
二 岡部(學) 三三 南部 下山

圓盤投

一 中村(學) 二五米七七
二 岡村弟(學) 二五米四九
三 水野(學) 二五米二三

走高飛

一 辰野(諸) 一米五八〇
二 下山(浦) 三三 高(帝)

四百米

一 大村(帝) 五十七秒
二 大石(浦) 五十七秒五分ノ四

棒高飛

一 永井(浦) 三三 架(帝)
二 佐藤(浦) 三三 舟山(浦)

二百米

一 大村(帝) 二十四秒五分ノ二
二 辰野(浦) 三三 市川(浦)

槍投

一 北原(帝) 四五米七五
二 近藤(浦) 四一米二〇
三 浦本(帝) 三八〇

ホ、ス、ジ

一 北原(帝) 一一秒七二
二 下山(浦) 十一米七一
三 辰野(浦) 十一米三五

一五〇〇

一 池田(浦) 五十分一秒五分ノ四
二 大村(帝) 三三 星野(浦)

八百米リレー

帝大チーム
浦高チーム (辰野 齋藤 市川 大石)

走巾飛

一 辰野(浦) 五尺九一
二 下山(浦) 五尺八七
三 大村(學) 五尺七九

一五〇〇

一 北大路(學) 四分五十六秒五分ノ三
二 池田(浦) 三三 德川(學)

ホ、ス、チ

一 中村(學) 一二米二三
二 岡部(學) 一二米〇三
三 下山(浦) 一一米五一

槍投

一 岡貫(學) 四三米三〇
二 近藤(浦) 四一米八七
三 吉見(學) 三九米七〇

ローハードル

一 岡貫(學) 二八〇五分ノ四
二 水野(學) 三三 齋藤(浦)
三 永井(浦) 九呎

本校對拓殖大學練習試合(於駒場トラツク)

走中飛 下山(浦) 五米九八 辰野 金子
ホ、ス、チ 下山(浦) 一二米二四六 宮村(浦)

蹴球部

二百米 岡田(拓) 大石(浦) 二秒四分ノ四

辰野(浦) 市川(浦) 二秒四分ノ二

四百米 岡田(拓) 五秒五分ノ四

大石(浦) 二秒四分ノ三

八百米 池田(浦) 二秒四分ノ三

池田(浦) 二秒四分ノ三

千五百米 池田(浦) 四分五二秒

星野(浦) 四分五二秒

八百米リレー 浦高チリム 一分四〇秒五分ノ一

齋藤 市川 大石 辰野

砲丸投 金子(浦) 一〇米〇八

森(浦) 岡田(拓) 一〇米〇八

圓盤投 三(拓) 二七米二二

佐藤(拓) 金子(浦) 二七米二二

槍投 近藤(浦) 三八四〇

一(拓) 金子(浦) 三八四〇

走高飛 辰野(浦) 一六六〇

小林(拓) 一六六〇

下山(浦) 一六六〇

陸上運動部に蹴球部が含まれてゐる。蹴球に關して學友會設置當初部員を集めてラ式を採用するかア式を採用するかを相談し、遂にラ式蹴球と決めた。ラ式蹴球たる男性的の男性的なるものである。寒風吹きしる中肉弾に加ふるに肉弾極度のフイテンブスビリットを要するものである。痛快此の上なき眞に血渾き肉踊るの概がある。吾々が敢てこれを採用した。亦故無しとせない。然して關之も帝大の齋藤圭司氏に指導せられたのである。即ち數回に至り寮生の大半は氏の講話によつてラクビーの如何なるものかを知りその痛快なる所以を知つたのだ。而して昨年於て早大出身の中村元一氏の熱心なるコーチによつてチームとしての活動をなすに至つたのである。試合も随分してゐる。第一年に於てはロー一高戦に惨敗し第二年に入つて、對高師戦に勝ち、對立教戦に裕々と勝を占めた。然し對一高、對商大、對早高、對帝大旅行部夫等には一時を鏖したのである。

勿論實力で敗れたのだ。吾々のチームは日も浅い、吾々は更に一大努力を拂ひ覇を天下に唱へねばならない。それには一方是非學友會の一部として獨立せねばならない。これを敢て附記する次第である。

旅行部誌

旅行部 第一回部長 林 先生

委員 藤田 尚 宮村勝男

第二回部長 島地先生

委員 宮村勝男 松原順三

第三回部長 島地先生

委員 宮村勝男 高柳磯五郎

旅行部誌

赤城雪中登之記

運動のシーズンも終つた試験も終つた。

十二月二十七日今夜愈々出發する事になつた。

冬の登山には一度の経験もない自分は夕刻までMの家で所持品の事や、雪中登山の面白い事を充分に聞き十時三十分上野驛に集る事も堅く約して別れた約束の時間に上野驛に著いて見るとTは大分待つたと言ふ様な顔付で立つてゐる。十時三十分と言ひ出したMは未だ來てゐない、驛の大きな時計が拾一時を早指してゐるのに未に見えない、五分……十分……十五分まだ來ない、あと五分しかない、しかもこれが終列車だ。驛前にどまる電車から降りる人も段々少くなつた。その少い人々を多大の注意をもつて見守つたがラン……ラン……と驛では發車を知らせる鐘が盛んに鳴り響いてゐる我々には殊更強く聞える。その時どまりかけた電車から飛降りてMが驛に飛びこんで來た。そのまゝどん／＼改札口目がけて行くTと自分とは切符をもつて追馳ける、どつちが待つてゐたのか一寸わからない、三人が乗り終るや汽車は

動き出した。

汽車の中ではMが汗をふき乍ら遅くなつた事を盛に辯解する曰く「電車が故障したから自働車に乗つたらその自働車が又おそかつたんだよ」だとか

二人がMの服裝を見れば何枚も防寒具をつき大きな袋を脊負つて足には鐵で堅めた様な靴をひきづつてこれでは遅くなるのも尤もだと思つた。雑談に時を費してゐる内に赤羽、浦和、大宮も過ぎて段々寝くなつて來た。夜は早く寢て朝は遅く起るものときまつてゐる三人は眼を開いてゐるのが苦しくなつて來た先づMが寢た様な顔をしたそれを見てゐる内に何時しか自分も寢てしまつた、それ故高崎に著いて眼が覺めるまでTとMがどんな格構で寢てゐたか又如何に凄い話をしてゐたかは一切記す事が出來ない。

此處に降りたのが二時眞世中の事で街も静まりかへつてゐる停車場で愚圖／＼してゐるのもつまらないから眞世中の高崎市中を商賣人の看板を見乍ら散歩した晝間暇めしい顔をしてつゝたつてゐる巡査も大きな聲を出してこの眞夜中に騒いでゐるのもあつた。

夜の高崎市中も一寸變つた所がある。一時間半ばかりの後再び停車場に歸りまゝ驛前のたゞ一軒おきて

た支那そば屋には入った。三人は乗車し、始めは外に四五人いたが段々減つて一行三人と妙に太つた一寸人間ばなれをしたのと四人きりになつた三人は此の寒い夜にあつたかい雲吞シューマイをにこ／＼喰ひ且つ煙草をふかしてすました。すると隣の妙に太つたのと三人の間に變な會話がはまつた。

「君達若そうだが煙草など吸つていいのか」
M「もちい」するとその男少しく憤慨した様に「徴兵検査はまだだらう」

早T「もうすんだよ」

I「(Mを指して)これが甲種合格(Tをさして)これが第一乙種合格」

M「もちい」その男憤慨と不審の表情を一緒にした様な顔でMを見乍ら

「何年生れだ」

M「明治三十五年とうじやな」
「どこの學校だ」三人急に得意に

「浦和高等學校」これが徽章だよ

「何か證明書があるか」この男仲々信用しないあんまり癪にさはつたからこちから

「君は一体何者だえ」と強そうに聞いた

「俺は刑事だ」これはしたり前から時々外の巡查など、話しをしてるのが合点だと思つた。三人は急に周章で、「おい勘定」と一圓拾五錢也を机の上に投げ出してその店をさび出した。停車場でも何だか心配だつた。やつとの事で桐生に行く汽車にのりボーと言ふ氣笛にはつと一安心。

桐生についたのはまだ夜が明けてから間もない事だつた。すぐそばに山々が今眼を覺ました様にうすく灰色にうき出てる黒い土も霜で白くなつて遠くで鳴いてゐる鶏の聲が我々に冬の朝を深く印象づける。

汽車が來たぞの客車の屋根からも煙突が出て煙を出してゐる。客車の中でストーブに石炭を入れてあたり乍ら走る汽車も又外にはあまりあるまい。十時水沼につく

赤城山はまだ見えない併しこゝからが一番近道だと言ふ、近道だけに驛のすぐ前から登りだ、暫く登ると又平坦な道となる緑色の草は少しもない寒い風に吹き倒されて皆黄色くなつてゐる。元氣で二十分ばかり頑張ると赤城山が見えて來た、頂上には雪があるらしい、十一時路傍の枯草の上で晝食をとるパンと大和煮がいやにうまい、腹を充分に膨ましてさつと出發

十二時三十分頃から愈々ほんとの登り道となつた。

大きな靴をひきづり乍らもさも自信ありげにMは除ろに歩くTは不相變輕そうに進んで行く。しきつめられた枯葉をふみしめ乍ら。籠を飾つてゐた林も今は寒さうに頂上から吹き下して來る風に慄へてゐる。

併し我々は息をはずませ乍ら暑さうに登つて行く、自分が一等弱いらしい。胃がグウ／＼鳴る腹が減つた一寸景色のよい所があると前の二人に「とてもいい景色だね」と話しかける二人もやはり休みた

と見えて大してよくない景色を「いゝねー」なんて言つて立留る、又暫く右に左にうねり乍ら登りつゞける機を見て又自分が前の二人に話しかけて一寸休むそれを何度も繰返して頂上に近い茶屋についた。

此處から上は雪はない、こゝで色々な話を聞いて服装を整へる。Mが大きな靴の中を掃除してゐる草靴をはき更へる。

自分はおつき合ひに脚絆を直す。十五分の後再び雪中行軍をつゞける、雪が膝位まで來るとこも眞白だたゞ所々に眞白い雪の中からいやに黒く木がつきでゐる、後の方に見える山も段々我々三名よりも低くなて行く。氣持がいい。

喉が乾けば雪をたべ疲れば雪の上に腰を下し、雪の上につけられた足跡をたよりにすぐ上の頂上に急ぐ足が冷たいが大した苦痛でもない。たゞ膝位までは入る足を一度一度引ぬいて進むのだから相當疲れる。四時頃頂上に達した。どこを見ても近所には三人のいる所より高い山は一寸見當らない登山の面白味は一つはこゝにあるのだらう。

大沼にも圍りの山にも雪が積つてゐる白樺の林が雪の中に淋しく續いてゐる。四圍の風景に暫らくみどれて居ると今迄暑く背中を流れてた汗がすっかり冷てとても寒い

此處から宿屋までは凹地で雪が又一層深い。腿位までは入るその足をひきぬくのも又苦痛だ、それを何回も繰返し、風で雪を吹きつけられ轉つたりして、やつとの事で宿についた。その名を猪谷旅館と言ふ僕等三名と前後して登つた他の二名と我々がこの冬最初の登山者だと言ふことだ。併しその二名は案内人をつけて登つた。僕等はあくまで獨りで道を求めて來つたのだ。我々三人こそ大正拾一年における眞に雪の赤城山第一の征服者と言ふ可きだらう。

宿では雪をとかして湯を沸かして下れたり、衣類を

乾かすために火をききこんでおこしてくれたり、非常に優待してくれた。

湯には入り和服にきかへた時は何ともいへない、氣持だつた。

窓を開けて静かな雪の大沼長く續く白樺の林が段々と夜にうすくくけされて行くのを眺めた時は我々は寸時もこの大自然にはなれる事なく永久に、永久に、これに抱かれてゐたいと思つた、ランプの下で明日の行程を定め偉大な赤城山が靜に眠る時に旅の宿とはいへ我々も又安らかな眠りについた。

二十九日眼をさますと恰度拾時今日の道はMがよく知つてると言ふ。まづ安心とゆつくり支度をと、のへ旅館の前で紀念撮影をし拾一時伊香保に出發した時々雪が降つて来る。

大沼でスキーをして二人に「さよなら」とMを眞先きにたてゝ進んだすると、は雪の中で左へ行つたり、右に行つたり、はては轉がつたりして仲々前進しない、従つて後について行く丁と自分も前進しないやうしたのかと聞いて見ると道がわからなと言ふ。雪が一尺余もつもつて成程道が見えないのも道理だと思つた。

つきりとそびえてゐる、木の枝にぶら下つたり、すべりおちたりして幸にMの言つた通り谷川の所まで降りる事が出来た。併し丁は、はいてゐた膏靴が目茶／＼になりMは奮闘のあとを充分に語る可く足に豆が十二も出来てもはや鐵でかためた様な靴をはいてる事が苦痛らしい、妙な足つきをして歩く。谷川を右に渡つたり左に渡つたりして晝飯をすますに善い場所を探した。谷川の少しくひろくなつて岩の上で握飯三個を呑み込む様に喰べ流れる水を飲んで簡単に而もおいしくすました。

丁がマントを宿屋に忘れてきて雨のため困つてゐる、然しすぐに霽れた。澁川に降りる方は傾斜は緩かだが仲々長いまだ降り終らない中に太陽は赤く妙義山の後に沈まうとしてゐる。

ふりかへれば我々を喜ばせ、又苦しめた赤城の頂上の雪が赤い名残の光にキラ／＼と反射してゐる。あゝ大沼のほとり白樺の林は此の日暮にどんなに美しいだらう。

足に豆だらけのM、足袋洗足の丁と三人で太陽を後に黒くそびえてゐる妙義を眺め乍ら黄昏の道を澁川に急いだ。三人の様子のあまりに物々しいので道に出

もう四五十分経つたのにさよならとさつき別れた筈の二人がすぐ側の大沼で滑つてゐる後をむくと今朝出た旅館が二三丁の所に立つてゐる。この儘で行くと伊香保にいつ著けるか見當がつかない。

三人奮勵努力犬の様に雪の中をとびまわりやつと足跡をさがし出しそれについて大急ぎ、今度は大分進んだらしい宿屋も見えなくなつた。すると又足跡がなくなつた。

前に行つても左に行つても谷右に行けば再び山に登らなければならぬ後に行けばもと来た所にかへつてしまふ。どうしても右に行つて降りる可きものを反對に登らざるを得なくなつた。

は先づその山の上に登つて下を流れる川を見、その川について行けばきつと山を下りることか出来る。と登山家らしく言ふ、成程それに違ひないと丁も自分も何の異議なく従つた。その山の頂上は雪が深くてその上風が強い、おまけに獸の大きな足跡が谷の方にとつてゐる。何の足跡かとさきと猪だと言ふ、猪が来たらしと身をかばはせば猪はツツと眞直にいつてしまふと、獨特の講義を聞いたが何だか心細いはるか遠くには日本アルプスの連峰が雪を頂いてく

會つた、三四人の子供が「山番やーい」などとからかつた。

中々澁川に出ない流石のMも豆が大分痛いらしい、スピードが衰へた。遂々日は全く暮れた。路傍の百姓家に入り道をき、乍ら湯などを呑み一寸休息した澁川をすぎ大分前橋の方に來てゐる由、これはしたりと教へられた通り電車通りに出て澁川に急ぐ。

澁川に著けば伊香保に向ふ最後の電車が出る所、三人痛む重い足を無理に馳させて辛じて飛乗り、伊加保の小暮旅館に入る。温泉に數度は入り九時半頃夕飯をすまし隣室に來合せた僕の中學時代の惡友二人と炬燵の中にもぐり乍ら色々話しをばせ十一時寝りに就く。九時に起きて伊香保の町に草履を買ひに出懸け歸つて僕の惡友二人、一行三人と紀念撮影をして惡友は榛名に行くとて早く出てゐた。

愈々十時何分か汽車で歸る事になつた。旅館の出口には兩側に數人づゝ女中が立列んでゐる。その中を靴をぶら下げて大きな袋を背負つて足に豆だらけの者、同じ様にきたない袋をかつぎ草履をはいてびつこをひいてゐるもの、バク／＼の靴をはいてゐる者、三人が「御機嫌よう」の聲に送られ乍ら裕々

と出るのも又壯觀だつた。

汽車の窓から思ひ出の深い赤城を眺めると苦しかった事も、今はすべて却つて面白い思ひ出となつて三人の口から出てくる。

高崎で乗換へ、見えなくなる山々に名残を惜んで上野驛に著いたのは大正拾一年も終らうとして人々が歳越の準備に忙しい十二月卅日の午後であつた。終

(Mは宮村 丁は武内 一は池知)

關 溫 泉

第一回スキー練習記

「おいスキーで面白んだつてな」

「そうだつて、一つ此年の冬出掛けて見やうか」

「滑べれる滑べれないは別としたつて、雪の中を轉りまわるだけだつて痛快だよ」

こんな話から簡單にスキーをやるといふことが決つたのは休みに間のない十一月の終りのことだつた然し愈々行くとそう簡單に行かぬものだ。

先ずスキーを買はねばならぬ。行く先を調べて宿屋も間合はさねばならぬ。曰く何、曰く何と。それでも學期試験迄には委員宮村の斡旋に依つてスキーも十

臺アルペン式の奴を買つたし行く先も信越線關溫泉といふことに決つた。

師走二十五日の夜八時本當の浮世を外にいふ形で新潟行の急行に乗つたのが僕等七人、宮村、武内、原田、上原、坂上、清水、村田の連中だつた。車中の話は自とスキーに傾いて行く、然し此の一行のうちどの一人さへもスキーに對して經驗を持つてゐないのだ従つて其の話も實に出駄羅目なものである。兎も角其の支度を見ても解つたであらう。二三の者を除いてはリュックサック等を携帶して來た者はない、大きなトランク或は鞆等を持つてゐる、而かも大切な靴さへ履かずに下駄履の奴も居るのだ。無謀と云ふか、大膽といふか、然しそれ自身に至極平氣なもの一角のスキーランナーの積りで吹く事物凄いのである。

明け方の四時僕等は關に下車した。宿屋からの出迎への人が待つてゐた。驚いた事に何より第一の雪が全然ないのだ。遙かの山にそれらしく思はれる様の白いものが見える許りだ。誰かの不満の聲がする聞いてか聞かでか宿屋の人は

「今年はえらく雪の降り方が遅うましては一年は

もう今時分こゝらは一面の雪なのですが」

終りの東京辯なのかひどく氣になつた

「然し山は二三尺の雪がありますからスキーは立派に出來ますは」

兎も角荷物は人夫に頼んで各自スキーを擔いで二里の山道を溫泉へと向つた。

「本當に雪は降るかね」

「當り前よふらねえ處に來るかい」

「そんなに威張つて途中でへたばるなよ」

快活な話聲が明け方の薄暗を破つて殊更にはつきり響く、道は林の間をぬつて次第に登つて行つたものゝ十五六丁も來ないうち貧弱な上原の奴スキーをほり出してしまつた。

「とても肩がいたくていけない誰か持つて呉れ」

「貧弱な事を云ふな頑張れ」

然しもう大低スキーをおろしてしまつた、そして僕達はそこに暫時息を付くことにした。額に心地よい程の汗がにじんで來た。こんな事を何回となく繰り返してかれこれ二時間の後(僕達が)小さい溫泉の流れを渡つて「旅人宿富山屋」と云ふきかない看板の掛つた宿屋についた時僕達は眞冬と云ふに幾度も額

の汚を拭はなければならなかつた。

都には珍らしいせんまいの味噌汁だつた。僕達は朝飯をかつこむや否やスキーをかついで出掛た。難然と勝手の方角に向つて立つてゐる五六軒の宿屋の間を通つて丁度擡鉢を二つに割つたその底の様な廣い練習場についた、こゝいら一帶は成程一二尺に雪が一面にある然し餘程前にふつたものと思へて可成の固さになつてゐる。さつきの案内に來て呉れた人がスキーの姿になつてやつて來た。その人は僕達に當分スキーをコーチして呉れるのだつた。

「こゝの金具の間に靴の先を入れてしつかりバンドで止めます、それからこつちのバンドで足首の處にしつかり後金をしめ付けます。それから今ではないのですが足を揚げてスキーがぶらんくするやうでしたら。この金でこゝを開けて中のハッジョを締めないといけません。

一々丁寧に説明して呉れた。そして尙歩行及登行について色々注意をして呉れたさて愈々滑るのだ。あんなやんその人は宿屋の息子であるそしてあんなやんと呼ばれてゐるのだつた。その後について少し傾斜の方に行つた何だか身體の中心がとれない様な氣が

して非常に歩きにくい。

「一番最初に直滑行をやるのですが、こういう風に兩足を前に出して出来るだけ後足に重味を掛けます、ちよとやつて見ますから」

云ひ終るか終らないにあんちやんは滑り出した。本當にスーと滑つて行つたをして一寸腰を下すとぐるりと右に曲つて止つた何のこたはりも無さうに兩杖を突き乍ら登つて來た。

「それから皆さんは單杖をお持ちのやうですがそれは反つて邪魔になりますからお使ひにならない方が宜しいでせう」

何にも知らない僕達は一世紀も前に使つたやうな單杖を持つて來たのだつた。

やるぞ、宮村が最初に滑つた兩手を左右に舉げて尻ビリ腰で、身體が二三度左右に振れたかと思ふと

「いげねえ」

ばつたり横つ倒しに倒れた。皆が笑つた、然し各自／＼がやり出した時總てが一間か二間の範圍を出る事が出来なかつた。それでももう僕達は夢中だつた夢中で滑り夢中で轉つた、笑聲悲鳴が絶え間無く起る。

る。

「あ、良い氣持だ」

「本當に山の中の温泉に入つてゐる氣持がするね」ランプが一つ柱の三尺位のところにポーとどまつてゐる。ごぼ／＼音を立て、流れ込む温泉の音、黄褐色にしみ込んだ湯ぶね、屋根裏をさらけ出した天井總てが山中の温泉であり、ひなびた温泉である、と歌ひ出した校歌は寮歌となり。應援歌となり「もし／＼龜よ」となつて忽ちその静かな空氣を打壊して行つた。あげくの果の湯合戦は若しも一人の詩人がそこにゐたとしたらばどんなに彼を嘆かせたことだらう。

夕餉の後不自由のランプの下での雑談はミルクの無い紅茶と一緒になつて僕達の友情を増した。

突然

「助けて呉れ」

雪の上にスキーだけ二本バタ／＼動いてゐる、僕達が急いでその周りに行つた時それは非度く轉倒したことによつて一人がスッポリ雪の中に埋まつて仕舞つてゐるのだつた。そして僕達はそれを發掘する爲に色々のことをしなければならなかつた。然し此の

「おいあれを見る」

原田の指さす方を見ると上原が一生懸命にスキーと角力を取つてゐる。餘程變な風に轉んだと見える。

「俺もう滑れるぞ」

武内は得意である。

「嘘をつけんならやつて見ろ」

滑つた。成程滑れる、然し五六間も行つたかと思ふと我慢してゐたものを一度に吐き出すかの様に具體的に云へば水泳に於ける飛び込みのやうに手を前にして雪の中にとび込んだ。ワツと笑聲が擧る。

飯の食ふ間も惜いやうな氣持で晝食をかつこんで再び練習所にとつて返した。未だ人影のまばらなのを幸ひと、勝手氣まゝに轉り且つ滑つた。山中の日暮は殊に早かつた。遠い山が夕日に赤くなつたともうそれはすぐ灰色にかすんでしまつた。そして僕達の周圍も又夕暗に包まれてしまつた。

宿に歸つてどてらと着替へて温泉に行く。この温泉は温度の關係から内湯がないのだ。すゝけた格子戸を開けるとづんと湯の香がする、蒙々とした湯氣が一抔こもつてゐる。どてらをぬぐなり一勢に湯ぶねにとび込んだ。黄色い不遙明な湯がザーと溢れ

發掘はそれからそれへと起つて來た。「助けて呉れ」

それ發掘だ、僕達はむしろ痛快に感じる程だつた

段々に上手な人達が之へ來た彼等はどれ程その良い雪を氣持よく愉快に使用したことだう。兩杖を持つて電光形に山の中腹に登つて行くそして可成りの高さに達するとスーとスタートを付ける。くつきりとした一直線のスプールを後に引いて本當に矢の様な速さで降りてくる。そして平地に達した時一寸腰を下して綺麗な半圓を畫いて停止する。と再び又杖をついて登つて行くのだ。その人達の前半分は雪煙の爲に眞白になつてゐる。中にはより高い處から右にまがり左に廻り廻りて見事な曲線を書いておりて來るものも居る。僕達が眞白になつて晝飯を食ひに行く時分には山の中腹は直線と曲線のスプールによつて美しい模様が書き出されてゐたのだつた。この時分から僕等はそれのぐる／＼と廻つて止るテレマークなるものを教つた。そして前提としてテレマークボジションの稽古に夢中になつてゐた。

この翌日あたりから下から温泉に上つて來る人は急激に増した。昨日は慶大の連中が來た今日は帝大と一高だといふ風にそして僕等の宿屋は帝大と一高

の連中で一つ杯になつて仕舞つた。一高の委員が挨拶に來る此方からも行く。同じ高等學校である氣樂さはこの宿屋中に何とない暖いゆとりさを感じしめるのだつた。山の宿屋にも元旦が來た番頭がしかつめらしく年賀の御祝儀を述べに來たとして大きな餅の入つた雑煮に始めての雪に包まれた正月を迎へたのだ。雑煮を食つた然し其の後は矢張り滑つたり轉んだりの元旦だつた。其の日の夕方上原清水坂上村田の四人は東京の正月を戀してか山をおりて行つた二日の朝約束通り加治木が登つて來た

「こゝろいふ風に少し足を前に出して重味を後に掛けて滑るんだよ」

「少し角な急な處は脚をひろげてこうして登るんだよ」

後から來た悲しさには加治木奴べしやんこにおさへられてしまつた。前の二人は盛んにテレマークを振廻してゐる。三人は加治木の轉り方が面白いと云つて三段論法なる名を付けたといふわけは彼は平常體重が上にあることで有名だつたのだ、従つて其のころがり方も一度尻をついてそれから肩をついて最後に頭をつける可笑しさの爲だ。此の頃からよく雪

泉がごぼ／＼流れてゐる許りだ。

「御免なさいまし」

あんちやんが入つて來た

「未だ二三日おいですか」

「え、居る積りです、然し随分さみしくなりしたね」

「はあもう一週間もしたら早此土地の者だけですからそりあつらいゝです赤倉へおいでになりませんか御案内しますが」

僕等は何の考へる處もなかつた

「えゝ行きませういつ」

「明日天氣が良かつたら出掛けますか」

あんちやんはそれから色々スキーの話をしてくれたとして再び

「明日天氣でしたら出掛けます」

と云つて部屋を出た

僕等は只もう譯もなく嬉しかつた谷もこえて赤倉に行くそれこそ本當にスキーをやつた事になるだらうとしてそれは先に歸つた連中を壓へてやるには實に充分なものだと思つた

翌八日は來た。然しそれはひどい吹雪だつた僕達二

がふる殆んぞ毎日ふつて居る、練習場の人は數百といふ多人數になつた。そして今日は帝大の連中が赤倉に冬を越しに行くとか昨日は一高の連中が春井澤に行つたと聞く丈でむす／＼する話が毎日温泉の中で聞かれるのだ。

もう皆の顔は雪焼で眞黒だ強い雪の反射を避る爲の黄色の眼鏡のあとだけが白く残つてゐる。

五日の夕方原田は京都に歸る可く山を降りた。七日には宮村が（急用あり）の電報で明雪の中をひた下りに山をおりて歸り初めたのだ。練習場に入る度に人數はへつて行く。リュックサックを背負つた連中が形の如く宿屋の上にある練習場に上つて來てなじみの人達に分れを告げては高い所からすべり下りて大きな杉の木の間消えて行くのだつた。

どう／＼武内と加治木だけになつてしまつた。今時分皆學校に出てゐるんだがなあと思ひながら二人は相變らず滑ることに夢中だつた。絶えず廊下を歩く音と話聲のたえなかつた宿屋も僕達二人になつては實に静かなものだ。いつも騒々しい迄に聞えた湯ぶねの中の歌の聲も聞えなくなつた。只相變らず温

人は宿屋にぞちこめられねばならなかつた。

九日の朝愈々二人はあんちやんに案内されて赤倉に向つた練習場を横切り峯根のすそを廻つて屋根だけ出てる神社の傍を脱けると谷の上に出た岡の下に赤黒い水が流れてゐる。向ひの峰續きに妙高山が南畫にでもありさうな姿を見せてゐる。そして谷川の邊の上手に蒸温泉の宿屋が三四軒雪にうづもれて見下ろされる

「。いゝですか私のあとについて降りて來て下さいそれ兩杖はこう云ふ風に一緒にして絶へず山側の方につゝばるのです」

あんちやんは降り初めた殆ど直角に近い絶壁を何の難作もなく右にまがり左にかわして降りて行く見る／＼うちに少なくなつたとして未だ僕達のおり始まらないうちに河原の平地に立つて上を向いて手招きをしてゐる

何だか恐ろしい氣持がして來た若し間違へば下迄落つてしまふのぢやないか、下であんちやんが盛んに手招きをしてゐる、まゝ僕達はおり出した滑る早い尻もちをつく／＼してそのまゝ二三間づゝ落ちる。もう目茶苦茶だ自分勝手の方に勝手な角度

をとつて轉つた方が早いかも知れない位な有様でそれでも下へ、とおりに行つた。

「なか／＼勇敢なすべり方ですな」

あんちやんは笑つてゐた、雪を拂つて谷川を渡つて今度は向ふ側の絶壁を登り初めた。そこで僕は矢張り幾度も方向を變へて電光形に登つて行かねばならなかつた。そして楓の枝の間をやつとぐりぬけてかれこれ二時間の後頂上に達することが出来た。身體中汗でぐつしより帽子をとつた皆の頭からは湯氣が立つて居た。

寒い日本海から吹上る風に吹かれながら晝飯をしたゝめた。握飯、もち、みかん、サイダー等總て山海の珍味だ。

「ほれあの向ふの方に黒くかたまつた杉が見えなせう。それから五六軒の家と」

なる程遙か下に箱庭のやうな家のかたまりが見える「あそが赤倉温泉ですよ」

二人は歡呼の叫びを擧げた。その時の氣持それはやうやく探し當てた戀人の家を遙かに望んだ時の氣持とでも云へやうか。もう疲れも何も忘れて仕舞つたのである。

に懐かしい東京の新聞を見るに餘念がなかつた

「おいえらい事があつたんだね」

「うむ山本内閣總辭職だね長いこと山に居ると自然世間にうとくなるね」

僕は始めて某重大事件を知つたのだつた

翌朝吹雪はやんだ日が出てゐる十時頃再び關に引返すべく出發したのだ、僕は再び谷川を渡る時分から又吹雪になつて來た、そして以前の神社あたりに來た時それは可成に非度くなつて時々物凄い山鳴りさへ伴つて來た。宿屋の炬燵に二人が疲れた身體を温める間もなくあんちやんが未だ雪を落しきらないさつきの姿でやつて來た。

「どうも偉い雪になりそうですが、今のうちにお歸りにならないで」僕は困つた今赤倉から歸つた許りだ。相當つかれてゐる。時計を見れば四時だ今から支度して出掛くとしても四時半頃にはなるいくから早く下れても町に着くのは五時だ。恐らく途中で日が暮れてしまふだらう

然し若大雪にとじこめられれば又此處に二三日居なければならぬ流石に學校のことも少しは氣になる「今笹屋に學生さんが二三人登つて行きましたが今

「大部様子が變ですなひどいやつが來ない中に降りてしまひますか」あんちやんは漸く強くなりかけた大風をきにしながら云つた。今迄見えた妙高の頂上もそこの山も皆姿をかくしてしまつたそして赤倉もかすんでしまつた。

僕はひた降りに下り初めた氣持のよいスロープは何のこたはりもなく下へ下へと僕達をばこんで行つてくれた。所々につき出た針葉樹の黒地上のすべてを覆ひ隠せる白この二つの色より他何もない果しく續けるスロープその上を唯一條のスプールを残して滑走する。心持、詩にして可か歌にして可か唯スキランナーにのみ許されたる氣持であらう。一里半の道も僅か二三十分で赤倉に達したそして高田屋と。かゝれたあんちやんの下をくぐつた時はかれこれ二時頃のことであつた。

早速でたらに着かへ温泉に入るきれいだ實にきれいだ埃一つない透明な温泉は關の黄色い温泉に入つた僕はをどんなに嬉せたことだらう

吹雪は次第に強くなつて來た湯殿の窓にかゝる雪はさあ／＼音を立てゝゐる途に其晩僕は高田屋に宿らなければならなかつたそして久し振りの電燈の下

すぐ行けば道も解ることゝ思へますが」

あんちやんはしきりに歸ることをすゝめるやうだ

「おいどうしやうか」

「そうだね日が暮れると困るけど」

「いや何でも下に降り行けばどこかに出るだらう」

「降らう」

僕は遂に山を降ることにしたやうやくぬいだ雪だらけの服を又々きなければならなかつた。

「さようなら」

「氣を付けておいでなしましよ」

「又春には是非、御待ちしてましよ」

僕は吹きまくる吹雪の中を一散に下へ／＼と滑り始めた右をみても左をみても何處をみても只眞白だヒューと音を立てゝ吹きつける風は雪をまきあげて幾度も／＼二人の行手をさへぎつた。かて、加へて前通つたスキの跡はともすればあとを消すのだつた。そして其の度毎に僕は止つてそれを探さなければならなかつた。

豫定の半分も進むことは出來ない吹雪は益々激しくなるそれに連續的に來る山鳴りは何とも云へない恐ろしさを感ずるのだ。

二人は無事だつた。然しお互ひに共通の恐怖と焦燥の氣持はたゞ先へ／＼と急がした。然しやうやく全體の半分も來たかと思ふ處でとう／＼日は暮れてしまつた。頼りにして來たスプールは全然見えなくなつてしまつた、吹雪は益々その勢を強めて來た。突然眼の前に眞黒い大きなものが現れた。森林だそれを通り抜ければ町に出られるのだが困つた事には何處を通つてよいところだかわからない僕達は右に行き左に行きして道を求めた。

「あつた」

ちよつとした木の切れ目の所にかすがだが確にまゐいあがある、兩杖のあとだ、嬉しかつた本當に嬉しかつた。僕達はそこから眞しぐらに林の中に進んで行つた

「うわ」

「御免／＼」

ばつさり一人は雪の中にひつくり返つた
先に行つた武内に後から加治木が衝突してしまつたのだ、鼻を摘まゝれても解らない林の中はこふした事が幾度となく繰り返へされたのだ
不意にスロープが急になつた何だか下に凹凸を感じ

始めたそして重苦しい氣持の國から出たやうな氣がした。町の端れに來て居た。ポーとした火がぼかり／＼と見える

「おい町だよ」

「とう／＼來たね」

驛前の都屋の前でスキーを外した時二人の氣持は何とも云はれない安らいだ氣持だつた

「随分ひとかつたね」

「全く恐ろしくなつちやつたよ、俺は道がわからなくなつて一晩中山中をうろつくのかと思つて心細くなつちやつた」

「おいビールを一本御祝ひしやうじやないか」

「よかるー」

やがて一本のビールは少さい命びろいの祝に持つて來られた

「始めて來てえらい目にあつたねでもいゝ思出さ」

じつと目を閉ると今迄のことが總て浮んで來るとれもこれも懐しいもの許りだ

九月廿七日汽車はこの懐しい土地想出深い土地關を後に吹雪の中をひた走りに東京へと走つた。

水泳部誌

水泳部

第一回部長 龜山先生

委員 調所 彰 田中雄哉

第二回部長 龜山先生

委員 調所 彰 田中雄哉

第三回部長 柳屋先生

委員 手代木 治兵衛 花房東二

水泳部誌

富浦の合宿

大正十一年の夏は悪疫にたゞられて部として何の仕事も出来なかつた。もつとも富浦の富浦館で合宿することにはなつてゐたのだが部として何の補助も設備も出来ないのだから要するに宿屋住まひの海水浴になるだけの事たつたのだ。

大正十二年。の夏から貧弱ながらも幾分の豫算の経上にあづかることになり、従つてそれに相應した活動は出来たわけだ。富浦館の方はこの年はうまく行かなかつたので場所の選定に非常にまごついた。部長龜山先生や委員の田中君と房州をあちこち飛びまはつて、それでも矢張り結局富浦に定つて貧弱な寺を借りることが出来た。土地の有力家に頼み込んでやつと見附けた寺は、正覺寺といふ無住の三十疊そこ／＼しかない破寺だつた。けれども富浦には剣道部も合宿することになつたので、二つの部が合してやつて行けることは何かにつけて便利だつた。それに剣道部には善波、川内御大をはじめ豪傑連が多かつたので何となく氣が強いやうな氣がした。

寺から海は近い僅か二三十間だら／＼降りると汗で後ろは山、少しの庭には松も生えてゐる、悪い景色ではなかつた。

七月十日 試験が終ると早々に賄をつれて富浦へ、炊事の準備風呂桶等の用意萬端、十二日部員の來泊を待つばかりになるまでは目の廻る忙しさだつた、二三日経つうちに部員の顔も大分揃つて三十人を越したらう。三十疊の座敷に三十人の部員は樂ではなかつたかも知れない、委員たる僕達はこれに就いて黙つてゐなければならなかつた。部員諸君一溫しい部員諸君はそれに就いて勿論何の不平も洩らさなかつた。龜山部長だけは剣道部の長村先生と一緒に他の少し綺麗な家に奉ることが出来たが、コーチャーの岡田氏は僕達と一緒に腐りかゝつた疊の上に毛布一枚にくるまつてゐるが、つてゐてもらはなければならなかつた。實際好意を以て來て下さつた氏に對して濟まなかつた。人員も揃つた。コーチャーも來た。「愈々泳ぎだ」といふ頃から雨が降り出した。翌日はやむかと待つてゐた雨は、翌日はもつともつと強く降つた。その翌日も、翌日も、稀に雲がきれて薄い日の光でも見やうものなら、皆争つて水に親まう

とした。けれども雨に冷された水は僕達を歓迎して呉れない、僕達は冷たさに震へあがつた、かうした晴れ間でさへ一時間とはつづかない、雨が降る、薄闇い寺の座敷にとちもつて、トランプもらんまはしも倦きたころ外では雨が降つてゐる、終には風さへ交へて、皆んな如何んなにか空をにらみつけたらう、夕方夕焼けに似た西の空をみつめて明日の快晴を願つた。「水泳部といふところは泳ぎに来る處である」と明かに意識してゐる賢明な人達は苦しみだした。夏、海の傍にゐて泳がないといふ事は生活の浪費であるといふ事を自覺して一部の人達は富浦を去つて行つた一部の勇敢な人達は雨の中に泳いだけれども雨は僕達には無關係に依然として降つた。寒かつた、僕達にはそれが七月であるのか寒中であるのか了解に苦しむ程寒かつた。尤も新聞紙上に「この七月は何十年來の記録を破つてまるで寒中の様な夏である」とも何とも書いてなかつた處をみると矢張り普通の七月であつたのかも知れない、たゞかうした涼しい時に泳がなければならぬといふ義務感念が僕達をしてそんなに寒く感ぜしめたのでもあらう。そして全く僕達がうんざりさせられて、ト

ランプにも倦き、らんまはしにも疲れて十九日に東京へ歸へるまでほんとうによく降りつづいた。そして面かもその日東京で見あげた夜の空には一点の雲さへなかつた。星がきら／＼と輝いてゐた。そしてその翌日から死ぬ程暑くなつた。それまでに僕達がやつた水泳部らしい仕事は非常に長距離でないところの――云ひかへれば僅か四五町の遠泳」と、龜山部長の水泳準備運動観海流泳法の手はどきを砂濱の上で、それから岡田氏の模範游泳をみたといふ事であつた。それ以上に僕達はトランプに熱達した。

要するに水泳部として不成功であつた、それは不可抗力的なものである。けれどもある意味に於て僕は斷言し得る。成功したとも云へる、水泳部の基礎はこの年に出来たのだ、僕達は部といふ一つのものになりきつて愉快にやつて来たといふことである。そんなに團結して過して来た日の事を今も懐しく憶ふ。

勇躍せんとして(大正十三年度)

水泳を單に夏期のための面白半分にする遊戯と見る時代は去つた。佐賀高校ではすでにブルを作つたそ

うだ、七高には天然のプールがあるさうだ。九州では五高七高佐高で對抗競技を今夏初めてやり、七高佐賀同点となりブルをもたない五高が僅に一点を得て大敗したさうだ。一高と水高では之も今年から對部競技を始めて一高が斷然勝つた。もう水泳は斷然競技だ。水泳部なんと云ふのは古い、よくしく競泳部とすべしだ。昨年暮僕と花房君が委員となつて水泳に明るい調所田中兩君のあとをうけたのは、何も知らない僕等の苦しい所だつた。でも、調所君と相談してどうにかこうにか豫算請求書を出した。所が總体で四千圓位のところへ約二千圓の請求額を出したのだ。少し無謀だとは思つたが少くしやうにもせよこれも惜くてはげれない。皆はしいものばかりだ。止むを得ず出したら一割にも足らない百九十圓圓かにけずられて了つた。

兎に角僅かの豫算だ。やれるだけやつて見やうと、前委員、調所、田中の兩君をマネージャーとして、大いに發展の策を考へた。

又々富浦へと大震災の爲め富浦はどうなつてるか視察して來やうと、花房君と二人で出掛けた。五月二十四日學校を一日休んで。しかし、富浦は思つたよ

り、家がたつてゐる。之なら大丈夫と富浦にする事にした。地震の爲泳ぐには却てよくなつた。七月十一日學校から山崎講師を特派してもらつて、どうにか三週間合宿の準備をした。昨年で水泳部の根底は出来てゐる。初から無暗と泳いだ。昨年の様に雨にもたたられない。そして皆思ひ／＼にクロールバック等を練習した。新しく入部した諸君に殊に優秀な泳手の居る事は更に意を強うした。コーチャーとして來部して下さる岡田氏に手紙で厚かましくもストツプウオッチを貸して下されと申込んで来る迄はタイムを取れないで、皆で競泳の練習はつかした。時々遠泳もやつた。遠泳は古代のものとして皆いやがつたが最後の遠泳として十九日に三哩ばかりの遠泳をやつた、水に飛込んだものの二十人此内二人舟に上つたきりで皆元氣で泳ぎおほせたのは大成功だつた。

水から上つてくず湯を飲んだ。其うさ泳がないものゝ知る事の出来ない甘味だ。十九日から岡田氏を正式にコーチャーとした。岡田氏がストツプウオッチを持つて來て下さつてからは猛烈に練習した。處が此頃から誰云ふとなしに一高と對部競泳をやりたいと云ふ聲が部員から起つて來た。委員として僕

は實に苦しかった。

岡田氏に聞いても相當な選手揃ひであるから大丈夫出来る。此上形の對抗競技へ行つてる辰野君が來部して二週間も水に入り水になれたら大丈夫だ。確に勝てると云ふんだ。さあ事だ！ 水泳部に金がない、と云ふのも委員の力が足りないからだと思はれるのはつらいと云つて皆に出させるのは尙更つらいあゝこまつた。でも一高とやつて打破りたいと云ふ氣は僕だつて人一倍餘計だ。何とかして部員の氣をおどさないで四方八方圓くおさめたいと随分苦心した。其あげく妙案を思い浮べた。夫は最後迄一高と競泳をやる部員に宣言してそして猛烈に泳がせ最後にどうもあの位の不熱心とまづいタイムでは、必らず勝てると定まらない名將は己の軍勢を計つて然る後戦ふと。必ず勝てると自信を來年はつけやうそれまで待たうぢやないかと、こう部員をなだめれば猛練習も出來て勵みもつきよく行くぞと、之が僕の胸に浮んだ名案だ。高が知れるとけなす勿れ當座は之なる哉。之なる哉と膝をうつたのだ。殊に嘘も方便と昔の嘘付きが云ふて呉れてある。こうして毎日泳いだ泳がせた。ひびいのは初めて水に入ると云

ふ人にクロールの型を教へて四十米のタイムを取つた事だ、随分水を飲んで氣毒だつたが當時は水を飲む位は氣毒だなんて氣が起らない。一高と戦ふんだしつかりやらなくてはならないと云ふ氣が先きだ。タイムをあげやうと云ふ氣はあつても塩水を飲むまいなんて氣は樂にしたくも起らない。

競争心は誰の話を話しながら歸るのだ。あゝ、僕の言を一途に信じてるらしい部員の後姿を眺める時は流石腹黒い人間と思つて僕も、心から、あゝ、すまない、來年は、奮闘して、諸君の希望する競泳をする様に盡力するから、今年丈は堪辨して下されと念じながら、心の中でどの位お詫した事だらう。部員諸君今となつて、凡てを白狀する。改めて許して呉れ給へ。二十五日陸上競技部から辰野君、柔道部から小山君が來部してからは部員の意氣とみにあがつた。兩君共に中學時代からの名うての名手だ。益々對一高戦の話に實が入る。こちらは下うつむいてる次第だ。

くして二十七日迄猛練習を續け、卅日 水上か運動會をして、納會として卅一日解散しやうと議一決した。突如帝大講師鈴木新太郎氏より二十九日附屬のイダイビング部員十數名の大拔手雁行をやつて大いに我部のために氣を吐いた事を聞いて喜んだ。然し先日附屬の御馳走がたゝつて卅一日、納會を仕様と云ふ時になつて、部員中の大半は下痢をしたので納會を打ちやめねばならぬ仕末になつた。最初うまゝ行つて最後が運わるかつた。

石神井の練習

九月初め學校を休んだら、商大豫科に挑戦されて應戦する事になり、毎日石神井のプールに部員が通つて泳いでると云ふ話を出された。不幸にして八月卅日部員諸君と石神井のプールで泳いだきりで九月の練習には参加する事が出来なかつたが相當自信をつけることが出来たさうだ。只おしむらくは決戦間際になつて、商大豫科水泳部にどさくさが出来て仕合する事が出来ないから、あしからずと斷られて來たのには部員諸君落膽しきつた。

かくして今年度我部の活動は打きりとなつた。

運動會を、やりたいから、學校の水泳場を貸して呉れと申込まれた、こつちの豫定を話した處東京の父兄に案内状を出してしまつたから、まげて貸して呉れと云ふのだ。あゝ泣く子と地頭には、なんとやら、昨夜の夢見が悪かつた位に、あきらめてやれむこうは古いんだ。こつちは出來たてのはやゝだいつか又お世話にならなきやならない事もあるだらうと思つて、納會を卅一日にする事にして表面快よく承諾した。

とすると二十八日朝一時頃から、花房君が腹痛でうなり出した。鹽水を飲んだせいだらう位に思つてたら、醫者が來てとても助からない病氣だと云ふ。あわてゝ館山病院長に來診してもらつたら腸捻轉の疑ありとの事だ。水泳の方は岡田氏と調所君に頼んで田中君と僕とで病人の世話をして方々へ打電した。學校からは同日夜一時頃長村講師が來て下されたので、ほつと安心した。でも二十九日朝千葉醫科大學病院へ入院させる手筈が出来たので、花房君も助る事が出來た。

かくして、僕は花房君に付きそつて千葉へ來り卅日富浦へ歸つたら、附屬の運動會に岡田氏がファンシ

各身樂暗誌

浦高エスベラント會誌

廣漠たる武藏野の真中に、浦和高等學校は生れた乾燥した空氣と、灰色の雲とに蔽はれたその生活の中に、唯一つの綠星は、高く沖天に燦として輝き初めた。愛と歡喜と希望の溢るゝばかりなる光を、我々の頭上に享樂する事が出來た。そして今我々は光明への途を突進しつゝある。

文甲守隨一君は、先づ我校にエスベラントを齎した彼の胸に輝く「綠の星」は、人の目を惹かすには置かなかつた。希望に憧憬るゝ若人の群は、是に初めてエスベラント會を建設した。高木教授を會長に戴いた我が會には、應募するもの五十名の多きに達した然し乍ら、世界の凡ての國に於ける此の種の會合の例に漏れず開會後幾許もなくして脱會者續出し、月を數ふる毎に益々その勢を失ひ、僅かに三名の會員を残して、綠星遂に武藏野より永遠に姿を隠さんとして大正十二年度を迎へた。

不定律に生れ、下定律に育つたエスベラント會は是は又不定律によつて委員を定めた。守隨一、新國康彦、土方辰三の三君である。そして第二回の會員

募集を行つた。應募者又五拾名。合併教室（今の三年文科教室）に於て、守隨君の Parolabo によつて開會され新國君の「エスベラントの歴史」及高木會長の挨拶等あつて盛會の裡に綠星は幻の様な光を増した。

遺憾な事は、先年の例を破り得ず、又もや中途脱會者多く、聴講に來て居られた島地教授も、何時の間にやら消え失せて、再び會は淋しくなつた。一學期の終りに至つて、普通會員の數七名。二學期から Kone の講習、出席者五名、講師は守隨君と新國君と云ふ哀れさで二學期の終に至つた。而して委員の更迭で、龜田純一郎君と自分が、新國、土方兩君の後を承けた。そして守隨君は尙踏止まつて我々新委員を導いてくれた。

三學期に入つて文乙一の七名の諸兄が新に入會されたが、その中の最後まで踏止つたのは、設樂安男君唯一人であつた。

當年度（大正十二年度）の講習は、一學期には、毎週金曜、午後三時より四時迄、合併教室に於て、二學期からは、毎週月、水、金、午後九時より十時迄寮内應接室に於て行つた。

今年度に入つて、新入會員(一年)十二名、其中通學生一人(榎本桃太郎君)の爲に、三年文甲教室にて、守隨君講述にて *Enobō* 及寮内應接室へ於て、他の十人のために、同じく *Enobō* 之は自分が講義した。

前者は毎週土曜、後者は毎週月、水、金。

新入會員のうちに、中學時代から研究して居られた堀内君を得た事を特筆する。

之等の *Kasō* は一學期の終りには已に *Ezopo* を終へて *Salome* に這入つた。

二學期に入つてから自然消滅的に脱會した二三を除いては、之の會史に希なる勤勉振りが漲つてゐる *Salome* の講義も今や佳境に入らんとしてゐる。加ふるに、二學期よりの新入會員二十四名を得た事は、我會の爲に大なる力である。そして今は *Salome* の講義を、堀内恭二君に委託して。自分は、新入會員の爲に、初歩の文法講義に努めてゐる。委員堀内君休學の爲、設樂君に代理を依頼してある。

最後に現在の眞の會員は、三十三名である事を附記しておく。

十月—今は無くなつてゐるがその頃には未だ浦和町に貸馬屋があつた。そこで上原四郎、三浦雕二、木村良藏の三名が土曜日曜毎に集つては馬術練習をした。最初はなか／＼馬が思ふやうに動かず、悠々と草を食ふに任せたと言ふ珍談もある。

大正十二年

六月—其の中に乗馬家は次第に其の數を増して、四名となり五名となり十名となり、翌年の初夏が訪れた頃には十五名に達した。そこで俱樂部設立の議起り遂に我乗馬俱樂部を設置し部長に龜山文之助氏を戴いた。次いで陸軍士官學校外馬術練習團體に編され、茲に正規の練習を開始した。練習は毎日曜日朝、士官學校内馬場に於て、或は附近の河日原馬場に於て行はれた。又屢東京市中を騎行したり戸山ヶ原に野外騎乗を行ふたりした。此間長村先生が我々のために種々盡力して下さつた事を特記して置く、因に當時の部員は左の如くである。

上原(委員) 三浦(委員) 守隨、日下、武内、坂

上、堀内、湯淺、清水、木村、戸ノ原、加治木、

野村、村田、荒木、(以上十五名)

七月—關東學生乘馬協會に加入した。此の事は我部

是が我浦高エスぺラント會生立の大略である。今は斯くも微々としてゐる我會ではあるが而も其の内部には伸びんとする力を持つてゐる。斯くも貧弱に見える我會の中には、常に歡喜と希望が満ちて居るのである。愛と光明とは。遂には人を牽きつける強い力を持つてゐる。

Tra la mondo irosfortavoko

浦和高等學校乘馬俱樂部誌

今や我浦和高等學校は創業第三年に入り我々は近く創立記念日を迎へんとしてゐる諸種の設備も漸く整ひ我々は足場をしかと踏占め各方面に向つて一樣に伸びやうとして居る。我々は過去を振り返り創業の苦心の跡を想はずには居られない。願れば本年四月三日關東乘馬大會に於て、又八月三十日全國高等學校馬術競技大會に於て、目覺しい活躍をなし、よく我浦和高等學校の意氣を發揚したる事は我々部員の記憶に新なる處である。今しばらく、記録と追憶を辿つてその生立ちを書き記して見やう。

大正十一年

に重大なる關係を有する。該協會は全關東に於ける學生乘馬團體の聯盟で、加入後我部は其の行動を共にし、以て現在に及んで居る。二十二日には部員堀内君が北海道に於て死亡されたのは残念であつた。二十五日から士官學校に於て日曜日を除いて毎日午前六時半から約二時間宛夏季練習を始める事になつた。

八月—二十八日には行程約八里の遠乗後西瓜會を催し練習を終へた。

九月—十月は震災の爲練習が不可能であつた。十一月—今月から再び練習を開始した。夏季汗と埃に塗れてした猛練習は徒爾ならず部員の御術は著しく上達し、天高く馬肥ゆる秋は數々の愉快な印象を残して行つた。

十二月—本月二日明治大學馬術部主催の下に國府臺千葉間往復約六十料の大遠乗會が行はれた。我部からは、上原、武内、木村、日下の四名が參加した。出發—午前六時、歸着午後六時、歸途四圍既に暗く歸鐵から發する火花は燦々と闇中に散つた。

大正十三年

四月—三日關東乘馬大會が陸軍士官學校に於て舉行

せられた。我部の選手、競技種目、成績概況は左記の如くである。

競技種目 選手

障害飛越 武内彌四郎

蛇 乗 上原 四郎

八字 乗 坂上 季次

巻 乗 加治木須恵人

成績概況

一等 東京帝國大馬術部 二〇九点

二等 早大馬術部 二〇六點

三等 浦高乗馬俱樂部 二〇一点

四等 慶大馬術部 不明

備考 満点(三〇〇点) 参加校(十九校)

二十七日—關東學生乘馬協會主催遠乗(陸軍士官學校から多摩川登戸附近に至る、行程約十一里、出發午前八時、歸着午後五時)に参加した部員は左の如くである。

守隨、上原、武内、木村、坂上、三浦、高橋、湯淺、丹澤、(以上九名)

参加者は陸軍士官學校教官、助教、學生及紳士、外に蹄鐵工、看護卒等凡て四百餘人、盛大なる遠乗で

あつた。

五月より六月中旬迄の間は士官學校に於ける練習が無かつた故部員有志は日曜毎に習志野騎兵第十六聯隊に通ひ、廣莫たる平野を縱横に馳驅した。こゝには良馬が多かつたので非常に愉快であつた。

十五日—陸軍士官學校記念運動會開催せられ、來賓競技に部員坂上、日下の二名が参加した。

廿二日—本日より再び士官學校に於て乗馬練習を開始された、新しく入部した経験なきものを乙班とし舊部員は之を甲班とし、別々に練習する事になつた七月—廿九日から約半ヶ月士官學校に於て夏期練習が行はれた。本年は日曜を除く外毎日午前六時卅分から約一時間宛校内馬場に於て練習した。我部員有志十二名が之に参加した。

八月—二日、三日、四日の三日間に互つて耐熱騎乗が行はれた。参加者は關東學生乘馬協會幹事等卅四名で本校乗馬俱樂部からは高橋が参加した。二回の豫行騎乗の後八月二日午前五時、陸軍士官學校を出發し午後三時八王子郊外由井村小學校到着。三日午前二時出發、多摩川二子に向ひ午後三時同地到着其地の旗亭に於て馬術教官部長山内少佐等の送別會を

催しそこに泊した。三日午前七時出發士官學校に向ひ、午前八時半歸着、

五日—耐熱騎乗に關する山内少佐の講評があつた。

十三日—此日を以て夏季練習は終了し、練習後例により西瓜會が催された。

三十日—全國高等學校馬術競技大會が陸軍大學に於て舉行された。概況は次の如くである。

○選手 上原 三浦 坂上

○優勝者

一 中村(弘前高校) 七九点

二 森(同) 七三・五點

三 坂上(浦和高校) 七三點

四 上原(同) 七三點

五 別府(一高) 七〇點

六 田上(弘前高校) 六七點

七 下平(四高) 六五點

弘前高校 二一九・五點(優勝校)

浦和高校 二〇八・五點

一 高 一九〇點

四 高 一八八點

三 高 一八四點

山口高校

一六六點

備考 満点(二四〇) 参加校(一高三高四高浦

和 弘前 山口 大阪 松本)

競技種目採點法

馬場馬術、及障害飛越の二種で各々満點四〇點であり、三名の選手の得點を合算したものが一校の得點となるのである。

天高く馬肥ゆる秋、乗馬シーズンは三たび環り來つた。我等はよき收穫を刈り取つて來春の競技會に備へよう。

現在の部長、部員は次の如くである。

部長 龜山文之助氏

部員 守隨一、日下信、上原四郎、武内彌四郎、

木村良藏、坂上孝次、高橋慎一、丹澤龍男

有賀嘉一、鈴木重夫、水野正直、神木英夫

小西專一、岸美知夫、光藤 三浦、二

加治木須恵人、木内利一、飯島忠雄

宗教哲學研究會

太陽が沈んで神秘的な夜が訪れた時に雲間に輝く星を

眺めてあの蒼天を何れへか航行し行く月を望んで特に私等は自己、自分の足許を考へずにはゐられない否、私等がシミ／＼と自己の内を省りみた時、何等かの深い感にうたれるものである。

人間は死んで行く、晩かれ早かれ我々の此の世に於ける生活の行路は私等の眼から隠れてゆくのである。生活の幕は垂れる。私等は此の地上に於ける生活に懷疑の眼を向けずには居られぬ。そして生活の兩端を限る生前と死後との世界が私等の現在の智識では解けないけれども確實に存在してゐることを思つたのである。それに相應した答は容易に得られぬにしても何等かの方法によつて追求してみたい、そして私等の日常の生活の方針を定め私等の生活を眞の生活になしてゆきたいとを考へるのは普通である私等は高等學校に入つた、毎日ノートをとり語學を學ぶのが先づ關の山である。不満を感じずにはゐられぬ。淋しさを覺えずにはゐられぬ。それは此の人類にとつて最も重大な人生を宇宙に追求してゆく眞の人間の血と涙の煩悶がなかつたからである。思ひ起せば三年の昔になるが、松村、坂崎兩先生の熱心なる援助と指導とによつて初めて追求の手段として之の

浦和高等學校宗教哲學研究會なるものが生れたのである。そして第一回の委員は澤口、宮島の二君であつた、これに土方君を合せて最初の盡力者の三君に感謝したのである。

こゝに於て私等は眞に熱ある若者同志がより集つて胸の奥底から、各人が宗教に對して或は哲學に對して或は科學に對して本當に眞面目に自己の意見を披瀝することが出来たのである。そして約翰が「兄弟よ、互ひに相愛せよ」と言つたやうに、社會の人がすべての人類が、共に愛して、助け合つて行くやうに心から願つたのである。

第一期に於いて私等は、會の指導者である松村先生を、海外にお送りしなければならなかつた。然しその代りに又私等の研究會は、楠本先生を迎へて各々思索に餘念なかつた。此の時に、小山隼太、相杜正太郎の二君が第二回の委員として澤口、宮島二君の後を繼がれた。そも／＼私等の研究會はその開かれる度敷によつて之を云云することは出来ないのである。各人が深く思考し自ら體驗して行つたならばそれで十分に研究の歩みが進められたとも言ひ得るのだから。

研究會員も、一年の間靜かに考へたのである、沈思默考して精進に全力を盡した此の間に金九秀夫飯村義美の二君が前委員の後を受けた。

丁度、時も十二年の秋の中頃、あらゆる人が自ら思索の境に引き込まれずには居られなかつたのである一年間の精進。それは發表されずには濟まされなかつた、自己の意見が常に心の中で燃えてゐたのであつた。こゝに於て必然的結果として、一年振りの會合は開かれたのである。その人員は五十名餘りであつた。而し皆眞摯に此の道に進まんとする同志であつた、私は委員として、生徒諸君の中には、宗教研究會なる名目に恐れ、餘りに之を誇大視して宗教哲學に近づき會に入つて共に研究するを躊躇して居られる人々が萬一有りはしないかといふことを恐れる私等は、ベニールを隔てゝ之を眺めてはいけな、私等は赤裸々になつて之の中に一身を投げ込もう。之の意味に於いて擧つて入會し。共に勵み、會の爲めに盡されんことを祈つてやまない。

最後に、研究會は表面にたつべきものでない、私等は小勢でも、そして誰か言つたやうに、哲學者は淋しい甲蟲であつても皆熱心な宇宙の探求者である

人生義の追求者である。而し私等に眞の人間の仕事が完成されるかどうか知ることには出来ないけれども終止變らぬ愛を以て共に研究の爲めに力を盡す決心である。研究會の前途を祈つて筆を擱く。

浦和高等學校基督教青年會誌

本會は大正十二年十一月當時在校の基督教信徒數名の發起によつて創立されたものである。そも／＼本會創立の機運は大正十一年開校當時の第二期頃より擡頭しかけてゐたのであるが入學當時のことでもあり、外的の事象に迫はるゝ方に各自が氣をとられかつたのである。然るに開校第二年度に入るに及び吾人が稍々落着きたる氣分を以て内省の生活を始むると共に、本校に於ける基督教信徒が何等かの機關を以て結合せられ、その靈的生活の一部を共同結束して實行したいといふ氣持が數人の人の間に一致したので遂に本會が具體的に現れた次第である、思ふにこの運はその九月に全同胞をおびやかした關東大震災に負ふ處が大きかつたのであらう。はじめ本會創立に關する協議會のあつた節には凡基督教の意味

でカトリック教の人も加はつたのであつたが、創立に到る以前に後者の要求により本會はプロテスタントのみを以て組織することになつた。儀式その他信仰箇條の差異による支障からくる申出を公教徒がなさなければならなかつたのであらう、だから本會はその實質に於て基督新教の青年會である。従つて會合の形式、採用する讃美歌及び聖書は現今我國に行はるゝ新教徒のものであるべく普通のものを選ぶことになつた。即ち聖書は改定譯を讃美歌は明治三十六年制定の第一編を用ふることにした。かくの如きに到つたのは創立發起人の或者の理想には反したことであつた。それは彼等が宗派をはなれ形式をはなれた會合として本會を生れしめたかつたからである。

さて吾人は第一回の會合を浦和町に於ける某私人の家に舉行した。この時の會員は計十二名（内文科生三人理科生九人）であつた。我會則はこの時左の通り制定されたのである。

浦和高等學校基督教青年會規定

第一條 本會は浦和高等學校基督教青年會と稱す
第二條 本會は會員間相互の信仰を相助け以て基督

教精神の發揚を期す
第三條 本會會員は浦和高等學校職員並に生徒に限る

第四條 會員は毎月金貳拾錢を納むるものとす
第五條 本會に左の役員を置く

一 會長 一名 二 委名 二名
委員は總會に於て會員中よりこれを選挙す
その選任期は一ケ年とす

第六條 本會は毎年十月總會を開く
第七條 本會規定は總會に於て三分の二以上の同意

あるに非れば變更することを得ず

以上

さて爾來大正十三年十月までに例會を開くこと三回又講演會を開くこと一回、會員數亦多少の異動を経現在に於ては左の如き狀勢にある。

一 會員數 理科八名 文科五名 計十三名
二 定例會

毎週木曜日午後三時より聖書研究會

毎月一回 茶話會

毎年十月 總會

三 會員の種別

日本基督教會信徒

組合教會信徒 一名

福音教會信徒 一名

ホーリネス教會信徒 一名

教會無所屬者並求道者 六名

何しろ未だ余り年月もたないし、會員の努力も余り充分に發揮出來ない爲に、我會はまだ名前ばかりの様な氣がする。近く第二回の總會を迎ふる吾人は此際本校職員中の基督信徒とも共力して大いに聖潔と愛とを以て神の國に突進したいと思つてゐる。さしあたり吾人は基督信徒である教授の中から祝福された強い會長をほしい。そして我會員のための寄宿寮がほしいと思つてゐる。本會は今迄もさうであつたが將來に於ても當分の間は余り對外的な社交的な公共的な事業に力を傾け得ない境遇にある。之は残念なことではあるが止むを得ない。他日我々の内容が充實して他の諸學校の青年會の様に多少的にも立派な神の像をうつし出したいとは思つてゐるのであるが、まだ自身の信仰の涵養を先にしなければならぬ状態にある次第である。願はくば神意のまゝなる發達を本會の未來に祈りつゝこの小誌を擲筆する。

ア式蹴球俱樂部

ア式蹴球俱樂部は初め文丙に於て起されたのである、熱心なる部員は多くの困難の中に、練習を積んだ、野球場との關係上部員は非常に時間に苦しんだ僅な時間をおしんで練習をはげんだ、そしてそれが文丙の一組では充分に發達し行かざるべきを知つてこゝにア式蹴球俱樂部が組織せられ廣く部員を募集し一方ア式蹴球聯盟に加入したその處女戰は對浦和中學であつた。三對戰で勝つた。以後その練習は緊張をまして或は目白中學或は帝大と戰つて基礎を固め、明治神宮の豫選に出場して強敵神奈川師範に敗られた。敗られたと雖も自重自愛今や猛練習の過渡期である。將來は待つべしである。

現在部員五十名余、學友會の一部として獨立を求める切なるものがある。

卓球俱樂部

山下義。木村良藏其の他の發起で起されてゐる。卓球程學校全般に行き互つてゐるものは無い。この俱樂部の設立されてゐるのも偶然では無い。圓滿なる發展を切望してやまないものである。目下部員五十名余農業大學、音樂學校其の他の對外試合をなしてゐる。

排球俱樂部

最近企てられた部である。吾校が新設尙日淺きに學校の方にて体育に注意を拂ひ排球場籠球場を幾つも作つたことは感謝に堪えないこゝに排球の愛好者が集つてこの部を設立した亦慶賀に堪えない健全なる發達を祈る次第である。

籠球俱樂部

之も亦最近企てられたもので最初体操の時間に諸先生方の熱心な指導によつて發達を遂げたものである有望な人が多い特に球場を四つも有して居る大々的の發展は期して待つべきである。

思潮研究會並に劇研究會

思潮研究會は大河内信威君等によつて初められ殘回か研究會を催し意見を交換し活動に入らんとして大河内君病氣となりそのまゝに今日迄立消え状態になつてゐる。

劇研究會も一時佐野碩等によつて發部せられ劇文學の研究に努め、その試演を寮の茶話會等に於てなし一時學友會の文藝部認にめられんとして努力せるも文部省の訓令もあり不可能になり、特に嚴しき現大臣よりの訓令も出で全く無活動の余義なきに至つ

た。

同人雜誌「白 鐵」

武藏野の郷土雜誌だ、同人雜誌である。この自然に育くまれた吾々の詩想その發表が年に二回乃至三四の學友會雜誌ではあまりに物たりない。同人雜誌の企てはあつた。而してこゝに藤倉寛三君の斷乎たる決心は遂にこの白鐵となつてあらはれたのだ。飽く迄も郷土藝術の爲に眞摯な歩を續ける様祈つてやまない。

同人雜誌「リコータン」

これも純文藝の同人雜誌だ。根岸國孝君等によつて企てられた月刊雜誌である。吾々はその誕生を祝福して健全なる發展を待つばかりだ。

寮友會誌

寮友會

總代第一回

東一寮 堀

豐次

東二寮 手代木 治兵衛

東三寮 和田 治平

西三寮 守屋 節夫

第二回

東一寮 本吉 加岐磐

東二寮 平井 孝雄

東三寮 善波 三周

西一寮 田中 達次郎

西二寮 吉田 信俊

西三寮 大澤 彦六

第三回

東一寮 館野 覺治

東二寮 橋本 猛

東三寮 福井 達雄

西一寮 大關 義勝

西二寮 富山 修

西三寮 鈴木 俊

第一年度

寄宿寮は大正十一年五月半ばに開かれた。仍つてその時から開始される。

新しい棟の屋に白紙に對する様な氣持で入寮したのは五月十七日。然し寮は全くの白紙ではなかつた。日課も決まつてゐるし、炊事も請負で一日五十錢と定められて居た。當時は東の三寮だけ。宿直室も小便室も東一寮のある室にあてられてあつた。二日はとして入寮式が本校舎のある部屋で行はれその後數日にして各寮毎に寮代及委員を選舉した。

東第一寮

堀 豐次

同 一同

手代木 治兵衛

同 三同

和田 治平

寮總代が定まると數日にして寮生規約が議定された。勿論先進諸校のものを基礎として議寮が作られてあつてそれを修正決議したもの。

入寮當夜の事は思ひ出す度に愉快だ。

その晩は須之部先生の宿直だつた。八時頃寮生を一同食堂に集められ、先生から御話がある。色々と御話が終わつて各自珍な氣持で室に歸つて來たのは十

時近くだ。その少しすぎになるとランセイの提義が出た。吾々が今夜から寮生活にひたるのだと思ふと嬉しくとても眠て居られなかつたのだ。所が準備のなつた十二時頃、「静かに、静かに」と須之部先生が來られた。そこで押問答が始められた。この問答は遂に夜明けまで續いたとの事、此處でランセイの語を説明して居かぬといけない。古來或は戰の庭、或は神の前で我々の祖先は夜を徹して盃を抱いてランセイを享樂した。その氣分はアブノルマルである。然し打算からやるのではない、いささかの不純をも拒否するものである。この名稱はランセイの最中に文因の男が何氣なく言つた名前。ところが時の推移と共に邪道に入り、それと共にその名は忘れられ一高の出店の様にストームと變名して了つた。だからこそストーム拒否同盟とかいふ様なものが出來たのだ。

その項は水道はなかつた。そこで寮生は朝露を分けながら化學教室のわきの井戸へ洗面に行つた。そして同校舎のたつてゐる位置は薄、野草、野莓の類が人の脊丈もおい茂つて真白い花、ルビー色の果實は我々の來るのを迎へてくれた。朝日をあびて、惠

まれるといふ感がひし／＼と感じられる事が多かった。

この間に學友會の方では理事が選舉されて、女學校長問題が起り次いで警察問題が起つた(各項参照)第一學期も終りに近き頃、寮生の間に熱病患者が出來た。そして一人二人と發熱するもの多くなり、學校が知つて來たときは大部の人数になつた。検査して見れば間違もなく腸チブス。早速寮内の大消毒をして熱のあるものは直ちに隔離入院といふ仕末、第一學期試験は延期寮生は十二日間の籠城。二三日おきの豫防注射。急に世界が異つて來た様になつた。然しこの間に寮生相互の親密の度の増して來た事は大なるものがあつた。

第二學期に入る。腸チブスのため數人の校友春は多き身を捨てられた事を我々は心から悲しむ。次第に全快した校友はうすい頭毛をもつて出席して來た今學期から西三寮が開かれたので更に寮生を召集し改めて西三寮だけ寮總代及各寮の寮友會委員の選辰

西三寮 守屋節夫

十一月八日、開校初年の記念日だ。學校でも二日に渡つて記念式を舉げる。陸上運動會の舉行された晩

日の入寮者の世話をやいた。

偽帝大生來る

偽帝大生が寮に來た、それは大なる驚であつた。寮生の二三の者之と須原屋附近にて出會、財布を失ひし故に金銭を貸せといふ。寮生之に同情して金銭を與ふ。更に宿所無きを云つたのでその寮生は之を伴つて寮に來た。寮生の一部之を危ぶみ之を歸さしめた。然るに彼は再び途上に寮生を促へ同じ理由を以つて金銭を巻きあげんとした。かくて、寮につれ來り、寮總代一同にてその理由を聞いた。彼は帝大生に非らざることを述べた。於是翌朝五時半寮生一同を食堂に集めこの由を述べ更にこの偽大學生に對して將來、いましむることをなした。彼亦泣いてわびた。吾等總代彼の爲に醜金をし、併せて帝大の帽子の代りに烏打を與へ、ボタンを取り換へて歸らしめた。

寮記念祭に關して

寮記念祭を行ひたいそれは吾々一同の希望であつた。吾々は寮といふ一つの大なる家族それが成立を記念して、祝ふといふのは一方寮に對する愛著と敬度を増さしめ一方吾等の生活は吾等の父や母やに知

全寮生茶話會を開く。校長、各教授の外審判員として來校された辰野、加賀、其他斯界の權威者が出席された。

學校年中行事中の大事、開校記念日が過ぎればあとは大風のすぎた荒野の様。短かい秋の日と其に瞬たく間に過ぎて了つた。

第三學期に一度、全寮茶話會を開く。この茶話會は新年を祝ふ意の外、來る三月にて寮と分れなければならぬ者もあるからしてその者に對する送別の意も含まれて居た。

席上、各寮から一二の余興が出されて各自獨特の拍手を博した。かくして寄宿寮第一年もいよいよ終りに近づいて來た。

第二年度

新入生入寮

四月十日に新入生が入寮白線と菊花惠まれた若人今憧憬の寮に入るのだ。若やかな笑顔をながむるとき、それらの幸福を祝さざるを得ない。

總代一同午前八時から寮玄關先に受付を設けて本

らしめたいと思ふのであつた。然し高等學校の寮記念等それは既に充分の弊害を認められる吾々はこゝに新しい高校らしい最も意味あり目的ある寮記念祭たらしめたいと思つた。學校では他の高校等のそれと比較して懸念の模様があつた。然し吾々の眞面目なる要求はやまなかつた。協議會の席上口角泡を飛ばして論じた。そしてやう／＼實行することを許された。然し部屋其の他の個人的裝飾は絶対に許されなかつた。吾々は於是大低次の様な計畫をたてたのである。

- | | |
|------|-------|
| 一 裝飾 | 庭園部擔當 |
| 一 余興 | 圖書部擔當 |
| 一 賣店 | 炊事部擔當 |
| 一 警備 | 運動部擔當 |

かくて裝飾に關しては總て一般的然もあつたりとし大澤總代指揮の下に廊下に盆栽玄關の裝飾アーチ等を作り余興係は晝夜分たず劇の練習をなした一方炊事部に於ては櫟林の中に風流な賣店を作り之に對する準備に余念がなかつた。而して吾々の寮それは全体的寮であらねばならぬ故に吾々は全寮生を全部この四つの部のいづれかに擔當せしめた。そして一人

も無爲に過すものをなからしめた。

當日は準備も未だ完全でない八時已に多くの人が見えた、あはてたのは吾々であつた。然しさすがに今日の盛會を思ふて合ふ人毎に「お目度う」の言葉がかはされた。寮歌集は片つ端から賣れた。賣店は大繁昌だ、だんごをはばる紳士、サイダーのラッパのみする淑女所は浦高特有武藏野の櫟林、松頼さはやかに、時々あがる花火と共にや添ふて行つたそれにつれて閉口してゐるのは下足であつた、札が足りなくなつた、ボール紙で作れ等と大さはぎ、午後〇時半食堂から美しいメロディが傳つて來た、レコードコンサートが初まつたのだ、風が少し吹いて來た午後二後わるゝ様な拍手で圖書部大苦心の西寮余興が初つた「戦時の花嫁」皮肉な人生をうがつた名作がどんなに觀衆の心を魅しただらう。終ると人々は一齊に賣店の方へ行くこの頃が最も人出盛だ。學校の連中の中あまり嬉しかつたのかビールに酔つて亂舞してゐたものがあつた。午後四時振鈴と共に期待された東寮余興「順番」が演ぜられた。巧な表出戯七する聲もあつたとか。非常な出來生であつたととは總ての人のいふ所であつた。これが終る頃や

うやく人が少くなつて行つた。午後五時振鈴と共に會を開いた。各部屋の前のビラが寮生によつて片つ端から破られて行く、それが風にふきとんで雜關の跡うらさびしいものがある。

夜これぞ思ひ出の集ひ、二百の若人から新作の寮歌が高らかに歌はれた。晝間と同じくレコードコンサート。及び東寮西寮の余興が演出された。拍采につゞくに拍采會のとざされたのは十一時頃、若き人々はそこで舞つた、踊り狂ふた。二百の若人は食堂に踊つた。舞臺に踊つた。廊下に踊つた。ホールで踊つた。歡樂の一夜踊れよ舞へよ、ストームはストームを生んだ、分列したストームは又他のストームと合した。それでも三時頃には大分静まつた。思ひ出せば四時筆者もそうだが總代六人の模範ストームとやらが起つた。全寮を廻るに凡そ二時間終つた時は朝がしらんで、太陽が武藏平原一角に大きく出る所だつた。

對抗競技當時

三高校對抗競技が浦和でひらかれることになつて新潟高校から寮をその宿舍として貸せとの申込みがあつた。それに對して吾々は出來る丈の便宜をはから

うとした。然し對抗競技なる以上寮生の大部分は寮に歸ることと思はねばならない。と一方寮の内部を貸すといふことは一つの問題である。高等學校同志である。特に對抗競技である。その目的には或る親睦といふことも含んでゐるかも知れない、それに對して貸すといふのはいふことかも知れない然し吾々は前のことをより重大に考へた。そして新潟高校選手にホールを貸すべく承諾した。

震災

九月一日の大震災それに直面した吾浦高、吾々は飽く迄積極的に活動した。それは寮生の誇である。其の記事は學友會記録を参照されたい。然しそれを遂行出來たのは吾寮生の力に間々あるのがある。學友會長よりは之に對して深甚なる感謝狀が出された。

第二回記念日の夜

昨年に於ける様に十一月八日全校生の晚餐會が食堂で開かれた。今日のよき日を壽ぐ聲に充された。對抗競技の結果を意外視して互に心よりなる喜に皆和した。會は約一時間、優勝した文丙初め各類祝勝會や慰勞會に今宵一夜を暮すであらう。

第二學期寮生茶話會

第二學期寮生茶話會は十一月中旬にひらかれたこれより先きその手配に關して種々の協議を遂げたそして分擔を左の如く定めた。

- 一炊事部 今宵の馳走及び會場
- 一圖書部 余興
- 一運動部 對寮の運動
- 一庭園部 會場

かうして計畫をすゝめた運動部に於て對寮リレー等を試み様としたけれども雨の爲に出來ずに終つた。圖書部の余興はその劇演出を劇研究會に委嘱した森田草之助「星を數へる人」シュニツレル「デイオゲネスの誘惑」前者は千葉靜一君の主役後者は古田湯淺君の主演によつて遺憾無き成功であつた。浦高の劇は相當だよ等と相語る様になつた。余興の間々には、寮生の音樂落語或は諸先生の隠し藝に花を咲かせた。わけても長村先生の動物の泣き聲は傑作であつた。

炊事部委員の熱誠

今學期の炊事部委員は人材を盡してゐた。そして充分にその手腕をふるつた、一方彼等は稍もすれば亂れ勝ちの寮内の風氣に對しても、氣をくばつた。

鋭意浦高寮風の建設に努力した。而して食堂内に於ける着袴、上下の草履の區別之等に對しては彼等は眞剣であつた。一方震災後通學生を便宜を計る爲余裕ある通學生の入寮を許可した爲寮風に幾分の弛を來した。君々は之を嘆じた。こゝに卒先して立つたが煩事部委員であつた。

寮生大會がひらかれた。食堂内に於いて煩事委員に絶對に服従すべきことを以つてした。然し寮生に之を充分に徹することが出来なかつた、小數の差によつて炊事委員の要求が容れられなかつた。於是炊事部委員は辭職を申し出たのである。彼等は泣いて浦高寮風の成立を誓つた。然しその注意が徹しない爲に投票に破れた。若人の常こゝに辭職を提出したのは當然のことであらう。寮生大會はそれら總てを協議會に待つことにした。

泣いて協議會は激論から激論を生んだ。然し炊事部委員の熱誠は寮生規約一部の改正となつて現はれた。吾々は思ふ、少くとも寮委員となつたら、今學期の炊事委員の熱誠さがあるべきであらうと。

賄交迭

吉田賄につきては兎角の評があつた。炊事部に於

ては斷然と之に處置をつけ後任として矢島賄を招いた詳細は炊事部報にゆづる。

第三學期寮生茶話會

第三學期の寮生大會は一月上旬に行はれた。この日の計畫は次の様だ。

- | | | |
|-----|--------|-------|
| 一晝間 | ボンプ使用初 | 運動部擔當 |
| 一夜間 | 献立 | 炊事部 |

- | | |
|----|-----|
| 余興 | 圖書部 |
|----|-----|

- | | |
|----------|-----|
| 余興會場其他事務 | 庭園部 |
|----------|-----|

大震災に鑑みて學校では大急でボンプとホースを買つて呉れた。然し之を一度も用ひないではいざ事のあつた場合に何の役にも立たない。於是運動部では今日をこの使用初めをしようとするのであつた。即ち運動場の側面即ち固定ネットの裏の空地に薪を山と積んだ藁もつんだ。今之に点火するのである。火は炎々としてもえあがつた。風が少しある、火は飛んで雜草一面を焼き盡さんとしてゐる。今やよしとボンプ掛が之を「ヤツサ」「コラサ」と押した。美事な假の火事はたちまちにして消し止めた。柏手が起つた。この日縣警察署から掛を派して丁寧な消防に關しての注意及びボンプ使用法を教授し呉れた。

夜は本年度最後の茶話會である劇研究會再度演出の「ディオゲネスの誘惑」を中心に一二の瘋癲劇が演ぜられた。幕が閉ぢ圖書部苦心の「藝福引」が初つた。即ちこゝよりを引いて命せられた藝をする、そしてその藝に因んだ福引を呈するといふ凝つた仕組である。舞臺上に流行歌枯薄を歌ひて優等賞あらず遊蕩証をもらふあれば、工藤先生と數人かかり綱引して大根と菜をかつぐものあり腹のよじれる程笑つた。目出度會を閉ぢたのは十二時近くであつた。

庭園部の活躍

過去二年間庭園部は頗る貧弱な豫算で送つて來たその爲に殆んど目立つた仕事は出來ずに來た。因て本學期は炊事及び圖書部は遠慮してそのかはり大部分を庭園部の爲に割いた。庭園部では於是大活動を斷行したのである。即ち東寮から西寮各一寮の前に高野槇を美事に植えた。後にはボブラを植えた。ホール賄の方面に槇を植えた。更に本校の校内から縣道路に出る迄の両側に銀杏を植え街路樹となし一面目を添へたのである。

送別晚餐會

三月九日で試験の終らんとする夜茲に送別晚餐會

炊事部報

がひらかれた。各總代の送別の辭に初まつた。大過無くすごした。各總代はこう云つた。武藏原頭高く浦高志氣を鼓舞せんとして浦高寮風否浦高寮校風の確定を誓つた。大正拾三年度總代の紹介をしその挨拶あつて終つて寮歌の合唱をした。二年の人々その大半は寮を去るのだ。感慨無量であらう。茶碗をたゝいて歌つた。歌ふよりもなるのであつた。手にした茶碗は歌が高調するに従つて割られて行く云ふに云はれぬ氣分に襲はれるのであつた。

惟ふに人間生活に重要缺くべからざる要素をなすものは「食ふ」といふ事であらう。勿論「人は食ふために生きるに非ず、生きるために食ふ」と云つた西哲の名言をこゝに否定せんとは思はぬ。乍然朝晩の新聞紙を眺めて「就職難」「失業問題」「資本家横暴」「同盟罷業」そうした文字を見出さない時が幾度あるであらう。是等の言葉の中には働いても働いても食へない現代人の空恐ろしい不満や、春めきや悲哀がはち切れるばかりに籠つてゐるのだ。現代人は餘りにそれが屢々なるが故に見狎れ過ぎてゐるかも知れぬ。然しそれはこの事實を見逃がしてもよいといふ

口實にはならぬのだ。或る貴族は一日日比谷公園の草をムシつて労働の體驗をしたとかいふ。咄！咄！彼は今日の労働者の胸に潜む深き悲しみ、不安と焦ぬのだ。明るき燈を求め、酒と女にこの悩みを忘れやうと流れ行く労働者の群は彼等の悩みとして益々深からしむるに過ぎないのだ。

懊惱は更に懊惱を生んで彼等の生活は日に益々荒廢し、衰頹して行くのみだ。扱てこゝに所謂彼等の悩みとは彼等の生活の悩みであり、食へる食へぬといふ現代語は明らかに生活の出来る出来ないをさへ意味してゐるのではないか。パンは正しく生活の象徴であり且つその恐ろしい支配者であることを誰が否む事が出来やう。食ふ事夫れ生活する事であらうか？或る獨逸人が近代の社會問題は要するに「胃」の問題であると云ふたのはこゝに於て誠に味ふべき言ではあるまいかと思ふ。又近時の罪惡病弊は皆悉くこの問題を中心とすると云はれてゐるのではないか。我々の重要問題といへば必ず炊事部に關する事であつた。少くともこの年はさうであつた。事もこゝに於て初めて首肯される所であらう。

脂肪 四〇グラム

炭水化物 三五〇グラム

總熱量 二〇〇〇カロリー

となる。是等の營養量は所謂保健食量と稱せらるゝものにして吾人の「食ふ」事否食はねばならぬ最小量を示すものである。而してこれが研究は單に一個人の健康に影響するのみならず一國の食糧政策にもより重大な關係を有するのであるから近時世界の各國は巨額の國費を傾倒し然も尙これを惜しまないといふ狀況である。我國にても佐伯博士は營養研究所を設立して熱心にこれが研究に當り且つ營養思想の普及に盡力してゐる事は世人のよく熟知する所であらう。於此我が炊事部は常々この營養上より寮生の食事に對し非常なる注意を拂ひ、且つ熱心に研究し來たつたのである、これ我が部の存在する所以であり且つ吾人の重大使命の眼目であると信するからである。故に一方に賄方にも常々これが研究を促すと共に賄方選擇の重要條件とし第三學期に至りて此の方面の熟練家たる東京四谷區矢島龜吉氏を聘して新たに炊事請負人に指定せしもこの点に於ける吾人の考慮の結果に外ならぬのである。又食品選擇に就い

「武士は食はねど高揚子」といつた時代は既に既に過ぎ去つたのである。行住坐臥一日一刻と雖もこの「食ふ」といふ事を忘れ切れない吾人は先づ須らくこの問題を眞面目に考慮すべきではあるまいか。

吾人は思ふ。食ふ事それは吾人にとつて見得でもなければ贅澤でもないそれは絶對的であり生命の得難き生命を失はねばならぬからである。吾人の一日の生活を或る學者が分折しその消費カロリーを計算したのを見るに左の如くである。

睡眠	八時間	五二〇カロリー
歩行	二時間	三四〇カロリー
労働	八時間	一九二〇カロリー
慰安	六時間	六〇〇カロリー
總計		三三八〇カロリー

されどこは勿論個人の體質により環境により甚しく相違する所であつて日本人一般に對する學者の説は約二千カロリーであるといふ。次ぎにこの消費カロリー補充の營養素配當額を或る説により計算して見れば、

蛋白質 八五グラム

ても嚴重に當り専門家の作つた献立を更に審議しこれを賄に正確に實行せしむるに努力したのであつた寮生を最もよく知るものは寮生自身である。故に委員は寮生の嗜好の如きもよくこれを調査し献立作製の際これを參酌したのである。然し嗜好にのみ偏する時は、醫學上に所謂「部分的飢餓」といふ問題を生ずるのであつて其の調和は實に委員の最も苦心する所である、幸ひにも本學年度に於てこの「部分的飢餓」とも云ふべき色盲、脚氣、境血症等の發生を見なかつた事は吾人の私に歡喜し満足に思ふところと云はねばならぬ。

扱て吾人はこれ等營養的食料によつてのみ満足され得るものであらうか。食ふ事は學窓にのみ親しむ吾人の唯一の慰安でなければならぬ。一種の娛樂でなければならぬのである。夫れ故に美しく塩梅せられた料理を見れば―否想像する丈けでも唾液其の他の消化液は分泌し如何に吾人の食欲を満足し得ることであらう。食物を娛樂とし慰安と見る時、調理は最も重大な意義を有するのである。調理は食物に物理的化學的變化を與へるのが目的であるからいかにして食物は其の形狀は勿論成分まで或ひは善く或ひ

は悪く變化するか其の變化の狀況も知らねばならぬ
即ち食物の營養價值を定める上の一要素であり従つ
て調理者の技倆を最もよく表はす點である。故に委
員は常に調理者に注意しより良き調理者を得る事に
苦心したのであつた。この食物の慰安については尙
ホールに於ても諸負人をして各種の料理を作らしめ
菓子果實を置き、これが質の向上、價格の低廉を計
つたのである。煙草の販賣に就いても請願せしめた
が本學年中に實現の運びに至らなかつたのは残念で
あつた。ホールのテーブル衝立を改善し又第三學期
に入りては床に花藎を敷いた事はいかにホールの感
じをよくし得たことであらう。之れに加ふに闘球盤
將基かるた碁等を設けこれが監理に當つたのは我が
部が一つに寮生の慰安娛樂に就き考究し計畫した誠
意の一閃めきに過ぎないのである。

扱て調理に次ぎ重要な事は食物の貯藏といふ事
である。貯藏の不完全は食物の營養價に影響し或ひ
は傳染病の侵入を導く事ともなるので委員は時々適
當に倉庫冷蔵庫の設備を檢査し、或ひは生魚生肉等
は出来る限り使用當日に購入し搬入する様に注意を
與へたのである。

れがため第二期の中頃我が部の監理のもとに共同の
竹の皮草履を購入しこれを以て上下を嚴重區別した
のであつたがこの事も經費の多額のため第三學期よ
りは從來の利に復すべく餘議なくせしめられたので
ある。思ふにこの問題は寮生各自の自覺なき限り又
現制度の存する限り今後とも委員寮の頭を悩ますも
のであらう。

扱て營養調理貯藏衛生より見て少とも重要な食
糧問題もすべての點に於て經濟的に成立しなくては
ならぬのである。食費として寮生より徴収するもの
は一日五拾五錢のみである。學校の備品である蒸氣
釜ボイラーを除けば茶碗もなければ藥罐もない食卓
も揃はない、然かも基本金は皆無である。斯うした
貧弱な經濟狀態で之れに加ふるに最も不幸な事は浦
和町の貧弱な事であらねばならぬ。町からは到底満
足な物資は得られない。勢ひ町の仲買人により東京
の物資を購入するとすれば高價なものを買ふ事にな
り直接取引するには餘りに素人過ぎるといふ苦しき
「デレンマ」に立たざるを得ないのである。然かも
營養調理につき適當なる専門家を探し出す事さへ容
易ではない。若し適當な専門家を得たとするも他の

營養に富む食物を撰び、これを巧みに調理し或ひ
は適當に貯藏するも一度これを盛る食器類にして不
潔ならば如何。是を搬入する炊夫にして衛生思想な
くば如何。折角の山海珍味も亦一塊の塵埃に比し、
それだけの價值があるであらう。病は口より入る、
昔から知られてゐる丈け其れだけその眞理の確實性
の大を吾人は思はざるを得ないのである。而かも寮
全体の一般衛生を委囑されてゐる我が炊事部委員は
その責任甚だ重大といはねがならぬ。されば夏季に
於ける吾人の心痛はあゝこれを何に比する事が出来
よう。一人の發病を聞いてさへ生命の收縮を感じる
のであつた。故に炊事場食堂は勿論浴場ホール便所
に至るまで吾人はいかに多くの細心なる注意を拂つ
た事であらう。尙衛生に關し最も注意すべきは草に
履問題である。上下草履の區別は第一學期こそ精確
行はるれ逐ひに第二學期第三學期には委員の非常な
努力もこれ水泡に歸せしめたのであつた。この行
はれざる原因はともあれ上下草履混同は廊下の不潔
は勿論室内食堂をいかに不潔ならしむる事であら
う。こは勿論寮生活上に於ける重大問題であつてこ

學校或ひは食堂に於ける宿禍である炊夫の不正を絶
無とする事を誰が保証し得よう。さればといひ高給
にして不正を防ぐ事とどれ丈け可能性のある事が甚
だ疑はしい所である。されば是等の諸點より見、今
直ちに美名に憧憬れ、自炊制度を採る事は却つて今
日の經濟狀態を良好に導くものに非ずして或ひは經
濟的破綻恐慌を來たさないとも限らないのである。

於此吾人は前學年に引續き請負制度を採用したの
であつた。勿論請負者と寮生との利益は相反するも
のである。乍然、請負者に確實信用資本あるものを
撰ぶ時その暴利を制する事は敢へて難い事ではある
まい。而かも熟練せる料理人を得られ新鮮にして種
類に富む食料を巧得たる便宜のある事も忘れては
ならぬ點であらう。然し是等重要なる問題に關し吾
人は決してその現狀を讚美しこれに満足するもので
はない。寮生と賄請負人とは常に共營共存の主義の
下に立ち得るものとは云ひ難いのである。

この爲め委員は常に人格の向上に志し高校生たるの
体面を保ち請負人に對するや正に堂々たる態度を持
し好んで決裂を惹起するが如きは深く慎まねばなら
ぬ所と思ふ。而して一面萬一に備へるため經濟的に

は基本金の創設確立を計るの必要がある。これ我が部が第三學期に於て基本金設定の建議を提出した所以である。

而して又一般寮生は委員の仕事に深き理解と厚き同情を持ち請負人及其の使用人に對しては自重し自省し自覺し些細なりと雖も委員に弱味を與へるが如き行動は遠慮せねばならぬ所であらう。

第二學期の中葉我が炊事部より食堂内に於ける炊事委員の絶對權を要求した事も當時の狀況としては止むを得なかつた事といはねばならぬ。要求を否決せられた我等は絶望と理解せられないものゝ不幸に泣き、遂に總辭職を宣言したのであつた。然し我等の誠意を認めた翌日の協議會は我等の要求を容れ懇ろに就任を勧告し來つたのである。我等も亦一時は總べてを放棄したが再び當時の寮の狀況に鑑みこの勧告に心よく従ひ、この所謂「絶對權問題」も遂に圓滿に解決せられたのであつた。今後斯くの如き遺憾事の再び起らざらん事は吾人の切に希望して止まない所である。

由來斯くの如き我が部の仕事は廣く食事食堂浴場洗面所其の他一般衛生に關し甚だ重要にして且つ困

難なるに加ふるに彼の天才的のそれに比し餘りに華々しからざるが故に血に涙せし委員の努力の計畫のいかに多く葬り去られし事であらう。然し蔭かれし種子が春の陽に遇ふて美しい芽を出すと同じく何時かは是等隠くれた礎の上に幸福なる寮生活の殿堂が強く大きく建設せらるべきは秘かに吾人は信じて疑はぬものである。

愛するといふ事がすべてを知るといふことであるならば吾人は我が愛寮の士に云はん、諸君よ諸君は先づ大いにすべてを食ふべし、而して後ち之をよく噛み絞めよと。

これ眞に我が寮生活の味を知り得る唯一の方法であるからである。更に吾人はこの稿を閉づるに左の和歌を以てしたのである。

わけ登る麓の道は多けれど

同じ高峯の月を見るかな

最後に期日の近迫は遂に幾多の記事を割愛せしめ、且つ拙筆よく愛寮の念に燃ゆる我が總代並びに委員の涙ぐましくも強き奮闘活動を如實に報ずるを得なかつた事に對し深く遺憾の意を表する次第である。尙寮日誌を参照し我が部の日誌を作りこゝに收

録することにした。

炊事部日誌

第一學期

四月十日(火曜日)

前學年終りに選舉された總代の任命があつた。其中の中平井孝雄君及善波周君は炊事部委員を兼ねた總代である。食堂座席は各寮の順により定む。

四月十七日(火曜日)

十二日選舉の結果により第一學期委員が發表された。其中

山田貞夫	武山魁芳	東一
矢部壽男	川内忠次	東二
小坂成二	齋藤孝義	東三
清水眞澄	吉田宏藏	西一
田部井寅吉	七島徳次郎	西二
小橋茂雄	松井一夫	西三

の諸君が炊事部委員となる。

同日午後六時半第一學期第一回の協議會を開いた炊事部に關する決議事項左の如し

1 食堂及ホールに於ても制服又は袴を着用して

出入すること

2 ホール其の他に於て襦袍着用裸體等凡て見苦しき様子を爲さざること

3 風呂代を補助すること

四月十八日(水曜日)

午後六時より會議室にて獻立表の検査等に關する打合せ會を開く。

四月十九日(木曜日)

總代會議を開き風呂石炭代補助費として一ヶ月一人金五拾錢宛補助することに決議す。

四月二十七日(金曜日)

午後六時より寮友會第一學期豫算に關する協議會開かる。尙記念祭を五月廿日に行ふことを決議す

四月卅日(月曜日)

午後六時より同十時まで記念祭に關する協議會をひらき我が部は賣店並びに晚餐會の萬端を受持つこととなる。

五月十四日(月曜日)

記念祭の準備に忙しく炊事委員も亦町の商人との協定に奔走す。

夕方正木繁樹といふものが帝大生を装ひ寮に入り

来る。舉動不審なるにより總代と協力して徹宵調査し偽大學生なること判明す。

五月十五日(火曜日)

朝五時食堂に非常召集を行ひ偽大學生捕縛報告あり。改悔の狀明白なるにより朝食を與へ制帽制ボタンの代りに烏打ち黒ボタンを買ひ與へて追放す

五月十八日(金曜日)

賣店の各種無料券を寮生に配布す。

五月十九日(土曜日)

記念祭準備に忙し。

五月二十日(日曜日)

記念祭記——午前拾時より入場

音もなく梢の花辨が名残り惜げに振り返り乍ら散つてゐた。櫻の木にも何時の間にか柔かな緑葉が燃えて眞晝の神秘は水蛇のやうに鱗をはいて限りない恍惚の時のやはらぎを送り、合掌し起臥し焦燥しこの大きな生誕のよろこびを鞭つてゐた。寮の南方の櫟林の中と運動場の西方とに設けられた賣店には人足絶える間もない。寮の中では見物の人がぞろ／＼續いて物珍らしげに室をのぞき落書をながめて笑ふ。

除興場にあてられた食堂は息切のする程一抔で

「順番」が演ぜられた。片睡をのむ緊張さで。

一日の勞働を終へて太陽が眞赤に焼けた西の空に沈みやがて黄昏の靄が靜かに歩み寄る時生れを祝ふ若人の聲の如何に強くこだませし事よ。晚餐の卓上には見事な料理が展開され舞臺の劇は總てを恍惚たらしむるに充分であつた。

想へば今日は我々の第一回誕生日である。

つゝがなく一年を経し過去を思へば漫ろに歡喜の感に打たれざるを得ない。躍れ若人！歌へ我が友我も亦共に……されど……お、大正十二年よ！汝の重大なるに思ひ到る時我等の胞はとゞろく。二點は一直線を決定す。願はくば十二年よ正しきポイントであれ我等の正しく進むべき、歡喜の聲夜半を過ぎて止まず。

六月二十日(水曜日)

文一乙主唱により一年各類の代表者夕食後ホールに集り炊事ホールにつて意見の交換をなし後營養衛生ホール改善につき決議書を作る。但し文甲は意見の相違より之に加はらず。

六月廿二日(金曜日)

左の諸君は炊事委員補助者を委託された。

小山 大關 富山 吉成 木間 北村 堀(正) 廣瀬

其の他。

是等の諸君は獻立、衛生、ホール監督につき委員を助けて大いに活動し大いに寮生の意を強からしむるものがあつた。

七月七日(土曜日)

東一寮五室山口政保大腸カタルにて關根病院入院

七月八日(日曜日)

寮生中異狀者數名あるを以て石井校醫來診す。時節柄便所其の他の消毒を施行す。

七月十日(火曜日)

第一學期試験終了。

七月十一日(水曜日)

暑中休暇に入れるを以つて寮閉鎖。

第二學期

九月二十五日(火曜日)

地震のため殘寮少なく寮を閉す。

九月三十日(日曜日)

本日より寮を開く。歸寮生百十九名。

十月三日(水曜日)

第二學期寮委員の選舉あり。午後七時より寮務室

に於て總代會を開く。田中達次部君善波周君に代りて炊事部總代となる。

決議事項左の如し。

一寮生にして罹災せるものに對しては寮友會費免除。

二臨時入寮者中再入寮のものに對しては寮友會費

及同入會金免除。

三寮生の食費を前取すること。

尙第二學期茶話會豫算編成の方針植樹等に關し一般的打合せありたり。

十月四日(木曜日)

今學期委員の發表あり。その中左の諸君は炊事部委員となる。

山田 貞夫 木間 常理……東一

鈴木 俊 吉成 由平……東二

小坂 成二 堀 正 侃……東三

大關 義勝 清水 眞澄……西一

田部 井寅吉 南雲 五郎……西二

小山 隼太 富山 修……西三

十月五日(金曜日)

炊事部委員會を開き今學期事務分擔に付打合せす

食堂掛り 吉成 鈴木 堀 山田

ホール掛り 小山 富山 小坂 清水

指定商人掛り 大關 田部井 南雲 木間

一献立表決定は五名以上の署名あることを要すとせり。

十月六日(土曜日)

今日より食堂掛りは賄の米、卵等検査を初め

ホール掛りはホール改善に着手し先づ賣品の價格協定をなす。

十月十日(火曜日)

午後六時より圖書閱覽室に於て協議會を開く。同十時終了。決議事項左の通り。

一 變災救護事業に關する學校長の褒詞を額に作り記念のため寮應接室に掲ぐることを。

二 賄請負人が物品購入に現金を要する現狀に鑑み食費を前納すること。

三 第二學期の茶話會は旅行になす豫定なりしを變じ簡單なる茶話會を寮内に開き晝は野球等の運動をなし夜は食事の後も個人的餘興談話等を爲す事。

右は土曜日に行ふもの其の期間は追つて決定すること。

四 震災に因める寮歌を作り右の機會に合唱する事

五 寮内及び校内に寮友會の仕事として植樹をなすこと

六 寮友會内に編纂部なる一部を設けて寮に關する記録をなさしむること。

七 消防隊を編成し時々練習すること。

十月十二日(月曜日)

偽一高生來寮(清水正義といふ)宿泊を乞ひしが種々推問せしに中途にして何れが行きて來らず。

十月二十八日(日曜日)

左記の物品をホールに備へ付く

圖球盤 二臺(ホール寄贈) 將基 三組

基 二組 かるた 三組

規定

一 ホール備付娛樂器具は炊事部委員之を監督しホール之を保管す。

二 ホール備付の娛樂器具はホール以外の場所に持たざることを。

三 ホール備付娛樂器具を汚損紛失したる場合には

辨償せしむることあるべし。

十一月一日

午後六時より會議室に於て總代會議あり。

決議事項

一 灰の王購入の件

二 寮内に於ける頻々たる紛失事件

三 炊事請負に關する件

四 寮庭植樹の件

十一月二日

午後七時より寮生大會を開き紛失事件につき總代の報告あり次いで我が部の提案たる食堂内に於ける炊事部委員の絶對權につき審議す。結果は否決せられ委員の總辭職となる。

十一月三日

午後六時より圖書閱覽室にて協議會を開催す。

前夜我が部より提案せし事を審議しこれを可決し

我が部に對し復職を懇請するところありしかば吾

人は現狀に深く鑑み心よく復職の宣言をした。

十二月一日(土曜日)

午後四時より消防演習ポンプ試演。

浦和警察署より巡查部長來寮指導せり。午後六時

より全寮茶話會をひらく。

劇—ダイオゲネスの誘惑。星を數へる人

十二月二十二日(土曜日)

午後五時半より約三十分炊事部委員會を開き吉田

賄よりの請負解約願を受諾す。

十二月二十五日(火曜日)

寮賄請負人變更東京四谷矢島龜吉を新たに請負人にす。

同日より冬季休業につき寮を閉鎖。

一月七日(月曜日)

寮を開く。

一月十日(木曜日)

第三學期委員選舉

委員の發表ありその中左の諸君炊事部委員となる

山田 貞夫 藤本次之助……東一

鈴木 俊 吉成由平……東二

富田 直之 小坂成二……東三

大關 義勝 清水眞澄……西一

南雲 五郎 田部井寅吉……西二

富山 修 小山隼太……西三

午後六時より協議會を開催。

一、第三學期茶話會を廿五日に行ふ事及び其の分擔

二、本學年中の委員に記念品を送ること。

三、其の他雜件。

一月十二日(土曜日)

矢島賄と全總代炊事部委員との間に懇親會を開き意見を交換す。

一月十三日(日曜日)

新炊事委員中南雲君田部井君主となりて洗濯と左記の件につき協定せり。

一、枕蓑猿股ハンカチ靴下は總額二十五錢以上なる
とき但一個に限り無料とす。

二、右洗濯料金は品物差出の際前金拂とす。

一月二十五日(金曜日)

夕刻より第三學期全寮茶話會あり。演劇福引等の餘興ありき。茶話會後食堂坐席を科類により定む

二月一日(金曜日)

午後七時より協議會開催、決議事項左の如し

一、圖書部細則

二、寮友會基金として大正十三年度より入金の二割を積立てること。

三、協議會で決議したることは少くとも其の委員任期中は改正することを得ざること。
同日午後十二時より大關小山富山三炊事委員代表として一高記念祭の招待を受け併せて寮の視察をなす。

二月九日(土曜日)

午後三時平井總代本吉總代大關小山富山鈴木(俊)の諸委員は水戸高等學校視察のため出發。劍道部の川内君と同行。同夕刻水戸着。

中田全寮委員長大島庶務委員長海野會計委員長嵯峨根炊事委員長の案内のもとに種々見學し同夜は寮務室階上に泊す。

翌朝食堂にて平井總代表として挨拶を述べ午後三時多くの收獲を得た一同は雨中親切な水高寮委員諸君に見送られ思出深い水戸を出發した。

因みに記す水戸高等學校寮炊事は自炊制度であるこれ又殷盛なる水戸市を背景とするが故であるといへやう。しかし委員は事務繁忙に堪へず依てその食費を全免するといふ。

二月十三日(水曜日)

終業後西一寮前にて寮生記念撮影をなし後我が部の十二年度總代委員の記念撮影をなす。

三月十一日(火曜日)

本日より春秀休業につき寄宿寮閉鎖。

圖書部記錄

寮の圖書部は昨年來非常に面倒で、圖書の紛失、新聞雜誌の閲覧に關しても頗る圓滑を欠いてゐた。昨年度委員の如きは爲之、殆んど寢食を忘れてゐたと稱せられてゐる。當初は自由放任主義、次いで各自勝手に帳簿に記入して借出するといふのであつた。そして毎金曜日に之を返却するといふ頗る理想的のものであつたが、自由放任の時は勿論次の時期に至つても、帳簿に姓名を記入して行くものは殆んど無い始末で、金曜日には委員が各一室毎を調べ歩まねばならなかつた。然し人情はこうして催促した時に本を出ししふるものであつた。委員は徒勞するのみであつた。そして最後に貸出制度を設けた。然し鍵のかゝる本箱はなし結局は委員の憤慨に終つた。
そうした後を引き受けた吾圖書部員の苦痛は大なるものがあつた。然し寮務本館に立派な圖書室が作

られ、本箱も新調した。吾々はこゝで一大活動を思つたのである、このさまで大きからざる本箱、然し之を充満さすべく吾々の書籍の數はあまりに貧弱であつた。故に吾々は新刊書以外に古本を求め或は更に寮生の寄付を求めた。然し、遂に一般寮生からは殆んど寄附を仰ぐを得なかつた。ただ「海の日本」「カトリック」なる二月刊雜誌は毎月無名の者より寄贈があつた。奇篇に堪えないのである。

次に、吾々は貸出法の制を改正して、次の様にした

一、單行本に關して
一、貸出は毎金曜日午後九時半より十時迄の間に取扱ふこと

一、貸出期間は一週間とすること

一、貸出期間中と雖も委員より督促のあつた場合は直に之を返却すること

一、書籍を紛失或は毀損せるときは事情に依り賠償せしむること

一、新聞雜誌に關して

一、新聞雜誌の閲覧は自由とすること但し絶體に圖書室以外に持ち出さざること

大體以上の如くであつた。雜誌は後にボール紙を附

し外に持ち出し悪い様にして置いた。かくして大體整頓はしたやうなもの、必ずしも一冊の本も無くならず、一部の雑誌も無くならないといふ譯には行かなかつた。それは凡らく寮生同志この圖書を轉貸することに存してゐたらしい。御本人は轉貸しない積でも矢鱈に部屋に入つて、勝手に持ち出して行くといつた、よく云へば親しい惡くいへばだらしが無い然しこれも創設當初の氣分として或はかくあるのが當然かも知れない。

次いで紀念祭が來た。紀念祭實行に關し、最も困難な余興係を圖書部が仰せつかつた。と一方圖書部では圖書部自身の計畫があつた。それは一は紀念祭歌、寮歌の作成と他は寮生の機關雜誌の發行とにあつた。前者に對しては型の如く之を募集し凡そ兩者合して二十程の應募者があつた。(寮歌集参照)然し後者に關してはかなりの問題とされた。たゞ寮生の機關雜誌ではその目的が危くあつた。思想發表か文藝雜誌か、或は又與多をとばすべきか、或は貧弱な雜報に止むべきか第一がこの根本條件にあつた。そして先づその題名に迄迷ひ結局「寮友」と落した。然し往後日を暮して遂に沙汰止にしてしまつたこと

は誠に千載の恨である。

吾々は當時新設者の常早く完成をいそぎたかつた他の高等學校に見るあの立派な「寮歌集」等を見ると羨しくてならなかつた、僅か三つの寮歌、それを一冊として印刷して賣出した等、惡くいへば稚氣に充ちてゐるが、吾々の完成をせう心、そして立派なものとしたい心に溢れてゐたからだ。

紀念祭は來る大切な余興係だ。飾物等の出来ないこの紀念祭に唯一の呼物はこの余興にあるばかりだ吾々委員は夢中になつて働いた。東寮は菊地寛の「順番」で太田慶太郎君の舞臺監督。山口政保、小坂成二君等の主役の下に西寮は「戦時の花嫁」佐野碩君舞臺監督、根岸國孝、武内彌四郎君等の主役によつてなされた。舞臺裝置等我々は銳意之當つたのである。演出時間に多少の手違を生じなければ、演出の妙は之を償ひあまりあるものであつた。

劇の始まる前にレコードコンサートをしたのである。かくして多忙を極めた余興を遂行し得たのは嬉しいことだ。かくて無事に第一學期を完うした第一學期委員を附記しやう

東一寮山口政保 東二寮守隨一 東三寮鯉沼呢

西一寮増田七郎 西二寮山口忠幸 西三寮田中達二郎

第二學期は震災の影響で新刊書も十分にかへなかつた。然る一方寮生はふへた。ふへたけれどもこうした變則的なふえ方は一方に於て弛が出来た。圖書の紛失も多くなつた。於是第一學期の貸出制度を更に換えて「カード」式を採用することにした。即ち寮生は貸出券に書名を書き之を貸出日に持参し圖書と引き換え、その返却は自己所屬の各寮圖書委員迄としその時圖書とカードと引き換える制度である。

これによつて以後殆んど完全に紛失を防ぐことが出来た。然しこうした制度は自治を本体とする寮に於て必しも理想のものであるまい、第一年度第一學期に於ける様な風にしたがひものである。

寮生大會に於ては再び余興係を命ぜられた然しこの日は劇研究會の人々によつて演出されるによつてさまでの苦心はなかつた。シュニツレルの「デオゲネスの誘惑」森田草之助の「星を數へる人」であつた前者は佐野碩君監督後者は紀伊輝雄君の監督の下に大成功裡に終つた。

第二學期委員氏名

東一寮山口政保 東二寮守隨一 東三寮喰代田駿

西一寮増田七郎 西二寮設樂安男 西三寮谷亮平

第三學期は讀書の季節である。然し寮友會の方では一二學期の大活動の爲に金錢に不足勝であつた。然し吾々は之に顧慮なくかなりの書籍を購入したのである。第三學期に於ける一大仕事と見なすべきは圖書部規約を作つた事である。その概略を示せば

一圖書貸出規定

- 一、貸出は金曜日午後九時より十時迄とす
- 一、貸出を受けんとするものは所定の貸出券に所定事項を記し所定の時間内に於圖書室委員に呈出し圖書と引換ふること
- 一、圖書を返却せんとするものは必ず自己所屬の寮圖書部委員に返却し貸出券と交換すべき事
- 一、圖書貸出券余白なきに至りたるときは更に委員に請求し舊貸出券を返却すること
- 一、貸出券紛失したるときは直に委員に届け出づること

一、圖書に關しては特に叮嚀に取扱ひ毀損紛失の場合には之を賠償せしむることあるべし

一、圖書は絶対に轉貸を許さず

一、新聞雜誌閱覽規定

一、新聞雑誌の閲覧は自由となすこと
一、新聞紙に關しては炊事部と共力してホールに於て之を閲覧せしむ

一、雑誌は絶對に圖書室以外に持出さざること

一、寮歌制定規約

一、寮歌 記念祭歌共に全寮生より之を募集すること

一、記念祭歌は之を寮記念日に發表し寮歌は第二學期寮生茶話會に於て之を發表すべきこと

一、曲譜も成るべく寮生より之を募集し、やむを得ざる時に外に依頼すること

大体以上の如くであるが新聞閲覧は炊事部の共力はいか様に見ても不可能である故に削去すべきであつた

今一つ圖書三學期の誇は「浦高ダンス」である之は第三學期寮生茶話會に於て寮生一同にて踊つたもので福井達雄君の紹介により成つたのである。

第三學期寮生茶話會は三度余興係を圖書部で擔當された。劇研究會に依頼して太田慶太郎佐野碩君の主演紀伊輝雄君の監督でシュミットボンの「傀儡師」をなした。この演劇に高木先生の御令息を拜借し得

たのは幸であつた。尙デオゲチスの誘惑が再び演ぜられ拍手裡に終り、圖書部苦心の藝福引をなした。萬場哄笑抱腹絶倒裡に第三學期らしい平和な茶話會を終へたのである。

回顧すれば圖書委員程華々しい仕事をなしたものは少ない。

終始一貫誠意を以つて事に當つた委員一同その職をふりかへつて轉た感慨に堪えない。炊事部委員と大々的の激論を戦したことも少くない。然しいづれも飽く迄浦高寮の建設の爲め眞摯な態度であつたのだ吾々は眞剣であつたのだ三學期委員氏名次の如し

東一寮山口政保 東二寮守隨一 東三寮鯉沼呢
西一寮増田七郎 西二寮谷亮平 西三寮山口忠幸

第三年度

茲に大正十三年度(四月―九月)の寮誌を書くに當つて、なるべく寮日記に基くことにする。

前學年末行はれた寮總代選舉の結果左の六君本年度寮總代に任命せられ、各々事務を擔當することゝなつた。

東一寮總代

館野 覺治 文二丙

東二寮同

橋本 猛 理二乙

東三寮同

福井 達雄 理三乙

西一寮同

大關 義勝 文二乙

西二寮同

富山 修 文二乙

西三寮同

鈴木 俊 文三乙

右六君の中 鈴木大關の二君は炊事部委員

富山橋本の二君は圖書部委員

館野君は 運動部委員

福井君は 庭園部委員

斯の如く委員兼任となつた。

これより先き各自總代となりて各々自己の抱負實現のため、又寮自治の向上のため前三學期の試験終つて後、寮に留り本年度の計畫をたて寮自治の面目を發揮せんことを申し合せた。而して本年に於ては前學年の如き多數委員の弊を認め、委員の數を減じて能率の増進事務の簡明をはからんため、炊事委員六名圖書部委員四名、運動庭園の兩部は夫々二名となし、又委員室を設けて委員は必ず交代に委員室に居つて寮内の事務を司ること、又今年度學友會各部の奮闘の意氣を思ひて各部選手を各寮に纏めることゝ

した、即ち東一寮は劍道部東三寮は競技部西一寮は野球部西三寮は柔道部に決定した。然し此事については相當の弊害もあることゝて議論もあつたけれど本年度は試験的行ふことゝした。

一ヶ月餘の春季休業もすぎ、梅花開き麥青みて雲雀の聲も長閑に武藏野の春は廻りて我寮も三年の春を迎へたのである。而して惱み多き高校の試験も終り幾多の俊才を打ち倒して二條の白線に若き血を躍らし憧憬の生活、高校の第一歩を踏み多くの若人を迎へたのである。

四月十日 遂に我寮も三年の門を開き此等希望と感激に充ちた若人を迎へた。

父を伴へるもの母を伴へるもの或は兄におくられて來るもあり。二條の白線に菊章は輝き武藏野の平原に立つ我寮も又希望に充たされたのである。

今年の新入生は皆若いね、皆四年修了の坊ちゃんかな。とは誰か強さうなものが來たら自部に引入れんと寮の入口に待ち構へた各部選手の聲であつた。

四月十日夜早速寮總代會議を開き新入寮生に對しての種々の手配を計り寮生規約を各室に配り寮に付いて質問ある時は各寮總代に聞き合はす様傳へた。而

して左の歓迎辭を食堂前に張つた。

怡々駘蕩春は夫れ榮光なる哉。此の時に當り吾人は若き血と熱とに燃ゆる諸君を迎へたるを喜ぶ。希はくは純なる高校生の精神を發揮せられんことを。

又「食堂内及ホールにては必ず袴をつけられし」或は「上下に用ゆる草履は嚴にこれを區別されし。」などの例の如き大きな掲示が出た。又今年から各室の入口に靴箱を備付けられた。

四月十日の入寮者は一四九名であつた。

四月十一日朝より食堂が開かれた。而して本日は本校講堂に於て入學式及始業式舉行さる。又寮に於ては其夜新入寮生の歓迎を兼ね、寮内の諸般に付いて説明をなし創業の寮の多事なるを傳へ新入寮生諸君の力に俟つもの多きを説くこととした、總代大關君の開會の辭に始り各總代の挨拶等あり、終つて寮歌の合唱をなし午後十時散會す、寮友會長も出席せらる。

四月十二日放課後入寮式を舉行し、校長及寮友會長の訓辭あり、總代に對し辭命の交付があつた。斯くして寮内諸般の設備も整ひ、多忙を加ふる時本學期の委員選舉を四月十五日委員室にて行うた。元來第

而して從來委員は各寮毎に選舉を行つたが、前述の如く委員の數を減じ全寮よりこれを選出したため、委員の配置上室換へを餘義なくされ又委員待遇の意味に於て委員は階上の室に居ることとなし委員の決定と共に室換をした。

創業の寮、新委員の力にまつこと多く而も新委員の力や希望にみち各自全力を盡して寮自治向上の下に進み今學年を期して確立を期したのである。

新入寮生も寮に慣れ各寮のコンバも開かれ、寮歌の聲應援歌の聲武藏野の春の寮は此等若人の力にみち希望に燃えたのである。ストーム禁止ありとも若人の力は止り難く各寮總代も過激に渡らざる程度に於て、暫時黙認のやむなきに至つた。若人よ舞へ我々は今や高校の生活に浸り我々の意氣は冲天の様を示して居る。我々の歌の聲よ、此の萌え出づる春の武藏野の平原の彼方の果迄も傳へよ我々は若人であると口吟まれたのである。然しストームも弊害を生ずる時は斷然これを禁ずることにした。

各寮コンバは開かれても、全寮生一堂に會するの機会なきを顧み、各寮生の意見を聞き又寮生の親睦を圖り、新委員の紹介を兼ねて全寮茶話會を催さんとの

一學期の委員選舉に際しては選舉權は當然一年生もこれを有するも入寮して間もなき事故、全部二年生に委ねんことの了解を求めたのであつた、が今學期は總代會議に於て一年生は今學期の委員選舉權なきものとなし二年生のみにて選舉することとした。而して其の結果は左の諸君である。

炊事部 文二甲 松崎 健吉 東一ノ十室

同 高橋 慎一 西三ノ十六

文二乙 道岡 誠一 西二ノ三

理二甲 永井 芳男 東三ノ八

理二甲 松井 正夫 西一ノ六

理二乙 堀 正 侃 東二ノ四

圖書部 文二乙 谷 亮平 西一ノ八

文二乙 設樂 安男 西二ノ九

理二甲 鈴木 重夫 東三ノ三

理二乙 堅崎壽三男 東二ノ五

運動部 文二乙 市川 本三 東三ノ二

理二乙 池田 晴彦 東三ノ七

庭園部 文二乙 中村 龍彦 西三ノ九

理二甲 橋本 豐治 東三ノ八

各員は全部二年である

議起り、四月二十五日に開かれたる總代及委員の初會合に謀り廿九日(火)に全寮晚餐會を開いたのである。

各寮總代の挨拶、新委員諸君の希望や抱負、又一般寮生の自治の確立に付いて各自熱辯を振ひ又新入生の希望や意見を陳べ寮歌の合唱に頗る盛會を極めた惠まれた諸君よ、其の夜の意氣と熱とを持つて願はくは寮をして美しき理想の殿堂たらしめんために諸君の力を奮ひ給へ。

各部委員も夫々活動を始めた、炊事部に於ては賄及使用人、ホール、衛生及寮内の草履問題に付き、又圖書部委員は圖書室の整理、設備及圖書の購入等各自大車輪であつた、而も記念祭を控えて居ること故圖書部に於ては記念祭歌記念祭繪葉書及特筆すべき寮友第一號創刊號の原稿蒐集に忙殺されたのである四月も過ぎ櫻花も散り果て、新緑の色を増し記念祭を行ふべき五月を迎へたのである。

五月一日午後六時より寮委員の懇話會を兼ね賄ホール請負人を招いて新委員の方針を傳へ且種々の意見を傳へ且聞き委員各自も意見の交換を行つて八時散會した。

記念祭

五月二日食後寮委員室に於て總代及委員會合し記念祭に對する方針の具體的協議をかさねたるも意見多くして中々纏らず大体的方針を立て各自更に研究を重ねることとした。此の後隔日位に委員の會合あり記念祭に對する方針につき意見の交換を行つた。此等の具體的方針及催し物の相談は五日に開かるる協議會に於て決定することに申合せた。

五月五日(月)午後六時より圖書室に於て協議會を開いた。

此會に於て記念祭に關するは勿論炊事缺食に關する件、ストーム禁止の件に付き相談した。

炊事缺食とは前に賄請負人より提出されたもので缺食費の返済に際し現在一日五十五錢全部を返済しつゝあるが此の中、缺食は日曜だけにすること、而して五拾五錢の中には使用人の勞力費も含なる、故返済に當つては其の幾分かを差引くこと等であつた。

これも皆寮生の缺食多き故かゝる議も起るに付き此の「缺食を制限する」等の議も出でたれど良法なく、研究問題として現在の制度を續くることに決した。

記念祭に關しては本會議の主要問題に付き、種々の

意見提出され、殊に餘興及飾付に對しては議論行はれ、假裝行裂、運動會相撲等の議も起りたるも何れも見合せとなり、飾付は從來の如く質實を旨とし、徒らに虚飾に流るゝを避け、寮生及其父兄友人を中心とし此の美しき武藏の自然を楽しみ新緑の蔭の逍遙に、我々の寮の日常生活の如何なるかを紹介することにした。而して又我等寮生は此の祝福の日を心ゆく迄歌ひ春の夜の歡樂に酔はんとした、此の會議に於て決定したのは、期日五月十七日(後に二十五日に變更)午前九時より午後四時迄とす、次の五部を設く。即ち、

- 接待係 餘興係
- 賣店係 會場係
- 警備衛生係
- 各役の幹部として委員中より左の如く決定した。
- 接待係 大關 道岡 松井 中村
- 余興係 富山 設樂 谷 野崎 永井
- 會場係 橋本(猛) 堀 橋本(豊)

賣店係 鈴木 高橋 鈴木(重)

警備衛生係 福井 館野 市川 池田 松崎

而して、各係として一年生は全部これに當て、二三年よりは適當な人を以てこれに當つることとし、各係の徽章は

- 接待係 赤色リボン 餘興係 綠色リボン
- 賣店係 紫色リボン 會場係 水色リボン
- 警備衛生係 褐色リボン

接待係に於ては招待券配付寮歌寮友手拭販賣、前寮總代各學校委員及名士の接待、入場者の徽章、下足札の製作、一般休憩所の設備等にして招待券は全寮生一人につき五枚配付とし、尙必要者には更に五枚以内に於て與へることとし通學生には一枚づゝ配付することとした、而して二千八百枚の招待券を配付したのである。又一般入場者には白の小さなりリボンを配り其他は絶對に入場を許可せぬ方針をとつた。

各學校に對しては一高、水戸、山形、新潟、松本、静岡、の各高校尙新設に對し問合を寄せられたる東京高工、水産講習所又遙かに寮記念祭招待状を寄せられたる山口高校に招待状を發することに申合せた、余興係は前年の如く劇を催すことになりその撰擇、其の練

習、裝置に不眠不休の活動であつた。其は菊地寛氏作「父歸る」を試演の筈なりしも故障のため行ふことを得ず、左の二つを行ふことにして、各人物の選定にこれ又多忙であつた。

- グレゴリー夫人作 「月の出」
- ダンセニール氏作 「旅宿の一夜」

會場係は會場内の整理設備等其の配慮に餘念なかつた。

賣店係は當日の園遊會に對して種々な品を賣り、且寮生に對し若干の食券を配付することとした。賣店は東、西両三寮の階上の室を二三、賣店及コーヒー店となし、寮外に於ては二ヶ所に設けることとした。

又、寮歌集、寮友手拭を賣ることとした。

警備衛生係に於ては大アーチを作ること、寮内外の風紀を取締り衛生に注意すること特に招待券を所持せざる入場者の取締を厳にす。

斯くして各係決定し具體的活動に入つた、前に募集せし記念祭歌、寮歌、寮友の原稿、手拭の圖案も決し左の諸氏がその撰に入る。

- 記念祭歌 文二乙 小山 隼太
- 同 作曲 文三乙 諸井 三郎

寮歌

文二乙 谷 亮平

同 作曲

文一丙 好地 武雄

記念祭手拭圖案

文二乙 柳井 陽

此處に又特筆すべきは誌寮友の創刊である。圖書部委員の努力に依つて兼ねて企てられつゝも發刊し得なかつた誌寮友の生れたるは大なる收穫である。光明である。寮生の大なる喜びであると共に慰安である。

然るに十八日は電氣會社の關係で日中は電氣を劇に利用する能はぬこととなり、此處に十八日の記念祭を延期するや否やの問題が起り、結局二十五日に延期することとなつた。更に、これを二學期に延期するの說出でたるも前學年に於ても多くの議論の後新しき寮が建ち最初の入寮したる日を末永く祝はんため五月中旬に於てこれを行うと決したる故、その謂を汲んで、同じく五月中にこれを行ふこととし、五月八日の委員會に於て二十五日午前九時より午後四時の間に行ふことに決した。

野球部事件

斯く記念祭に對し多忙を極むる一方、五月八日行はれたる、文丙寮生コンバの後、猛烈なるストームあり、中に多數の野球部選手居り、ために野球部選手のストームなりとなし、これに反感を有する二、三の寮生は野球部に對し不快なる行爲をなし剩へ投書をなして己が反感情を密に洩したる故、野球部選手よりの抗議となり、一は野球部選手のストームを行ひし件及「ストーム」に對する反感より、卑劣なる行爲をなすは、高校生の精神に反し、寮生の面目を傷つくるものとなし、九日夜總代會議の結果、當夜直ちに寮生大會を開くことに決議し十一時食堂に於て全寮生總出席をなし鈴木總代より詳細に事の經過を報告し、野球部主將立つてストームの謝罪をなし更に事の經過を述べ、これに對し寮生各自もたとへ「ストーム」ありともかゝる行爲は卑劣にして許すべきにあらずとなし各々高校生の純なるべく公明なるべきを説き此の如き者寮生にあらば速に出で、謝罪すべしとの熱辯は各人の口より叫ばれ、我寮を負うべき寮生は須らく卑劣なる者を馳逐すべしとの辯を振ふ、各々純なる寮生の叫び寮の確立に憧憬を叫びは堂を壓し議論又沸騰して未明に及べり。此の時に於て此の處置は總代委員に委任するの議出で、議長を選挙して全寮生に謀りたる結果、異議なく總代委

員に一任と決して散會す。

寮生諸君よ、更け行くかの夜、吾人の眼瞼は紅み、高校生の意氣に溢れて我寮の透徹せる平和の要求を叫びし、かの夜の思出は永久に吾人の胸に藏したいものであり、かの熱と意氣とは寮生としての心に銘し永く我寮に流れて、益々榮え行くことを希うものである。斯の如き事件起り又記念祭を眼前に控ゆる寮總代委員の多忙は大なるものであつた、殊に餘興部は醫務室に於て劇の練習に忙殺されてゐた。

記念祭當日

五月二十五日記念祭舉行の大きな揭示に記念祭歌寮歌の練習及各設備に寮生も活動を始めた、五月二十日午後立教大學教授辻莊一氏來寮の實情を視察せらる二十四日は各寮とも夫々裝飾に取懸つた。記念祭の喜びに溢れ、簡筆なるべきであつた裝飾も中々に大仕掛になつて來た、然し飽く迄質實を旨としたる點は賞すべきであらう。同夜は徹宵若葉の枝或は萌出えでたる緑の草を取り來つて獨特の趣向を凝らした。

五月二十五日 若葉の香寮の窓を襲ひ武藏野の緑濃き春、又酣なる時、我寮第二回の記念祭が催される

のである、夜來の小雨に氣を惱したるが朝に至りて雲飛び空晴れて長閑な春の光りは寮に充ちたのである。寮の二階の窓に立ちて遙か春の武藏野の果を眺むる若人の眼、春の光りに浴して靜かに寮歌を吟む若人の群、誰か此の武藏野の春を楽しみ我寮の榮えを祝福しないものがあらうか。今日こそ歌ひ、今宵こそ舞ふとは徒らな叫ではない。

ポスターに飾付に、總ての備前は完成し、九時開場し一般の入場を許した、食堂に於ては餘興の劇、午前は「月の出」を午後は「旅宿の一宿」を行ふ。賣店又豫期以上に成功し數千人の入場者があつた。前總代及一高、水戸、松本、山形、新潟各高校水産講習所の各寮委員等來寮して寮の視察をなす。午後突然沛然として降雨ありたるも間もなくやむ、頗る盛大裡に午後四時閉場す。

尚當日對抗競技のため來校せられたる福原學習院長も來寮視察さる。午後七時より食堂に於て全寮晚餐會を開き、校長生徒課長他各課長寮關係者及前寮總代及來寮の各高校寮委員も特に招じ福井寮總代の開會の辭に富山總代によつて記念祭歌の合唱をなし前寮總代に對し記念

品贈呈あり、且各高校委員及前總代の挨拶あつて直ちに劇に移り最後に寮歌の合唱をなし非常な盛會に午後十一時散會した。

然しながら感激に充ちた若人の心は何で黙して居られよう。踊り狂ふ幾多の寮生の群は寮歌を高唱しつゝ、劇の舞臺の上に、食堂に、ホールに、到る所を占領して春の夜の更け行くも知らず、今日の祝福に浸り愛する我寮に更に榮多かれど、歌となり演説となつて或は友を抱いて泣くもあり、其の熱意氣とは武藏野の野を壓し其の聲は遠く森に衍して東の空の白む迄歎を盡したのである。

斯くして、記念祭も終り其の夜の歡びも、憶出として永く我等の胸に残るであらう。

記念祭以後

今學期の大事業たる記念祭も終り日夜多忙を極めた寮總代及委員も此處に喜と安慰に浸り得たのである然し又、學友會に於ては各校との對抗競技切迫と共に多忙となり、五月二十八日には山形、新潟兩校競技部委員と對抗競技に關する協議會を寮務室に於て開くを見たり。

而して又選手の猛練習の關係上選手の中の通學生を

試合迄寮に合宿することを許可することとなりこれがため若干の室換をなせり。

六月十四日夕食後炊事委員會を開き炊事に關する事及記念祭後上下の草履稍々混同の傾きありしかば嚴重なる警告的揭示をなしたり。各對抗競技切迫し學友會應援團の活動となり、寮に於ても寮生一年各類の生徒其他を集めこれが協議をなしたり。尙學友會理事會合も再三寮に於て行はれたり、講堂に於ては數度應援團演說會行はれたり。

一學期も終りに付き、二學期寮委員を選挙することとし總代會議の結果、六月二、七日(午後三時より五時迄)に二學期寮各委員選舉の同日午後七時より協議會を開くこと、尙來學期の圖書部委員を二名増加することに決議す。然るに二學期委員選舉に付いて候補者多數にて選舉猛烈を極め各類對抗の傾きもあり、又寮内護憲團など出で候補者推薦の揭示に賑ふ。

六月二十七日(金)午後三時より五時の間に於て委員室に於て投票用紙を配付し投票を終り、同六時より總代及若干委員立會にて開票し其の發表は後日に譲り、同七時より直ちに協議會に移れり。

の事務總轄に力を入ることとす。

次に二十六條但し以下「會員にして意見あるものは協議會々議に出席してこれを述ぶるを得」を削り、意見あるものは委員迄これを述べ又議案を出すことに決す。

各決議の後種々の意見交換をなし午後十一時半散會して本學期の協議會を終る。

六月二十九日(日)午後八時より食堂に於て新作の對抗競技應援歌の練習をなせり。

七月一日(火)本日より電燈は變壓所學校内に設けられ自營となれり。

七月二日、六月末選舉の二學期寮委員發表せられ左の如く決す。

炊事部

文一甲 藤枝 泉介

同 小山 貞雄

文一乙 船山 德輔

同 豐田幸太郎

文一丙 足立 修

同 姉崎 種世

文一甲 利根川秀吉

同 山口 靖

圖書部

同 山口 靖

次に規約第八條但し以下即ち「寮總代は各部委員を兼ねる」を削ることとし總代の煩を避け總代は全般

圖書部 文一乙 鍛冶 四郎
文一乙 福島 角三
文一丙 堀内 恭二

運動部 同 小笠原 録雄
文二乙 道岡 誠一
文一丙 柴田 正治

庭園部 文一甲 松田 慎三
文一乙 志村 博

右の十六君に決定す、然るに庭園部委員志村君二學期退寮に付き變更した。

庭園部 理二甲 橋本 豊治

七月九日夕食後炊事委員會あり賄請負人との關係に付き紛糾を來し相當の議論の後先方よりの釋明にて落着し尙炊事使用人に對し特に功あるものを賞することす。

當夜寮應接室に於て學友會理事の會合あり。

七月十日斯くして多事なりし一學期も終り、一學期の試験も午前中に終り寮に於ても其翌日より夏季休業中閉寮することとなる。されど陸上競技及野球兩部の各選手のみは特に合宿を許可せらる、尙夏季休業中寮内各室の疊換を行ふ、

山形に於て催されたる陸上競技に際し應援のため同地に赴きたる富山大關の二總代は試合當日山形高校寮視察をなし同寮委員と意見を交したり。

浦和高等學校學友會日誌

大正十一年

四月 十日 浦和高等學校第一回入學式

十二日 始業式

浦和高等學校學友會設置に關する會合

四月二十五日 學友會創立委員會

五月 十一日 大正十一年度學友會理事任命

十日 各部々長委囑さる

十日 各部委員任命

十五日 寄宿寮開、入寮者九十八名

十八日 決定、寮生規約議定

二十日 入寮式舉行、總代任命

二十六日 大正十一年度豫算に關する役員會

六月 三日 エスベランド講演會、寮生野球大會

十日 食堂に於て全寮茶話會開催

十六日 第一回寫眞繪畫展覽會

十五日 食堂に於てレコートコンサート

二十一日 女學校問題に關して報告及協議

二十四日 學生對警察問題本日を以て解決

二十六日 學生大會、警察問題報告

七月 一日 腸チブス發生、數名入院

三日 寮の大消毒を行ふ

五日 本縣衛生課技手及び浦和警察署衛生係來寮更に寮内の大消毒を行ふ

第一回フクチン注射舉行

寮生糞便検査

七日 第二回フクチン注射

八日 第三回フクチン注射

八月 二日 會員鏑木常正君盲腸炎にて死亡

三日 會員白木隆君腸チブスのため死亡

四日 會員伊藤恒君腸チブスのため死亡

九月 五日 西三寮總代任命、二學期よりの入寮生入寮式

十月 一日 庭球部處女試合、熊中と戦ふ

二日 第二回寫眞展覽會開かる

十一日 コレラのワクチン注射、辯論部拓大派遣

十二日 大劍道部大會に選手派遣

十七日 誘掖會對庭球試合

二十一日 陸上競技トラック開き

二十二日 辯論部日本大學辯士派遣
 二十九日 縣下中等學校第一回野球大會
 三十一日 庭球部對國勢院試合
 三十一日 縣下中等學校大會決勝
 十一月一日 第一回辯論練習會
 五日 對第一高等學校庭球試合
 五日 辯論部宗教大學辯士派遣
 八日 開校記念運動會、縣下中等學校上陸大會
 八日 全寮茶話會
 九日 開校記念音樂會
 十一月十二日 辯論部外語辯士派遣
 十六日 エムヘラント發會式
 廿一日 理事改選
 廿五日 各部委員改選
 三十日 各部委員再改選
 十二月九日 大正十二年度豫算に關する役員會
 十三日 陸上運動部本校對一高一年練習試合
 十三日 第三回繪畫寫真展覽會
 十六日 思潮研究會發會
 廿五日 學友會雜誌第一號發刊

大正十二年度
 一月五日 東京帝大に辯士派遣
 十三日 乘馬クラブ發會
 十五日 劍道部寒稽古始まる
 二十七日 全寮茶話會開催
 二月三日 學友會追加豫算陸上運動部對類競技規定及物品會計規則に關する役員會
 十七日 對一高蹴球戰
 二月廿三日 宗教哲學研究會發會
 十日 總代任命
 十七日 寮委員任命、協議會
 廿四日 陸上運動部委員一部改選
 五月三日 辯論部練習會
 五月十二日 陸上春季競技會、一年對類競技運動部、弓道部、柔道部長更迭
 十五日 對抗競技に關する件、中等學校生徒を主体とする辯論部並びに運動各部大會に關する件追加豫算に關する役員會
 十八日 帝大東北武者修業の一行に武德殿で稽古

一 寫真展覽會
 大正二十日 寮記念祭
 二十一日 辯論練習會
 二十六日 劍道部新入生歡迎試合
 六月十七日 法政大學劍道大會に選手二名派遣
 十八日 卓球クラブ發會
 二十三日 對浦中野球部試合
 二十六日 對新潟山形高校陸上競技同上餘算概算及選手に關する件庭球部外四部に對し接待費分配に關する役員會開催
 七月三十日 對抗競技第二次豫選
 七月二日 對抗競技に關する應援團編成
 乘馬クラブ關東學生乘馬協會に加入
 選手推戴式
 十一月十一日 劍道部房州富浦に合宿開始
 水泳部富浦合宿
 十五日 對抗競技三高校代表者打合
 十八日 劍道部夏稽古終る
 十九日 三高校對抗競技第一日
 二十日 同 第二日
 九月三日 夜警開始 寮に留るもの四五人

十四日 救護團新設
 五日 浦和驛及び浦和町にて救護團の活動
 六日 川口驛に於ける救護團の活動
 七日 救護團大宮驛に於て活動十四日終る
 十一日 職員生徒罹災慘況視察隊組織さる
 二日 寮委員の選舉
 三日 庭球部對浦和中學練習試合
 六日 劍道柔道道場完成
 二十二日 縣下中等學校柔道大會
 野球大會
 二十六日 縣下中等學校庭球大會
 二十八日 劍道部縣下中等學校大會
 卅一日 第二回陸上運動部縣下中等學校大會
 庭球決勝(縣下中等學校)
 乘馬クラブ明治大學馬術部主催遠乘に參加。臨時救仁部本會選舉規則に關して役員會開かる
 十一月二日 早稻田大學柔道大會に選手派遣
 四日 庭球部對東京高蠶試合
 五日 對國學院庭球部試合
 六日 東北帝大辯論大會に辯士派遣

八日 第二回開校記念式、第二回運動會
 九日 柴田倫太君死亡さる
 十一日 八日より十一日まで寫真展覽會
 對學習院野球戰
 十六日 劍道部東京高靈對試合
 柔道部紅白練習試合
 十八日 對學習院陸上競技試合
 對一高一年本校一年陸上競技
 二十五日 理事改選
 二十六日 學友會委員改選
 同二十七日 三校合同辯論會に辯士派遣
 十二月一日 消防演習
 八日 辯論部納會
 物品檢查施行
 旅行部々々長更迭
 十四日 大正十三年度豫算に關する役員會
 十五日 來年度豫算に關する役員會
 二十六日 寮賄受員人變更
 學友會雜誌第三號發行
 大正十三年
 一月八日 理事一部改選

十日 第三學期寮委員選舉
 十日 劍道部寒稽古開始
 二十日 對一高蹴球戰
 本年度豫算に關する役員會旅行部委員更迭
 會費及び據金滞納者に對する申合せ事項に關する役員會
 全寮茶話會
 二十五日 劍道部熊中遠征
 二十六日 劍道部川越中學遠征
 二十七日 對高師蹴球戰
 劍道寒稽古納會
 二月一日 東京帝大劍道大會及國學院大學 東
 洋協會劍道大會に部員出場
 十三日 埼玉師範と柔道試合
 對商大蹴球戰
 浦和町より武道獎勵の爲に寄附あり
 十一日 對立大蹴球戰
 辯士派遣早稻田高等學院
 國學院へ辯士派遣
 十四日 柔劍道親睦會

十七日 對帝大蹴球戰
 松戸高等園藝へ辯士派遣
 二十一日 文科對理科蹴球戰
 對早稻田高等學院蹴球戰
 二十三日 劍道部東北武者修業出發
 十一日 武者修業歸校
 二十日 關東乘馬大會に出場
 四月 三日 新入生入學式舉行
 十二日 始業式舉行後新入會員歡迎會總代任命入寮式
 十三日 埼玉武德會支部主催の劍道大會に劍道部員出場
 十五日 一高劍道部關東武者修業の途次來校
 二十六日 陸上運動部一年級對類試合
 對一高野球練習試合
 二十七日 關東學生乘馬俱樂部遠乘に出場
 二十九日 全寮茶話會
 辯論部水泳部長副會長交迭
 春季陸上競技會
 劍道部一年對類試合
 八日 辯論部例會

十日 第一回講演會幸木博士招聘
 十一日 對農大野球練習試合
 陸上對抗競技豫選
 十五日 明治大學へ劍道部派遣
 十七日 陸上運動部對帝大醫學部練習試合
 第二回音樂會
 キリスト教青年會主催講演會小手國雄氏招聘
 十八日 對學習院野球試合
 二十一日 對帝大工學部陸上競技練習試合
 追加豫算に關する役員會
 二十四日 千葉陸上對硬式試合
 二十五日 對商大豫科野球試合
 寮記念祭
 關東中等學校辯論大會
 對學習院陸上競技
 三高校對抗競技打合せ
 學友會應援團長選舉結果發表
 辯論部練習會
 二十九日 戶山學校劍道大會へ部員派遣
 三十日 對商大豫科野球練習試合
 六月 一日

同

七日

陸上競技對拓大試合
對商大豫科野球試合
本校一年對師範との柔道練習試合
立正大學に辯士派遣。自治會館に辯士派遣

六月 八日

對一高庭球戰

十五日

乘馬クラブ陸師記念運動會ニ參加

十八日

日連宗大學に辯士派遣

十九日

對抗技に關する役員會

二十一日

對國學院大學野球練習

二十二日

對東洋大學野球試合

二十三日

法政大學へ劍道選手派遣

二十四日

選手推戴式

二十九日

文立大野球試合

七月 十二日

劍道庭球陸上競技部合宿

對逓信省野球試合

京都帝大辯論部派遣

十五日

劍道部陸上競技部出發

十七日

京都帝大劍道大會開かる對橫濱高工野球試合

十九日

對農大野球試合

二十日

辯論部東北遊說隊出發
山形浦和新潟水戸四校辯論大會
對一高野球戰

二十一日

辯論部會福島中學に開會

二十二日

三高校對抗陸上競技第一日

二十三日

同第二日庭球部選手出發

二十六日

劍道部選手歸る

二十七日

對抗庭球試合第一日

八月 二日

乘馬クラブ耐熱騎乘に參加す

七日

向フ三十日間野球部大湊合宿

十三日

乘馬クラブ全國高校馬術競技大會に參加

二十日

對熊中クラブ野球試合

二十七日

靜高選手觀迎會

二十八日

對靜高對抗野球試合

校歌

大いなるかな武藏野は

天の紺碧地の綠

渺茫として果もなし

あゝ人生の朝にして

自由の翼高く

理想の國を天翔る

我等に何そふさはしき

大いなるかな天地

大いなるかな我等

このもかのもとに櫻草

美しいかな武藏野は

あゝ人生の春にして

捲攔として亂れ咲く

至純の郷にあこがるゝ

眞紅の血汐色若く

美しいかな天地

我等に何そふさはしき

美しいかな天地

美しいかな我等

壯なるかな武藏野は

秋父風のひたよせに

颯々として渦を卷く

あゝ人生の戦に

久遠の勝を制すべき

力の戦士義の勇士

我等に何そふさはしき

壯なるかな天地

壯なるかな我等

應 援 歌

(ハ調 4/4 拍子)

{ 谷 本 (歌詞)
譜井三郎 (曲) }



五

四

三

二

戦なき地は静まるを
はてしなき凱歌は高し
萬歳の響あふれて
感激の涙あつぎ

萬歳を勝利と凡て
渴しつゝ君を待たん
若人の精神と意氣と
示さばや今日の勝利に

おはれぬ力秘めつゝ
すこやかに君がすがたぞ
たのもしと血はおどろつゝ
若人の心はうれし

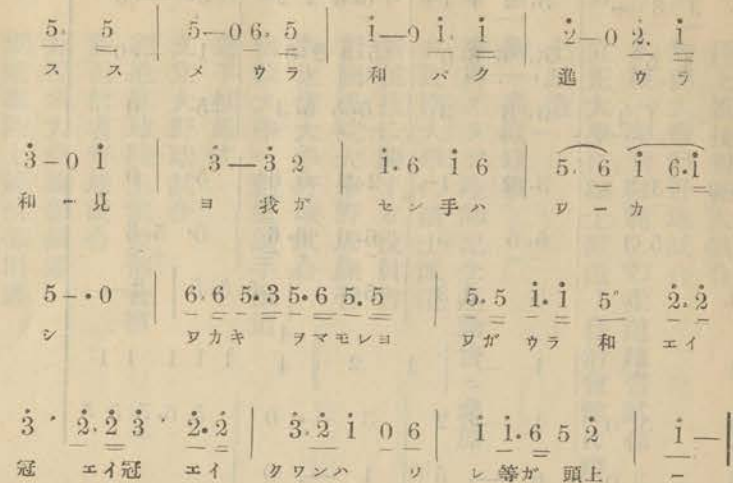
炎熱は大地を成し
草木のみ繁れといふも
若人は聲の限りな
君が爲叫ばんものぞ

應 援 歌

{ 4/4 變口長調 |
拍 子 }

壯 快 ニ

{ 大河内信成(歌詞)
弘田龍太郎(曲) }



四

三

二

祝へ 浦和 祝福浦和
見よ 我が選手は偉なり
偉なるを仰がん 我が浦和
榮冠 ヲ々 ヲ々は
我等が頭上

勝てよ 浦和 優勝浦和
見よ 我が選手は勝てり
勝てるを稱へよ 我が浦和
榮冠 ヲ々 ヲ々は
我等が頭上

奮へ 浦和 奮闘浦和
見よ 我が選手は強し
強きを欺はん 我が浦和
榮冠 ヲ々 ヲ々は
我等が頭上

寮 歌

守 隨 一 (歌詞)
吉 田 信 俊 (曲)

6	1	3	3	4	3	3	6	6	4	4	3	0
ミ	ド	リ	ノ	ガ	カ	ベ	ム	ギ	ノ	ノ	ニ	
3	4	3	2	2	2	1	7	6	3	3	6	0
ハ	ル	ハ	カ	ヘ	リ	ヌ	ヒ	ト	ト	セ	ト	
6	7	1	2	3	3	3	4	3	2	4	3	0
エ	タ	カ	ニ	ニ	ホ	フ	オ	モ	ヒ	デ	ノ	
3	6	6	4	4	3	3	2	1	7	1	6	0
ハ	ナ	ハ	ウ	マ	イ	ニ	フ	シ	テ	ケ	リ	

- 一 縁の丘邊の野に
ゆたかに匂ふ思出の
- 二 廣茫遙けき武蔵野に
若き心の野に崩ゆる
- 三 今追憶の木の實熟る
冷たかりけり土の香の
- 四 日は沈めども野に立ちて
あゝ若人に血は燃えど
- 五 されど果なき歌語に
今宵の灯見あぐれば
- 六 いざ吾くまん饗酒を
いざや歌はん吾友よ

寮 歌

- 一 春は還りぬ一年と
花は美睡に伏してけり
- 二 紅き花咲き又散りて
うら若草は茂みけり
- 三 機林にさまよへば
黙せる魂にしみ入りて
- 四 秩父の脈に眺め入る
憶は長し夢はるか
- 五 紅くもえたつ六寮の
熱き想にふるふかな
- 六 集ひの宵の更くるまで
あふるゝ胸のさくるまで

(守 隨 一)

寮 歌

藤 倉 寛 三 (歌詞)
諸 井 三 郎 (曲)

3	3	4	3	3	1	7	6	6	1	2	3	0	3	3	6	6	5	5	4	3
ム	サ	シ	ガ	ハ	ラ	ノ	ス	エ	ト	ホ	ク		ク	ス	ギ	バ	ヤ	シ	ニ	
6	6	5	6	5	5	5	6	6	6	4	3	0	1	1	1	1	7	7	2	1
ム	サ	シ	ガ	ハ	ラ	ノ	ス	エ	ト	ホ	ク		ク	ス	ギ	バ	ヤ	シ	ニ	
3	3	7	1	6	0	7	7	2	1	7	7	4	2	3	3	4	3	3	0	
ヤ	ミ	チ	チ	ヌ		ケ	ム	リ	ハ	ヒ	ニ	ク	ク	ク	モ	マ	ヨ	ヒ		
7	7	5	6	6	0	5	5	6	6	5	5	6	7	1	1	2	1	1	0	
ヤ	ミ	チ	チ	ヌ		ケ	ム	リ	ハ	ヒ	ニ	ク	ク	ク	モ	マ	ヨ	ヒ		
6	6	3	4	3	3	1	1	7	7	1	7	6	0	6	6	6	6	1	7	6
ヨ	ハ	イ	ン	サ	ニ	ン	ト	ク	レ	ユ	ケ	ド		チ	ニ	ソ	ソ	リ	タ	ツ
6	6	1	6	5	7	6	6	5	5	6	5	6	0	4	4	3	1	6	7	1
ヨ	ハ	イ	ン	サ	ニ	ン	ト	ク	レ	ユ	ケ	ド		チ	ニ	ソ	ソ	リ	タ	ツ
3	3	3	4	3	0	3	3	1	7	6	6	6	3	1	1	7	1	6	0	
マ	ツ	ノ	ミ	キ		ヒ	ニ	ア	カ	ア	ニ	カ	ト	モ	ユ	ル	カ	ナ		
2	7	1	6	5	0	6	6	6	6	6	6	1	1	6	6	5	6	6	0	
マ	ツ	ノ	ミ	キ		ヒ	ニ	ア	カ	ア	ニ	カ	ト	モ	ユ	ル	カ	ナ		

- 一 武蔵が原の末遠く
煙は低く雪迷ひ
地に聳り立つ松の幹
- 二 燃ゆる思に胸溢れ
泉涌ふと分け入れど
丘邊に立ちて嘯けば
- 三 道渾沌と闇深く
いざや彼方の丘の上
聖き光を懐かしみ
- 四 嗚呼淡々と湧き出づる
今宵ぞ明き灯の下に
友よ腕を差し出せ
- 五 葉盃溢れ滴れば
泉の美酒の甘くして
三年の月日泡沫と
- 六 夜吹く花の落散りて
樹陰を忍ぶ月影ぞ
君よ聞かずや硝子戸に

- 一 機林に閑落ちぬ
世は陰惨と暮れ行けど
陽に赤々と燃ゆるかな
- 二 機林の奥に湧く
迷途に衝もなく
煩悩に染まるかな
- 三 夕づく星の影もなし
薄紅に匂ひ出し
己が古巢に歸りなん
- 四 泉の美酒を掬ひつゝ
互ひに酌まん友や誰れ
一葉緑我にあり
- 五 膝に亂るゝ夜の花
餘樂の契果知らず
消えんも淡き夢の寮
- 六 寮間も深き時
若き眠りの胸に射す
夜を吸り泣く郷愁

(藤原寛三作)

變ホ調 $\frac{4}{4}$

震災記念寮歌

野崎壽三男 (歌詞)
諸井三郎 (曲)

1. 1 7 6 | 3. 3 3 — | 6. 6 4 4 | 3 — — 0 | 3. 3 4 3 | 2. 1 7 — | 1. 7 17 17 | 6 — — 0 |
レイロー ノツキ アフギツツ ナガツキ ハナチ ノニサ—グ—ル

6. 6 5 6 | 1. 1 7 — | 1. 1 2 2 | 3 — — 0 | 3. 3 6 3 | 4. 4 3 — | 2. 2 1 3 | 7 — — 0 |
アキハキツレド ハルノゴト ハナノフシドニ ウマ イシテ

6. 6 7 6 | 5. 5 3 — | 3. 3 4 3 | 3 — — 0 | 6. 6 6 5 | 7. 7 6 — | 5. 5 5 5 | 6 — — 0 |
サイワヒノヒチ ヌメムトキ ホノホハアカグ ソラチツメ

4. 4 4 3 | 2. 2 1 — | 7. 7 6 1 | 3 — — 0 | 3. 3 4 3 | 1. 1 6 — | 5. 5 5 7 | 6 — — 0 |
ナキハタ イザニ トドロシテ ヘイハノサトハ カゼスサブ

- 一 玲瓏の月仰ぎつゝ、
秋は来つれど春のごと
幸福の日を夢む時
地震は大地にとどろして
嗚呼新潮の澎湃と
奮闘し文明も
今武蔵野はいぶせくも
懐みにむせぶ人の聲
三 この渾池の闇の世を
導くものは若人の
淡き未来に微笑めば
わが行手にぞ擴りて
- 一 長月花を野にさぐる
花の床にうまいして
焰は赤く空をそめ
平和の郷は風すさぶ
寄せし島根に鯨亂と
奇しき力に色褪せて
愁の雲に覆れつ
蓬々として風に吹く
光輝く彼方へと
希望の調ゆるやかに
荒涼の原蒼茫と
豊饒けき末を思はする

(野崎壽三男)

ハ調 $\frac{4}{4}$

大正十二年度

記念祭歌

田中達次郎 (歌詞)
佐野碩 (曲)

5. 5 6 5 | 5. 4 3 — | 2. 3 4 3 6 5 | 5 — — 0 | 5. 5 1 7 |
スエハル カナル ムサシイノ—ノ サツキノ

7. 6 5 — | 4. 3 2 3 5 4 | 3 — — 0 | 3 — 3 4 | 5. 5 6 5 |
ソラニ モエイ—デ—シ ワ—カキカホリノ

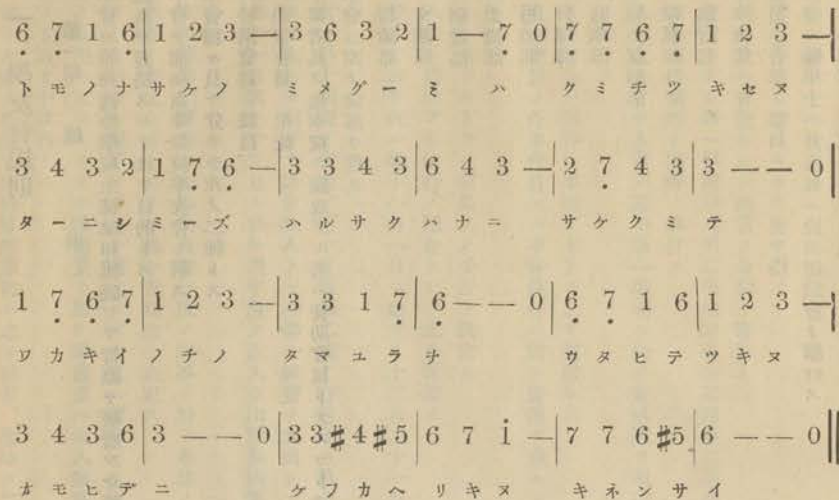
4. 4 4 4 | 5 — — 0 | 5. 5 6 5 | 5. 5 1 — | 7. 7 7 6 7 |
ノニミテバ フレヲガチシホ ナミタカー

1 — — 0 | 1. 5 5 — | 3. 3 6 5 | 4. 4 3 2 | 1 — — 0 ||
シ イ—イザ—ツドハン キネンサイ

- 一 末はるかなる武蔵野の
若き蕪の野にみてば
いざ 集はん記念祭
二 富峰の雪を仰ぎつゝ
胸のひびきは高うして
いざ 歌はん記念祭
三 自治の日此處に始まりて
この礎を踏みしめて
いざ 祝はん記念祭
- 一 五月の空に萌え出でし
我等が血汐波高し
菊花の秀をかざすさき
若人のこころだませり
時めくりぬ一星霜
宇宙に若き名を示さずや

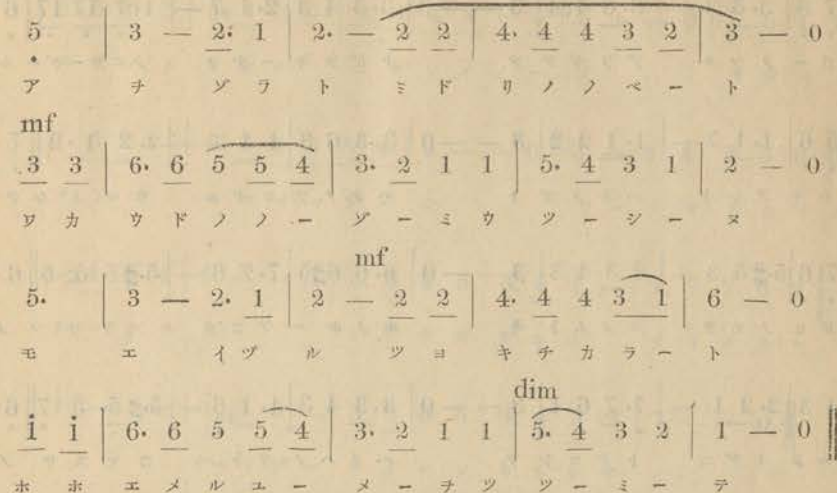
(田中達次郎作)

變ホ調 $\frac{4}{4}$ 大正十三年度 紀念祭歌 小山準太 (歌詞) 諸井三郎 (曲)



- 一 友の情のみめぐみは 春咲く花に酒波みて 歌ひて盡きぬ追憶に
- 二 緑したるむさしのに 大空高く不二ヶ嶺を ともしびゆらぐ六寮に
- 三 時雨かなしきむさしのは 幾千年の寂しさを 男の子の胸に感じつゝ
- 四 學びの道は遠くして 歩み止めて若き子が 瞑想の露うるほいて
- 五 何を求めんむさしの、 心よりなるよき友を ひそかに胸を移りゆく
- 六 さはれ今宵の自治の寮 世は酒々の風の音 唯我魂の純々と
- 一 揃みて盡せぬ谷清水 若き生命のたまゆらを 今日歸へり來ぬ紀念祭
- 二 夜の帳は續かれて 月の朧に照すとき 生れを祝ふ聲高し
- 三 太古の思土の香に 夕捧ぐる合掌の 眞の友と泣きし哉
- 四 タづく星のきらめきに 機林に憩ふとき 此の天地を抱きしめし
- 五 外に我らが希望また 棄てて、何處に我行かん 流るゝ時と諸共に
- 六 窓の彼方を眺むれば 汚れし人の世にありて 祈る心の記念祭

變ホ調 $\frac{4}{4}$ 大正十三年度 寮 歌 谷亮平 (歌詞) 好地武雄 (曲)



- 一 碧空と緑の野邊と 萌え出づる強き力と
- 二 櫻草野に咲き充ちて 逍遙をめぐる草木も
- 三 思ほへば二年はへし 協同の訓をめで、
- 四 つきやらの思幻の流 瞬し星に結び
- 五 されどなほ友の愛と 限りなき涙なりしが
- 六 世の人の嘆は外に 怒りたる波に漕ぎ出づる
- 七 今宵しも樂しきまどぬ 交さずや歌ひまひつ
- 一 若人の望うつしめ 微笑める夢をつゝみて
- 二 若人の血潮うたひぬ 夏早き心に燃えぬ
- 三 自治の家なほく守りつ 團聚にうれしき我ら
- 四 酌みて酔ふうまし夢はも はゝみぬ不二の靈姿に
- 五 青春の情さこそは なつかしき夢にはあれど
- 六 ゆめにいれ草に臥しては 力をば培ふ我ら
- 七 歡のあふるる酒杯 感激の若き一夜や

學友會規則

第一章 總則

- 第一條 本會ハ浦和高等學校生徒融和輯睦シテ智徳ヲ研磨シ身體ヲ鍛鍊シ校風ヲ發揚スルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ヲ浦和高等學校學友會ト稱ス
- 第三條 本會種々員ヲ分テ左ノ二種トス
 - 一 特別會員 職員
 - 二 通常會員 生徒

本校卒業者其ノ他本校ニ縁故アル者ハ贊助會員トナスコトヲ得

第四條 本會ニ左ノ諸部ヲ置ク

- 一 辯論部
 - 一 文藝部
 - 一 劍道部
 - 一 柔道部
 - 一 弓道部
 - 一 野球部
 - 一 庭球部
 - 一 陸上運動部
 - 一 端艇部
 - 一 旅行部
 - 一 水泳部
- 第五條 會員ハ各部ノ部員タルコトヲ得
- 第六條 本會ハ毎年十一月八日ニ於テ運動會ヲ舉行ス

第二章 役員

第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

- 一 會長 一名
- 一 副會長 一名
- 一 理事長 一名
- 一 部長 各部一名宛
- 一 事務員 二名
- 一 理事 各一名宛
- 一 委員 文藝部五名、陸上運動部三名、其ノ他各部二名宛

第八條 會長ハ學校長ヲ推戴ス

第九條 副會長、理事長、部長及事務員ハ特別會員ニ就キ會長之ヲ

委嘱ス

副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ之ヲ代理ス

理事長ハ本會ノ常務ヲ管理ス

部長ハ各其ノ部ノ常務ヲ管理ス

事務員ハ本會ノ庶務及會計ニ關スル常務ヲ掌理ス

第十條 理事ハ各類通常會員ノ互選ニ基キ會長之ヲ命ス

第十一條 委員ハ各部ノ互選ニ基キ會長之ヲ命ス

第十二條 組總代ハ組長ヲ以テ之ニ充ツ組長事故アルトキハ副組長之ヲ代理ス

組總代ハ會務ニ關スル議事ニ參與ス

第十三條 理事及委員ノ任期ハ毎年一月一日ヨリ十二月末日迄トシ毎年十一月中ニ於テ之ヲ改選ス

第三章 會計

第十四條 特別會員ハ會費トシテ相當ノ金額ヲ寄附ス

通常會員ハ會費トシテ第一學期分及第二學期分各金五圓第三學期分金四圓ヲ毎學期授業料ト同時ニ納付ス

通常會員ハ入會金トシテ入會ノ當年第一學期ニ於テ金貳圓ヲ則項ノ會費ト共ニ納付ス

既納ノ會費及入會金ハ何等ノ事情アリトモ之ヲ返附セズ

第十五條 會員ハ會費ノ外本會員スハ本會員外ニ對シ寄附ヲ求ムルコトヲ得ス

寄附ヲ申入ル者アルトキハ會長其ノ受否ヲ決定ス

第十六條 收入金ハ信用アル銀行ノ預金トシテ之ヲ保管ス

第十七條 本會ノ會計年度ハ毎年一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ル

第十八條 本會ハ第十四條ノ會費、第十五條第二項ノ寄附金及第十六條ノ預金ヨリ生ズル利子ヲ以テ收入トシ一切ノ經費ヲ支出トス

第十九條 毎年十一月又ハ十二月ニ於テ翌年度ノ收入支出豫算概算書ヲ編成ス

前項ノ收入支出豫算概算書ハ理事長及翌年度ノ理事ニ於テ各部ノ豫定經費要求書ヲ査定シタルモノニ就キ會長之ヲ決定ス

第二十條 避クベカラザル豫算ノ不足ヲ補フタメニ又ハ預算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツルタメニ豫備費ヲ設テ豫備費ハ收入豫算金額ノ百分ノ五以上十以内トス

第二十一條 第十九條ノ收入支出豫算概算書ハ之ヲ經常、臨時ノ二

ツニ分ツ經常支出豫算概算書ハ之ヲ理事及各部費ニ區分ス

第二十二條 收入支出豫算ハ第十九條ノ收入支出豫算概算書ニ基キ役員會之ヲ議決ス

第二十三條 物件ヲ購入、修繕又ハ營繕セントスルトキハ理事又ハ各部委員ハ所定ノ請求簿ニ品目、數量、概算單價、概算價格、供給者又ハ請負者、其ノ他ノ所要事項ヲ記入シ理事長又ハ當該部長ノ檢印ヲ經テ事務員ニ差出スモノトス

事務員ハ前項ノ請求簿ヲ接受スルトキハ直ニ購入修繕又ハ營繕ノ手續ヲナシ請求簿ニ價格、豫算殘額等ヲ記入シタル上之ヲ物件ト共ニ請求者ニ交付又ハ引渡スモノトス

第二十四條 他地方ニ出張ノ上支拂ヲ要スル費途ニ就キテハ前條第二項ニ拘ラス理事又ハ各部委員ニ對シ概算書ヲナスコトヲ得此ノ場合ニ於テハ事務員ハ理事又ハ各部委員ニ對シ受領者ノ領收證ヲ徴スルモノトス

前項ニ關スル他ノ手續ハ第二十三條ニ準ス

第二十五條 豫備費ヲ以テ補充スヘキ費途及豫備費ヲ以テ支辨スヘキ費途ノ金額ハ理事長及理事ノ意見ヲ聞キ會長之ヲ決定ス前項金額ハ他ノ費途ニ流用スルコトヲ得ス

第二十六條 理事長ハ各部ノ提出スル決算書ヲ審査シテ總決算報告書ヲ調製シ翌年度ノ始ニ於テ之ヲ公表ス

第二十七條 各年度ノ收入ニ剩餘アルトキハ之ヲ翌年度ノ收入ニ繰入ル

第二十八條 會長ハ各年度末ニ於テ事務員ニ對シ若干金額ノ報酬ヲナスコトヲ得

第四章 役員會

役員會

第二十九條 會長ハ會務ニ關シ隨時役員會ヲ召集ス

役員會ハ事務員外ノ役員ヲ以テ之ヲ組織ス但翌年度ノ豫算ニ關スル議事ニ就キテハ翌年度ノ理事及各部委員其ノ年度ノ理事及各部委員ニ代ルモノトス役員會ノ議長ハ會長之ニ當ル

第三十條 役員會ハ役員總數ノ三分ノ二以上出席スルニテラザレバ議事ヲ開キ決議ヲナスコトヲ得ス

第三十條 役員會ハ過半數ヲ以テ之ヲ決ス但本規則ノ改正ハ出席役員三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニテラザレハ議決ヲナスコトヲ得ス前項本文ノ場合ニ於テ賛否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

附 則

第三十二條 第四條ノ各部ハ本會諸般ノ事情ヲ顧慮シ左ノ順序ニ依リ漸次其ノ設置ヲ完成スルモノトス

- 一 文藝部
- 一 陸上運動部
- 一 野球部
- 一 旅行部
- 一 辯論部
- 一 柔道部
- 一 水泳部
- 一 劍道部
- 一 弓道部
- 一 端艇部

第三十三條 通常會員ノ會費ハ第十四條第二條ノ規定ニ拘ラス當分ノ内在校三ヶ年分ヲ入學ノ學年中ニ於テ每學期授業料ト同時ニ分

要ナルモノアルトキハ甲乙當事者ヨリ其ノ旨事務員ニ通知シ現品ノ受渡ヲナスヘシ

第六條 理事又ハ各部委員ハ使用中ノ物品ニシテ自然毀損シ修理ヲ要スルモノアルトキハ事務員ニ其ノ修理ヲ請求スヘシ

事務員ハ前項ノ修理ヲ了シタルトキハ更ニ原當事者ニ引渡スヘシ

第七條 不用トナリタル物品アルトキハ理事又ハ各部委員ハ之ヲ事務員ニ返付シ物品監守受拂簿ノ摘要欄ニ其ノ事由年月日ヲ詳記スヘシ

事務員ハ前項ノ物品ノ返付ヲ受ケタルトキハ之ヲ審査シ尙使用ニ堪フルモノハ保存シ尙後使用ノ見込ナシト認ムルモノハ處分案ヲ具シ會長ノ決裁ヲ請フヘシ

第八條 理事長及各部長ハ其ノ部局ニ屬スル物品ノ保管監督ノ責任ニ任

理事長及各部長ハ前項ノ趣旨ニ基キ毎年一回以上物品監守受拂簿ニ依リ其ノ部局ニ屬スル現品ヲ査閱スヘシ

第九條 毎年一回以上品檢査ヲ執行ス

第十條 物品檢閱ノ日時ハ檢閱者之ヲ定メ豫メ之ヲ被檢閱者ニ(理事ニ屬スル物品ニ就キテハ理事、各部ニ屬スル物品ニ就キテハ各部長及委員)通知スルモノトス

第十一條 檢閱者ノスベキ要項ハ左ノ如シ

- 一 物品保管ノ適否
- 一 物品使用ノ適否
- 一 消耗品消費ノ適否
- 一 消耗品毀損ノ有無

納スルモノトス

前項會費ノ分納納額ハ左ノ如シ

- 第一學期分 金六圓
- 第二學期分 金九圓
- 第三學期分 金六圓

二 學友會物品會計規則

第一條 物品ヲ分チテ備品、消耗品ノ二トス

前項ノ備品ト稱スルハ比較的長年月ノ使用ニ耐ヘ又ハ其ノ性狀ヲ變スルコトナシシテ其ノ用ヲ爲スモノト云ヒ消耗品ト稱スルハ毀損シ易シ又ハ其ノ性狀ヲ變シテ其ノ用ヲ爲シ再度ノ使用ニ耐ヘサルモノヲ云フ

第二條 物品初度ノ出納ハ學友會規則第二十三條ニ基キ左ノ諸號ニ從ヒ之ヲ處理ス

一 事務員物品ヲ交付セントスルトキハ之ヲ備品、消耗品ニ分チ其ノ品目、數量、價格納人名及受授年月日ヲ物品出納簿ニ登記ス

二 理事又ハ各部委員ハ物品ヲ受領シタルトキハ之ヲ備品消耗品ニ分チ備品ニアリテハ其ノ品目數量及受授年月日消耗品ニアリテハ更ニ其ノ消費高ヲ物品監守受拂簿ニ登記ス

第三條 理事及各部委員ハ其ノ部局ニ屬スル備品及消耗品ノ監守及取扱ノ責任ニ任ス

第四條 理事及各部委員交代シタルトキハ新理事及各部委員ハ物品監守受拂簿ニ其ノ受繼年月日ヲ記入シ且記名捺印スヘシ

第五條 甲部局ニ屬スル物品ニシテ不用ニ屬スルモノモ乙部局ニ於テ必

第十二條 物品檢閱ノ際被檢閱者ハ其ノ席ニ列シテ檢閱者ノ質問ニ答フヘシ

第十三條 檢閱者檢閱ヲ終リタルトキハ檢閱ノ情況及意見ヲ會長ニ申報スヘシ

第十四條 物品ノ缺損ハ其ノ當事者ニ於テ之ヲ補償ノ責任スルモノトス但特別ノ事情アル場合ニ限リ會長ハ檢閱者ノ意見ヲ聞キ適宜之ヲ處理スルコトアルベシ

附 則

第十五條 本則ハ大正十二年度ヨリ之ヲ施行ス但現存ノ物品ハ第四條ニ準シ受繼了スヘキモノトス (大正十二年二月五日決議)

三 陸上運動會對類競技規程

第一條 陸上運動會ニ於ケル競技種目ハ左ノ如シ

- 一 一百米競走
- 二 四百競走
- 三 一哩競走
- 四 リレー走
- 五 二百米ローハドル競走
- 六 走幅飛
- 七 走高飛
- 八 棒高飛
- 九 ホップステップアンドジャンプ
- 一〇 砲丸投
- 一一 圓盤投

一二 投槍

第二條 前條競技種目ノ外臨時其ノ他ノ一種目ノ團體競技ヲ加フルコトアルヘシ
團體競技ノ種類ハ其ノ都度會長ニ於テ理事長及理事ノ意見ヲ聞キ之ヲ定ム

第三條 第一條及第二條ノ競技種目ノ評點ハ左ノ如シ

1. 一乃至三及五乃至一二ノ評點
一等 四點 二等 三點 三等 二點
2. 四及他ノ團體ノ評點
一等 七點 二等 五點 三等 三點
四等 一點 五等 零點

第四條 各類ノ得點ヲ合計シ其ノ最多多數ヲ得タル類ニ優勝旗ヲ授與ス但得點總數同一ナルトキハ會長ニ於テ之ヲ保留ス

第五條 選手ハ一人一種目ヲ原則トス但當分ノ内一人ニテ二種目マデハ之ヲ兼スルコトヲ得シム

第六條 各競技種目ノ選手ノ數ハ其ノ數ハ其ノ都度會長ニ於テ理事長及理事ノ意見ヲ聞キ之ヲ定ム

第七條 本規定ハ役員會ニ於ケル出席者三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニテラザレハ之ヲ改正スルコトヲ得ス

(大正十二年二月五日決議)

四 對抗競技ニ關スル申合事項

一 本會員ハ對抗競技ニ關スル全國高等學校長ノ申合事項ヲ格守スルコト

六 學友會役員選舉規則

第一章 理事及各部委員ノ選舉

第一條 會長ハ選舉長トナリ選舉ニ關スル事務ヲ統轄ス

會長事故アルマキハ副會長其ノ事務ヲ代理ス

第二條 理事及各部委員選舉ノ日時ハ其ノ日ヨリ少クモ三日前ニ生徒揭示場ニ揭示ス

第三條 選舉ハ選舉者ノ投票ニ依リ之ヲ行フ

選舉者ハ各科類ノ適當會員トシ各部委員ノ選舉者ハ當該部所屬部員ニシテ選舉ノ當日迄引續キ六箇月以上其ノ部ニ在ルモノトス

投票ハ理事及各部毎選ニ選舉者一人一票トス

第四條 投票所ハ理事及各部委員選舉ノ都度之ヲ定メ選舉日ヨリ少クモ三日前三生徒揭示場ニ揭示ス

第五條 投票所ニ投票監督者及投票管理者ヲ置ク

投票監督者ハ理事ニアリテハ理事長、各部委員ニアリテハ當該部長及理事之ニ當リ其ノ投票ニ關スル事務ヲ監督ス

投票管理者ハ理事ニアリテハ理事、各部ニアリテハ當該部委員之ニ當リ其ノ部屬ノ投票ニ關スル事務ヲ擔任ス

理事長、各部委員、理事及各部委員ニ事故アルトキハ代理者其ノ事務ヲ代理ス但代理者ハ會長之ヲ委嘱ス

第六條 選舉者ハ選舉ノ日時内ニ於テ自ら投票所ニ就キ投票スヘシ

第七條 投票用紙ハ選舉ノ當日投票所ニ於テ之ヲ交付ス

第八條 選舉者ハ前條ノ投票用紙ニ自ら候補者一名ノ氏名ヲ記載スヘシ

二 對抗競技(練習試合ヲ除ク以下之ニ同シ)ニ關スル事務ハ理事長之ヲ掌理シ理事之ヲ取扱フコト

三 對抗競技ヲ行ハントスルトキハ時期、場所及方法ヲ具シ役員會ノ決議ヲ經ルヲ要スルコト

四 對抗競技ノ選手ハ役員會ノ承認ヲ經ルヲ要スルコト

五 對抗競技ノ應援ハ志ヲ厚クシ形ヲ簡ニスルコト

六 對抗競技ヲ行フニ要スル費用ハ臨時會費トシテ全會員之ヲ負擔スルコト

七 前項ノ費用ハ豫算概算書ヲ具シ役員會ノ決議ヲ經ルヲ要スルコト

對抗競技ヲ行フニ要スル費用ハ相手方ノ學校ノ畧々固定スルニ至ルト共ニ之ヲ一般會費ニ加フルコト

(大正十二年五月十七日決議)

五 中等學校生徒ヲ主體トスル辯論部並ニ運動各部大會ニ關スル申合事項

一 首題ノ大會ニ關スル事務ハ其ノ部ニ於テ之ヲ取扱フコト

二 首題ノ大會ノ時期ノ關係中等學校ノ事情ヲ顧慮シ之ヲ豫定スルコト

三 前項ノ時期ヲ豫定スルニハ理事長理事及關係各部役員ノ協議ヲ經ベキコト其ノ豫定ヲ變更スルトキ亦同シ
首題ノ大會ヲ開催セントスルトキハ豫メ其ノ時期、範圍及方法ヲ具シ會長ノ承認ヲ經ベキコト

(大正十二年五月十七日決議)

投票用紙ニハ選舉者ノ氏名ヲ記載スルモノトス

第九條 投票管理者ハ投票終ラハ之ヲ整理シ封筒ニ入レテ封鎖シ直ニ開票所ニ至ルモノトス

第十條 開票所ハ選舉長ノ指定シタル場所ニ之ヲ設ク

第十一條 開票所ニ開票監督者及開票監視者ヲ置ク

開票監督者ハ理事ニアリテハ理事長各部委員ニアリテハ當該部長及理事之ニ當リ當該部屬ノ開票ニ關スル事務ヲ監督ス

開票監視者ハ理事及各部委員之ニ當リ當該部屬開票ニ關スル事務ヲ擔任ス

第十二條 開票所ニハ選舉長及前條ノ者ノ外入ルコトヲ得ス

第十三條 左ノ投票ハ無効トス

(一) 制規ノ投票用紙ヲ用ヒサルモノ

(二) 第八條ノ規定ニ違反セルモノ

(三) 記載シタル候補者及選舉者ノ氏名ノ承認シ難キモノ
(四) 候補者及選舉者ノ氏名ノ外他事ヲ記載シタルモノ但其ノ候補者ノ科類組又ハ敬稱ノ類ヲ記載シタルモノハ此ノ限リニアラス

第十四條 投票効力ニ就キ疑義ヲ生シタル時ハ開票監視者ハ開票監督者ノ意見ヲ聞キ之ヲ定ムヘシ

第十五條 有効投票獲得數最高ナルモノヨリ順次ニ所定人員數ノ當選者ヲ定ム

前項ニ依リ當選者ヲ定ムルニ當リ同點者ヲ生シ其ノ取捨ニ決定スル事能ハサル時ハ抽籤ニ依リ之ヲ定ム

第二章 理事及各部委員當選者

第十六條 一人ニシテ數部屬ニ投票ノ多數ヲ得タルトキハ各部ノ所屬部員數ヲ以テ得票數ヲ除シタル商ノ多キニ從ヒテ其ノ部屬ヲ定メ得点各相等シキトキハ該被選者ニテ任意其ノ一ヲ選ハシム但シ理事ニ多數ヲ得タルトキハ他ノ部ノ得点數ニ拘ラス理事タルヘキモノトス

條十七條 開票管理者ハ其ノ部屬ノ當選者ノ定マルト共ニ開票監査者ヲ經テ之ヲ選舉長ニ報告スヘシ

選舉長ハ各部屬ノ當選者確定シタル後之ヲ發表ス

第三章 理事及各部委員ノ補充

第十八條 理事ハ投票開票ニ關スル願末ヲ記録シテ次期ノ理事ニ引繼クヘシ

第十九條 理事及各部委員ニ缺員ヲ生シタルトキハ會長ハ選舉ノ日時ヲ定メ更ニ選舉ヲ行ハシム但會長ニ於テ其ノ補充ノ必要ヲ認メサル時ハ臨時理事ヲシテ之ヲ代理セシメ又缺員ノ儘ニ存スルコトヲ得

第四章 雜 件

第二十條 本規則ノ改正ハ出席役員三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニアラサレハ議決ヲナスコトヲ得ス

第二十一條 本規則ハ大正十二年十一月三日ヨリ之ヲ施行ス
(大正十二年十一月二日)

七 浦和高等學校學友會臨時救仁部規則

第一條 浦和高等學校學友會ニ臨時救仁部ヲ置ク

臨時救仁部ハ會員中大正十二年九月ノ震火災ニ罹リ又ハ其ノ影響ヲ受ケ修學ノ繼續困難トナレルモノヲ救済セムカため其ノ學費ヲ

補助又ハ與貸スルヲ以テ目的トス

第二條 學費ノ補助又ハ貸與ニ充テムカため特別會員ハ相當金額ヲ寄附シ普通會員ハ特別ノ事情アルモノヲ除キ大正十二年十一月ヨリ大正十三年三月迄毎月金壹圓ヲ提出スルモノトス

第三條 學費ノ補助又ハ貸與ハ一人ニ就キ第一學年ニ在リテハ金百九拾七圓(金百五拾圓月額貳拾五圓)ニ大正十二年度第二學期ニ於ケル授業料並ニ學友會費ノ分納額及臨時會費ヲ加算シタル金額)第二學年ニ在リテハ金百八拾貳圓金百五拾圓ニ大正十二年度第二學期及第三學期ニ於ケル授業料ノ分納額並ニ學友會臨時會費ヲ加算シタル金額)ヲ以テ最高トシ各人ノ實情ヲ調査シテ之ヲ定ム

第四條 學費ノ補助又ハ貸與ノ事務ハ大正十三年三月末日ヲ以テ之ヲ止ム

第五條 學費ノ補助又ハ貸與ヲ受ケムトスル者ハ大正十二年十一月十日迄ニ其ノ事由並ニ所要金額ヲ詳細シ保護人連署ヲ以テ會長ニ提出スヘシ但學費ノ貸與ヲ受ケムトスルモノハ返済ノ時期ヲ付記セムコトヲ要ス

第六條 學費ノ補助又ハ貸與ヲ受ケルモノニシテ其ノ必要止ミタル時若クハ補助又ハ貸與額ヲ減シ得ルニ至ル時ハ直ニ會長ニ届出ツヘシ

第七條 本部ノ役員ハ會長、理事長、事務員、大正十二年度理事及各組ヨリ選出シタル實行委員一名ヲ以テ之ヲ組織ス

會長ハ事務ヲ統轄ス

理事長及理事ハ常務ヲ掌理ス

事務員ハ庶務會計ニ従事ス

實行委員ハ學費ノ補助又ハ貸與ヲ受ケムトスルモノノ實情ヲ調査シ學費ノ補助又ハ貸與ニ關スル議事ニ參與ス

第八條 理事長ハ大正十三年四月ニ於テ本部ノ總決算報告ヲナスモノトス

第九條 本部ノ收入カ學費ノ補助額又ハ貸與額ヲ超過スル時ハ會長ハ學友會役員會ニ附議シテ其ノ用途ヲ定ム學費ノ貸與金ヲ返済シタルトキ亦同シ

(大正十二年十二月二日決議)

八 會員滯納ニ對スル申合事項

一 學友會々費及臨時會費ヲ指定期間内ニ納付セサル者ニ對シテハ各組總代ニ於テ之ニ注意ヲ加ヘ指定期限後一週間ヲ過ゲルモ之ヲ納付セサルトキハ其ノ保護人ヲ經テ之ヲ督促スルモノトス

二 學友會臨時機關ノ離金ヲ指定期間内ニ納付セサル者ニ對シテハ各組實行委員ニ於テ之ニ注意ヲ加フルモノトス

附 則

本申合セ事項ハ大正十三年一月一日ヨリ施行ス

(大正十二年十二月十五日決議)

學友會規則中一部改正

一 第十四條第二項ヲ左ノ如ク改ム

通常會員ハ每年會費トシテ第一學期分及第二學期分各金五圓三第期分金四圓ヲ每學期授業料ト同時ニ納付ス

二 第十四條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第十四條ノ二本會ハ特別ノ事情アル場合ヲ除キ前條第二項外ニ於テ臨時ニ會費ヲ徵集スルコトナシ

三 第三十三條ノ次ニ左ノ二條ヲ加フ

第三十四條 大正十三年度現在ノ通常會員ハ前條會費ノ外第二學年ニアル者ニアリテハ金九圓ヲ大正十四年度迄ニ第一學年ニ在ルモノニアリテハ金十六圓ヲ大正十五學年度迄ニ每學期授業料ヲ同時ニ分納スルモノトス

第二學年及第一學年ニ在ル者ノ前項會費ヲ分納スベキ額ハ左ノ如シ

第一學期分 金二圓
第二學期分 金三圓
第三學期分 金二圓

第三十五條 大正十四年度及大正十五年度ニ限リ通常會員ハ第十四條又ハ第三十五條ノ會員ノ外金一圓宛テ第一學期及第二學期ニ於テ納付スルモノトス

(大正十三年十月十八日決議)

購買部創設研究ニ關スル申合事項

大正十三年 度學友會役員會ハ大正十三年十一月八日落成記念祝賀事業ノ一トシテ本校ヲ中心トスル消費作用ヲ最モ經濟的ナラシムル購買部創設ニ關シ研究センコトヲ申合ス

(大正十三年十月十八日決議)

一 對抗競技ニ關スル全國高等學

校長ノ申合事項

第一條 此ノ申合ニ對抗競技ト稱スルハ一又ハ以上二ノ學校若シハ團體ヲ相手トシテ行フ總テノ競技ヲ包含ス

練習試合ハ之ヲ對抗競技ト看做ス

第二條 對抗競技ノ相手ハ高等教育ヲ施ス諸學校ニ限ル但對抗競技ヲ其ノ土地又ハ近距離ノ土地ニ於テ行フ場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第三條 對抗競技ヲ行フ時期ハ近距離ノ土地ニ於テ行フ場合ヲ除キ春季、夏季若シハ冬季休業中トス但休日(式日ヲ除ク)二日以上ニ

互リ授業ニ影響ヲ及ボスノ虞ナキ場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第四條 對抗競技ノ回数ハ其ノ土地近距離ノ土地ニ於テ行フ場合ヲ除キ同一種類ノ運動ニシキテハ一學年一回ヲ超ユルコトヲ得ス但春季、夏季若シハ冬季休業中ニ於テ競技地並ニ其ノ消遣ニ於テ行

フ土地ノ學校又ハ團體トノ競技ハ本文ノ回数ニ算入セス

第五條 對抗競技ヲ行フタメ授業ヲ休止スルコトヲ得ス

第六條 對抗競技ヲ行フ際入場料ヲ徴收スルコトヲ得ス

第七條 對抗競技ヲ行フ場合ニハ成ルベク教官ヲ同行セシムルモノトス

第八條 高等學校間ニ於テ對抗競技ヲ行ハムトキハ關係學校長ハ其ノ時期、場所及方法等ニ就キ豫メ打合ナスモノトス

二 豫算施行ニ關スル注意

一 各部屬ノ豫算中各目ノ豫算額ハ相互ニ之ヲ流用スルコト

ナ得

二 各部屬ノ豫算中雜費ヲ以テ支辨シ得ヘキモノハ一個又ハ一件ニ付金壹圓五拾錢以内ノ物件ニ限ル

三 各部屬ノ豫算中或目ノ豫算額ヲ以テ各目外ノ費途ニ充ツルコトヲ得ス

四 各部屬ノ豫算中或目ノ豫算額必要トナレルト共ニ各目外ノ豫算必要トナレル場合ニ於テハ必要トナレル或目ノ豫算額又ハ其ノ一部ヲ收入トシ必要トナレル各目外ノ費用ヲ支出トシテ追加豫算案ヲ編成シ役員會ノ議ヲ經ヘキモノトス

五 物件ノ購入、修繕又ハ營繕セムトスルモノハ嚴ニ本會規則第二十三條ノ手續ヲ履ムヘキモノトス

三 議事規則概要

第一讀會議

案ノ朗讀(便宜省略スルコトヲ得) 發議者ノ趣旨辯明

議案ニ對スル質疑ト大體ノ討論

大體ノ討論シタル後第二讀會ニ移スヘキヤ否ヲ決ス第二讀會ヲ開クヘカラスト決シタルハ其ノ議案ハ廢棄セラ

レタルモノトス

第二讀會議

案ノ逐條朗讀(便宜省略スルコトヲ得) 修正動議ノ提出

議長ハ審議ノ順序ヲ變更シ又ハ數條ヲ連ネ又ハ一條ヲ分割シテ議題トナスコトヲ得

第三讀會議

山形高等學校浦和高等學校庭球對

抗競技規定 (大正十三年度)

一 試合ハ少クモ二回以上續クルコト、場所ハ交互ニ行フコト

二 第一回ハ山形高等學校コートニ於テ行フコト

三 第一回試合舉行期日ハ大正十三年七月廿六、廿七兩日ト定ム(但シ雨天順延)

四 組數ハ、ダブル三、シングル六セツトハ五トス

五 点取ハ各組一点トシ勝点五点以上ニ達セル時ハソノ勝トス

六 レールハ大日本庭球協會決定ニ從フコト

七 審判官ハ舉行校ニ一任ス(審判官ハ第三者トス)

八 ポールハ「ライト」ヲ使 スルコト

九 ゴールハ舉行一週前ニ交換スルコト

十 試合用コート及ビ器具ハ試合前日審判官立會ノ上調査スルコト

十一 應援の行動ハ絕對ニ禁止スルコト

十二 右規約中變更ノ要アル時ハ兩校代表者合議ノ上訂正附加スルコトヲ得

靜岡高等學校對浦和高等學校野球

對抗競技規定 (大正十三年度)

注 意

(一) 發言セントスルモノハ起立シテ議長ト呼ビ又自己ノ氏名ヲ呼ビ議長ノ許可ヲ待テ發言スヘシ

(二) 動議ハ三名以上ノ賛成者アルヲ以テ議題トス

(三) 討論ハ成ルベク賛成反對者交互ニ行フヘシ

(四) 討論ハ議題以外ニ涉ルコトヲ得ス

(五) 他ノ役員ヲ呼フトキハ敬稱ヲ用フヘシ

(六) 發言者未ダ盡キスト雖モ討論終結ノ動議ヲ提出スルコトヲ得

(七) 修正ノ動議ハ案ヲ具ヘ議長ニ提出スヘシ

(八) 同一ノ議題ニ就キ數個ノ修正案提出セラレタルトキハ議長ハ議案ニ最モ適マモノヨリ順次表決ス

(九) 議長表決ニ付スヘキ問題ヲ宣告シタルトキハ其ノ議題ニ就キ發言スルコトヲ得

(十) 議長表決ヲ採ラントスルトキハ問題ヲ可トスルモノヲ起立セシメ起立者ノ多少ヲ認定シテ可否ノ結果ヲ宣告ス

- 一 靜岡高等學校々友會ト浦和高等學校學友會トノ間ニ於テ
大正十三年度ヨリ野球試合ヲ開クコト
- 二 試合場所ハ兩校中ノ校庭ヲ以ツテ充テ毎年交代スルコト
大正拾三年度ニ於テハ浦和高等學校々庭ヲ以ツテ之
ニ充テルコト
- 三 競技ノ期ハ毎年七月の中トスルコト、但シ十三年度ニ限り
八月二十八日トスルコト雨天順延スルコト
- 四 ルールハ朝日新聞運動年鑑所載ノモノトス
但シグラウンドルールハ試合前ニ於テ審判官、兩チーム主
將ト協議シテ之ヲ定ムルコト
- 五 審判官ハ二名トシ仕合地ニアル學校友會ニ於テ仕合地ニ
アラザル學校々友會ノ承認ヲ經テ兩校ニ關係ナキモノニ
就キ之ヲ定ムルコト
- 六 前項審判者ニ對スル謝禮等ハ仕合地ノ學校々友會ニ於テ
之ヲ負擔スルコト
- 七 仕合ニ關スル設備其ノ他ノ用意ハ仕合地ノ學校々友會ニ
於テ之ニ當ルコト
- 八 仕合地ニアラザル學校々友會選手ガ仕合地ニ在ル學校々
庭ニ於テ練習ヲナスハ仕合ニ先ツ三日以後ナルベキコト

新潟山形浦和高等學校陸上運動

對抗競技規定 (大正十三年度)

- 一 本校學友會山形高等學校々友會及ビ新潟高等學校々友會
トノ間ニ於テ本年對抗競技ヲ開クコト
- 二 審判委員外ノ競技委員ハ各學校在學生徒ノ者之ニ當リ成
ルベクソノ數ヲ同一ニスルコト
- 三 競技應援ハ運動精神ニ基キ豫メソノ方法ヲ協定スルコト
- 四 競技用旗ハ浦和紺碧、新潟白、山形海老茶トス
- 五 競技ニ關スル設備ソノ他ノ準備ハ山形高等學校々友會ニ
於テ之ニ任ズルコト
- 六 競技ノ設備距離及ビ競技用器具等ハ審判員及ビ各校々友
會代表者豫メ之ヲ査閲スルコト

- 二 競技ノ場所ハ山形高等學校「トラック」トス
- 三 競技ノ期ハ大正拾三年七月十九日トスルコト但晴雨ニ
拘ラズ決行ス
- 四 競技ノ種類ハ百米、二百米、八百米、千五百米、高ハ
ドル、低ハドル、千六百米リレー、八百米リレー、走
高飛、走幅飛、ホツプステツプアンドジャンプ、棒高
飛、槍投、圓盤投、砲丸(十二封度)投トスルコト
但シ左ノ種目ニツキテハ豫選ヲ行フコト
- 五 百米、二百米、四百米、高ハドル、低ハドル、
各種目ノ選手數ハ三名以內トスルコト、但シリレーハ一
組ノコト
- 六 各競技種目(リレーヲ除ク)ニ出場スベキ選手氏名表ハ競
技ノ五日前迄ニ交換スルコト補欠選手氏名モ記入スルコ
ト
- 七 各種目ノ評点ハ一等五点、二等三点、三等二点、四等一
点トスルコトリレーハ一等五点二等三点三等零點トスル
コト
- 八 競技審判規定ハ現行學生聯盟、大日本体育協會規定ヲ準
用スルコト、但特別ノ習慣アルモノハコノ限ニアラザル
コト
- 九 競技ノ審判委員ハ山形高等學校々友會ニ於テ相手方ノ學
校々友會ノ承認ヲ經テ三校ニ關係無キ者ニツキ之ヲ定ム
ルコト
- 十 右審判委員ニ對スル謝禮等ハ山形高等學校々友會ニ於テ
之ヲ負擔スルコト

一 入寮者心得

- 一 入寮者ハ入寮ノ際寮務室備付ノ入寮、始食ニ關スル帳簿ニ入寮及始食ノ月、日、時、寮名、室號並ニ氏名ヲ記入スヘシ
- 二 下駄ハ玄關ニ在ル各自所屬ノ下足箱ニ入レ置クヘシ又外出ノ際ハ上草履ヲ下足箱ニ納メ置クヘシ
- 三 靴及脚絆ハ各室入口内、板間上部ノ戸櫛内ニ納メ置クヘシ但シ下駄ハ此ノ所ニ持チ入ルヘカラス
- 四 行李、夜具其ノ他ノ所持品ハ各自室内所屬ノ押入ニ納メ置クヘシ
- 五 寮内ニテ使用スル上草履(赤緒ノモノ)又ハ「スリッパ」ト外出ノ際使用スル下草履(赤緒以外ノモノ)トハ嚴ニ之ヲ區別スヘシ
- 六 寄宿舎ニ關スル示達ハ玄關入口内ノ揭示場ニ揭示スルヲ以テ常ニ之ニ注意スヘシ
- 七 起床、點檢等ノ時限ハ振鈴ヲ以テ之ヲ報ス
- 八 點檢午後十時ハ各自所屬ノ室前ニ北向ニ整列シテ之ヲ受クヘシ
- 九 旅行、歸省、外泊又ハ時間外ニ於テ外出セシムトスル者ハ寮務室備付ノ帳簿ニ所事項ヲ記入シ許可ヲ受クヘシ
- 一〇 前條ニ依リ旅行、歸省又ハ外泊シタルトキハ歸寮ノ際必ス前條帳簿ノ相當欄ニ歸寮月日ヲ記入シ且外泊先ノ證明書ヲ差出スヘシ
- 一一 已ムテ得サル事情アリテ點檢ニ後レタル時ハ歸寮ノ際直ニ寮務室備付ノ遅刻届簿ニ所事項ヲ記入スヘシ

第五十四條 寄宿寮ハ一學年ヲ以テ一期トシ春季休業及夏季休業ノ終始ニ之ヲ開閉ス

第五十五條 新ニ入校シタル者ハ少クモ一學年間ハ總ヘテ寄宿寮ニ

寄宿スヘキモノトス但特別ノ事情アル者ニ對シテハ詮議ノ上通

學ヲ許可スルコトアルヘシ

第五十六條 寄宿寮ニ寄宿スヘキ者ノ數收容人員數ニ超過スルトキ

ハ若干名ヲ限リ通學ヲ命スルコトアルヘシ

第五十七條 在寮生徒ハ學年中途ニ於テ退寮スルコトヲ得ス但特

別ノ事情アル者ニ對シテハ詮議ノ上之ヲ許可スルコトアルヘシ

第五十八條 在寮生徒ニシテ疾病ニ罹リタルトキハ其ノ種類又ハ症

狀ニ依リ外泊又ハ退寮セシムルコトアルヘシ

第五十九條 在寮生徒ハ生徒監ノ許可ヲ得ルニアラサレハ外泊、歸

省又ハ旅行スルコトヲ得ス

第六十條 寄宿料ハ一學年金貳拾圓トス

第六十一條 寄宿料ハ左ノ三期ニ分チテ之ヲ徵收ス

第一學期分 金六圓

第二學期分 金八圓

第三學期分 金六圓

寄宿料徵收期日ハ細則ヲ以テ之ヲ定ム

第六十二條 既納ノ寄宿料ハ何等ノ事情アルトモ之ヲ返付セス

第六十三條 寄宿料徵收期日後入寮スル者ノ寄宿料ハ其ノ月分ヨリ

寄宿料徵收期日ニ退寮スル者ノ寄宿料ハ其ノ月分ヲ徵收ス

前項ノ場合ニ於ケル寄宿料月額ハ金貳圓トス但第一學期分寄

宿料ノ月割ニ關シテハ七月及八月ヲ算入セス

一二 點檢前ニ就寢セムトスル者ハ寮務室備付ノ就寢届簿ニ所事項

ヲ記入スヘシ但シ病氣ノ場合ニ於テハ代理者ヲ經テ届出ツル

モ妨ナシ

一三 外出ノ際ハ事務室玄關内ニ掲ケタル姓名札ヲ反シ歸寮ノ際ハ

直ニ之ヲ復スヘシ

一四 各室ニ吹込入、紙屑籠、ハウキ、ハダキ各々一ナ配付貸與セ

ルヲ以テ各室員ハ其ノ保管ノ責ニ任スヘシ

一五 校醫ノ定期診察日時(受診心得參照)外ト雖不時發病ノ場合ニ

於テハ寮當直ノ者ヲ經テ其來診ヲ求ムルコトヲ得

一六 發熱、下痢等ヲ伴フ疾病ニ罹リタルトキハ必ス特別便所ヲ使

用スヘシ

一七 許可ナクシテ小使ヲ使役シ寮内備付ノ物品ヲ他ニ移動シ又他

ノ室内ニ釘ヲ打ツカ如キコトアルヘカラス

一八 自己ノ不注意ニ依リ寮内備付ノ物品及電燈器具等ヲ毀損又ハ

紛失シタルトキハ直ニ生徒課ニ届出テ且之ヲ辨償スヘシ若シ毀

損又ハ紛失シタル者不明ナルトキハ當該寮又ハ室員ニ於テ之ヲ

分擔辨償スルモノトス

一九 時計、金錢、爲替證書等ハ常ニ之ヲ携帯シテ室内ニ遺留スヘ

カラス入浴等ノ際ハ同室員ニ其保管ヲ依頼スヘシ

二〇 消燈時限ハ別ニ之ヲ定メスト雖モ就寢ノ際ハ必ス消燈スヘシ

二 學 則 (抄)

第八章 寄 宿 寮

第五十三條 寄宿寮ハ生徒ヲ寄宿セシメ本校ノ教育ト相俟ツテ之ヲ訓練スル處トス

三 學則施行細則 (抄)

第七章 寄 宿 寮

第三十九條 在寮生徒ハ本校教育ノ趣旨ヲ體シテ修養ニ勉メ特ニ和

衷協同ノ習慣ヲ養ハムコトヲ期スヘシ

第四十條 在寮生徒ハ規約ヲ定メ學校長ノ認可ヲ經テ之ヲ實行ス

ヘシ

規約ヲ以テ定ムヘキ事項左ノ如シ

一 寮内ノ秩序、風紀並ニ衛生ニ關スルコト

二 炊事ニ關スルコト

三 其ノ他必要ナル事項

第四十一條 新ニ入學シタル者外ノ生徒ニシテ入寮ヲ願出ツルトキ

ハ收容ノ餘裕アル場合ニ限り詮議ノ上之ヲ許可スルコトアルヘ

シ

第四十二條 特別ノ事情ニ依リ退寮セムトスル者ハ其ノ事情ヲ詳記

シ保證人ノ連署ヲ以テ願出ツヘシ但病氣ニ依リ退寮セムトスル

者ハ願書ニ醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第四十三條 各室人員ノ配置ハ生徒課長之ヲ定ム

第四十四條 各寮ニ總代一名及寮内ニ委員若干名ヲ置ク

總代ハ每學年ノ終ニ於テ次學年ニ在寮スヘキ者ノ選舉セシ十二

名ノ候補者ニ就キ學校長之ヲ命ス

委員ハ在寮生徒ノ互選トシ學校長ノ認可ヲ經テ就任ス

委員ノ互選區域及員數ノ配當ハ生徒課長之ヲ定ム

第四十五條 總代ノ任期ハ一學年間トシ委員ノ任期ハ一學期間トス

但再選スルコトヲ得

第四十六條 總代及委員ハ生徒監ノ指揮ヲ受ケ寮内ノ整理ニ任シ規則規約ノ實行ヲ督勵ス

第四十七條 寮内ノ日課時限ハ學校長ノ認可ヲ受ケ生徒課長ノ決定ス

第四十八條 在寮生徒ハ毎夜點檢ヲ受クルモノトス但病氣其ノ他ノ事故ニ依リ點檢ヲ受クルコト能ハサル者ハ豫メ生徒課ニ届出ツヘシ

第四十九條 己ムヲ得サル事情アリテ所定ノ時間外ニ外出セムトスル者ハ豫メ生徒監ノ許可ヲ受ケヘシ

第五十條 外出中己ムヲ得サル事情アリテ歸寮時限ニ遅レル者ハ其ノ事由ヲ具シ歸寮ノ際直ニ届出ツヘシ

第五十一條 己ムヲ得サル事情アリテ外泊セムトスル者ハ豫メ生徒監ノ許可ヲ受ケ歸寮ノ際外泊先ノ證明書ヲ差出スヘシ

第五十二條 春期、夏期及冬期休業日外ニ於テ歸郷シ又ハ旅行セムトスルトキハ日數及旅行先ヲ明記シ願出テ生徒監ノ許可ヲ受ケヘシ

歸寮ノ際ハ歸郷先又ハ外泊先ノ證明書ヲ差出スヘシ

第五十三條 在寮生徒ニシテ停學ニ處セラルタル者ハ直ニ退寮セシム但在寮ノマ、謹慎セシムルコトアルヘシ

第五十四條 第四十八條乃至第五十二條又ハ時々ノ告示訓諭ニ違背シタル者ハ學則第四十一條ニ依リ之ヲ懲戒シ又ハ退寮セシム

シテ七月八月ノ兩月ヲ除キ毎月金壹圓ヲ食費ト共ニ納付スルモノトス

寮友會員ハ入會金トシテ入會ノ際金一圓ヲ前項ノ會費ト共ニ納付スルモノトス

既納ノ會費ハ如何ナル事トモ拂戻ヲ要求スルコトヲ得ス

第十條 收入金ハ信用アル銀行ノ預金トシテ之ヲ保管ス

第十一條 每學期ノ始ニ於テ其ノ學期ニ於ケル收入支出豫算概算書ヲ編成ス

前項ノ收入支出豫算概算書ハ各部委員其ノ原案ヲ作成シ更ニ寮總代ノ査定シタルモノニ就キ協議會之ヲ議決ス

第十二條 物件ヲ購入又ハ修繕セントスルトキハ各部委員ハ所定ノ用紙ニ所事項ヲ記入シ其ノ部ノ委員ヲ兼メ寮總代ノ檢印ヲ經テ事務員ニ差出スモノトス

第十三條 寮友會員ハ寮内ノ秩序、風紀及衛生等ニ關シ左ノ諸號ヲ履行スルモノトス

一 毎朝洗面後ヨリ點檢時限迄ハ制服又ハ袴ヲ着クルコト但室内ニ在リテハ此ノ限ニアラス

二 自習時間及就寢時限後ニ於テ音讀、放歌、雜誌其ノ他總ヘテ喧噪ニ涉ル舉動ヲナサルコト

三 室内ニ於テ歌牌及樂器等ヲ弄ハサルコト

四 許可ナクシテ寮内備付ケノ物品ヲ他ニ移動セサルコト

五 寮内ニ他人ノ室ニ入ラサルコト

六 來訪者ニ對シテハ通學生タリトモ總ヘテ應接室ニ於テ面會スルコト

四 寮生規約

第一章 總則

第一條 吾人寮生ハ自治ノ精神ヲ以テ寄宿寮ニ關スル學則及細則ヲ格守シ校風發揚ノ中心ヲ成スルコトヲ期ス

第二條 吾人寮生ハ寮内ノ秩序ヲ整齊シ風紀ヲ肅正シ且衛生ニ留意シ特ニ清潔潔白ヲ旨トセムルコトヲ期ス

第二章 寮友會

第三條 第一條及第二條ノ所期ニ基キ寄宿寮内 寮友會ヲ置ク

第四條 寮友會長ハ生徒課長ヲ推薦ス

第五條 寮友會ハ寮生全部ヨリ成ル

第六條 寮友會ニ炊事部、圖書部、運動部及庭園部ノ四部ヲ置ク

炊事部ハ食事、食堂、ホール、浴場、洗面所(理髮所、洗濯所)其ノ他一般衛生ニ關スル事務ニ當ル

圖書部ハ圖書、新聞雜誌ノ購入、閱覽及寮歌ノ制定等ニ關スル事務ニ當ル

運動部ハ各種ノ運動競技ト旅行等ニ關スル事務ニ當ル

庭園或ハ庭園ニ關スル事務ニ當ル

第七條 寮友會員ノ親睦ヲ圖ラムカダメ每學期一回全寮茶話會ヲ催ス

第八條 寮友會諸般ノ事務ハ委員之ヲ分擔シ寮總代之ヲ綜フ但寮總代中ノ二名ハ炊事部委員ヲ他ノ二名ハ運動部委員ヲ他ノ二名ハ圖書部委員ヲ一ノ委員ヲ兼メタルモノトス

第九條 寮友會員ハ入會金トシテ入寮ノ際金壹圓ヲ納付シ又會費ト

七 外出ノ際ハ事務室玄関内ニ掲ケタル姓名札ヲ反シ歸寮ノ節之ヲ復スルコト

八 私ニ小使ヲ使役セサルコト

九 寮内ニ於テハ徒跳シ又ハ上草履ヲ使用スルコト上草履ヲ使用スルトキハ之ヲ下草履ト區別スルコト

一〇 指定外ノ場所ニ於テ食事ヲナサルコト

一一 寮内ニ於テ飲酒セサルコト

一二 毎朝八時迄ニ必ス其ノ居室ヲ掃除シ常ニ室内ノ整頓清潔ニ注意スルコト

一三 常ニ火ノ元ニ注意スルコト

一四 前各號ノ外秩序風紀ヲ整リ衛生ニ悖ル虞アル言動ヲナサルコト

第十四條 寮友會員ハ炊事ニ關シ左ノ諸號ヲ履行スルモノトス

一 炊事委員ノ外直接助方ニ交渉セサルコト

二 病氣ノタメ特別ノ食事ヲ要スルトキハ豫メ炊事委員ニ申出ツルコト

三 飲食セムトスルトキハ前日中炊事委員ニ申出ツルコト但三回以上連續飲食スルモノ、外ハ食費ヲ減セサルモノトス

四 食器ヲ毀損セサルコト

五 食費ハ必ス期間内ニ支拂フコト

第十五條 圖書、運動、庭園其ノ他ニ關スル心得方ハ別ニ之ヲ定ム

第十六條 寮友會諸般ノ事項ヲ議セムカダメ毎月一回協議會ヲ開ク但急ヲ要スルトキハ臨時之ヲ開キ必要キキトキハ之ヲ開カサルコトヲ得

第十七條 協議會ハ寮總代及委員ヲ以テ之ヲ組織ス但毎回會長ノ臨席ヲ請フモノトス

第十八條 協議會ノ開會ハ之ニ先之ニ日前寮總代之ヲ揭示ス

第十九條 協議會ノ議案ハ豫案會長ト協議スルモノトス

第二十條 寮友會員ハ協議會ノ議案ヲ提出スルコトヲ得但其ノ取捨ハ寮總代委員ト協議之上ニテ決定ム

第二十一條 協議會ノ議長ハ總代中ノ一名之ニ當ル

第二十二條 協議會ニ於テ決議ナラス場合ニハ寮總代及委員總數ノ三分ノ二以上ノ出席アルヲ要ス

決議ハ過半数ヲ以テ之ヲ決定ム

第二十三條 協議會ノ決議ハ會長ノ承認ヲ得テ之ヲ施行ス

第六章 雜 件

第二十四條 寮友會員ニシテ本規約ニ背キ寮生タルノ本部ニ戻ル者アルトキハ寮總代及委員ハ之ニ忠告ヲ加ヘ尙改メサルトキハ會長ニ具申スルモノトス

第二十五條 校則ニ依リ處分ヲ受ケタル者ハ寮總代及委員ニ選舉セサルモノトス

第二十六條 本規約變更ノ必要アルトキハ協議會ニ於テ之ヲ處理スルモノトス但會員ニシテ意見アル者ハ會議ニ出席シテ之ヲ述ブルコトヲ得

炊事部細則

第一條 炊事部委員ハ炊事諸員ノ監督、食器、食堂ノ清潔、献立表ノ檢閲、缺食者ノ取調及浴場(理髮所、洗濯所)ノ管理等ノ責任ヲ任ス

第十條 食費ヲ納付スルトキハ豫テ生徒課ヨリ發行シタル納付書ト共ニ之ヲ提出スヘシ

第十一條 炊事諸員ハ對スル食費ノ支拂ハ之ヲ毎月二回ニ分テ前半ヶ月分ヲ其ノ月ノ二十日ニ後半ヶ月分ヲ翌月五日コ於テナスモノトス但シ休日ニ當ルトキハ順延トス

第十二條 炊事部委員ハ食費通知書ヲ支拂定日ノ前日マテニ缺食費通知書ヲ翌月三日マテニ生徒課ニ提出スヘキモノトス

第十三條 食費通知書ニハ喫食者延人員調ヲ具シ缺食費通知書ニハ別記様式ノ缺食調書ヲ添付スヘキモノトス

第十四條 缺食費ハ其ノ翌月ノ食費中ヨリ差引クモノトス

第十五條 炊事部委員ハ左ノ帳簿ヲ備ヘ明確ニ登記スヘシ

一 喫食者通知簿

二 缺食者明細簿

食費通知書様式

一金

是ハ大正 年 月前半期分食費(喫食者延人員何人ニ日何程宛)

右ノ通ニ御座候也

大正 年 月 日 主査炊事委員 何之 謹印

生徒課御中

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

食費通知書

第二條 食費ハ一日金五拾五錢トス但炊事委員ニ於テ變更ノ必要アリト認ムル時ハ協議會ノ決議ヲ經テ改正スルコトヲ得

第三條 炊事部委員ハ炊事諸員ヨリ一週間分ノ献立表ヲ其ノ前週水曜日マテニ徴シ之ヲ吟味修正シ諸員ノ合意ヲ經テ土曜日迄ニ食堂前ニ揭示スルモノトス

請負人ニ於テ前項ノ献立ヲ變更スルノ必要生シタル場合ニハ豫メ炊事委員ノ許可ヲ受ケルモノトス

第四條 寮生規約第十三條第三號但書ノ規約ニ拘ハラス三十人以上ノ團體ノ缺食ニシテ二日前ニ届ケ出テタルモノニ對シテハ食費ヲ減スルモノトス

第五條 寮生規約第十三條第三號ニ依リ食費ヲ減スル場合ニ於テハ三回ヲ以テ一日分ニ計算シ之ニ充テサル端數ハ切捨タルモノトス

第六條 炊事部委員ハ一會員ヨリ缺食ノ届出ヲ受理シタルトキハ直ニ之ヲ炊事諸員ニ通告スルモノトス

第七條 寮友會員ハ毎月六日ヨリ十日マテニ食費ヲ生徒課ニ納付スヘシ但毎學期ノ初ニアリテハ其ノ開始ノ日ヨリ七日以内ニ時臨入寮ノ場合ニアリテハ入寮ノ日ヨリ三日以内ニ納付スベキモノトス

第八條 炊事部委員ハ生徒課ニ於テ發行シタル食費納付書ヲ各寮生ニ配付スルモノトス

第九條 炊事部委員ハ生徒課ヨリ第七條ノ納付期日ヲ經過セルモノハ氏名ヲ通知セラレタルトキハ直ニ本人ニ督促スルモノトス

前項ノ督促ヲ發シタル後尙二日以内ニ納付セサルモノハ其ノ氏名ヲ會長ニ報告スルモノトス

缺食費通知書様式

缺食通知書

一金

是ハ大正 年 月 中 缺食費(別紙調査書ノ通り)

右ノ通ニ御座候也

大正 年 月 日 主査炊事委員 何之 謹印

生徒課御中

缺食費調書様式

何年大正 年 月 中 缺食調査書

一 姓名

二 缺食日數

三 金額

四 備考

主査炊事委員

何之 謹印

五 受診心得

一 學校醫ハ毎週左ノ日時ニ於テ寮内醫務室ニ出勤シ寮生及通學生ノ希望者ノタメニ診療ス

二 受診心得

三 受診心得

四 受診心得

五 受診心得

六 受診心得

七 受診心得

八 受診心得

九 受診心得

十 受診心得

十一 受診心得

十二 受診心得

十三 受診心得

十四 受診心得

十五 受診心得

十六 受診心得

十七 受診心得

十八 受診心得

十九 受診心得

二十 受診心得

二十一 受診心得

二十二 受診心得

二十三 受診心得

二十四 受診心得

二十五 受診心得

二十六 受診心得

二十七 受診心得

二十八 受診心得

二十九 受診心得

三十 受診心得

三十一 受診心得

學校醫 高橋鐵之助 月曜日又ハ水曜日(自午前七時至同八時)
同 石 井 清 月曜日水曜日及金曜日(自午前七時至同八時)

二 寮生ニシテ疾病療養ノタメニ休養室ニ入ラムトスル者ハ學校醫ノ診察ヲ經テ生徒課ニ願出ツヘシ

三 入室患者ハ學校醫ノ許可ヲ得ルニアラサレハ猿ニ退室ススコトヲ得ス

入室患者ハ療養ニ關シ總テ校醫ノ指揮ニ從フヘシ

入室中ハ藥價其ノ他療養ニ要スル費用及物品ハ總テ自辨スヘシ

入室患者ヲ看護セムトスル者ハ生徒課ニ申出テ許可ヲ受クヘシ

七 入室患者ニ直會セムトスル者ハ生徒徒課ニ申出テ許可ヲ受クヘシ
但商會時間ハ十五分以內トス

八 傳染病ニ罹リ又ハ其疑アル入室患者ニハ面會スルコトヲ得ス
ムヲ得ス而會スルトキハ相當ノ消毒法ヲ施スヘシ

六 寄宿寮非常心得

一 寄宿寮失火ノ節ハ之ヲ發見シタル者ヨリ直ニ生徒課又ハ寄宿寮當直教官ニ急報スヘシ

二 寄宿寮ノ失火ヲ發見セタル者消火器具使用シ又ハ他ノ手段ヲ以テ消止メ得ヘクシテ前條ノ報告ヲナサハ却テ時機ヲ逸スルノ虞アリト思惟スルトキハ大聲ヲ發シテ之ヲ報シ直ニ消防ヲナスベシ

三、寮生ハ生徒監、生徒課員其ノ他本校職員ノ指揮ヲ受ケ消防、救護、運搬警戒等ニ従事スヘシ

四階上ノ祭生危急ニ頻スルトキハ備付ノ麻縄ヲ用ヒテ窓口ヨリ遊
難スヘシ

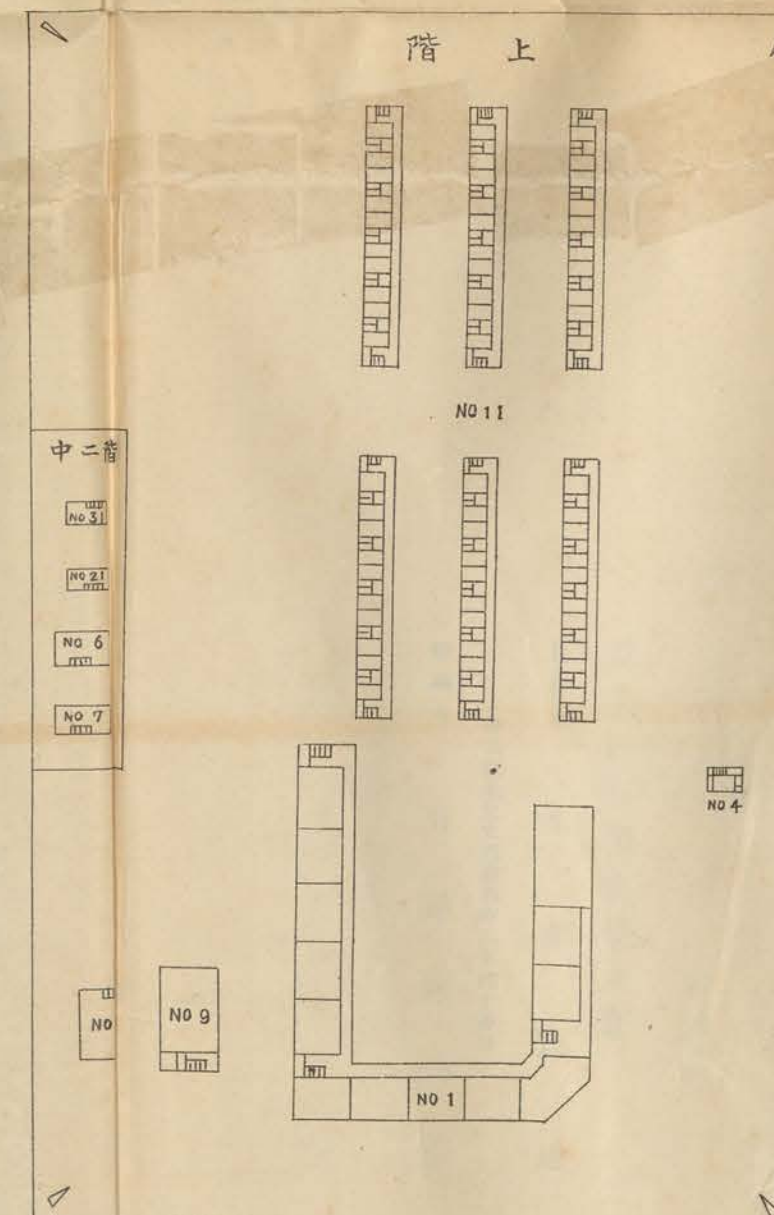
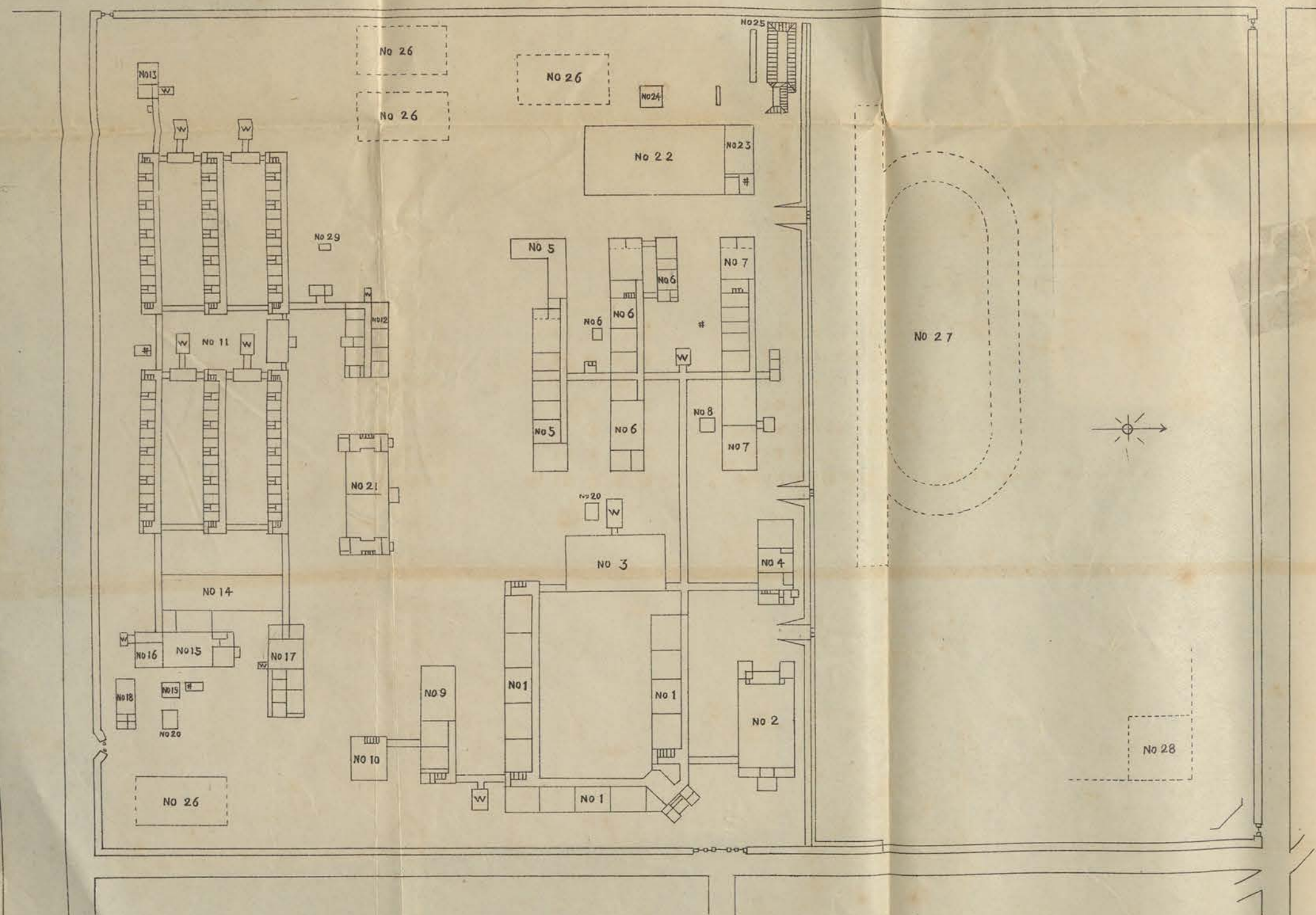
五 寄宿寮外ノ校舎失火又ハ近火ノ節ハ第三條ニ準ス

- | | | | | |
|----------|----------|-----------|---------------|-----------|
| No 1 本館 | No 8 発信室 | No 15 炊事場 | No 22 雨天體操場 | No 29 變壓室 |
| 2 講堂 | 9 圖書閱覽室 | 16 浴室 | 23 銃器室 | |
| 3 生徒控所 | 10 書庫 | 17 集會所 | 24 弓術場 | |
| 4 小使室・物置 | 11 寄宿舎 | 18 物置 | 25 射撃場 | |
| 5 博物教室 | 12 寄書事務所 | 19 汽罐室 | 26 テニスコート | |
| 6 物理教室 | 13 病室 | 20 貯炭庫 | 27 トラック及フィールド | |
| 7 化学教室 | 14 食堂 | 21 道場 | 28 野球グラウンド | |

浦和高等学校

建物配置圖

敷地貳萬四拾坪



- 一 寄宿寮火災ノ節ハ之ヲ發見シタル者ヨリ直ニ生徒課又ハ寄宿寮當直教官ニ急報スヘシ
- 二 寄宿寮ノ火災ヲ發見シタル者消火器ヲ使用シ又ハ他ノ手段ヲ以テ消止メ得ヘシテ前條ノ報告ヲササハ却テ時機ヲ逸スルノ虞アリト思惟スルトキハ大聲ヲ發シテ之ヲ報シ直ニ消防ヲナスベシ
- 三 寮生ハ生徒課、生徒課員其ノ他本校職員ノ指揮ヲ受テ消防、救護、避難等ニ従事スヘシ
- 四 階上ノ寮生危急ニ瀕スルトキハ備付ノ麻縄ヲ用ヒテ窓口ヨリ避難スヘシ
- 五 寄宿寮ヲノ校舎火災又ハ近火ノ節ハ第三條ニ準ス
- 六 寄宿寮非常心得
- 七 入室患者ハ寮生ニ關シテ校醫ノ指導ニ従フヘシ
- 八 入室中ハ寮費共ノ他寮費ニ要スル費用及物品ハ總テ自辨スヘシ
- 九 入室患者ヲ看護セムトスル者ハ生徒課ニ申出テ許可ヲ受クヘシ
- 十 入室患者ニ面會セムトスル者ハ生徒課ニ申出テ許可ヲ受クヘシ
- 十一 但面會時間ハ十五分以内トス
- 十二 傳染病ニ罹リ又ハ其疑アル入室患者ニハ面會スルコトヲ得スバムヲ得ス面會スルトキハ相當ノ消毒法ヲ施スヘシ

No 1 本館
 2 講堂
 3 生徒控所
 4 小使室并物置
 5 博物教室
 6 物理教室
 7 化学教室

No 8 瓦斯發生室
 9 圖書閱覽室
 10 書庫
 11 寄宿舎
 12 寄宿舎事務所
 13 病室
 14 食堂

No 15 炊事場
 16 浴室
 17 集會所
 18 物置
 19 汽罐室
 20 貯炭庫
 21 道場

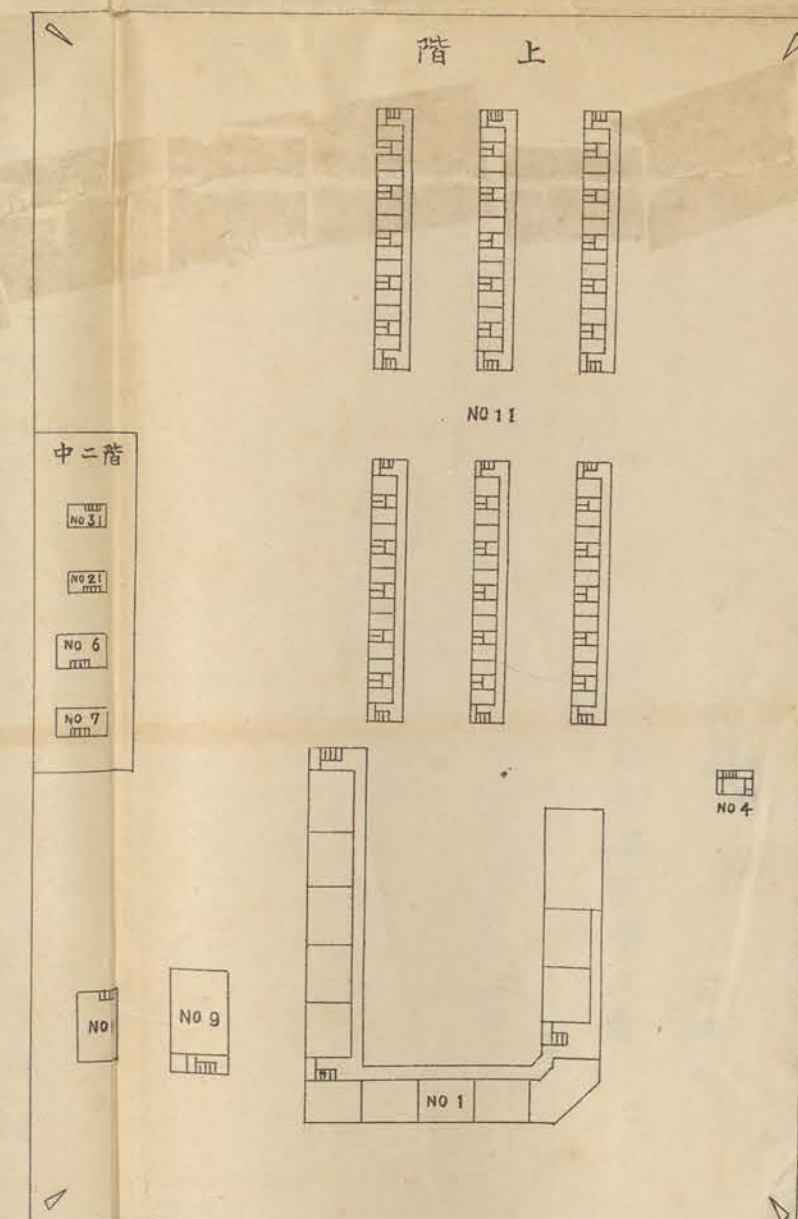
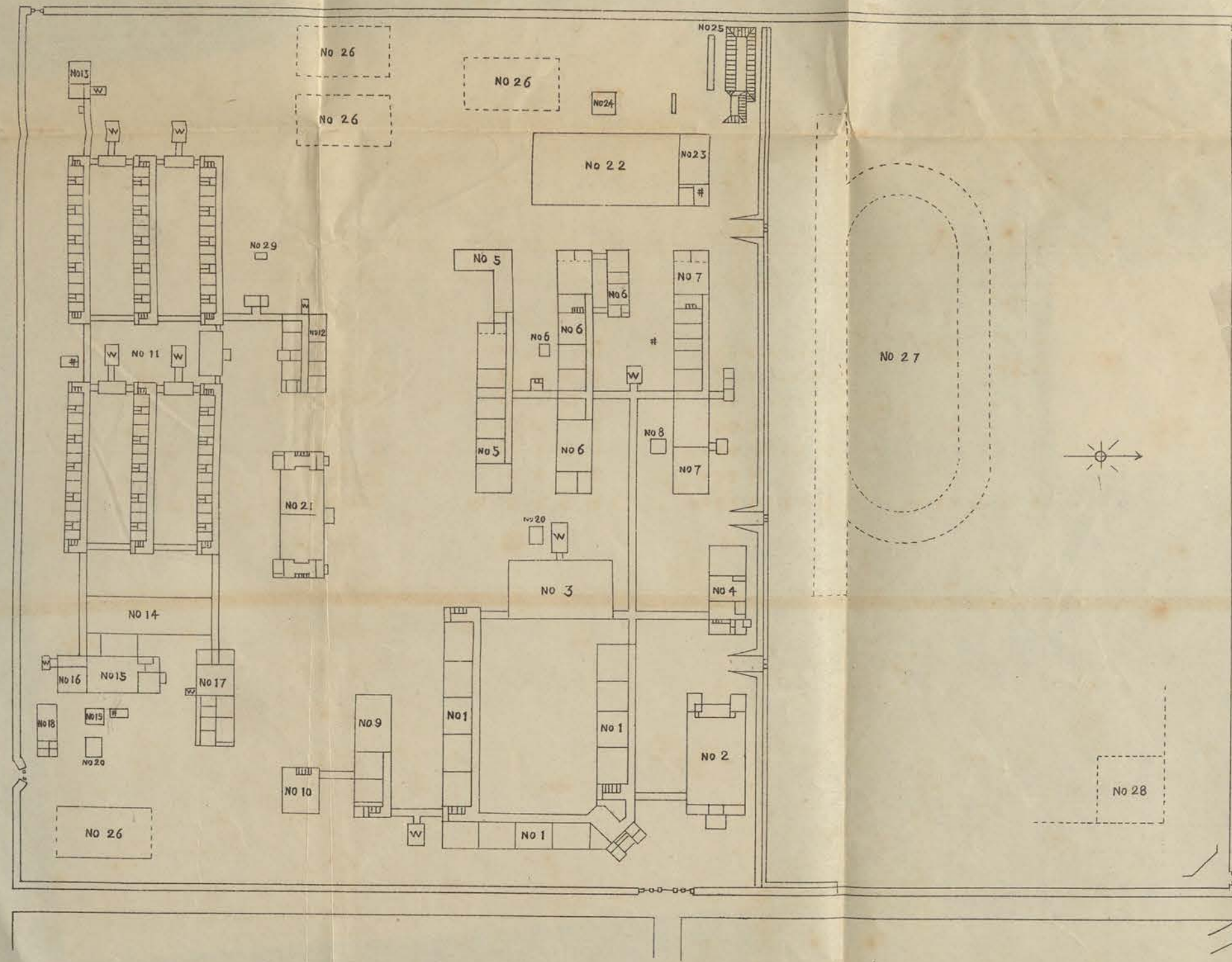
No 22 雨天體操場
 23 銃器室
 24 弓術場
 25 射朶
 26 テニスコート
 27 トラック及フィールド
 28 野球グラウンド

No 29 變壓室

浦和高等學校

建物配置圖

敷地貳萬四拾坪



大正十四年一月十日印刷
大正十四年一月十五日發行

【非賣品】

浦和高等學校學友會

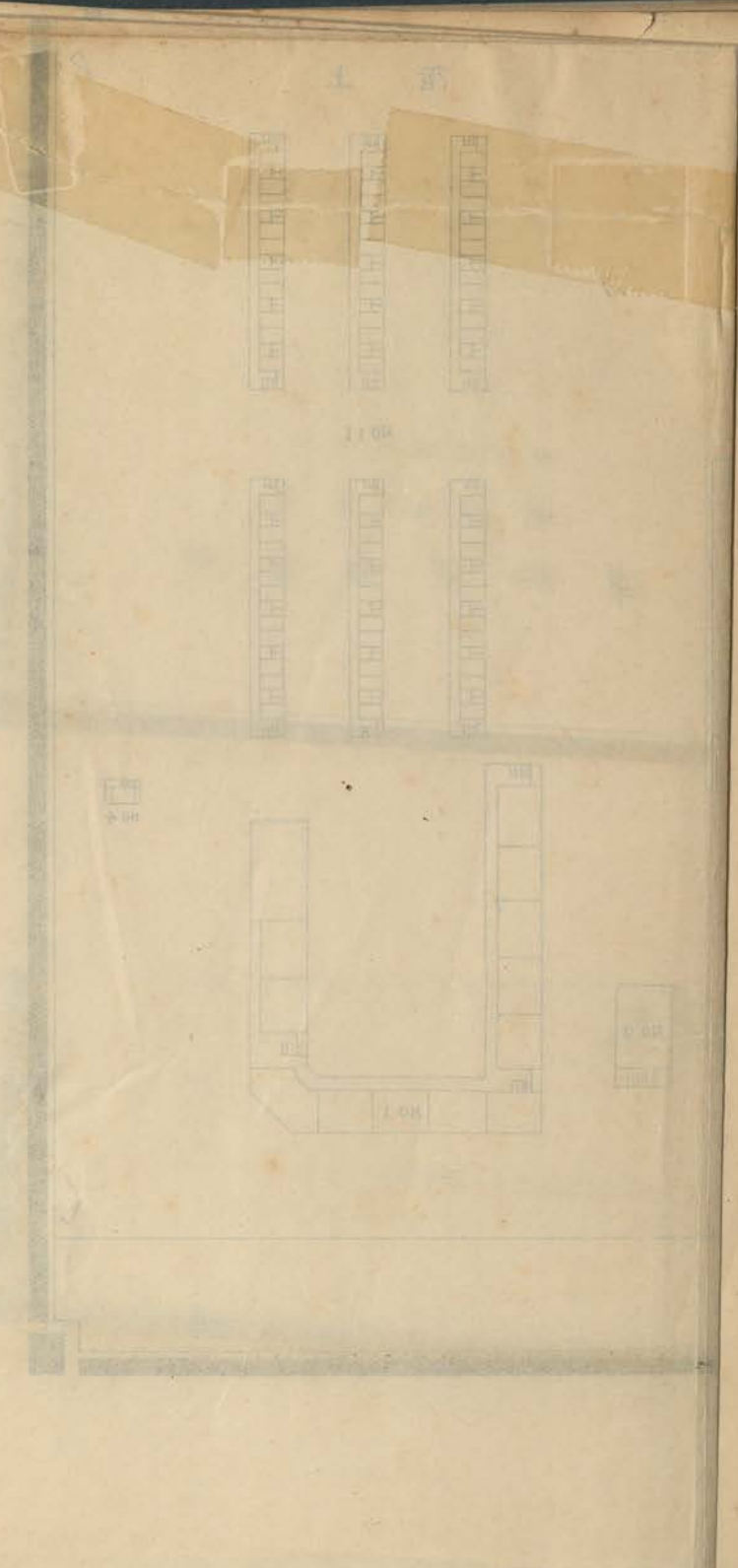
代表者 平 井 六 尾

埼玉縣北足立郡浦和町二百四十番地

印刷人 竹 田 駒 太 郎

埼玉縣北足立郡浦和町二百四十番地

印刷所 忠 臣 堂 竹 田 印 刷 所



明神宗

嘉靖三十四年

御製

明神宗

嘉靖三十四年

御製

明神宗

嘉靖三十四年

明神宗

嘉靖三十四年

御製

4000

書庫
館內用

書庫
館內用

埼玉県立図書館



31041529